
Diary

中井

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Diary

【Nコード】

N9994D

【作者名】

中井

【あらすじ】

存在しない「事件」。手がかりとなるのは、記憶を読む力を持つ「俺」が偶然手に入れた、持ち主不明の日記。「事件」の真相はどこにあるのか、「私」とは何者なのか。謎を追い求める中、事件は再び起こり始める。

1 序章

その雨の夜も、私は家を飛び出していた。

どしゃぶりの雨が持っていた傘を揺らして、着っぱなしの制服はとつくにびしょびしょだ。それもそうだろう。今まで、行くあてもなく夜の道を歩いていったんだから。

最悪の気分になって、私はいつものように、逃げ出していたんだ。誰か、私に声をかけて、殺してと願いながら。馬鹿げたことを、私はしているんだ。

いつしか私は、知らない家の前に佇んでいた。

どこの窓もカーテンが閉まっている。しかし、少しだけ開いた扉からは、暗闇がのぞく。開けっ放しのドア。

こんな時間に不用心だ。

私は疑問に思いながら、ひどい雨の中、目を凝らした。よく見ると、靴が片方、ドアに不自然な形で挟まっている。

何気なく辺りを見回して、誰もいないことを確かめた。こんな日に出歩く人はいないだろうから、靴は家主のものだろう。

表札を見ると、女性がここで一人暮らしをしていることがわかる。靴は見るからに男物。

大きさもかなりのものだ。

「……」

何か、おかしい。

私はしばらく考えて、中に入ることにした。

おとなしく家に帰るということは、頭から消え失せていた。

濡れたシューズを放り投げ、廊下に足を踏み入れた。

「……これで、私も犯罪者か」
投げやりに呟いた。

呼吸が浅くなつて、容赦なく吐き気がこみ上げる。
体が変調を訴えていた。胃がきりきりと痛み出すのを、それでも
私は何とかこらえた。

玄関を潜り抜けて、暗闇の中を静かに進む。

どこも照明は落ちていた。

住人らしき人はいない。

目の前に階段を見つけた。

見あげると、二階部分がほんのりと明るい。

その場に立ち尽くして息をひそめる。

耳を澄ますが、やはり音はない。

「……ん」

私の貧相な形の鼻が、妙なものをとらえた。

大量の灯油のニオイ。

階段の上から、中ほどまで流れている、液体。

汗が全身に吹き出して、鼓動が早くなつていくのを、私は感じた。

階段に足をかけ、一気に上がった。

二階部分の廊下の奥、ぼんやりと光がこぼれている。

灯油はその部屋からまき散らされている。

私はその部屋の扉を静かにあけた。

目の前の光景を見たとき、私はただ立ちすくむしかなかつた。

死体がひとつ、転がっていた。

「その人」はイスから引きおろされた格好で、人形のように固まっていた。

ざっくりと切られた腹部から漏れる血液は、私の足元にまでつた。
う。下を見て、思わずのけぞった。

胴体を中途半端に裂かれた死体は、空ろな目で私を見ていた。困惑と、絶望と、苦悶。変なものが入り混じった、表情を、しむけながら。

見ていた。

まるで、勝手に家に入った私をなじるように、責め立てるように。

「きみ、ついてないよね」

背後の声に、私は振り返った。

いつのまにか一人の少年がそこにいた。フードを被って顔はよく見えないが、その視線は確かに私にあった。

逃げなければ。

けれど、絶望感が体を覆いつくしたみたいに、全身が私の意に反し、言うことをきかない。

「きみがこんなところに来なきゃ、何も知らずに済んだのにさ。ああ、これで決定しちゃったよ」

少年は私に、空々しいほどの声で語りかける。

紅く紅く、塗りたくったようなナイフを手にして。

その輝きに、まぶしさに、私は目を見開いた。

「……これは、人ん家に勝手に入ったきみへの罰だ」
運命はもう、決まっていた。

* * *

ぼんやりと考えていた。すると、彼女の朗らかな声が聞こえた。

「行くうか」

「はい」

その女性

くろきいずみ 黒木泉の問いかけに、俺は答えた。

制服の懷に小さな砂時計をしたためたまま。

ある晴れた十月の空。

この町では不可解な事件が人知れず起きていた。

2 記憶・1 (9・15)

どこから、話せばいいのか。

どこから、切り出せばいいのか。

しかし話さなくては、弁明にはならない。それぐらいはわかりきっている。

だからこそ、話すんだけどね。

それにしても、この泉という人。

いったい、誰だろう？

「もう一回訊くけど、ホントに忘れたの？」

俺の気持ちを察してか、泉は問いかける。無邪気な笑いを伴って。笑えない。

だから真面目に、忘れたと答える。

彼女は、笑いながらも呆れたように言った。

「ぜんぜんアタシのこと覚えてないのな。相変わらず冷たい奴だねえ」

見ず知らずの人に言われるのも癪だけど、間違っではないない。だからよけい癪に思えるんだけどね。

歩きながら話しているうちに、自分の家に到着する。

当然、黒木泉という「見ず知らずの、会ったばかりの人間」を、家に迎え入れなくてはならない。

面倒なことだ。

さて俺は彼女に、今まで起こった「事件」について、話さなくてはならない。

だが、ここで一つ問題が出てくる。

コイツは俺のことを知っているが、俺はコイツを知らない。

例えば、幼稚園児や小学生で一緒だった人で、何人が覚えていない、ということはあるだろう。

俺もそんなに記憶力がいいほうではない。

しかしこの人は、中三では同じクラスだったと言い張る。中学三年生、といえは、去年のことだ。

たかだか一年で、相手の顔も、名前も、存在そのものすらも、忘れるはずがないんだけどね。

もし泉の主張が正しければ、俺は重度の記憶障害だと疑わざるを得ない。

まあ一年ぶりの、折角の再会も、素直に喜ぶことができない。たとえ知っていたところで、喜んだりしないだろうけどさ。

「これがキミの言ってた、日記？」

俺の渡した「それ」を手にとると、中を開く。なんてことはない、ごく自然な動作を、泉はしてのけた。

手帳サイズの、それでいて半分以上のページが空白地帯の日記。

これから、あることを話す上で絶対に欠かせないのが、「日記」の存在だった。

だから彼女を家に連れて行ってまで、部屋で大切に保管してあったものを見せることにしたんだけどね。

全く、不必要なミスをしでかしたものだ。

部屋まで招き入れて今更なんだけどさ。

「そろそろ、話始めるか・・・アンタが誰なのか、後で聞くか。まずは、俺の話から、だったね」

「うん」

快活に応えた。

「で、言うことは、あの家に侵入した理由。要するに、何で俺が空き巣まがいのことをしたかってことで」

「うん。でも」

日記から目を離す泉。幼い顔立ちからは、先ほどまでの笑みはどこかに隠れていた。

「勝手に人の家に入った理由がこれっていうのもねえ……」
日記を指し示しながら、思い切り納得はついていない様子だった。
無理もないか。

「そうだよ」

「しかも、その家の人もう死んじゃったし、ねえ」

「だから、説明しなきゃ納得してくれないと思ってさ。その代わりに、後で他人に話すなよ？」

「うん」

「あ、あと話の途中で寝ないこと」

「わかってるよ！」

なぜかムキに言われてしまった。

冗談だけだね。

さて、急なことだが。

現在までに至った経緯を、ここ一ヶ月ほどの記憶を、日記のペー
ジを一枚ずつめくるように、振り返り、辿らなくてはならない。

そこには、とある「殺人事件」が絡んでくる。

けれどそれは、今の時点では解決していないのだと、ことわって
おこう。だから、俺の記憶の中で「事件」が解決することは、まず
ありえない。

それでも、順に追ってゆくうちに、手がかりが出てくるのかもしれない。

嘘みたいな話なんだけどね。

でもこれは、本当にあったのだから、嘘じゃない。

まずは、とある日記を拾ったことから、話を始めよう。
遡ること一ヶ月。

俺はありふれた生活を、淡々と過ごしていた。

九月十五日・水曜日

廊下の端に落ちていた物は生徒手帳だった。

手帳は周囲の静けさに溶け込んでいた。ともすると、俺ですら見逃していたかもしれない。

拾い上げると、表紙は黒一色に覆われていた。

中を開く。

そこに名前はなかった。いや、名前の入った部分だけが破れてなくなっていた。

これでは持ち主すらわからない。

俺は少しばかり、手帳に名前が書いてはいないか確認をした。

名前は、果たして見当たらない。

どうしようか。

少しばかり判断に迷った。

このまま遺失物として届けることはできた。

俺が所属する図書委員。彼らは言うまでもなく図書室を拠点として活動している。その中に、落し物の管理という変な仕事も含まれているのだ。もちろん図書委員として俺が預かっても何ら変わりはない。つまるところ、図書室に預ければいいだけの話だった。

だけど、俺ならどうするか。

答えは、単純だった。

要は落とし主を探せばいいのだから、手帳に残っている「記憶」を辿り、そこから持ち主を特定すれば、解決する。それは俺にとって、難しいことでもなかった。ただし、触れなければ記憶は読み取れないけど。

視線を手帳に向けて、じっと見つめる。

目は閉じなくてもいい。

手帳に意識を集中すればいいだけだ。

よくパソコンを使って、ファイルのコピーをするときのような、単純な作業のだけれど、そうやってダウンロードした記憶は、俺の頭の中で再生される。不思議と頭の中に、ぼんやりと映像が浮かび上がる。

さて、今回は誰の記憶が出てくるだろうか。

再生

聞き覚えのある声が耳に入る。

教師が何かしゃべっているようだ。

目に映るものは、ノートと、筆記用具。下を向く格好で、机に向かっていた。

どつやらここは、授業中のようだ。

「記憶」の持ち主は教卓のすぐ前の席で、必死にノートを写していた。

時折黒板に目をやり、教師の角ばった字を丹念に読み取る。しばらくして、またノートに顔をうずめる。ノートと黒板と、内容を考える間も無く、せわしなく首から先を動かす。

とりとめもない、のどかな日常の一部。

嫌いじゃない。

けれど、退屈なものだ。

もっとも、「記憶」は操作できないから、ただ「見ている」こと
しかできないけどさ。

ふと、教師は自分に目を合わせる。

少しばかり口をまごつかせ、やがて名前を呼んだ。

「天美、八十ページ目だ」

「あ、はい！」

記憶の持ち主が、名前に反応した。

そのまますぐに教科書を朗読し始めた。

あまみじゅり
天美樹里。

何のことはない、自分のクラスの級長だった。

停止

3 記憶・2

超能力があるかないか。

こんな質問があつたなら、俺ははいと答える。

なぜかというと、自分にもそういうものが備わっているから。たいしたことはないけどね。

触れると、持ち主の記憶を読み取ることができる。

それだけだ。

他に付け足すことはない。

ただ、読み取れる記憶は「持ち主」だけなのだから、使い道は限られている。

例えばここにある、天美の生徒手帳。

仮に他の人間が盗んだとしても、俺が読み取れるものは「天美の記憶」だけだ。

その代わり、「盗んだ人の記憶」については読み取れないし、そいつを知ることもしかない。

あと、持ち物から読み取れる記憶は、いつも一つしかない。

直に触れた人の記憶なら、いくらでも引き出せるけどさ。

持ち主がいない物ともなると、読み取るうとしても意味がないけどね。

この辺りが、融通が利かないわけなんだ。

だけど落とし主探しにはもってこいの能力だ。

案の定、天美は図書室のそばにある遺失物箱を、必死の形相で探していた。

俺の持っていたものを見るや、彼女は突進した。

「うお！」

とまではいかないけれど、思わず後ずさってしまっうほどに、彼女はつつかかってきた。

「ねえねえ！　ねえちよつと！　ねえ！　名前の辺り破れてなかった？　あ！　よくこれであたしのだってわかったね！　どうやって見つけたの？　ねえねえ！」

当然のことながら、天美は目を丸くして俺に質問を浴びせてきた。

正直、ウザい。

とはいっても、記憶を読みましたと答弁しても、変な目で見られるだけだから、

「破れた手帳、持ってるんのお前しかいねーだろ」

こうして嘘をついているんだけどね。

いつものことだけども。

もちろん、彼女の手帳が破れていたということは、さっきまでは知らなかった。

「あ、そか」

こんな嘘ですぐ納得するものだから、全く、単純なクラスメートだ。一応級長で、勉強熱心な人なんだけどね。

それでも俺みたいな偏屈な人間よりは、幾分かまともに見える。

天美はお礼を言うと、さっさと図書室を出て行った。

「凧なまき。ちよつと」

図書室に戻ると待っていたのは、委員長だ。生気のない声で、俺

を呼んでいた。

「これ、あなたの？」

彼女の手にあるものは、白い手帳だった。申し訳程度に小さいけれど、日記帳のように見えなくもない。

何より名前が書かれていなかった。

「どうして俺に聞くんですか」

「何となくね。あなたならこんなどうでもいい物、持っているだろうな、って」

言いながら、笑っていた。

無礼にも程がある。

「決め付けないでくださいよ。そもそも、それどこで拾ったんですか？」

「あっち」

といつても、彼女の指し示す範囲は、いたって広い。具体的に言うくと、半径十メートルくらいだろうか。もちろん、整然と並ぶ本棚の向こうも含めて。正しくは、室内全域にまで。

さぞ、相手は混乱をきたすことだろう。その相手は誰でもない俺だけだ。

「正確にお願いします」

「………黙秘します」

「それはないですよ、委員長」

本当に話しづらい人だ。言いたいことをほとんど表情に出さないと、突拍子もない言動で困らせるものだから、全くといっていいほど俺と相性が悪い。

俺がそう決め付けているだけかもしれないけど。

「で、どうなの？」

「どつって言われても………」

こういう人には、さっさと会話を切り上げるのが無難だ。だから勢いあまって言ってしまった。

「俺のでもいいですよ、もう」

「あらそう。じゃ、はい」
違うんだけどね。
今更反論するいわれもなかった。

学校から家に向かうバスの中で、俺は手帳を開いた。

白の手帳はまだ新しく、さほど使っていないことが、誰の目にも明らかだった。中身は、その日起こった出来事を書いた、日記。丁寧な字で、日常を簡素に書き連ねているそれは、一ページ見るだけで、書き手が几帳面な性格なのだと感じるほどであった。

だが、俺から見ておかしな点も、ある。

第一に、「ある時点」から日付が、一週間ほど開いていること。

何日か日記をつけていないことは、誰にでもあるだろう。だが、日記をよく見ると、何ページか切り取られているのがわかる。

間のページは、捨ててしまったのだろうか。

第二に、日付が八月十五日の時点で終わっていること。

奇妙なことに、日記をつけ始めたのは八月一日で、八月七日から八月十四日までが欠落していた。その次の十五日で、そこで日記は終わっている。

半分以上残された後のページは、空白のままだ。

そして、第三。

いうまでもないことなのだが。

持ち主が、日記を学校に持ち込んだという事実。

普通、自分の日記なんて赤の他人に見られたくないものだが、「これ」は図書室に落ちていた。部長が言うには、机の小さな隙間に落ちていたらしいのだけど、落としした人は図書室の、それも人前で堂々と日記を読んでいたことになる。

明らかにおかしい。

だから持ち主に会ったら、そのことを聞いてみたい、そんな気もする。

かといってその人に関する知識はないに等しい。当然だろう。俺は名前や顔すら知らないのだから。

じゃあ、どうすれば、持ち主に返せるだろうか？

持ち主の正体を知る方法。

俺にはその方法が、ないわけでもなかった。持ち主の記憶を、この小さな手帳から引き出してやればいい。

それは俺だけに備わった能力だ。そして、自分にしかできないことだった。

4 記憶・3

記憶を掘り起こす力。

自分でも、その原理や特性は分からない。どの範囲まで記憶が引き出せるのか、動物にも有効なのか、俺は知らない。

試してみないと分からないこともある。

ただ、自分だけに不思議な力があることは、幼い時から感じていた。

もつとも、俺はそのことを隠していた。どうせ、誰も信じてはくれないから。けれど、怖いもの見たさから人の記憶を読むことに、抵抗は感じない。

たとえそれが、危険なものであってもね。

もつとも、最近はなるべく控えるようにしている。

自分の能力に、重大な欠陥があったから。

それは一つ間違えれば、取り返しのつかないことになる欠陥だ。

まあ、今は関係のない話だ。

くだらないことを考えつつ、文字を指で丁寧になぞり、記憶を探る。

その人の意思を感じ取るように。

周りの雑音、窓に差し込む日の光すら、俺の意識から外れる。暫く経って、ダウンロード完了、と。

さて、誰の記憶が出てくるのだろう。

再生

視界に浮かび上がったのは、なぜか机だった。

網膜の端から伸びる細い手は、先の細いボールペンをゆっくりと動かし、後には細やかな文字が作り出されていた。

日記を書いているのだろう。

日付から察するに、八月十五日。おそらく自分の部屋にいて、机に向かっているのだ。

外を見ると、大きな雨粒がガラス製の窓を強くノックする。その窓は黒く塗りつぶされて何も見えない。にわか雨。夜。そばにある時計は、十一時をまわっていた。

家族はどうしてるのだろうか？

物音がしないか確かめようとする。だが雨音が不気味にこだまし、声を聞くことすら許されない。部屋の外を調べたいと思っても、おそらくドアが開いているであろう背中側の景色は窺えない。

要するに、今は机と日記しか見えないわけだ。

さて、この人は書きながら時折、上目遣いの格好で時計を見ている。

時計の針は先程とは変わっていない。それでもチラチラ見ているので、短針のほうは少しずつ右にずれているのがわかる。

カチカチ、動く時計。

けれどその独特の音は、雨にかき消されてしまう。

「・・・？」

不意に俺は、視線を下げた。

いや、違う。

視線を下げたのは、ずっと日記を書いていたこの人だった。

はじめ、妙なものが目に留まった。

どんなものかというと、赤みを帯びた何か。

それは、右脇腹から、さながら手品のように突き出ていた。何も感じないのだけれど、不思議と、汗が噴き出してくる。

そこでようやく、腹から突き出てるものが、血を帯びたジャックナイフだと理解した。

何者かが背後から、ぐつと強い力で刺し込む。

その度、腹部を貫通したナイフは先端から押し出される。

思わず、痛ましい声が、どこからか洩れる。

シャツの表面がうっすらと渗む。

渗み、広がり、吸いきれなくなった液体は行き場を失い、滴り始めた。

危険だ。

無意識に手を押さえようとする。けれど両方の手はすぐに朱色に染まり、ほんのりと暖かな、ネバネバした、鮮血の感触が伝わる。

強い圧迫感と共に、この人の身に激痛が走る。

何者かが突き出したナイフを右に払った。脇腹の右半分が強引に切り裂かれ、派手に臓器と飛沫を撒き散らしながら、血溜まりの中に倒れこんだ。

「……ッ！」

言葉にならない声を繰り返し発する。下半身の感覚がない。その代わり、首から上を動かすと、皮膚と臓器が切り裂かれ、緑色のカーペットにぼとぼと、こぼれ落ちていた。

天井に仰向けになったまま、指一本動かせない。動けない。逃られない。背中にじんわり、生暖かいものを覚え、血液に身を浸しているのだと全身で理解させる。

口を上下に動かし、上半身だけが悶え、のたうちまわる。

声を出すたび、ごぼごぼと咳払いながら、変な液体が出た。

やがて、視界がぼやけ、黒く塗りつぶされていった。

必死に目を開いて、そばにいた何者かを見ようとした。

「そいつ」は上下の黒ジャージに身を包み、表面を十字型に切り取っただけの白い仮面と、ジャージの色に合わせた黒いフードを頭から被っていた。顔や表情は分からない。立つたまま、一歩も動かない。観察でもしているかのように感じられた。

右手には、よく研ぎ澄まされたと思われるナイフがこちらに向けられていた。

刃物の柄から先は、べっとりとした赤に包まれていた。

目の前にいる「そいつ」は傷口から少し上の下腹部を踏みつけた。

水分を含んだ気味の悪い音と共に、大きな傷口から、血色のよい内臓が出た。

痛い。

イタイ。

傷口が無理に引き裂かれ、この人の中でもう一度吐き気がこみ上げてくる。

吐いた。

口から出てきたものは、鮮血に染まった濁った胃液だった。

不意に視線が傾く。

今胴体を半分ほど切り裂かれた、この人が物音に反応したものだ。つた。

視線の先にあっただのは、ちょうどさっき俺が見れなかった部屋の後ろのドアだった。

戸は無造作に開かれていた。

この瞬間、殆ど動かなくなった全身を擦り、倒れたままそのドアに向かい合った。

同時に俺は見ていた。

黒服の人間とは別に、学生服を着た少女が立っているのを。

濁りきった目で

こちらを呆然と見ていた。

しばらくして、

「記憶」はぶつりと切れた。

停止

見渡すと、夕日に包まれたバスの中は閑散としてた。

今のは一体、なんだろう。

そう思いながら、ゆっくりと息をついた。まるで、今まで呼吸一つすらしなかったかのように。

手を返し、窓から洩れるオレンジ色の光に、光る汗を見た。

その汗は手の感触に残って、いつまでも離れなかった。

5 記憶・4 (9・16)

* * *

過去と現在は、一つの道筋に結ばれている。

それは記憶という形で脳裏に刻み込まれ、あらゆる過去が、人を縛りつける。

思い出したくないもの。

忘れなければならぬもの。

黒い記憶。

閉ざされた記憶。

人の記憶を辿ることは、時としてそういった部分にまで、光を当ててしまう。

生々しい「記憶」に耐えうるほどの精神力。

殺人事件を平然と見送ることのできる人間。

死んだ人間に、余計な感情を持つてはいけないのだ。

まあ、俺はそういう考えを持った、ごく普通の高校生なんだけど
な。

人の記憶を見る力を持つ俺。

そして俺が日記から引き出した、殺人の「記憶」。

これは一体何なのか。

記憶の中で、何が起きたのだろうか。

その時の俺はまだ、知るはずもなかっただろう。けれど、確かに「事件」は起きたのだ。

そこで、注意しなくてはならない。

「事件」は終わっていないのだ。
ありもしない日記が、ここに残っている限り。
本当は、「一年前に焼けてなくなったはずの」日記が、ここにあるのだから。

けれども一ヶ月前の俺がそのことに気付くのは、まだ先の話。

九月十六日

クラスに入ると、いつもよりずいぶん騒がしく感じられた。とりわけ寝不足の俺にとっては耳が痛くなる。

眠れるはずがない。
全ては目を瞑るたび脳裏にフラッシュバックする光景が原因だった。

全身から汗が吹きだし、鳥肌が立つ。

そんな感じに。

「どうした。顔色悪いぞ」

俺を見るなり言ってくるのは、たかしまひさし高嶋久史。中学時代からの同級生で、身長、体格、見た目からしてごく普通の高校一年生、といった感じだ。

「なんでもねーよ」

「徹夜は体に悪いヨ？」

不動卓ふどうたくは笑いながら言った。語尾の発音がどこかカタカナで表記するようなものである以外、特に変わった生徒ではない。

強いて挙げれば伊達眼鏡をかけていることぐらいだろうか。こちららも、同じ中学にいた奴だ。

「凶星だな」

随分と納得した表情で茶化す高嶋。

「んー。ま、そんな感じ」

徹夜じゃないけどね。

そういうことにしておくか。

「ところでさ、最近この辺りで事件なんか起きてない？ 殺人とか」

「ありえないネ。つつか尻クン。そんな大層なもの、起きたら困る

ナ」

「あるわけないっしょ。どうしたん？」

「いや、退屈だからさ。最近面白い事ないかなってね」

殺人が面白く感じられたら困るけどね。

しばらくとりとめもない会話を続けていた。日常生活とか、テス

トとか、軽い話題ばかりだけど。

大して笑えないけど、一応笑ったりボケたりツツこんだり。それ

だけで休み時間が潰れる。

ただ、今日だけはこの些細な行為でさえ、あの「記憶」の暗い影

がつきまとい離れない。

忘れようとしても自分の頭から消えてくれない。

おそらく、下手なB級ホラー映画よりも真に迫るものがあるだろ

う。

脚本がまるで無し。キャストは名も知らない被害者と正体不明の

殺人者、謎の少女の三人。あるのは殺人シーンだけ。

全く笑えない。

そんなものを笑うのも困るけどね。

ともあれ、こうして俺たちが暮らしている日常に、殺人事件なん

て微塵にも感じられないのも事実だった。

平和な生活と、「記憶」の中で起こった惨劇。

この二つのギャップの大きさに俺は、戸惑ってすらいいた。

英語の授業が始まってしばらくしたころ、妙に教室が静まり返っていた。

見渡すまでもないことだけど。暖かな秋の日差しを感じつつ、集団で瞑想といったところか。

寝てるだけなんだけどね。

俺も眠いといえは、否定はしない。

だから起きている奴のほうが目立つわけだ。

その一人が、天美。あの人は規則正しい品行方正な御令嬢なのだ。変わっているけどね。

生徒手帳が理不尽なまでに何度も紛失する辺りとか。

今日もどこかに失くしたらしい。俺が見つけたのは昨日の夕方だ。要するに限度を越えたマヌケ。

そして、もう一人。

あいそのゆづ
藍園優という名前の少女だ。

小柄な体格に、整った顔立ちをしている。髪は後ろに結ったポニーテールが特徴的だが、染めてはいない。髪を下ろせば、肩にかかる程度といったところだ。

何よりも彼女には独特の雰囲気を感じられるのだ。

口数はそんなに多くはなく、周囲とも少し距離を置いている。話しかけられたら応えるぐらいの機知はあるけど。

それでも自分から話しかけることは絶対でない。

俺には何を考えているのか読めない、不思議なタイプの人種だった。

「うん？」

結局三人しか起きていなかったらしい。その状況を見かねたのか、ようやく気付いたのか、

「こら、お前ら起きろ！ ほら天美も」

クラス担任兼英語の教師・福原忍足ふくはらおしとは声を張り上げた。

「え？ なんて私も！」

「寝てただろうが」

「寝ていませんよ！」

そう言いながら堂々とヨダレを拭っているのはあえてスルーしよう。訂正だ。二人しか起きていなかった。

日記は鞆の中にしまっていた。

もちろん持ち主に返すためなんだけど、その人は多分生きていない。殺されたに違いない。

とすると、誰かがこの日記を「盗んだ」のだろう。

殺人者か。

それとも、ドアの前にいた少女か。

もっとも少女のほうも生きてはいないだろう。犯人の目の前で殺人を見てしまったことになるし、口封じのために殺されていると考えよう。

やはり犯人が盗んだのか。

さらに考えると、その「事件」は解決されていない。犯人が捕まっただけで、学校に来て図書室で日記を見ていたのだろうね。

それだけで推測の枠を壊すことはできないけどさ。

いや、それとはまた別の人間が持ち去ったのだろうか？

少なくとも日記は「八月十五日の夜には持ち主の家にあった」のだ。そこから何らかの事情で、第三者が学校へ持って来た……

どうして今になって持つてくる必要があるのだろうか？

少し、話が飛躍しすぎたか。

わかること、確実なことだけを、推論すると

日記を置き忘れた奴は、必ずこの学校の生徒か、その関係者でし

かない。

教師と、生徒たちしか使わない図書室に日記を持ち込める、という点で。まあ学校と無関係な人物が入ったら、他の人から目立ってしまうだろう。

それともう一つ、日記の事についてよく知る人物。

こんな手帳を持っていて、得することはない。たいしたことが書かれていないから、まず捨てるか学校に届けるか、どちらかを選択するだろうね。

自分なりに推理をしたつもりだけど、謎だらけ。その謎が出てくると、つい深く突き止めようとするのは、自分の悪い癖だ。無駄な時間を費やしているだけにすぎない、と切り捨てることもできるだろうに。

けれど、俺は切り捨てたくはない。

殺した奴。

殺された人間の正体。

「事件」の真相。

その全てを、知りたかったから。

興味本位からくる純粋な好奇心、というものなんだろうね。

あんなふうに、人をためらいもなく殺せる。そんな奴の残酷な一面を、覗いてみたい。

冷静になってこう考える俺も十分異常だろうけど。
退屈な授業が終わると、すぐさま俺は図書室へと向かった。

授業が終わったばかりなので、まだ教室を出る人はまばらだった。それを横目に、俺は早足で図書室へと向かった。

持ち主の正体を、知りたい。

そう思いながらも、まだ俺は何も知らなかった。当然だろう、記憶の中で起きた「事件」の詳細も、まだつかめていないのだから。殺人が起こった、という肝心な部分だけしか見ていないからね。そういうわけで、今はその輪郭を埋めなくてはならない。だからといって手探りの状態って程でもないけど。少しは頭を働かせたさ。

日記を落とした場所が図書室であることに変わりはない。

だから、そこで持ち主に関する情報は得られないだろうかと考えた。日記を拾った委員長なら、他に何か知っていることがあるかもしれない。

まあ、同じ学校に、落とし主はいるのだから、いつかは探し出せるかもね。

淡い期待か。

終礼を終えたばかりだったので、また図書室にいる生徒もまばらだった。

「うん？ 今日早いな」

小田島が首をかしげた。この図書室の司書を務め、図書委員を率いる、いわば管理人的な存在の中年男性。

親子ほどの年齢差を感じさせない筋肉質な体格と顎鬚あごひげが、この場には不釣り合いだった。

「そうですね。今日は終礼が早かったですから」

「他の生徒はまだ来ていないみたいだが……、まあいい。実は今日、

本棚の整理を頼もうと思つてな。先に始めてくれないか？」

「そんなに急ぐことですか？」

「古本の回収業者が明後日に来るんだ。だからそれまでに不要な古本を片付けなきゃいけない」

面倒臭いけれど、いちいち不平不満を垂れるほど俺は短気じゃない。後で日記のことを聞くためにも我慢するとしてよう。

委員長が来ればの話だけど。

案の定、彼女が来たのは委員の殆どが来て、整理をあらかた終えて、解散した頃合いだった。狙い済ましてきたとしか見えないね。

「遅いぞ、社^{しゃ}」

「すみません」

随分と腑抜けた謝罪だった。どこの政治家のように誠心誠意がまるでこもつてない。

「マツタク……うん？ 何そこでぶすつとしてるんだお前は。帰らないのか？」

「委員長に用事があるので、帰りません」

正直、イラついてるんだけどね。ここは冷静に、遅刻したことを許容するとしてよう。

それで、委員長に質問。

「昨日の日記？ ああ、アレね」

「あの、コレです」

鞆から取り出した手帳は、没個性的なものだった。

「どこで拾ったんですか？ 正確に教えてください」

「んーとね……確かに拾ったんだけどねえ……」

暫く眉をひそめ、考えていた。

少しして、長いすから腰を上げた。

「ついてきて」

委員長が言った時には既に本棚の角を左に折れていた。遅れずについて行く俺。都内有数の蔵書量を誇るこの学校の図書室は、コの字型の校舎の中央部分に位置し、広いスペースが本棚で占められて

いた。

「この机に挟まっていたわ」

そこは長方形に切り取られた机が並んでいた。

見ると、確かに小さなノートくらいは挟まったら気付かない。

昨日委員長が指差した場所は、たぶんここだ。

「あら？ 何か挟まっているわね」

委員長の指摘に俺は目を見開いた。

見覚えのある生徒手帳が隠れていた。

「後で持ち主に返しておきますよ」

「知ってるの？」

かなりのドジなんですけどね。委員長。

「いつぐらいに気付きました？」

「昨日の夕方ね。放課後ここに来て、一時間くらい経ったところかな。

何もない机に、こんなものが挟まっていたわ」

その時誰かいませんか？ これを落とした人とか。

委員長は即座に首を振った。

「いいえ」

ちよつとだけため息をついた。そんな些細なこと、覚えているはずがないか。

それにしても、こういう隙間にはゴミとかが溜まるものだ。消しゴムのくずとか、ガムの紙。

そうしたものが積み重なってしまうため、定期的に掃除をしなければならぬ。その時に、委員長は見つけたのだが。

「でも落としてからそう何日も経ってないみたい。……手帳の上には殆どゴミが積み重なっていなかったからね。地層累重の法則よ。もちろん、これくらいは知ってるわよね。まさか知らないわけないでしょうね」

「当たり前ですよ。常識です」

俺は軽く地層累重の法則について説いた。

「そうね。そこまで馬鹿じゃないわよね」

こんな風に、たまに微笑みながら嫌味を吐くような人なのだ、委員長は。

半ば呆れてしまいが、次に机の下を見てみる。

せめて、この近くに座っていた人が誰なのかわからないだろうか。

「汚いね」

「そつスね」

掃除をしなかったら汚くなるのは自然現象だが、これはマジで酷い。何故かというと、パンの欠片が至る所に散らかつており、それを四匹のネズミが堂々とかじりつき、斑模様で毒ついた色をしたクモが、横の壁に張り付いていたからだ。

全く、素晴らしい世界を営んでいるものだ。

その住人が残飯と害獣という時点で既にアウトだが。

「掃除しなきゃね」

「……そつスね」

よくこんなところに座ったものだ。落とした奴は。

考えてみると、日記が挟まっていた机は、誰のものでもない公共物だ。

「誰かが座っていた」という記憶を引き出そうとしたところで、持ち主なんているわけがないし、無理に決まっている。

その上、先ほどの本の整理で体が疲労を訴えている。

というわけで、学校を探しまわるとは諦めることにした。
適当だね。

どうせこれ以上委員長に聞いてもしょうがないしさ。

けれどまだアプローチする方法は残っている。今度は、家のパソコンを使ってだけ。

ともかくもこれ以上図書室にいる理由もなかったので、俺は早々

に立ち去ることにした。

「このネズミ、おいしそう……」

委員長の爆弾発言はあえてスルーして、ね。

やはり俺の見たものは殺人事件だから、ニュースに報道されていないだろうか。

例えば、五年前、十年前の殺人事件。

一個人の俺が、そんなものを調べられる方法。

すると、案外身近なものが役に立つものだ。

便利な世の中なんだね。

と、少しばかり思う。けれど、中々目当ての情報が出てこないものだ。

あれからもう三日も経ってるけどさ。

宝探しに似ているね、これ。

九月十九日

同じようにキーボードを叩くと、すぐさま検索ワードが画面に示された。

そこには今自分が住んでいる区域の名前、八月十五日という日付、そして「殺人事件」といった言葉が、スペースを挟んで並んでいた。もちろん日記の日付は去年のものだった。

なぜそんなことを知っているかという点、八月二日の記事に注目したからだ。

その日、とある有名な小説家の最新作について記されていた。

「最新作」というからには、出版されてそれほど年月がたっていないはずだ。そしてその「最新作」は、既に初版から一年を過ぎている。

ここから推測すると、日記は去年につけられた。

その小説は俺も知っているから、間違いはないだろう。

ちなみにその有名な若手作家は、もうこの世にはいない。

どうでもいい話か。

部屋に設置されているパソコンにもう一度目を向ける。

マウスをクリックすると、画面が変わった。

だが、そこに表示される記事に、どれも条件を満たすものはない。検索条件を少し変えて、また同じ操作を行う。

今度はヒット件数が一つもなかった。

同じことを三日続けて行っているのだから、辛抱ならぬね。

ヒット件数がゼロ。それはつまり、検索したキーワードに一致するものがないということだ。

俺が見た「事件」は、世間では起こっていないと扱われているらしい。

なぜだろうか？

俺の考えでは、あの「記憶」の中であった殺人事件はマスコミに取り扱われてもいいはずだった。

さらに、被害者が胴体を裂かれるという、かなり猟奇性の高い事件だ。

そんな珍しい大魚^{ネタ}を放置して腐らせるようなマスコミはいない。

むしろそれで飯を食っているのだから血眼になって飛びつくだろう。

だが、日付が去年とはいえ、すぐネットから立ち消えるものだろうか？

世間には様々な事件が起きているが、古いものでも少し探せば必ず出てくる。

ここはどう考えるべきだろうか？

公にされていないとか？

報道機関が隠す理由が見当たらない。

それとも「事件」そのものが本当になかったとか。

違うね。俺の記憶探索能力は絶対だ。見える記憶に嘘はない。

今日、何度目かの溜息を、気付かないうちについてしまったらしい。とたんにパソコンの画面が白く曇りだした。

疲れた目を、ひとまずシャットダウンする。

将棋でいうと、詰まれる寸前の王将といったところかな。

思わずあくびが出てしまうほど、無駄なことをしているように思えるんだけどさ。

それでも貴重な時間を三日も費やして、何も知らないまま引き下がるのも癪だった。

と、変なところで意固地になってみる。

そんなことは横に置くとしよう。

さて、どうしよう？

ここまでくると、俺が見た「事件」は、報道されていないようだ。ならば、別の方向ルートから調べる。

事が大きいだけに、必ず痕跡は残っているはずだ。

「持ち主」から探してもだめだった。

「事件」を探してもだめだった。

探すところがあるとすれば、残りは一つしかない。

日記の記述だろう。

俺は少し考えて、フロアリングの床に無造作に置きっぱなしの鞆を拾い上げ、白い手帳を取り出し、中を開いた。

ここに何も目を引く箇所がなかったなら、しょうがない、調査は中止だ。

一通り見通したものの、これといって大層なことが書かれていなかった日記。

綺麗な字だが、内容が退屈だったから、あまり真剣に読む気は起こらなかった。

敬遠していたのかもね。

退屈なものにさ。

ふと、目を留めた。

それは日付が欠ける前の日の記事だった。

* * *

八月六日 晴れ

「アーク」という喫茶店の主人をつとめている私の友人がいる。

その人、最近新しいメニューを考えているのだとか。

大変だね、全くなさ。

それはさておき。

常連客として思う。

あの店は、絶対的にメニューが少ない。

断言してもいいだろう。

かといって隣町にある「レイ」のように増えすぎるのも困るけど
な。

第一あそこは顔なじみがないし。

話を戻そう。

さて、店の主人は以前新メニューの一つを、私に披露してくれた。

ただどき、砂糖と塩を間違えるという古典的なネタもご披露してくれたおかげで、今も舌が熱を帯びて痛い。

先が思いやられるね。

* * *

「ふーん」

持ち主の友達というわけか。この人なら、何か知りえているかもしれない。

少なくとも、持ち主のことについて。

「会ってみよ」

俺は時間を確かめて、すぐさま鍵を持って玄関に出た。

今日は姉もいないし、飯を食べる頃にもちよつどいいだろう。

日記の記述を元に、俺は町へ繰り出した。

あの店に、「事件」の手がかりが潜んでいる。あと、持ち主の名前がわかるかもしれない。

そんな希望は、すっかり空腹に紛れてどこかに置き忘れていた。冗談だけど。

「アーク」という名の店に心当たりはあった。

小高い丘の、寂れた広い公園のすぐそばにあって、普段は人の通らないもの静かな場所にある。夜になるとそれこそ、人の影すら見当たらないというし、本当に経営が成り立っているのだろうか、少し気にかかる。

しかし、去年からずっと営業が続いているとすれば、それなりに通う人もいるのだろう。

リピーターというやつね。

涼しげな風にあおられて、つい最近まで肌感じていた汗が、一気に払拭されたような気がした。

不快極まりなかった夏は、この時期もう過ぎていた。当然のことながら歓迎するべきだろう。

だけど、涼しく思えるのはこの曇り空が晴れるまでだ。まだ九月は半分しか過ぎていない。

「いらっしやいませ」

落ち着きのある声で、迎えられた。

俺はその声の主を、店の主人だと悟った。

他に従業員は見当たらないからね。

「カウンター席に座ってもいいですか」

なんとなくだけど、初めて来た店だから自分でも気が引けている

らしい。まあ、他に客はいそうにないけど。

「いいですよ」

ということ、出口から一番遠いところへ移動しながら、店の様子をチェックしてみる。

外から洩れる薄い光が、広い店の中をぼんやりと照らす。

四角い形をした店には、間隔を置いて大きな絵画が飾り立てられていた。そしてごくシンプルなテーブルに、同じ木製のイスが、同じように並ぶ。整然とした配列に、掃除の行き届いた、白い地の床。ここが惜しい。少しばかり地味な印象を受ける色合いだ。

俺の独善的な価値観で評価してみたけれど、ごく普通の、至ってシンプルな造りだ。第一印象としては、落ち着いた雰囲気のお店だとそれとなく思う。

「ご注文は」

俺が席に着いたのを見計らって、店の主人は微笑みながら言った。

メニューを見て、適当な値段のものを選ぶ。

というわけで、カツカレーを注文。

財布に余裕はないけれど、この価格なら安心できる。

注文を一度復唱して、店の主人は厨房に去っていった。

「さてと」

先に出された水を飲みながら、質問の内容を考える。

まさかいきなり、この常連客で最近殺された奴はいるかなどと訊くことはできないだろうし、答えづらい質問はなるべく避けるべきだ。

日記を書いていた「誰か」がなじみだった店。

失礼だけど、来る客は少ないから店主のほうもそれぞれ客のことをよく覚えているだろう。

突然死んだ常連客ならば、なおさらね。

「おまちどうさま」

五分くらいたって、店主はやってきた。

客が一人しかいないから、注文が早いのも当然か。

と無駄な思考をしていると、独特の匂いが鼻を刺激する。思わず頬の内側がじんわりと湿りだす。質問より、まずは食べることにしよう。

料理の腕は中々だった。もつとも、感想を考える間もなく平らげてしまったけどね。

おかわりした水割りを一口飲む。一息ついたところで言った。

「いつもはどれくらい人が入りますか？」

これだけは素直に聞きたい。本当に経営が成り立っているのか不安になってきたからね。

と、なぜか店主は吹きだした。

「たまに新しい客が来るたびに言われるんですよ、それ」

大丈夫ですよ。店主はそう付け加えた。

「常連客が多いんですね」

「ええ。この辺りに店はあまりないですから、来る人も限られてくるんですよ」

とすると、この店の立地条件が悪いだけの話だろう。リピーターが多いことは、いい店だという証だ。

そしてどこことなく、話しかけやすい雰囲気がこの人にあった。人柄なのだろうか。ならば、それに甘えて、質問を続ける。

今度は、本題だ。

「噂に聞いた話なんですけど、常連客の中に最近亡くなった人、いませんでした？」

一瞬、店主の顔色が変わった。

その表情は、微妙にこわばっていた。少し単刀直入に尋ねてしまったかと、俺は後悔する。

しかし、すぐもとの穏やかな、先程までの店主に、戻っていった。「どうして、その事を……?」

ほんの少し、わずかだがそれとわかるほどに声は震えていた。笑

顔をつくるっではいるものの、やはり口元がひきつっていた。

「どうって、噂で聞いただけです・・・なんかすいません・・・」

再び、店主は微笑んだ。今度は本当に表情が和らいでいた。

「いえ、そんな気遣いは結構ですよ」

一瞬間を取って、またつぶやいた。

「確かに、亡くなったのは、私の友人です」

「.....」

「氷室美月ひむろみつきといって、ああ、私の幼なじみです。開店してからよくこの店に来てくれたんですよ」

笑みを絶やさず、ゆっくりと語りかけてくれた。

氷室 美月。

生きていれば、今年で二十八歳の誕生日を迎えていただろうこの女性は、坂の上を行った先にある、大きな木造住宅に住んでいた。もっとも借家だったとか。

性格は几帳面で、とても正義感のある人だったらしい。それに加えて、自分なりの価値観を持っていたらしい。

職業は、近くの中学の教師を務めていたという。

驚いたことに、俺の高校の出身だった。つまり、遠い先輩に当たる人だ。

結婚はしていなかったが、恋人はいたとかいないとか。

家族は弟が一人、遠い町に住んでいる。

そして。

一年前の八月十五日、雨上がりの真夜中に。

彼女は「焼死」した。

木造の住宅は全壊し、消火したときには既に、辺りは灰に埋もれていた。

午前四時三十八分。

柱に下敷きにされた状態で、遺体は見つかった。
警察はそれを、火災による焼死と断定した。

店主から道を教えてもらい、坂を上る。足腰は強いほうだから、さほど苦にはならない。五分もしないうち、俺はそこへたどり着いた。

かつて氷室美月という人が住んでいた家は、今は跡形もなく消えて、四角い形に切り取られたかのように地表が露あらわになっていた。

去年の八月十五日に、人知れず起きた「事件」。過去に、ここで何があったのか、知る術はない。

土地を見る限り、記憶を引き出せるものがないからね。

空き地の向こうは、坂の上らしく見晴らしがいい。町の向こうを穏やかに流れる河口を窺うことさえできた。

天気がいい日なら、遠く海のほうまで見ることができると。

今は重たい雲が垂れ込んで、ぼやけているけどね。

俺は、色あせた花が近くに横たわっているのを目にした。

また、風が吹いた。

心なしか、花は揺れた。

九月二十一日

「ああそれと、今日はモツプの交換をする。高嶋、ついてきてくれ」
担任の福原忍足ふくはらおしたりはきびきびとした口調で言った。

「ハイハイ。わかりましたよ」

「ほら！ そう文句垂れるな。すぐだ」

それでも納得のいかない高嶋だったが。なるほど、最もサボる確率の高い奴を選んだということか。

そういう俺もサボりたいんだけどさ。

今日は委員会の集まりもあるし。

「早く帰りたいネ」

ぶつくさと不平をいう奴がここにも一人。独特の口調で不動は言った。

「あのサ、聞いていいカ」

「ん？ 何」

「この後図書室で大掃除やるらしいネ。なんでも委員長が汚いつていうカラ。急にどうしちゃったの力ナ？」

最悪だ。

「また掃除だなんて、嫌な日ダネ、全ク」

何も言う気にもなれなかつた。

とそこに、藍園が青いポリバケツを持ってきた。

見ると、自分のクラスの書かれたゴミ箱だった。

「あれ、それどこにあった？」

俺は不思議に思った。先週辺りから行方不明扱いを受けていたものが、今この場に堂々と姿を現しているのだ。

「……ゴミ捨て場」

藍園は平然と応えた。

でもどうしてそんなところに？

「ああ！ これ私が先週なくしたゴミ箱！ 優ちゃんありがと！」
犯人はお前か、天美。

「今度から気をつけてね、天美サン」

ここにきて物忘れが酷くなっているのは気のせいだろうか。気のせいじゃないと俺が困るね。

「ああ！ 私の教科書がない！ 藍園さあんっ！」

「……あとで探してあげるから、先に掃除しましょう」
彼女には無理な話だったか。
さて、これ以上くだらないことに時間を割いてしまわないように、さっさと掃除を終わらせてしまおう。

「遅いぞ、お前ら」

図書室で待つていたのは委員長、ではなく、他の先輩や、図書委員だった。

「教室の掃除で遅れました……って、委員長はどうしました？」

「さあ？ 見てない。つたく、アイツがいないと始められないんだよな」

不安が頭をよぎる。まさか提案者いいんちやうが掃除をしないわけにもいかないだらう。

しかしあの人なら平然と実行する恐れがある。

また悪い癖が出たのか、と勘ぐる。

「あーあ、あの人サボりにかけては前科があるからネ。ハメラレタネエ」

不動がタルそうに愚痴る。俺もいかげん帰りたくなってきた。

「じつは俺、用事が」

「遅れました」

そんな時に委員長が来るものだから、全く、嫌味な御方だ。

なんでこの人、委員長になれたんだらう。

「ん？ 何よ」

「……なんでもないです」

「あらそう、じゃ、掃除をはじめましょう」

自分が遅刻したのを完全に棚に上げ、委員長は涼しげな表情で言った。

大掃除といっても、教室の数倍もの広さを誇る図書室を一日で終えることは無理に近いものがあつたので、数人ごとに一つの区域を担当し、一週間かけて掃除を行うことにした。

つまり、当分委員会活動が掃除のみという本末転倒の上ないことになっているのだ。

ちなみに俺は委員長と不動の三人グループで、入口を担当。

あの日記を拾った机の区域ではないので、ひとまず肩をなでおります。

ネズミとゴミ相手に格闘するのも面倒だしさ。

「って委員長。楽なことばかり掃除しないでくださいよ」

「これは私の優先事項よ。だからあなたたちは他のところをやりなさい」

唯我独尊な人だなあ。

どうでもいいことが。

適当に壁を拭き、雑巾をバケツの水に浸し、また壁を拭く。同じ作業を何度か繰り返し返したところで、ようやくきれいになる。

「不動はその本棚の裏をお願い。壁は終わったようね。ならんは、棚の内側を拭いて。本は濡らさないようにしてね」

てきぱきと指示を出す委員長。

確かに不動の小柄な体格ならば棚の裏に入ることができるし、三人の中で一番背の高い俺は、埃のたまりやすい棚上を楽々、拭くことができた。

とまあ、珍しく彼女がすっかりしていたおかげで、作業は順調に進んでいった。担当区域が比較的楽なことあつて、暗くなるころには掃除を半分ほど終えていた。

「よし、今日はこれぐらいで終了だ。集合ー！」

顧問の小田島は芯の太い声を張り上げた。
今日は休館日だから、大声を出そうと、何の問題もない。
他の区域から、続々と委員が戻ってくる。
全員が集まったところで、水曜日にもた掃除を続けることが伝えられた。日を挟んではいたが、俺の区域はその日には終わる。
委員長がサボらなければの話だけど。

委員たちが解散した後、俺は一人教室に戻った。鞆を取りに行くためだった。

しかし、クラス内がぼんやりと明るいことに気が付く。

こんな時間に、誰かまだいるようだ。

中に入ると、果たして同級生がそこにいた。

「藍園？」

確か彼女は掃除当番になっていたはずだった。としたら、掃除を終えてからもずっとここにいたようだ。

藍園は俺を一瞥すると、何も言わずに入れ替わりに反対側のドアから出ていった。

俺は特に気にせず、自分の机に向かった。

「俺の鞆は・・・と。あつたあつた」

何の変哲もない、学校謹製のカバン。

中を確認すると、白い手帳、つまり日記は、ちゃんとあつた。

用事を終えた俺は、藍園がここに戻ってくることを考えて、教室の明かりをそのままにして、さっさと校舎を出た。

空は黒一色に覆われ、わずかに学校から漏れ出す光だけが辺りを照らしていた。

学校の近く、バスの乗り場に足を運ぶ。すると、妙な張り紙が一枚、飾られていた。

何かの通達だろうか。

見ると、内容はバスの運行停止のお知らせとある。他の車両が事故を起こし、今は運行できない状態らしい。

すると、この場でバスを待たせていても仕方がないことになる。薄暗い照明を頼りに読み終えた俺は、近くの駅に向かった。

電車を使って帰ればいいだけの話だ。

この時間帯は割と混雑しているけどね。

あと一つ加えるなら、家に一番近い駅からも、この間行った店のある坂を越えていかなくは、家に辿りつけない。

不便なことこの上ない。

さて、珍しく切符を買うことになって、改札口を通る俺。

ホームに待たされること数分。その時間は、バス通学の俺からすれば、早く思える。

バスなら二十分はゆづりに待たされるからね。

けれど、電車に乗ると、混雑した車内は熱気がこもっていた。中で動きがとれなかったこともあって、額から汗が流れ出す。

まるで夏が押し寄せてきたようだ。とにかく、暑い。

電車を降りると、そばにあつた丸いアナログ時計を見やる。

八時三十八分。

帰る時間が随分と遅れてしまったようだ。

駅を出ると、涼しい風がやわらかく吹き付けた。それだけで、かいた汗が乾くには十分だった。

駅前を通り抜けて、住宅街に入り、緩やかな坂を登る。静かなところだけあって、車の走る音すらどこにも聞こえない。

別に嫌いじゃない。

むしろ俺は騒がしいところに不快を覚えるほうだ。図書委員になったのも、静かな図書室で暇をつぶせるから、だったような気がする。覚えちゃいけないけど。

そう思いながら、日記を書いた人がかつて住んでいた所を、通り

過ぎる。名前の分からない花は、まだひっそりと残っていた。

坂の上まで登った見通しのきくところで、信号に出くわす。トラックが一台、丁字路の交差点の前で立ち止まっていた。見ると、緑色の信号が点滅していた。急いで渡りきったところで、トラックが走り始めた。

すぐ左手にあるのは、公園だ。

広い敷地を持つ公園だが、今は閑散としている。それに木が生い茂っているため、暗くてよく見えない。こんなところに、幽霊ゴーストも出たりするんだろうね。ありえない話だけど。

冗談を心の中でもみ消して、先へ向かう。

そこを過ぎると、あとは坂を下るだけだった。

その時、誰かの声が耳に入った。

空耳と疑ってしまう。けれども、そうは認識できないほど、はっきりと聞こえてきたのだ。空耳ではない。

俺は辺りを見渡した。公園からではない。道の先から。声はした。辺りに人はいない。そして、この辺りは何かしらの施設ばかりで、家も建っていない。坂の反対側と違って、ここは家と呼べる建物は少なかった。

その代わり。

昨日行った店が道の先にあることは、はっきりと覚えていた。

店を目にしたとき、俺は既に様子がおかしいことに気付いていた。悲鳴はここから聞こえた。

近づくと、扉が少し開いていた。上の階は確か、あの店主の住居になっていたはずだ。その窓は、開いていたものの、暗くて中の様子がうかがえない。

けれども、違和感を感じていた。

そう、たとえばようのない、緊張感ともいべきもの。

ぴちゃ。

店先で立っていた俺の頬に、何かがはりついた。

撫でると、指には生暖かな黒い液体が残った。

おそらくあの部屋から飛び散ったものだろう。

ただ、周りの暗さで「それ」が何なのか、わからなかった。

だが、何か、ある。

何かが起こっている。

先を急いで帰らなくてはならないはずなのに。

なぜか両足が店の方に向いていた。

そのまま、ゆっくりと時間は過ぎていく。

心臓の発する音が、今にも聞こえてきそうだった。

さっきまで気にも留めていなかった静寂が、痛いほどに耳に張り付く。

嫌な予感があった。

けれども、俺は歩を進めて、ドアの前で立ち止まった。そして、ドアノブに手をかけた。

昨日より、重く感じられる。

ゆっくりと開けるたび、油の切れた音が出る。

それを無視して、勝手に中に入った。

暗くて何も見えない。けれど、目は慣れていた。

昨日と同じ装飾のまま、無機質に置かれたイス。そしてテーブル。ほんの少しだけ片付けを行った痕跡がある。

それらを目にしつつ、広い店内を通り抜けて、奥へ進む。

どうやら一階部分には何も無いようだ。

そう思った刹那。

異臭を覚えた。

ごく最近「感じた」ことのある、不快な匂い。

戦慄が走る。

だが、その根元がわからない。

異臭は、どこから発しているものだろうか？

けれど考える間もじれったく感じられた。俺は狭いカウンターを、滑るように潜り抜け、調理室へと入った。

厨房を照らすぼんやりとした明かりが、今は不気味に思えた。

どうしてこここの電気がついているのかはわからない。

しかし奥のドアは、奇妙にも開きっぱなしの状態だった。行くか。

引き返すか。

俺は迷わず、後者を選ぶ。

そういう性格の人間だから。

自分の中に潜む、異常な好奇心がそうさせているのだろう。

たとえ、死ぬ可能性のあることでもね。
だからこの瞬間、明るい所で、さつき頬についたものが目に見えるようになって、俺は動じることはなかった。
予感があったのだが。

紅い鮮血が、頬を撫でた指にこびりついていていた。

ドアの向こうを見た。

その先の階段にも、ぽつり、ぽつりと、血だまりができていた。
カバンを肩にかけ直し、慎重に足を運ぶ。

一本道の廊下を抜け。

狭い階段の下に辿り着く。

上は暗くてよく見えない。

だが、気配はあった。誰かが上で

誰かが背後にいる。

振り返ったとき、黒服の「そいつ」はどこからか現れ、俺に襲い掛かった。

後ろは狭い階段。一本道の廊下の先には、奴。

塞がれたか。

奴の手に持っていた朱色の包丁が、俺に迫りくる。

それをかろうじて右にかわす。

ざく。

「っ！」

右太ももを切られた。

しかし体を傾けた勢いで、奴と入れ替わるように調理室へと突っ

走った。

力を振り絞って。

だが右足に痛みが走る。

体を支えきれず、前のめりになった。

すぐに体勢を立て直し、立ったところで、奴と向き合う格好になった。

刃物を突き出し、俺を威圧する、黒服の人間。

動けない。

外へ出られる位置に立っているが、奴を背にして逃げることは不可能だ。

狭い廊下、その先の狭いカウンター、重い入口のドア。

それらが邪魔になって、いずれ奴に追いつかれてしまう。

向こうは「それ」を待っている。俺が背を向ける、一瞬のタイミングを逃さずに。

相手を警戒しつつ、少しずつ後退する。呼応するように、奴は前へ足を踏み出す。

足の痛みはたいしたことはないだろう。血はほとんど流れていない。

だが。

逃げられるか？

いや。

逃げるのなら、奴を見た瞬間に、階段を上がり、二階の窓から飛び降りるべきだった。

それが唯一の逃げ道だった。

しかし、そんなことまで考える余裕もなかっただろう。

今、劣勢であることに変わりはないのだ。

殺される

体の震えを必死にこらえ
全神経を目の前に注ぐ。

ぼたり、あごの先から、汗が垂れた。

ゆっくりと包丁の先端を下げ

再び奴はかかってきた。

「即座に、後ろに逃げて・・・
いや、駄目だ！

「クソッ！」

踏みとどまって、右手の刃物に視線を注ぐ。
カバンを右手に持ち、盾にする。

もう一度奴の背後へまわり、階段に

畏だった。

刃物を突き立てるふりをして、左の拳を繰り出した。
避ける間もなく、顔面にヒット。

後ろに倒れようとするのを、俺はこらえた。

奴の左足が、俺の頭部を強打した。

カバンが手から離れ

そのまま頭の後ろを壁にぶつけ、俺は床に倒れた。

頭部から血が噴き出し、瞼の上に留まる。

やがて、頬を伝って零れ落ちた。

どうやら、切ったらしい。

俺は壁にもたれた姿勢のまま、奴を見上げた。

わずかに洩れる調理室からの光から、奴の姿がぼうつと浮かび上がる。

見覚えのある十字形の、白磁の仮面をつけていた。

12 記憶・11 (9・23)

* * *

混雑した車内でひととき大きく、アナウンスが流れた。

私は人ごみを分け、とある駅で降りた。

また、いつもの一日が始まる。

そう、嘯ひそひそきながら。

混み合ったプラットホームに、同じ制服を着た学生が所々に紛れ込んで、そ知らぬ顔をしている。彼らは互いに知らない人たちなのだろうけど、同じように、私も彼らを知らない。

この中で、私と口をきく人間はというと、おそろくない。

そんなことを無駄に考えながら、人ごみをおしわけて進む。

エスカレーターに乗り、改札口を通る。改札口は毎朝、数分に一回はトラブルが発生する。大抵は取るに足らない理由のだが、中には機械の故障でつかかってしまうこともある。

どんなことであれ、いつも、正常に、何もかもが、うまくいくなんてことはない。

落とした日記が見つからない。

探そうとしても、どこにあるかわからない。

全く、上手くいかないものだ。

九月二十三日

その日、久しぶりに暑さが戻ってきた。

ここ数日、空をすっぽりと包んでいた分厚い雲がどこかへ流れていったからだ。だから半袖の制服越しに、汗が搾り出されるように仕方がない。

校舎に入ると、いくばくか暑さが和らいだ。どこのクラスも冷房をかけているため、冷気がこんなところまで押し寄せてきている。ほっと一息つく。

靴を替えて廊下を通る。顔を知っている教師が、その途中で声をかけてきた。

三村という名の、新米教師。二十三歳、つまり去年まで学生として生きていた人だ。

そのせいか、彼女には親しみやすい反面、どこか威厳が感じられない。それでも、

「おはようございます」

礼儀正しくあいさつはしたつもりだった。

「あ、おはよ！」

そのうち、教師らしくなるかもね。

教室に入ると、案の定冷たい風が流れてきた。

あまりの寒さに温度設定を確かめてみる。最低温度、強を選択していた。

独自の判断が働いたので消させてもらおう。

「くおら！ てめえ消すな」

高嶋という男子生徒の声だ。

「消せ！ つーかマジ寒イ」

すると、不動という変わった口調の同級生の声が、耳に入った。

「暑いから消すな！」

「ウルセエ、黙レ！ オイ、オマエ消せ」

癩に障る言い方だったが、同意。

いつもつるんでいたつけ、あの二人。

すると校舎内に聞きなれた鐘の音が響き渡った。

「きりいっつっ!」

教卓に一番近い席にいた天美が叫んだ。既に、担任の福原は中に入っていた。

「礼!」

一斉に頭を下げる。それに洩れず、私も。

「それでは出席をとります」

そう事務的に言って、出席簿を手に取る。順に、名前が呼ばれる。しばらくして私の番がまわってくる。

私の名前が、教室にこだました。

「はい」

それで終わりだった。自分の名前が呼ばれば、あとは関係ない。そう思っ、鞆から読みかけの本を取り出したときだった。

「はい」

振り返ったとき、既に凧和也の名前が呼ばれたあとだった。

「その傷、どうした?」

出席簿に書きながら福原が頬を指して言った。

「切っただけッス」

「そうか」とだけ告げて、また出席を取り始めた。もちろん誰も、

「傷」のことを気にかけない。それがどんなにおかしなことか、知っているのは私ぐらいのものだろう。

確かに、頬の傷は「犯人に襲われてできた」ものだった。一昨日の夜に、私はあの店にいて、その傷を、彼の姿を見たのだから。

あの日、遅くなった学校からの、帰り道だった。

店の前を通り過ぎようとしていた私は、ふと異変に気付いた。

はじめは暗い店内がどうなっているか、中に入ることをためらった。けれど、私は意を決して、重いドアを開けた。

中をゆっくりと、進む。やがてカウンターを通り抜けたところで、私はぎよっとした。

調理室の向こうに、誰かが血を流して倒れていた。暗い店内でも、ぼつぼつと飛び散った血痕の量が多いとわかる。

私は恐る恐る、近くに寄って、その人物の顔をそっと覗き込んだ。

凧和也だった。

彼は壁にもたれかかるように、倒れこんで、ぴくりとも動かなかった。

けれど、ただ気を失っているだけだった。私は安堵した。死んでいるのではないかという不安が、そのとき一気に消し飛んだから。

生きていてくれてよかった。

何も関わっていないのだけれど、つとにそう思う。

近くには彼の鞆と思われるものが、中身をさらけ出していた。

その中に、一枚の紙と、白い手帳のようなものが、半分ほど出ていた。

けれど中を見ようとは思わなかった。

辺りにたちこめる「異臭」が、気にかかっていたから。

それはかつて、一度だけ嗅いだことのあるものと同じ匂いだった。

私はもう一度、目の前にいる人物に目をやった。

彼が生きていることを確かめて、階段の奥に向かった。一段ずつ、ゆっくりと、登る。

階段の上は、暗闇に包まれていた。

「それ」を見た瞬間、私はすぐにこの場から逃げ出したい思いに駆られた。

咽るほどの腐臭を放って、店主は横たわっていた。変わり果てた姿の骸が、唯一存在していた、とも言つべきなのだろう。

頸動脈を切られたと思われる失血死。部屋一面が、噴水のように血で埋め尽くされ、それは天井をどす黒く染めていた。

足元が変にネバネバする。見ると、フローリングの床に、血だまりができていた。

私は強烈な吐き気を催した。

耐え切れない。

死体に背を向けて、私は逃げた。

階段を降りて、廊下を一直線に進む。

だが途中で、私は止まった。

凧和也は、わずかに顔をあげて、私のほうを見ていた。

このまま彼を残して立ち去るべきだろうか、私は答えに迷った。何があったのか、どうして店主が殺されて、彼がここにいるのか、聞き出したいという思いも、小さな塊となって私の足をとどめていた。

けれど、その想いを、私は振り払った。

何もかも、全てのものから、逃げ出したかったから。

結局、私は逃走したのだ。

店主の死体が発見されたのは、日付が変わった昨日の朝だった。頸動脈を切られるという事件は瞬く間に世間に広がっていった。けれど、私が通報したからではない。翌日の朝に店に食材を配達しにやってきた業者の男だった。

私は、警察に通報することもなく、全てを放り投げて、逃げてし

まったのだ。

理由は、ただ怖くなったから、などではない。

私の頭に巣食う、あの悪夢のような記憶と、重なったのだ。

ちょうど、あの時氷室美月が殺されたときのように。

思い出したくもない。

これ以上、あの「事件」とは関わりたくなかった。それは事実から目を逸らすことなただけけれど、それでいい。もう人が殺されるのは、見たくはないから。

けれど、日記は、日記だけは、どうしても取り戻さなくてはいけない。

絶対になくしてはいけないのだ。

「起立！」

イスの音がかたがたと鳴った。

いつのまにか、鐘が鳴り、また同じ昼休みが訪れていた。

私は一人、図書室に向かった。

クラス内で話題になっている、この間の殺人事件。

私も一応関係者なのだろうけど、話には関わりたくはない。その代わり、疑問を持っていた。

殺人現場にいて、平然と学校に来て、何事もなかったかのように過ごしてる同級生に、私は戸惑いすら覚えていた。

「あれ、どした？」

図書室のカウンター席に座って本を読んでいる凧に、見知らぬ女子生徒が尋ねた。

凧は顔を上げた。

「委員長？」

「その傷、どうしたの？」

「え？ ああ、これですか？」 頬を撫でた。「……木の枝に当たって、切っただけですよ」

「ふうん」

そういつて委員長と呼ばれた人は、一冊の本を取り出した。

「これ、返却するね」

「あ、これ三週間も延滞してるじゃないですか！」

「さあ知らないわね。借りた日にちが間違っているんでしょうね」

「……図書委員失格ですよ、ソレ」

私はそれとなく、頬の傷を見ていた。

彼に対して、深い疑念を抱きながら。

机に突っ伏して、私は図書室のカウンターに座る一人の少年に、疑いの目を向けていた。

ここ数日、凧和也は不可解な行動を取っている。

事件当日、確かに彼は店の中にいた。けれど事件に遭ったにもかかわらず、自分の身に何事も起きなかったかのように、平然として
いる。

でもそれは、おかしいことなのだ。

普通の人間だったら、まず警察に対して、通報するなり事件の目撃者として話すなり、つまりそういった行動をとるものだろう。少なくとも、あの状況を見逃すようなことはしない。けれど、彼は何食わぬ顔で、登校している。

当然ながら、私は凧に疑いを抱いた。

彼が、店主を殺害した犯人ではないかと。

もし犯人なら、警察に通報することはしない。廊下で傷を負ってうずくまっていたのも、店主を殺害した時に、抵抗にあってできた傷かもしれない。

けれど、それでもどこか、腑に落ちない。

犯人なら、「私の顔を知っているはず」だろうし、毎日顔を合わせている自分に、全く気付かないというのも、うなずけない。

それに、廊下で怪我を負っていたこと。

本当に店主を殺したのなら、死体から離れた廊下で倒れていたのは、なぜだろう。まっとうな考えなら、廊下で「誰か」と格闘して傷ついて倒れた、といった方がいいだろうけど。

では、彼が犯人ではないとする。すると、彼はあの日何をしていたの
だろう？

まず現場の店で、何者かに襲われたとしよう。その後、私が彼を

見て、死体を見て、逃げ出した。最後に見たときは、わずかに意識が戻っていたのだけれど、その後は知らない。

彼がその後、とった行動を、推測しよう。

まず、彼は意識を取り戻し、店を出る。けれど警察には通報しない。

店を立ち去り、翌日もまた何食わぬ様子で、登校する。

いつもの生活に戻る。事件とは関係がないように装って。

それはなぜだろう？

いや、私も同じように、現場を逃げたのだから、彼を責めることはできないのだけれど、どうして？ 私とは別の理由があって、逃げたのだろうけど、それはなに？

「……………」

机に目を泳がせたまま、もうしばらく思考の波に漂ってみる。行き着くところは、ひよっとしたら、ないのかもしれないけれど。

静かな室内に、ひそひそと話し声がある。なんだろうと思いつき、本に向かい合った顔を突き上げて、一呼吸してから、ちらり、見た。

「委員長の借りた本、あと八冊ほど延滞しています。返してください」

「その記録が間違ってるわね。私は無関係よ」

「小田島サンに言いつけますよ」

「あらあら、先生に告げ口？ 随分と幼稚ねえ」

「怒りますよ」

どうでもいい話が延々と続いていた。

ふう、と息をつきながら、私は目を閉じた。

日記を探さなくてはと、疲ればかりが重なる。どうしようもなく、ひどく疲れる。たまに、そんな自分に嫌気がさすときがあるのだけれど、そう自白したところで、誰か他の人間に取って代われるわけもない。全てを忘れ、全てを捨てたいのだけれど、できるはずもない。

もっとも、そうしたところで、何も変わらないだろう。

他人になることは、それまでの自分を真っ向から否定することになるから。

結局、自分は過去を捨てることができないのだ。話が逸れた。

今の私は、日記を取り戻すことだけを考えなくてはならない。もう遅いのだろうけど。

また、嘯く。嘯いたけれど、日記がどこにあるのか、皆目検討がつかない。さて、あの白い手帳は、どこにあるだろう。

そう考えた時、私はまた、あの店の光景を思い起こしてた。

放り出された凧和也の鞆が、ふと目に入った。

そこから少しばかり出ていたのは、暗闇の中、ぼんやりとした白地の、小さな手帳だった。

そこには一枚の紙が挟まっていたのだけれど、なぜだろうか、あのときは気にも留めていなかった。

彼の鞆に入っていた、白い手帳。

凧和也は日記を持っている。

図書室を離れ、校舎を出たとき、日の光はまだ眩しかった。結局、日記を持っていないか、私は聞かなかった。持っているなら、返して欲しいのだけれど、どうしても言い出せない。

聞き出したい、真意を問いたいのだけれど、かえって自分が怪しまれるんじゃないかと、恐くなって聞き出せない。

事件に遭ったことと、日記を持っていたこと。これは、偶然なのか。そうじゃないのか。知る術はない。

私は迷っていた。彼が事件の犯人だという考えも、まだ捨てきれないから。尋ねてみるのが一番早い。けれど、それはできない。もどかしい自分に情けなくも思えた。

やがて、日は暮れた。

どのくらい歩いたのだろうか。ふと、あるところで私は立ち止まった。

そこは小さな丘の上にあって、広々とした土地が目の前に広がっていた。その向こうには大きな川が流れていた。

思い出すまでもなかった。ここは、かつて氷室美月が住んでいた所だった。

今は空き地となって、地面がむき出しだ。

無意識のうちにこの場所に来てしまったようだ。

あの夜も、私はここにいた。

それは決して忘れることのない記憶なのだけれど、ここに来るたびに嫌でも頭に浮かび上がってしまう。小降りになった雨、ずぶぬれになった私、あの人の目、血の臭い、紅いもの、黒い人間、ナイフを突き立てる光景、何一つとして、私にしがみついて離れない。

おそらくあの人と、店主を殺害した犯人は、同じ人間なのだろう。

「事件」の存在を知っている自分も、いつかは殺される。そんな不安が、いつも付き纏う。けれど、もう何も関わりたくない。思い出したくないから。

私の言い分、分かってくれるだろうか？

そんなことを、誰かに尋ねてみたいと思う。

「どうしたんかね？」

私は後ろを振り返った。見ると、頬のこけた中年の男が、怪訝そうな顔を浮かべていた。

「そんな空き地に入って、何をしているんだ？」

改めて自分の立ち位置を確かめる。いつのまにか、奥の柵にいて、崖の下を眺めていた。

空き地は崖の上にあった。男は、私がここから飛び降りるのではと、不安に駆られたのだろう。

私はそっと柵を離れ、男のいるほうに向かった。

「どうも、すみません」

「あんまり柵に近づくと危ないから、気をつけるよな」

男はそう言っつてふっと微笑んだ。

「どうして、こんなところにいたんだね？」

「え？」

「いや、ここはめったに人の通らないところだから、不思議に思っ
て。アンタ、どうしたんだい？」

気さくに話しかける。その様子には少し気が引けながらも、答えた。

「ここで、昔火災があったと聞いて、来たんです」

「一人で、かい？」

押し黙る私。

「まあいい、それなら一つ聞いてくれないか？ あんた、見たとこ

る同じ高校の制服を着ているようだし・・・」
ふと疑問に思った。同じって、何？

私と同じ制服を着た人が、いるってこと？
それをこの男は話に持ち出した。

「最近さ、この辺りで聞き込みまがいのことをやっとなる高校生がいるみたいなんだ」

嫌な予感がした。

「詳しくは分からないけど、なんだか亡くなった氷室さんのことについて聞き出してるみたいなんだ」

執拗に、火災事故のことを訪ね歩く高校生。

「そいつは男で、君の制服のベストにつけてるのと、同じ校章だ」
私はその男子生徒の特徴を事細かに聞いた。

そして、私は啞然とした。

「知り合いなのか？」

回答に困った。

「すみません、知りません」

男は残念そうに「そうか」とだけ呟いた。

「いや、つまらんことを聞いて悪かった・・・まあ、わかるはずもねーよな」

知っているのだけれど、嘘をついてしまった。

けれど、その代わり私は確信した。

凧和也は「事件」だと気付いている。

そして彼は、その「事件」の真相を追っているのだと・・・。
彼はおそらく、あの人のことは知っているだろう。

けれど、日記にはあの人の名前も書かれていないし、日記と事件と、二つの接点が彼にわかるはずもない。一体、どうしてだろう？
どうして、わかったのだろうか、とまた私は考え込んでしまった。

「・・・」

私は思った。

やはり、彼自身に問いただすしかないのだろうか。

なんにも関わりたくもないのだけれど。

* * *

あの店で、俺は何をしたのか。何を思っていたのか。事件の起きた日から、順に追ってみよう。

九月二十一日

どのくらい気絶していただろうか。
とにかく、俺はひどい頭痛に目を開けた。

俺は仄暗い廊下のそばで、横たわっていた。辺りを見る。しかし、奴はいなかった。それどころか物音一つ、聞こえない。

助かった、のだろうか？

ふと、無造作に放り出されたままのカバンを見た。腹ばいの中を確かめると、日記は無事、収まっていた。
すると、一切れの、いや、日記と同じ大きさの一枚の紙が挟まっていた。

中を開くと、細かい文字で埋め尽くされていた。
暗くてよく見えないが、これは、間違いない。
日記の切り取られたページの一片だ。

しかし、こんなものを誰が、持っていたのか？
何となく、奴だと思ってみる。あまり考えると、頭痛が酷くなる。

まあ、それはさておき。

「・・・」

俺の目に人影が映った。

誰だろうと思って、廊下に横たわった顔を上げる。すると、見知らぬ少女の姿が目に入った。どこかで見たことのある、けれど、しばらく思い出せないでいる。

その少女は、どうやら、俺の通う高校の制服を着ているようだ。肩に少しかかるくらいの黒い髪に、濁りきった水のような目。その時俺は思い出した。

氷室美月の記憶の中で、呆然と立つ少女。

今日の前に、その人が立っていた。

「彼女」と今、「目の前にいる人」が、全く重なって見えた。

ああ、生きていたのか。

俺は驚きながら、心の中で呟いた。

しかしその少女は、くるりと背を向けた。

やがて、無言のままどこかへ行ってしまった。

それから数分、暗い廊下に沈黙が流れた。

俺はさっきまであったことを、できるかぎり、もう一度思い起こした。

俺は、奴の蹴りをまともに、頭に喰らって倒れた。

うずくまる俺。

そばに立ち、ナイフを突きつける奴の姿が目に見えかぶ。

死ぬ。

頭に、それがよぎる。

俺は覚悟を決め込んだ。

不思議と、奴の動きがゆっくりと感じられた。

いつのまにか、奴の視線は違う方向へと注がれていた。俺が落とした、カバンがあった。

そこから、あの日記が飛び出していた。

「・・・」

おもむろに奴が手に取る。一方、俺は先ほどの回し蹴りをまともなくらい、体を動かすことすらままならない。

血が流れて止まらない。

痛みをこらえ、奴の動きに注視した。

無言で中をぱらぱら、めくる。

と、再び奴はこちらに振り向いた。

そう思っていたら、もう一発。

奴の右足が俺の腹を直撃した。

そして、しばらく気絶していた、ということが。

床に手をつけて、立ち上がる。

「いてて」

足に刺すような痛みが広がった。見ると、右足ふとももを切ったようだ。

なんとか痛みをこらえようとする。

俺は、階段のほうに向いた。

さつきは奴と鉢合わせてしまい、二階に行くことはできなかったが、どうしよう。

また、先程の襲撃に遭うことは、ないだろう。

何となくそう思い込む。しかしそれだけでも、十分だ。

「行ってみるか」

その先に、誰がいるのか、おおよそ見当はついている。

そうしなきゃ、この「臭い」の説明がつかないからね。

酷い話だ。

階段を登ると、あたりは暗闇に包まれていた。そして確かに、静かに、店主は横たわっていた。

気持ち悪い。

俺は急いで引き返そうとする。しかし階段の途中で足がもつれ、頭を強く打った。

「つてて・・・」

とても痛い。

だが、その痛みを感じる俺は今、生きているのだ。

不思議なことに、今この時が愛おしくも思える。

立ち上がり、調理室へと向かう。ふらついた足を必死で動かして、途中、紙切れの挟まった日記の入った、床に寝かせたままの鞆を肩にかけて、調理室を抜ける。カウンターをくぐり、そうしたところで、俺はもう一度背後を振り返った。

このまま逃げていいのかと、後ろめたい気持ちに捉われる。

このまま通報するべきか。

だが俺の考えは、一つに決まっていた。

ここから、立ち去ること。

要は、逃走だ。

別に理由はないんだけどね。

けれど、とっさの判断が働いた。

ただ、それだけのことだった。

俺は誰もいない、無人の店を後にした。
全てを放り投げて。
全てを残して。

ただ、日記と、一枚の紙だけを、手にして。

幸いにも、頭に負った怪我もさほど深いものではなく、足に残る痛みもいくらか落ち着いていた。

九月二十二日

学校から帰宅してテレビをつけると、「画面に「神谷町で殺人事件、発生」との見出しが大きく張り出される。

神谷町、俺の住んでいる所だった。

とある食品業者が材料の仕入れにやって来たところ、異臭に気がつき、そのまま店主を発見したのだという。

それは正午過ぎのことだった。

「ずいぶん遅かったな」

俺はそう呟いた。

元々人通りの少ないところだからね。

それよりも注目すべきところは、目撃情報だった。

犯人の特徴は？

黒のジャージに、十字に刻まれた白色の仮面。その下の素性は、男か？ 女か？ 老人か、中年か、若い人か。

だが、中々目当ての情報は流れてこない。遺体の発見が遅れたのが、原因だった。

遅れたのは、自業自得だとしよう。

通報はしなかったからね。

俺はテレビを消して自分の部屋に戻った。

カバンを放り投げ、急いでパソコンを立ち上げた。

しかしどのサイトにもまだ、真新しい情報は来ていない。

もう少し時間をおいてから改めて調べるべきだろう。

そう思い、電源を消し、そばのベッドに腰掛ける。

姉が出かけているので、家が静まりかえっていた。

ありえない。

頭の傷をさすりながら、俺はそう呟いた。

全く、不思議ではない。

硬いベッドに転がりながら、考える。こんな生活からは、昨日の

「あれ」は想像すらつかない。同じ町で事件が起こったことすら、信じられない。

それだけじゃない。

記憶の中で起きた「事件」にも、俺は同じような気分だった。

二つとも、殺人という点では同じ事。

殺人を目撃しながらも、俺は安穩とした日々を送っていた。

危険に遭遇しながらも、俺は生きている。

何度も考えることだけだ。

平和で退屈な日常生活と、それとは程遠く凄惨な殺人事件。

この二つのギャップが、あまりにも大きい。大きすぎるから、ちよつとした混乱状態に陥っている。

この一週間で起きた出来事。

どう説明付けられるかい？

というよりこれから、どうする？

無意識に、その言葉を口にした。
つまり、目撃者として、警察に行くか、行かないか。
事件は起きてしまったのだから、今すぐに決断しなくてはなら
ない。
さて、どうしよう。

自分の見たことを、ありのままに警察に話す。

確かにこれは、正しい。善良なる一般市民として目撃したことを
ありのままに話し、犯人逮捕に貢献する。

遅くはないだろう。

けれど、ひよっとすると、今この瞬間に、犯人は手錠と結ばれて
いるかもしれないけどね。

すると、俺の証言なんかは捜査の役に立つはずもない。

そもそも、警察には話したくない。

「.....」

じゃあ、変なことだけど。

自分の力で犯人を追えないだろうか。

犯人に繋がる手がかりすらない、この状況で。

いや。

一つだけ、俺は犯人の残した手掛かりを持っている。

それは奴が持っていた、日記の一部分とすべき代物だった。

あの時、奴は俺の持っていた日記に、一枚の紙を挟み込んでいた。筆跡鑑定なんてしたことすらない俺でも、紙に書かれている字を比べることはできる。当然、全く同じものだった。

紙の日付は、八月九日と、十日。

これが「氷室美月を殺害した犯人」のものである可能性は高い。なぜなら、その犯人はつい最近まで、日記を持っていたのだから。すると「俺を襲った奴と、その犯人は同じ人間」ということになる。

記憶に間違いがなければ、あの白い仮面も、服装もほぼ同じものだった……。

少し整理をしよう。

氷室美月は、世間には「火災による事故死」として扱われている。しかし、この時間に、同じ家で「事件」は起きている。おそらく、火災が発生する前に。

それを知る人間は、俺と、犯人だけだ。

一方で犯人は、氷室の日記を、なぜか、持ち出した。

一年経ったある日、日記は俺が拾ってしまった。

犯人にしてみれば、取り返さなくてはならないだろう。

氷室美月の家は、焼け落ちている。

すると、普通は家にしまっているはずの日記も、焼けてなくなるはずだ。

けれど、今ここにある。

それはどう考えても、誰かが持ち出したとしか思えない。

つまり、火災のあった家に、誰かがいたことになる。

そうすると放火された疑いも出てくる。

結局この日記は、「事件」があつたことを示す証拠になるのだ。筆跡を調べれば、誰のものかわかるからね。まあ、「事件」といつても、記憶を覗かないと無理だけど。犯人にしてみれば取り返そうとしてもおかしくはない。だが、犯人のした行動は、謎めいている。持ち去つたはずの日記を、今になって学校に置き忘れた、その理由も、わからない。

もしかしたら、俺の知らない、犯人の意図がまだ潜んでいるかもしれない。

いずれにしろ、日記は学校の図書室で拾つた。

そして日記は犯人が持つていた。

だから、学校に通う「誰か」が、犯人だ。

だから自分の力で犯人を探し出すこと。

できるかもしれない。

当然、この日記は隠しておく。

今警察に持ち出したところで、軽くあしらわれるだけだ。

そう、結局は自分が調べるしかないのだ。

九月二十五日

「そういえば、図書室って、落とし物した人もよく来るんだよね。それで最近、こここの前の遺失物箱に来て、よくチェックする人がいるんだ」

図書委員の当番の日、小田島が不意に言った。

「最近ここに入れられる落とし物の数が減ってきたし」

「そうみたいスね」

俺が絡んでいることは黙っておこう。

「それで、社の奴がさ、気になること言ってたんだよ」

「委員長が？」と俺は聞き返した。

「ああ、女子生徒のことなんだけど。その人一年生なんだけどさ。

しょっちゅう来ては、ここ覗いてるらしくて。聞いてみたら、白くて小さな手帳を落としたってさ。お前、心当たりあるか？」

さあ、知りません。

「ま、そうだよな」小田島は、野太い声でうなりながら、欠伸をした。

その振動がこちらまで伝わってくる。

「どんな人ですか？」

「名前は聞いてない。けど、割と小さな子だったな」

偶然、といえば、それで済む。

だが小田島の言葉に誤りがなければ、「その女子生徒が日記を落とした」ことになる。

どういうことだろう？

日記を落としたのが、「事件」の犯人で、そいつが、女子生徒。ただ、その生徒は「背が低い」らしい。

一方で、俺が見た犯人は、背丈は同じくらいだった。

俺は一七二センチ。

とすれば、犯人は身長が一七〇前後ということになる。

男子ならば、それ位はこの学校に数多くいる。

だが女子となれば、そこまで背の高い奴は限られている。

女子で背の低い人物が犯人とは、俺には考え難い。

すると、別の可能性が出てくる。

困ったことに。

日記を落とした、その女子生徒は、俺があのお店で見かけた
「少女」

そして、彼女は犯人ではないことになる。

推測でしかないけどね。

「ポスター貼りにいつてきます」

俺はそう告げて図書室を出た。

学園祭のポスターは、相変わらずセンスの悪いデザインに仕上がっている。こんなものを、掲示板に張り出したくないのだけどさ。

でも仕事。

退屈なままよりましだ。

ポスターに画鋏をしっかりと食い込ませる。図書室前の作業は五分で片付いた。

「へんなの」

委員長がぼそつと言う。

「・・・何やってんすか？」

「気にしないで。かりんとう食べてるだけよ」

さくさくさく。小気味よい音を立てる。

「さくさく、図書室で、こんな、もの、さくさく、食べちゃ、ダメ
つて、言われ、さくさく、だから、ね、さくさく」

「食べるか喋るか一つにしてくださいよ」

「ほしい？」

いりません。

へんな委員長を放置して、もう一度ポスターを確認した。

少しも傾くことなく、堂々と張り出されたポスターだが、これを見たからといって、学園祭に来たいとも思わない。かえって逆効果。

ま、文句を言うなら、これを描いた奴に言うべきだろうね。

「委員長」

「大丈夫よ、歪んでないわ」

「いやそうじゃなくて」俺は振り返った。

「遺失物箱の前によく来る人がいるらしいですけど？」

「ああ、センセに聞いたの」

委員長は小さな口をかりんとうで埋めた。

「もごもご・・・後輩の女の子らしくて、私は知らないわ。随分と無愛想な子だったことだけはよく覚えてる」

「それ以外に何か覚えてることはないんですか？」

「さあ？ ちよつと髪が長い位かな？ 忘れた」

ああそうですかと、それ以上は聞かない。覚えていないというのなら、記憶には残っていない。委員長はそういう人だからね。

「・・・はあ」

溜息をつく。徒労感ばかりが残ってしまった。

「そのの後輩。ジューズ買って来なさい」

「あ、俺もう帰ります」

「買ってきて。自腹で」

「イヤです」

「じゃあかりんとうあげるから、さくさく」

まだ食ってたのか。

菓子を貪るおかしな委員長を放置して帰宅した。

帰宅した俺は、玄関に男が一人立っているのを目にした。

「あれ？」

こんな時間に、なんだろう。ふと疑問に思った。

門の前に、じっと石のように固まっている。

しばらくして、インターホンを押す。けれども誰も出ない。

姉もまだ帰っていないようだ。

それにしても、何の用だろうか。

近くに寄ると、男は気付いた。

「君は、この家の？」

「あ、はい。そうです」

「そうか。誰もいないから困っていたところだったよ」

男はふう、と溜息をついた。

「あの……何か用です、か？」

少し言葉に詰まった。俺はこの男を知らない。

「まあな。そんなところだ」

「……手帳？」

男は胸ポケットから取り出したそれを、俺に差し出した。一旦玄関に入り、明りをともし、見た。

警察官 呉竹重氏くれたけしげうじ

「警察の方、ですか？」

「そうだ」

ドアの前で堂々と立っている姿を見ると、成程、いかにもという雰囲気をもし出している。

やり手の刑事、といったほうがしっくりくる。

黒のスーツを身にまとい、レッドカラーのネクタイはきっちり

結ばれている。後ろに束ねた長髪と、細いあご、そして長い切れ目が際立っていた。

この人を見て、無意識に何と思うか。

非のあるものなら圧倒されてしまいそうだな、ないものなら安堵感を与えてくれそうだな。整った顔立ちからは、対峙する人間の本心を垣間見させてくれる。

「最近この付近で殺人事件が発生したのでな。見たところ、君は学生のようだな。学校からは説明があったらどう？」

「えっと、はい、ありました」

登下校は十分気をつけるように。朝礼で述べていたことだ。

「こうして我々は、聞き込みを行わせてもらっている。すぐに終わるから、答えてくれないかな」

「いいですよ」

警察手帳をしまうと、呉竹はこう切り出した。

「九月二十一日の夜、君はどこで何をしていたのか」

「……ええ、と。学校から帰宅したところ、ですね」

「学校というと、バス通学かな？」

「あ、そうです」

よく知っているな。心の中で本音を言ってみる。

「私も、あのバスを使わせてもらっているのですね」
考えていることを見透かされたようだ。

「しかし、そうになると……君はどうやって帰宅したのかな。実はあの日、バスが事故を起こして乗ることはできなかった。電車でも使ったのかな？」

「はい。神谷駅が一番近いですね」

呉竹は、メモ帳を取り出し、何かを書き込んでいる。向かい合った格好のため、覗くことはできない。

「ここから、駅まで少しかかるだろうね」

「十五分くらいです。途中で近くの坂を上りますから、少しかかります」

「坂、というと、君はあの店の前を通ったのかな？」

「そうですね。通りました」

「それはいつのことだい」

「・・・覚えてませんが、多分九時ぐらいだったと思います」

メモを取るペンを止めた。

「近くに、怪しい人間を見なかったか？」

「・・・」

「どうなんだい？ よく、思い出して・・・」

「誰も見ませんでした」

嘘。

俺は、正直には答えない。

「本当かい？」

呉竹は、わずかに目を見開く。俺の態度に疑いの目を向けているかのように。

「はい。人通りがないところですから、誰かがいたら、気付くと思います」

「・・・」

咄嗟についた嘘をかばうように、冷静に応える。

「確かに、付近の方々の言うことには、人通りがないそうだね」

納得、したか。

「それじゃあ、一つ聞こう。重要なことだから、決して口外しないように」

「はい。なんですか」

「九時ごろ、あの店から一人、学生服を着た誰かが出て行ったという目撃情報がある。それでも君は、本当に何も誰も見ていないのかな？」

口を、綿か何かで塞がれた気分だった。

少しの間、俺は言葉に詰まった。

しばらくの間、沈黙が流れる。

「九時ごろ、学生服を着た人物が店を出た。そして、君はその時間、店の前を通った」

沈黙を破ったのは、呉竹のほうからだった。

「と、いうことになるね」

「.....」

呉竹の鋭い目つきが俺を捉えて離さない。

「まあ、あくまで可能性の話だがね」

「.....疑ってますか？ 俺のことを」

「そんなはずはないだろう。何を言っているんだね？」

穏やかな語り口で、笑みを浮かべる。しかし、冷たい目つきだけは相変わらずだった。

「それなら、一つ聞かせてください」

「何かな？」

「目撃者がみた人、学生服着てたんですよ」

「ああ、そうだが」

「女子ってことも、ありますよね、それ」

「.....」

「例えば、スカートをはいていたか、いなかったか。夜中でもそれくらいのことは判別できますし、性別を特定できるという意味では、重要なことです。その人は、何と仰っていましたか？」

不意に、呉竹は口元を綻ばせた。しかし今度は、本当に可笑しかったようだ。

「女子だ」

呉竹は言った。

「確かに、学生服は、男女では違うからな」

「悪ふざけはよしてください。アンタ本当に警察官ですか？ ふつ

う一般市民にそんな聞き方、しないですよ」

「悪かったな。すまない。この場で謝らせて頂こう」
それでも、頭を下げたりはしない。

「だがこれは私のやり方だ」

「……あ、そうですか」

事実を隠して、相手の反応を試す。成程、この人、俺が犯人ならさっさと追い出したいと思うね。

違う意味で。

「さて、つまるところ君は、本当に何も見ていないのだね？」

「そうですよ」

「同じ高校の学生服をまとった、女子生徒も？」

「はい。見ていません」

投げやりに答えた。

本当は嘘なんだけどね。

偽証罪に問われるかもしれないな。

けれど、嘘をつく理由は、この人には解かる筈がないさ。

俺も別に、後ろ暗いところもない。

だからといって、「自分の知っていること」を話す気にもなれない。

本当のことを話したりはしない。

今しがた、この嫌味な警察官に対して不信感を抱いたからね。

犯人に協力する形になるけどさ。

「質問は、これで終わりだ。申し訳なかったかな……」

呉竹はメモ帳をたたみ、ポケットにしまいこんだ。

「どうも」

「もし怪しい人間を見かけたら、連絡をするように。署の者が対応してくれることだろう」

「はあ」

俺は時計を確認した。午後九時半を過ぎたところだろう。

「犯人って、まだ、特定できてないんですね」

「ん？ ああ、そうだ」

呉竹は振り返った。

「現場には証拠が数多く残されているが、ね」

「証拠、ですか？」

「うむ。しかし、殆どが意図的に残したもので、犯人に繋がる痕跡は一切残されていない。逆に言えばそれほど用心深い、ということだろう」

俺は呆気にとられた。

「いいんですか？ そんな捜査機密漏らしたりして」

まあな。

小さく呟く。

その言葉には、かすかにいらだちを含んでいるようにも思えた。

「……ご協力、感謝します」

深い、静かな声が玄関先にこだまし、呉竹は足音と共に去っていった。

表面上は、表向きは聞き込みをしただけなのだが、取調べをようやく終えた、とでも言いたくなる気分だ。

「ただいまあ」

そこに姉が帰ってきた。

「ん？ どうしたの？ そんなとこでつつ立って」

「別に」

言い放つと、自分の部屋へと戻った。

おもむろにカレンダーの日付を見た。

日記を拾ってから、二週間経つだろう。

そして、殺人事件が発生してから、九日。

呉竹という警察官に尋問まがいのことをされて五日。

ポスターを張り出してからも五日。

そんなある晴れやかな月曜の朝。

爽快な秋の空とは裏腹に、俺は携帯を落としてしまった。

九月三十日

「ハハ！ バツカじゃねーノ？」

「うっせーよ！」

イスの下に潜り込みながら、怒鳴り散らす。

表現が多少、大げさだったか。

でも、それに近い声を張り上げたのは確かだった。

・・・あくまで、人のいない教室において、だけど。

「携帯、携帯、と。やっぱ、ねえ」

「早く探せヨ、オイ」

参ったね。これは、失態だ。天美じゃないけど。この通り、朝から失くしたものを探している。探さないと困る。困るから探す。

巡り巡る、無限のループ。

さて、この悪循環は断ち切れるだろうか。

「それにしてもどこでなくしたネ？ お前、朝持ってタよナ」

「まあね」

「実験室に置いてきたトカ？ 今日授業のあったトコ」

「・・・かもな」

不動に言い分はあった。確かに、なくしたことに気付いたのは、二時限目の始まる頃だった。朝に来たメールを返そうと思って、ポケットをまさぐり、そして今に至る。

別に、返す必要のないメールだったけどさ。

将来のことを考えると、不便なことこの上ないだろう。

「オーイ」

「わかってるよ。つうか、もう先帰ってていいよ？　なんか見つかりそうにないし。時間掛かりそうだし」

「オーケー」

最初からそう言えよ。な感じのニュアンスが若干含まれていた。不動がさっさと教室を離れ、俺はひたすら搜索に汗を流す。めつきり涼しくなったから汗なんて出ないけど。

そんな屁理屈を二つ三つ並べた五分後、俺は根を上げた。

「行くつきゃないか」

実験室に。

* * *

風の携帯を拾った。

どうやら、最近彼とは不思議な縁があるらしい。

もちろん、実験室で拾ったとき、最初は誰のものかはわからなかった。ただし、携帯の中を少し確認すれば、個人情報はおのずと出てくる。当然、興味本位で調べたりはしたが、見たことを心の中にしまっておけば、なんら支障はない。

私はそういう人間だ。

ところで、これをいつ、どうやって返せばいいのか。

つとに疑問を抱いた。

このままずっと隠しているわけにもいかない。かといって、自分から彼に返そうということはできない。

彼に対して、今は目立つようなことは避けたかった。

彼が事件の犯人か、どんな目的を持っているのか、見極めてみたいから。

だから私の正体は、まだ知られたくない。

顔見知りだろうけど。

今のところ、風は知らないようだから、それでいい。

さてどうしよう。

少しの間考えて、ようやく結論が出た。

元のところに戻そう。

無難な選択だろう。彼のことだ。いつかは実験室に取りに来るだろう。

そのままなくした場合は、私は知らない。

実験室に行き、彼が座っていた椅子の下に向かった。そっと床に置いて、離れた。

これでいい。

少なくとも、顔を見られないで、日記の行方を知る方法が、見つかったのだからね。

* * *

「お？」

放課後の実験室には一人、藍園が残っていた。

「……？」

こんな時間に自分が来ることを奇妙に思っているのだろうか。そんな面持ちでこちらを見ていた。

特に気にせず、俺は机の下を端から覗く。

滑らかにコーティングされた床の上に、黒い物体が見える。

「あつた」

思ったよりもすぐに見つけられた。授業で俺が座っていた席の下で、表面をブラックのコーヒードラムで染み込ませたような携帯が、ぽつんと置かれていた。

その様子を藍園は、観察するようにじっと見ていた。

「落し物？」

「ん？ まあね、そんなところ」

ふうん、と興味なさげに呟いて、またプリントに目を向けた。すると、続々と見知らぬ生徒がドアをくぐってくる。

これから補講授業でもあるのだろう。

関係のない俺はそそくさと実験室を離れた。

* * *

携帯の紛失は、ひとまず落ち着いた。

いや、そうであるかのように思えた。

だが、後に「イズミ」と名乗る彼女がそれを拾ったことで、一つの大きな転機が訪れる。

このところ、何もできないでいたもどかしさを覚えつつあった俺には、それは偶然だったかもしれない。

その偶然は起きなくても、よかったのかもしれない。

ともあれ、不可解な事件は、さらにその輪を広げることとなった。

* * *

九日

久しぶりに高校時代の知り合いと会った。

今はどこかで教師を勤めているらしい。遅刻欠勤が未だにないとか。

同じ畑の人間として感心するねえ。

自分のことは棚にあげたままだけ。

欠勤といえば、私の中学でも夏季休暇をとって有意義かつ悠々自適に日付をめぐっている同僚も、ムダに休まない。

みんなどうして皆勤にこだわるかな？

完璧にこだわるかな？

意味のない完璧は、私には理解できない。

と愚痴る私も、調べてみると皆勤だった。

十日

昨日の話の続き。

といつても話がだいぶ逸れてしまったのと、今日は何も書くことがないのが程よく重なって書かざるを得なくなったようだ。

くだらない話だ。

ところで、私は昨日述べた友人と近くのファミレスに行った。

私は金がなく、簡単なランチをオーダーする。彼は何を頼んだのか忘れたらしく、困った店員は私のほうを向いた。しかし私も忘れてしま

(氷室美月の日記。切り離されていたページの一つ。日付は九日と十日)

* * *

犯人ではないけれど、「事件」に深く関わる、少女。

誰かは知らない。だが、そいつに立ち会わない限り、「事件」の真相を知ることはいかない。

だから、探そうと思うのは当たり前か。

俺はそのまま、室内に立ち寄りすることもなく、急ぎ帰宅した。

外は、闇に包まれていた。

近頃夜の訪問が早まっているのは、天体上で自然のことだろう。ただ最近はこの「夜」が疎ましくも思える。

あの店で起こった事件以来、ね。

黒く身を包んだ犯人。

そいつは今も、この町に住んでいるのだろうか？

もしそうだとすれば、ある程度は身を守らなくてはならない。

「我々警察が、必ず犯人を」

なんていう呉竹の言葉を信用するほど、俺は正直になれないからね。

駅前のホームセンターに入り、目的のものを探す。こつこつと輝く照明に目がしばらく追いつかない。俺はしばらく、光を避ける形でうつむきながら歩いていた。

さて、携帯用の催涙スプレーと、数個の窓に取り付ける防犯ブザーはどこにおいてあるだろう。

今頃になって、文字通り防「犯」対策するのも遅い気がするけど。まだ殺されてないから遅くはないか。

それに、これは姉の強い要望によるところも大きい。俺が警察の人間が来たことを話すとあわてふためいて、

「それマジやばくない？ てゆうか防犯対策しなくちゃ。あ、どうせならこのお金でアンタ買ってきてよ。おつりはやるから」
知性の欠片もない姉につき合わされるのもご愛嬌で済ますとしよう。

ちなみに、俺の家族、つまり両親は、とある事情により家にはいない。つまり、見掛けも作りもごく普通のこの家にいる人間は最大でも二人だ。

だからといって、複雑な事情があるという程でもないけど。スプレー見つけ、と。

「千五十一円になります」

無機質な店員の対応に、こちらも無言で金を渡す。

「ありがとうございます」

俺はレジ袋を手に、帰宅なる行為を再開した。

本当はスプレーは自分のために買ったというのは、レシートもろくに見ない姉には言わないでおこう。

袋から取り出した小型サイズのそれを、制服のポケットにしまいきんだ。

帰宅するとすぐに、姉とブザーの取り付けにかかった。

「これで守りはバッチリね。後は警察の方々が捕まえてくれるし」

「そうだね」

別にあるにこしたことはないけどさ。

満面の笑顔を表現する姉を放置して、部屋に戻る。
なすべきことが残っていたから。

かといって学校の宿題という、ありきたりな事例を挙げるつもりはない。

机の引き出しを開く。日記が顔をのぞかせていた。
ページに挟まれた紙切れを取り、じっくりと見てみる。

内容は、八月九日と、十日の記事の一部。

学校に関する話が、淡々とつづられていた。しかし、十日の記事は、途中で切れている。小さな手帳の一枚ページを使い果たしてしまったらしい。下に進むほど、文字が細かくなっていた。

書いた本人もページ内に収めたかったようだ。

それにしても続きが気にならないのは、この人の話が退屈だからだ、とでもしておこう。

それよりもこの記事の中に、何かヒントが埋もれていないか。

犯人が残した、この紙切れ一枚に。

しかし、なにもない。

とりあえず「記憶を少し探ってみる」。

手をかざして

出てきたのは、「事件」の記憶だった。

「再生」したそれは氷室美月が内臓を裂かれる、ほんの少し前の時間だった。

随分と久しぶりに見てしまったような気がする。

好んで見たいとも思わなかったので、俺はすぐに「停止」した。

取り出せる記憶は、こんな小さなものでは限られているらしい。

氷室美月の見た、最後の「記憶」。

どうやら、それ以前の記憶は上書きされて、覗くことはできない。それが歯がゆくも思える。自分の能力に限界があるからだ。

しかし、逆に考えてみよう。

日記の本体と全く同じ「記憶」が、このページにも存在した。

ということは、「事件」の起きた夜、これはまだ、切り離されていなかった。氷室美月が生きていたときまでは。

すると「事件」の後、犯人か誰かが「故意」に、切りとったのだ
らうか・・・？

その時、何かが部屋の中に鳴り響いた。

それは、マナーモードにもしていない自分の携帯からだった。
こんな時間に、誰だろう。

見ると、非通知と表示されていた。

不思議に感じつつ、ボタンを押す。もしイタズラ電話なら、電源を切ればいい。その手の詐欺の匂いを漂わせるものなら、適当にあしらって切ればいい。この家に老人は一人として存在しない。その一言で程よく馬鹿にすればいいさ。

ところが、どうも違っていた。

「もしもし」

俺がそう言くと、途端に静まり返った。

凧和也さんですね。

静寂が辺りを覆い始めるころ、小さな声が耳に入った。

俺は少しばかり、懐かしさを覚えた。

どこかで聴いたことのある声だ。けれども思い出せない。

「はい、そうですけど？」

電波の向こうの人物は、どうやら俺に話があるようだ。

「……え？」

私は、イズミ、と言います。

噛みしめるように、ゆっくりと、喋る。高圧的な口調でもなく、丁寧。しばらくして、言った。

日記のことについて、話を、聞かせてください。

ほんの数秒、思考が停止した。

「日記……？」

あなたが持っている、小さな手帳です。

状況を理解できない俺に、その人はヒントをくれた。

日記。

まさか、この白い手帳のことだろうか。

もしそうだとしたら

「氷室美月の、あの日記？ ……もしかして、アンタ」

電話越しに聞こえる、女性の声。「その人」は、日記、つまり「事件」のことを知っている。そうすると、電話の向こうにいるのは俺はようやく相手の言おうとしていることを捉えた。

「……いや、その前に一つ聞いていい？」

「はい」

「『本当の』アンタの名前は？」

「………」

答えない。

沈黙が辺りを包んだ。

一秒すら、長く感じる、重い時間。その間も、相手の紡ぐ一言を、俺は何も言わずに待っていた。

やがて、その人は口を開いた。

「私を、知らない、のですね」

安堵したような口調で、続けて、ゆっくりと、言った。

「………イズミ、とでも言うてください。もちろん、私のことは何も言えません」

安堵したかのような、ひどく落ち着いた口調で、イズミはそう言った。

* * *

何も関わりたくはない。

私は無関心でいたいのだけれど、そうさせてくれない人間が、電話越しにいる。

「事件」を追おうとする人がいる。

けれど、無関係でいたいという自分のエゴに、他人を巻き込むわけにはいかない。

かといって私は、あの「事件」を思い出したくもない。

色々な理由があるのだけれど、結局いつかは、こうしないとけないのだと思う。

説明できるのだろうか？

「あの時店にいたの、アンタだろ」

凧は確認するように、もう一度訊いた。

「あと、俺の携帯の電話番号、知ってたんだ？」

「そうなりますね。一度拾って、またもとの位置に戻しました」

「・・・ああ、見たのかい、個人情報」

「ええ、見ました」

否定はしません。

私は開き直って、はっきりと告げた。罪悪感はない。

そういう人間なのだからね。

「じゃ、どうして電話してきた？ こんなまどろっこしいことしてさ・・・」

私は少し答えに迷った。

「・・・正直に言えば、あなたとは関わりたくなかった」

顔を合わせて、日記を返してくださいと言えば、それで済むのだろうけど、必ずその次に、彼は「事件」のことを聞いてくるだろう。

けれど私は思い出したくない。

語りたくないのだ。

だから、彼を避けた。遠ざけたかと思った。

「・・・ああそう」

酷く思われたらどうか？

別に構わないけど。

それから、少しばかり日記のことを聞いた。予想した通り、彼は持っていた。ただ、

「なんで、あの人が殺されたなんてことを知ってるかって？」

彼はしばらく、電話線の向こうで沈黙した。

「あの日記には名前が書いていません。だから、書いた人の名前を知るはずが、ありません」

凧は、その名前を知っている。

しかし「日記」と、「氷室美月」という接点は、事件とは無関係なはずの彼にわかるはずがない。

一方で、当の本人は「信じてくれるかなあ・・・」と呟いていた。「どうしました？」

「いや、こんなこと他人に言うの、初めてなんだけどさ」

記憶を見る力を持っている、と彼は言った。

それから少し、彼は説明を加えた。

落とし主に至るまで、随分と回り道をしたようだけど。

私は少しばかり驚く。

「ま、事実だしさ。クレームつけられても困るけど」

「本当、なのですか？」

「さあね。どう思っかはアンタの自由だ」

「・・・」

再び、沈黙。

微妙な雰囲気、私の肩に重くのしかる。

予感があった。

何となく、だけれど。

「……………最近、落とし物の数が目に見えて減っています。図書委員のあなたなら、別に不思議には思えませんか」

「暇だからね。他にすることもないんだ」

「すると、日記の記憶も、あなたは引き出したというのですね」
ま、そうなるね。

彼は気安く答えた。

* * *

どうして事件が起きたのか、その犯人も含めて俺は知りたかった。最初はただの好奇心で。けれど、今は本当に。早く犯人を見つけ出さないと、あの店主のように、俺は再び人を見殺しにしてしまうかもしれない。

「呉竹とか言う刑事がさ、犯人が捕まらないとかでぼやいてたし。警察は当てにならないから、俺達が見つけないきゃいけないみたい。少なくとも、殺される前にさ」

「……………」

誰が、とは言わなかった。

けれど、そこに入る言葉は、俺だったり、イズミという少女だったり。

要するに、誰でもその可能性はあるということだ。

* * *

ひととおりの話を聞き

その代わり私は後悔するばかりだった。

彼を事件に巻き込ませてしまったのは、日記を落とした自分なのだから。

確かに、今こうして平然としていられる彼の神経は、異常なのかもしれない。

話を聞く限り、記憶を引き出す能力を使って、殺人現場を見て、興味本位で事件に首を突っ込んだ。だから、まるで理解できないから、異常な人間としか言葉にできない。

考えてみれば、あの店主は殺されずに済んだかもしれない。

彼が早く警察に通報していれば、今頃犯人は見当がついたかもしれない。犯人を野放しにしているから、再び事件が起こってしまうかもしれない。

私が全ての責任を感じることはないのだけれど。
日記を学校に持ち込んで、落とさなければと後悔する。

もう、何を言っても遅いのだろうと、私はあきらめた。
だから、話を聞いた後も、ずっと私は押し黙っていた。

ただ、犯人をどうやって見つけ出すのかと言った覚えはある。
「どうやって、見つけ出すかって？」

凧は答えた。

犯人を特定できれば良い。

そのためには、そいつの記憶を見ればいい。
記憶は嘘をつかない。

むしろ、犯人にとり、殺人は強く印象に残っていることだろう。

だから疑わしいと思った人の持ち物からこっそりと記憶を引き出す。

当然、法律に反してはいない。そもそも無断で人の記憶を見るなという法律があるはずがない。

もし間違っていたとしても、もう一度別の人間を探し出せばいいだけだ。

もちろん、その時点で犯人だという証拠はないだろう。

しかし、疑うだけでいいのだ。

それだけで、犯人を追い詰めたことになるから。

それで事は終わる。

警察にもできない、風にはかできない、方法だった。

「・・・全く、馬鹿げていますね」

私はこう言うしかなかった。

「それだけで犯人がわかるなら、警察という機関も必要ないでしょう」

それから何を話したのか、電話を切った時、覚えてはいなかった。日記はもう取り戻そうとは思わなかった。

ただ、聞きたいことは、全て聞き出した。心に染み付いたわだかまりが、少しばかり解けた。それだけでも、よかったのだろう。

天井を叩く音がする。

雨が降っている。

夕闇に紛れた水玉は、所在無く地面に当たり、やがて溶けてなくなる。しばらく途切れることのないサイクルが、しかしこの町をすっぽりと覆いつくしていた。

おもむろに遠くを見やった。

びっしりと窓にこびりついた雫が、雨の強さを物語っている。

確か、あの日もこんな雨だった。「事件」が起きた、あの夜も。

様々な形であっても、何もかもが違っていても、時間だけは特別どこまでも広がる空のように、全てを包み込んだまま、漂い続けてゆく。

どんな想いを抱えていても、日付は過ぎていく。
訪れたのは、また新しい月の始まりだった。

23 断章・1

* * *

話がひと段落ついた頃、ふと泉は俺に尋ねた。

「その人、誰だか知らないの？」

首を縦に振る。

「思い出せない。なぜかは知らないけど」

もつとも、あの電話の時、不思議と初対面だという思いはなかった。だから驚きは少なかったのだけれど、ただやはり、いつかはイズミの正体を掴まなくてはいけない。

「ふうん、気になるなあ、その謎を秘めた女の子・・・ねっ」

「にんまりと口を綻ばせた。」

「その人、元はといえばさ、日記を持ってたんでしょ？」

「ん、そうだけど」

「その日記はどうしろうって言ったの？」

俺はイスにもたれて、あらぬ方向に目を泳がせながら、考えていた。

「確か、うん・・・あいつからすると、返してほしいとは思っつよな」

「歯切れ悪いよ」

「・・・そうそう」

少しばかり思い出した。

俺がそのまま、日記を預かる形になったのだ。

「その代わり、日記からちぎれた残りのページを探してくれって、そいつに言われたんだ」

「え？ そんなのあるの？」

ある。

そう彼女は断言していた。

「今も、あの犯人が持っているらしい。なぜかは知らないけど」

ふうん、と泉は呟いた。ソファに座りながら身を乗り出したこの人の格好は、どこか幼さを感じる。

「どうもじっくりこないなあ・・・」

「・・・？」

「ほら、風がさつき話したじゃん。その人、要はキミと顔を合わせたくないんでしょ？ それなら、なんでその人、わざわざ電話をしたのかな？」

「彼女は日記を探していたんだ。多分、俺が持っているなって考えてたんだろうね。それで、俺に確かめなきゃいけなかった。そうだなけりゃ、俺とは関わりたくない、だってさ」

「ただだけ嫌われてるんだか」

しかし、彼女にとって都合のいいことに、俺は受話器の向こうにいる人が誰だかわからなかった。聞き覚えのある声だとは思っけだね。

悔しいが、思い出せない。

「うーん。それだけ、かなあ？」

「なに、まだお悩み？」

「あのね、どうするつもりだったんだろって、ね」

「は？」

「・・・」

しばらく彼女は黙りこくって、何かを考えていた。すると、

「うん、やっぱりおかしい」

だから何が。

そう口走ったら、やたら発声がよかつたらしい。驚かせてしまった。

「いや、あのね、よくその人、のんきでいられると思うよ。キミの言う一年前の事件に、巻き込まれたんでしょ？ それなのに、なんで人に黙ったままなのかなあって」

「・・・ああ、そのことね」

「へ？」

そう、あのイズミに関して引つ掛かりを覚えるとすれば、まずそこに至るだろう。

「それは俺も、考えたさ。で、確か・・・言ったと思うんだよ。うん。確かに、アイツに言った」

同い年の女の子は、元々大きな目をさらに丸くした。

「それで！ その人なんて？」

「・・・日記」

「？」

「日記を探すため、だって」

正確には、誰にも知られずに、犯人の持っている（らしい）日記の残りのページを、全て取り戻すためだ。

警察が犯人を捕まえてしまったら、日記を取り戻すことができなくなる。

「・・・とれ」

「・・・さっぱりわからん」

ゴール地点前で一気に突き放されたマラソン選手のように、彼女はすっかり呆気にとられてしまった。

「そうするときは、犯人野放しじゃん」

「まあね」

「わかんないなあ、そんなことしてさ。ひよっとしたら、明日自分が殺されるかもしれないっていうのに」

「それは俺も同じ。もっとも、二人ともこうして生きてるけどさ」

九月二十一日、俺が犯人に襲撃された時。

俺は確かに、あの時奴から、殺意を感じていた。

しかし、何かがあって、奴から殺意が急速に薄れていったのを感じたのも、事実だ。

そして奴は、失われていたページの一枚を、俺に残した。

日記。

・・・奴が、俺のカバンから飛び出していた日記を、見つけて・・・

「日記のせい、なのかな？」

「また日記？」訝しげに泉は言った。

「ああ、あの時、俺は奴と格闘したんだ。こっちも必死で、それでカバンが放り出されて、中に入っていた日記が出たんだと思う。それを、たまたま、奴が見つけて・・・」

克明に覚えている。奴の動作、反応。

日記を見てから、奴は態度を変えた気がした。

犯人が殺さなかった理由。

それはつまり、日記と少なからず関係がある、ということかもしれない。

俺が日記を持っていたことで、犯人は何を思ったのだろう。わからない。

けれど、その結果が、俺が死なないで済んだこと（？）と、とても重要な一枚の紙を残したこと。

「やっぱり、イズミさんも同じなのかな？」

ぶつくさ考えていると、横から泉が言い出す。

「同じって？」

「その人も、日記に関わっている人間だし、そのせいで殺されていないのかなって」

「この日記を書いた人はそうじゃないけど？」

「あつそうか・・・ううん？」

めまぐるしく、せわしく頭を働かせているようだ。俺も同じだけどね。

姉が帰ってきたら、こんな二人を見てどう思うことやら。

「じゃあ、凧と、その人と、違う理由で、それぞれ生かされているってことかな」

「へんな言い方だけど、そうなる」

「イズミさんはその辺り、どう思ってるのかな？」

「・・・」

おそらく、自覚はしているだろう。

自分が生きのびた理由。それはあの人もわからないことかもしれない。しかし、おおよその見当はついているのではないか？ それを俺にまだ、話さないだけで、じゃあどうして話さないのだろう？ 彼女がまだ、信用しきっていないから、だろうか？ どうして？ と考えているうち、いつのまにか自分のほうが頭を抱え込んでいた。

「でも、さっきもいったけど、あの人も隠し通してるんだよね。い

るんなことを。事件の存在を彼女は隠して、そのまま過ごしてた・
・もちろん、犯人にとっては好都合って？」

「そういう意味では俺も、共犯関係にあるんだけどね」

「だめじゃん、隠しちゃ」

「今更、隠したことを警察に話しても遅いよ」

「え？」

それはさすがに、犯人も望んではないだろう。奴は自首する気はおそらく、ない。そうすると、焼け跡から「事件」の存在を明るみにすれば、黙ってはいない。奴はすぐにでも俺とイズミに、残酷な制裁を行うだろう。

「事件」の存在を知る人間は俺と彼女だけだからね。

こういう俺でも自分の命は惜しいさ。

今まで話したと矛盾しているけどね。

「じゃあ、犯人って、最初からキミらがそうしないって思ってるのかな？ けっこう人を当てにしていると思うけどさ」

「犯人によって、そういう風に仕向けられている。こう考えたほうが、いいんじゃない？」

奴のとつた行動の理由。

いずれそれは、俺達に分かるのだろうか？

俺は奴と「二回」、同じ場所にいたことになる。

一回目はあの店で、二回目はあの家に無断で立ち入った時。

そのどちらにも共通することは、日記だ。

持っていない、欠けたページのうちの、二枚。

実はこれ、さっきまで話していたより、もう少し後にあったことなのだけれど、少しばかり気付けることがある。

つまり、俺が殺される可能性が、二度あったのだ。

恐ろしいことにね。

けれど、そうならなかった。

何か、作為的なものを感じる。

けれどそこばかりは、自分の命がかかっているのだ。頭が真っ白になるまでも、考えてやるさ。

「・・・もうわかんないや」

とさじを投げたのは、泉。

「じゃ、帰る？ 込み入った話は、まだまだ・・・」

「ダメ！」

でも、猛烈に首を横に振る。その仕草がなんとも小学生っぽい。

「最後まで聞かないとよけい悩むよ。それに、悩みっぱなしで寿命ちぢむかもよ？」

「変な方向に飛躍させないでほしいな。それに高校生は悩み多き年頃だから気にしないでいいと思うよ？」

「へえ、キミからそんな甘酸っぱいコトバが出るとは思いもよらなかったねえ」

バカにされてしまった。

まあ、別に話してもいいけどさ。渋ることもないだろうし。

「まあ、いろいろ、謎が多いままなんだけどさ。とりあえず犯人を探すって事で、俺は彼女の意見を飲み込んだ・・・残りのページなんて探しようがないけど」

「犯人が持つてるからね」

「酷い話だよ。アイツ（イズミ）も酷ければ、あんなバカバカしいことまで起きてしまう。本当に最悪な日々だ・・・」

「あんなことって？」

「だからさ、それは・・・」

思えば、十月に入ってから、ろくなことがなかった。

というより、今月のことなんだけどさ。

話を再開しよう。

「・・・あれ？」

「どうしたの？ 急にだんまりになっちゃって」

もう一度、頭から再生ボタンをかける。

確か、イズミとの電話で、色々とあつてから、十月になって。

「忘れた」

「は？」

「いや、だから、覚えてないっばいんだ」

情けなく笑ってしまう。全く、自分が情けない。

「いやいや、話してくれなきゃ！ よーく思い出してよ。てか、さ

つきもウチのことも忘れて・・・あの、大丈夫？」

「かな？ 忘れっばいのは相変わらずだと思っただけ」

「度を越してひどいよ、それ」

「なんでだろ？」

ひよっとして、とんでもないことまで忘れていたりして。

・・・あ。

「思い出した？」

まあ、一応ね。

どうしようもなく、しょうもないことだけ。

それでも、記憶を再生する導火線になってくれればいいさ。

だから、それも話しておくしよう。

「・・・はあ」

ほんとうにくだらな話だけ。

そう思いながらも時計を見つめていた。

午後六時を、少し回ったところだろう。

窓を見ると、わずかなオレンジ色の空が、最後の輝きを放っていた。

十月は、秋の真っ只中を深く潜り込む、そんな日々だ。

舗装された道は、ここで途切れていた。

辺りに広がるのは、くるぶしにつかるほどに生い茂った雑草。林立するビルが、遙か彼方にぼつりぼつりと見える。

そばの大きな川は、磯の匂いを漂わせる海へ、とうとうと流れている。この町は、比較的都心から近く、また河口に位置していることから、有数の人口を誇っていた。けれど、ここはそんなことはお構いなしと、荒れ果てていた。

見渡す限り、何もない。その代わりに、灰色の空が、ときたま雨をもたらしてくれる。

俺は持つてきた傘をさして、対処する。

雨に混じってごうごうと、風の音色がよく聞こえる。

「立入禁止」と書かれた、金網にぶら下がった古いステッカーは、その度によく揺れていた。

ここを越えるのは簡単なことだ。

そして、その向こうに、これも小さく目に写る建物が、一つ。近くに寄ると、大きな建物だとわかるけれど、同時に至るところが古びているのも目にするようになる。

何年も、そう、何年も、取り壊されることのなかった、廃工場だ。

広い埋立地にそびえる、金網に囲まれた、錆びた建物。

ここでは、何もかもが目覚まし時計の針を止めていた。

だから、いつまでたっても、ベルは鳴らない。

鳴らないのをいいことに、眠り足りない人が、時計をそのままにしているのだろう。

そう考えると、この場所自体が、眠りこけたように静かなのもうなずける。

もと来た道を、引き返した。
今になって、なぜここを訪れたのかはわからない。
ただ、ヒマだったのかもしれない。

十月三日・木曜日

バスに乗り込もうと、俺は急いだ。
乗り遅れると完全に遅刻を喰らってしまう。
足を大きく羽ばたかせて疾走した。
運転手気付けてくれ。

俺の祈りが通じたのか、窓越しに体格のいい屈強な男は、一旦握ったハンドルを手放してドアを開けてくれた。
助かった。

小田島よりも筋肉の太い屈強な男は、無言を貫いている。その代わり、料金箱をそつと指し示した。

泰山自若。

その仕草に、この男、只者ではない、とか思ったり。
料金を払わずに定期を使っただけだね。

「・・・」

終始無言の屈強な男は、車内の全ての人間に大きな背を見せて、力強くハンドルを回した。その姿はどこか大船に乗ったようで、安心感を漂わせる。

この人、いい人だ。

自分勝手な俺はプラスの向きに解釈を行った。

ゆっくりと動き出したバスに、中にひしめいていた乗客の体が揺れる。転ぶまいと、必死になりながら、つり革に手を預ける。大半の利用者が、スーツに身をまとった体育会系の成人男性だけあって、

蒸し返すような熱気に包まれる。

嫌だね、こんな毎日。

ぶつぶつ言っているうちに、背後のドアが開いた。

左側の前の席に座っていた俺は、降りる人がいるな、としか感じ
ていなかった。けれども、

「すみませーん！ 降りますから通してください！」

と、朗らかな女性の声が響き渡ったので、思わず振り返った。

「ごめんなさい」

と、後部座席に座っていた女性らしき人は、並みいる屈強な男た
ちの間をすり抜ける。やがて、細身の体が出てきた。

見ると、制服姿の女子高生だった。

少しウェーブがかった髪は、かろうじて肩にかかるほどの長さだ
った。しかしそれ以上に、見たことのない校章が、黒のブレザーに
飾られていた。

どうやら隣町の高校生らしい。

どこかで見たような気がする。

ふと、そんなことを考えていた。

そう遠くない過去に、彼女の姿を見たことがある、と。

「発車します。つり革、手すりにお掴まり下さい・・・」

屈強な体格の運転手が、悠然と言った。

すると、バスが大きく揺れ、その反動でイスに体をぶつけた。

体を起こして窓の外を見ると、あの女子高生の姿はもうなかった。

彼女が俺と知り合いだったことは、この時はすっかり覚えていな
かった。

授業に遅れないように、いつものように実験室へと向かう。生物の授業は、担任の福原が務めていた。

高嶋と不動と、いつものメンバーで同じ席に座る。最後列のは、既に壊されて使い物にならないため、その二つ前に腰を下ろした。

「そついや、まだ犯人捕まってるらしいな」

高嶋が何気なく言った。

「マアそうだな」

「これじゃ、無能な警察がまた醜態をさらしかねないだろうね」

「随分な皮肉だな。マ、当たってるケドヨ」

不動が言った。

「それにしても、気になるよな」

高嶋が机に突っ伏して腕を組む。

「ん？」

「目撃者がいて、その人が言うには、ウチの学校の制服着た誰かが、現場から逃げたらしくてさ・・・そうすると、この学校の誰かが犯人じゃね？」

「そついや、こないだ警察の人が来てたな。質問もされたし」

「ア、俺も来たぜ。ヤニ臭エ奴ダッタ」

「ふーん」

「ま、当分は巡回続けるって言っし、そのうち見つかるだろ、犯人」

高嶋はそう言って、机に顔をうずめた。

「犯人も、暫くは動けないだろうね」

「マ、ソウだな」

両方の手が暇をもてあましていたので、そこにあつたシャーペンくるくる回していた。そのうちに福原が無造作に戸を開けた。

「きりいっつー!」

天美が威勢よく号令をかけた。

少し声が裏返っていたのは、マヌケとしかいえない。

放課後、俺は委員の当番をするため、図書室へと向かった。

「ん？」

図書室の前を行ったり来たり、せわしなく動いている教師を、真っ先に見つけた。

「なにやってんスか？」

「ん・・・あ。君、私の時計知らない？」

「いえ、知りません」

即答する。

すると三村は、がっかりしたようなそぶりを、わかりやすく表現した。

その後、舌打ちした。

この人、あからさまにイラついてるね。

「ね、こここのほかに、落し物箱があるところってないの？」

「ありません。ここだけです」

「はあ、しょうがないか」三村はため息をついて重い足取りでどこかにいった。

確か、あの人は今年から赴任した教師だ。クラスは持っていないから、非常勤ではあるが。

「あ、待ってください」

「はい、何？」

またここに来られて不審者みたくうろつかれてはたまらないので「その時計、俺も探しますよ」

どんなことを言ったかは忘れたけど、とりあえずこの人の腕時計探しを手伝うことになった。

「しっかし助かるねえ。手伝ってくれるって、ありがたいねえ」

最近コンタクトに変えた俺と違い、三村は薄い眼鏡をかけている。それでもしきりに、縁を指で押さえる辺りフィットしていないのだ

ろう。

「・・・で？」

「え？ 何か？」

「いや、なくしたときの状況ですよ状況。それ言ってくれなきゃ探しようがありませんよ」

「あ、ああ、あつははは！」

高笑いする三村。

とても理解し難い反応を示された。

「えつとね・・・今日の昼、だつたっけな。職員室に戻ってポケットを探したら、なかった」

「腕時計をポケットに突っ込むなんて、珍しい携帯の仕方ですね」

「ほら、時計つて長く巻いてると、アトができちゃうよね。私あれが嫌で、そうしてるの。悪い？」

「・・・別に」

話を合わせるとしよう。ここで人の価値観について論じても空しく時間が過ぎるだけだ。

「それから、なくしてからどうしたんですか」

「職員室探してなかったからさ、ここに来た。まあ、他にも実験室とか行つたわよ。今日そこで授業をやってたから」

「教室なんかは探しました？」

「うっん。私、クラス持つてないから。担任とかじゃないし」

職員室か、実験室か、あるいは別の場所か。

少し探す範囲が広い。それにいくらこの人が探したつてのたまって、人間どこかで見落とすこともある。躍起になって探していても、軽く日が暮れてしまっただろう。

じゃあ、別の方法で探すか。

久しぶりだな、人の記憶を見るのも。

ふと、俺は振り返った。

「何？」

急に立ち止まった俺に、三村は不思議そうだ。

「頭下げてください。後ろ、危ないですよ」

「え」と言わんばかりに、角材が若輩教師の後頭部に直撃した。

「いたっ！」

「あ、すまんすまん。前が見えなかったもんでな」

大量の荷物をおんぶしたまま呟くその声は、福原。

「・・・なんですか、そんなの抱えて」

「これか？ 学園祭の準備に使う物だ」

へえそんなに、と感心する。さして関心もないことだけど。

一方の三村は、俺の視界の端っこでうずくまっていた。

「もう、痛いじゃないですか！」

「ははは・・・じゃ、さっさと道を通してくれないか」

軽くあしらわれてしまった。

「大丈夫ですか？」

俺は後ろにまわった。茶色く染まった後頭部に、大きなブローチが鈍く光る。その横に飛び出した一本の髪を、根元からぷつりと絶った。

「今なんかした？」

「いいえ」

髪の毛一筋を手の中に収める。

「・・・やっべ、ホンマに痛い」

「ホンマに痛いなら保健室に行ってください」

「ええ？ 時計はどうするのよ！」

「だって痛いんでしょう？」

半ば気持ち悪いうめき声を、いつまでも図書室の前で上げてもらっても困るからね。

しばらくしゃがんだまま、考えている。

滑稽な光景だ。

「やっば痛い」

で、一人とぼとぼと行ってしまった。

何がしたいんだか。

でもその間に、ちっと時計を探してみよう。

髪の毛から記憶を取り出すことはそう難しくはない。仮にも三村の一部だったものだから、案外早く時計を探すことができるかもしれない。

いずれにしても先生が戻ってくる前には終わらせよう。

そう思っていたのだが、

「ね、私の時計知らない？」

いつのまにか藍園が背後に潜んでいた。

全く、ついてない。

「あとで探すから、ちょっと待ってて」

「ヒマじゃないの？」

「違います」

みんな図書委員イコール帰宅部か何かと勘違いしているらしい。

確かに外れちゃいないけどさ。

あの委員長が率先してサボりまくってるし。

それが他の委員に伝染したのか、最近に至っては俺と不動以外に誰も来ない。

「じゃ、しばらく中にいる」

とだけ言って、かびた古本の匂いがキツイ室内へと入った。

「……ん？」

気のせいだろうか。

彼女も、そう、小柄で女子生徒だ。

成程、髪は後ろにーくくりにして、眼鏡もかけている。しかし、もしかしたら、アイツが「イズミ」とも考えられるだろう。

「……探すか」

何を考えているんだか。

頭がおかしくなったらしい。

全てを疑わなきゃ、気が済まなくなったらしい。

異常だね。
異常だ。

再生

ぼんやりと浮かび上がる「三村の過去」は、おそらく昨日のものだろう。

朝、人の少ない電車に飛び乗り、一息ついたところで「時計」を何気なく見つめる。午前の六時半を指していた。

この時間帯はまだ、車内が人で埋め尽くされないらしい。しばらくして、ホームに降り立った。

校舎の二階にある職員室は、ヤニときついアロマの匂いが広がっている。席に着いた三村に話しを持ち込む福原も、既に一服。俺にも、臭いとは感じる。

要は、その人が感じたことを共有するのだから、仮に死ぬほどの激痛が起こっても、俺にも体感できてしまう。

脇腹を裂かれるのは痛いさ。

けれど、それは記憶の中でのお話。

別に、「俺自身」に対しては何も起こらない。

映画の中で、いくら死人が出たところで、ひとたびそこを出れば、何事もなかったかのように終わる。仮想はあくまで幻であって、自分の目の前にある現実とは違う。たまに殺人事件が起きたところで、自分の身に降りかかることじゃないから、底に沈殿したまま、いつしか忘れるものだろう。

記憶とはそんな、霧のようなものだ。はっきりとした形とはならないから、消えてしまう。

だから日記があるんだけどね。

自分の記憶を書き綴るものだから。

でも、それはひっくり返して言うと、忘れさせてはくれない、と

いうことらしい。

いや、実際にそうなのだから。

この前も話しただろう？

日記がある限り、この「事件」は終わらない、と。

話はまた、三村の記憶に戻る。

実験室で授業を終えた三村は、再度「時計」を見る。正午を少しまわったところだ。

この時間、校内は昼休みモードに切り替わっている。やたら騒がしくなりだして、やがて人がぞろぞろ、廊下に現れた。

「自販行くかあ」

三村が一人ごちた。二階にある休憩室に入り、ポケットの中の財布に手を入れる。じゃらじゃらと小銭ばかりが顔を見せる。けれども百円玉以上のコインは見つからない。その内について夢中に探し始めてしまった。

「ああ、ちくしょー。やっぱねえわ」

およそ教師らしからぬ態度で呟いてから、職員室に戻った。

福原を前に、十円玉をいくつか取り出す。

「百円とこれ十個、交換お願いしまーす！」

訝ったのは福原だった。

「いいけど・・・三村、またこれはどうしたんだい？ 急にさ・・・」

「私、自販に十円玉を十個も入れない主義なので！」

色々と変なこだわりがある人だ。

俺には理解できないけど。

まあそれは、福原も同じことらしい。すっかり宇宙人に遭遇した一般人Aのような顔つきでこちら（三村）を見ていた。それでも百円玉はもらったけどね。

軽やかな足取りで、再び三村が自販へと戻る。道行く生徒たちの

視線が痛い。この人は全然気にしてないけど、俺はそこまで鈍感にはなれない。

自販に銀の硬貨を入れる。そして、烏龍茶のボタンを押す。けれども、何も反応がない。

「あつれ？ おかしいな・・・」

早く気付いてください。百円じゃ何も買えませんよ。

俺の祈りが通じたのは、同じ事を三回試行した後だった。

「うっわ！ やばいやばい・・・あと十円入るんだった」

まわりをきよきよ、せわしく首振りする。誰もいないことを確認し終わると、ほっと胸をなでおろした。

「見られてないからよし！」

ばっちり拝見させてもらいました。今後はネタとして活用させていただきます。

そんなことはさておいて、

「財布、財布つと・・・あれ？」

異変に気が付いたのは、三村も同じだった。「ポケットに入れたはずの」腕時計が、手の感触になかったからだ。

「あつれえ？ どこやったっけな」

三村は着ていたスーツの全てのポケットに手を当てていた。しかし、腕時計はどこにもない。

どこかで落としたか。

あるいは、職員室に立ち寄った際に、無意識のうちに置き忘れたとか。

実験室では確かにあつたはずだ。

すると、このわずか十分間に、事は起きてしまった。

さて、この時三村は一体、どこを探したのか。休憩室の机の下？

二台ある自販の隙間？ あるいは、職員室に戻るといふことも考えられ

「まあいつか。いつものことだし」

停止

記憶を見終えた俺は、とりあえず休憩室に行くしかなかった。

全く、頼りない人だ。

文句の一つでも吐き捨てたい気分だった。

物申すことがたくさんありすぎて、かえってのどを詰まらせてしまいそうだね。

休憩室には誰もいなかった。日も暮れかけたこの時間はいつも、気持ちよく席に座れる。たまに横になって寝る人がいるけど。

時計はまだ、あるだろうか？

俺はまず、携帯を探したときのようにイスの下から始めた。そこになかったなら、机。すると、やや暗くて目立たないところに、黒っぽいそれが見えた。

古いアナログ時計だが、使えないことはない。

「これ、かな？」

記憶の中で見たものと、今俺の手にあるもの。

どちらも黒くて、同じタイプの腕時計だ。

「あ、いたいた」

すると、どこからか三村はひよっこり顔を出した。

「もう、急に消えたから、どこ行っちゃったのかなって探したよ！」

「それはすみませんね。それで、頭どうでした？」

「全然、ばっちりだって！ いつもと変わりはないって」

正直、変わってほしいような。でないと、先が思いやられるからね。

「あ、あとね、この子も連れてきたよ。落とし物を探してほしいって」

「・・・藍園？」

そこにもう一人、ひよっこりと姿を現す。

「・・・見つけたの、それ？」

「え？ あ、うん」

俺は手に持っているそれと、藍園を交互に見つめた。

「ひよっとして、お前がなくなったのって、黒い時計だったりして・・・」

「・

こくり、とうなずいた。

「じゃあ、もう一つ探さなければならぬ。そういうことになるね」

三村が指差しして言った。

「それ、私のじゃないよ。似てるけど、もうちょっと傷がついてるから」

三村のものではない、ということば。

「藍園？」

俺は訊いた。

藍園は、再びうなずいた。

「・・・多分、さっきここに来たときに外して、そのままになっちゃったと思う」

それならばと、藍園に返した。

まじまじと見つめて、自分のだと確認すると、「ありがとう」とだけ呟いて、彼女はどこかへ去っていった。

残されたのは、俺と、引き続き三村。

「まだここ、探すんですか？」

「そうね。確かにここは盲点だったわ」

「ほんとに盲点なんですか？ 探すのが面倒だったんじゃない」

「何を根拠にそんなことを言ってるのよ！ 私は教師よ。ちゃんと探したわよ」

面倒がつてたくせに。

教師が平然と嘘をついていた。

「さつさと探しましょ」

「・・・自己責任つてことで、一人でやってください」

「なんでよー！」

そりゃ、あなたは教師という、立派な大人なんですから。管理のできなかったあなたが悪いんですよ。

と、本気で言ってしまった。心の中で、じゃなくて、口の中から。

おかげで、随分と気分を悪くされたようだ。

「頼りになんねーの！」

「何とでも言つてください。元はといえば、あなたの責任ですから」
一種暴言にも似たことを言い放つて、俺は帰った。そのときも少しばかり、子供のような口喧嘩を教師としてしまったらしくて、全く、二人とも大人げないことだ。

だから思い出したくもなかったんだけどさ。

おかげで、その後のことを完全に思い出せたから、よしとするか。

ちなみに言うと、三村の時計は見つからなかった。

変だとは思っていた。

休憩室という、比較的人の出入りが激しいところで、誰かが見つけるはずだろう。あんな時計、捨てたとしても、そいつが持っているも仕方ない。こういうときには、図書委員へ届け出ることが一つ

の慣例となっていたからね。

だが黒い時計は、ついに持ち主不明の遺失物リストに載ることはなかった。

三村は一晩かけて、学校中を徹底的に探したのだという。けれども、当然のごとく見つからなかった。

しかしそれは、今から考えれば当然のことにはならなかった。

あの古ぼけた時計を盗む物好きな人間なんて、まずいない。そう思っていた自分が、ほんの少しだけ甘かった。

まあその時の俺が気付くのは、三村と喧嘩した手前、到底無理な話だったけれど。

災難というものは次から次へと、押し寄せてくるということだ。

ただ、人の持っていた「それ」が、高尚なものに、崇高なものに光り輝いて見えた。だからそれを奪い取った瞬間だけに得られる、恍惚な浮遊感。満足感。達成感。それだけのために

十月七日

「昨日も盗難事件が二件、神谷町近辺で起きている。これで、届出が始めてから八件だ。先日、殺人事件に加え、君たち市民にはより一層の協力を求める・・・以上だ」

帰り道のバスで偶然乗り合わせたのは、刑事の呉竹だった。なぜかまた、事件のことについて頼んでもいないのに話していた。

「あの・・・それ、俺に話す必要ってありますか？」

「なあに、君だけに限ったことではないさ。地域住民との連携を深める。警察官としては当然の行為だ」

だからといってたまたま一緒になった人に、自分とは関係のなさそうな話を持ち込まないでほしい。

「自分とは関係のない話だ。そう思っただけじゃないかな」
心を読まれてしまった。

「実際そうでしょ」

「ところが、そうもいかんだ」呉竹はそう言って、溜息を吐いた。
「・・・？」

「学校からの届出が、その内の半分を占めている。つまり、自転車の盗難、校長室からも、重要書類や寄付金等が盗まれたそうだ」

「犯人・・・学校の関係者ってことですね」

「ああ、その人間を調べ上げれば、事件は解決に向かえるのだが・・・」

・な」

また、溜息を吐く。

この人の持つ外見、やり手というイメージからは、少し意外にも
思える態度に、俺はふと疑問を抱く。

「なんかありました？ 元気なさそうですけど」

「上層部だ」

呉竹は即答した。

「・・・上層部が、私のやり方に反発してくれているおかげで、捜
査が一向に進まない。先日の殺人事件も、その問題が引きずったま
まだ。これでは、犯人に悠々と時間を与えてしまふのだが・・・」

「・・・はあ」

「悪いな。愚痴の一つでも溢したい気分だったのでな・・・私らし
からぬことだ」

呉竹さん、結構キているな。

何がつて、愚痴をこぼすこと自体。

おもむろに呉竹は席を立った。バスがゆっくりと徐速し、やがて
手前のドアが開いた。

もう一度、呉竹は「私らしくない」と呟き、勝手に降りていった。
うん、異常だ。

相当もめているのだろう。その上層部と。
知りたくもないけどさ。

体育館で行われる月曜日恒例の朝礼でも、殺人事件と盗難がいつ
しよくたにされて、取り扱われていた。

校長の話は、特にありがたいとも思わない。いや、思えない。そ
のうちの殺人事件には、少なからず加担しているからね。

そう思っているうちに、高らかに弁舌を振るう校長のマイクが突
如として、声を拾わなくなった。

教室に戻っても、HRでは相変わらず福原が話題にしていた。

「とにかく、怪しい奴を見たら、まずは近づかないことだ、わかったか」

こちらはなぜか盗難事件のことについて一切触れることはなかった。

* * *

数学の問題を解いていた。授業中、生徒たちは答えを求めて、ただ自分の前に立ちふさがる石を、それとなく振り払う。時折教師に当てられることもあるのだけれど、それも想定したところで、あえて先にまで手をつける。私も、少し先の軌跡の問題を、淡々と解き続けていた。

考えるまでもない。

また、同じことの繰り返しだ。

たまに、この平穏な日々の暮らしに、胸を痛めたりする。平穏でいられるのは、むしろ無関心でいられるということなのでは？

それは、もう当たり前のこと。だから、気には止めない。

じゃあ私は？

退屈な、それでいて鬱屈した日々、変化を求めたい？

結局は逃げてばかりの自分を、変えようとしたい？

いや、いつかはしなければならぬだろう。

呑み込まれないために、殻を抜け出すように。

だがそうすると、風には「全て」を、話す必要が出てくる。

私はそれが嫌だ。

嫌だった。けれど、日を追うにつれて、少しばかり仕方のないことだとも考える。

結局は、私も犯人を見つけ出して欲しいのだ。

それ以上に、「あの男」を探し出して欲しい。

彼にはまだ伝えていなかったか。

いずれ、日記を返さなくてはならない男なのだけけれど。

その前に、日記から離れたページは、正確には知りえないけれど、数枚ある。

その中の一枚は、店主が殺害された時、犯人が遺したと風が言うていた。

すると残りのページも、犯人が持っていることになる。

ともすれば、その後起こりうる殺人の残り回数なのだが。

いや、こう考えるのは、いささか間違っているのかもしれない。過ぎた考え、かもしれない。

けれど、だからといって殺人事件が、これ以上起きないという理由はない。

そう思えないだろうか？

この教室から、この町から、またひとり、姿を消す。

そのとき、私は無関心でいられるだろうか？

「今まで」のように。

自分の編み出した解答と照らし合わせて、赤のボールペンで大きく、丸をつける。正解だ。

次の問題に進もう。

騒がしい教室に、福原の号令がこだました。

「文化祭が近い。皆には何をするか、そろそろ考えてほしい」

今更だけど、彼はクラスの担任を受け持っている。だから授業の他にしなければならぬことが多く、もちろんすぐに片付くはずもない。よって生徒たちに意見を交わせて、自主的に決定させるという効率のいい方式を採っていた。

無論のこと、俺たちにとってはありがたくもない。

中には文化祭に積極的に動く生徒もいることはいるが、そいつらの座るイスは、とてもまばらな数だ。

だからクラス単位で委員を決めたんだけどね。

一年でそれ以外仕事がないという微妙なポジションにある、学園祭実行委員。

その名前に属す人間は、二人。天美と藍園だった。

「じゃあこれから決めるよぉー！ おーい、そこ聞こえてるー！」

まず天美が教壇に立った。

「聞こえてます」

「聞いてるっつーの」

「てゅーかとつと先に進めよーぜ」

この人が進行役を務めても、あまりまとまりがない。すると、藍園。

「・・・じゃあ、はい」

「え？」

「・・・何か意見を」

藍園がぶつぶつ言っている。今度は教室にくぐもって聞き取れない。

「あたし？ そーだねえ」

受け応えたのは、伊地知いちぢだった。

「無難に喫茶店と行きましょ」

「そう。じゃあ次」

「ぼ、ぼく？」

司会の天美を押しよける形で淡々と進める藍園。

向井はしばらく、だんまりを決め込んで

「ぼくは、そーだねー・・・うん？ ソーダ？ 急にソーダが飲みたくなってきたなあ・・・アハハ。冗談だよ。でも、そうだねなんか喫茶店に」

「喫茶店ですね、わかりました」

と都合のいいように解釈する藍園だった。

なるほど、さっさと終わらせたいのは彼女も賛成らしい。

「他に意見は？ ないならないって言うてください」

「別になくていいでしょ？」

「もう決まった？」

ということ、満場一致で喫茶店に決定。

俺はというと、何もしなかったけどね。

十月九日

「日記、日記と」

ふと思いついたのだが、最近日記を見ていないこと。一応イズミから預かっていることだし、すぐにでも持ち出せるようにしておかなければ。

朝、五分ほどして掘り出したそれは、埃にまみれていた。

それでも中を開くと、誇らしげに綺麗な文字が姿を現す。よく古い本を手にとったときのような、開くと地の色がまだ残っているのと同じ。つまり、これを新品と呼べなくなってしまったのだ。

まだ使えるだけに、残念。

そのほかには、一枚のページがさしはさまれている。

だが、あとのそれは全て犯人が持つている。しかしイズミは、日記の切り取られたページを探したいと言い出す。

探すことはつまり、犯人を探すことになるのだけれど、その理由がわからない。どうして日記が必要なのか、俺には見当もつかない。さて、そろそろバスが来る頃だ。

急がなくては、と、日記を机の引き出しにそっとしまふ。机には鍵はついていない。けれど、大丈夫だろう。

「いつてきます」

いつものように姉にそう告げて、さっさと玄関を出た。

「あ、鍵持つてる？」

姉は訊いた。

「俺？」

「うん。アタシね、今日遅くなるから。鍵持つてないとヤバイよ」

ああそう。ヤバイんだ。

相変わらず語彙能力の劣る人だ。

「持つてるよ、それくらい」

「うし。中々優秀だな。それでこそ我が弟だ」

何をほざいているんだか。

* * *

手を伸ばし、収める。

それと同時に周囲を確認し、すぐにその場を離れる。背徳感はない。

ただ、その手にあるものが、愛おしく感じた。

中に入っているのは、たかが数枚の書類だろう。

だがしかし、誰かにとって欠かすことのできない重要なものもある。

それを今、たった今、盗んだのだ。

奪ったのだ。

私のものにしたかったから。

欲しいという欲求が私を駆り立ててやまず満足感を欲するがゆえに欲求に従った。

でも、それはすばらしいことではないか。

緊迫感と共に得られる、体中から沸き起こる、達成感。

けれど、甘美な泉に身を浸せるのはほんの一瞬だけだ。

目的を果たしたことで、すぐに乾ききってしまふ。

枯れてしまふ。

だからまた盗まなくてはならない。

私がそれを欲しているから。

何も人を殺したのではないのだから。

そう、この町で起こった殺人事件より、私は許される立場にあるはず。

臆すことはない。

昼時に生徒が向かう所といえば、食堂とか校庭とか、自販だったり、あるいは職員室。ともかく、教室から校内の至る所にまで、人が分散される。俺もまたその内の一人で、普段は退屈な教室を離れて図書室で何かをしている。昼飯も食べることはあるけども、大方時間を節約するために、昼前に食べきってしまう。いつ腹の中に収めるかは、企業秘密。

そんな俺だが、今日は様子が違っていた。

古びたドアを開け、誰もいない屋上へと踊りだす。すると、秋風が俺を待ち受けていた。思わず近くの金網へとしがみつく。向こうには、広々としたグラウンドが開けていた。遠く、遙か遠くに、川が見える。今日も弓のように曲がった湾のほうに、悠々と動いていた。そこが、俺の見える限界点だ。

もっとも、わずかに潮風が垂れ込んでくる。ここは、そんなのかなスポットだ。

「こんな時間に、なんか用？」

携帯を手に、耳にかざす。相変わらずの非通知設定の向こうには、イズミの声があった。

「一つ聞き忘れていたことがあります」

それにしても、あまりに唐突過ぎるといふもの。さぞ、それに見合った話題でも切り出してくれるのだろうか。

「犯人について、どれくらい知っているのですか」

「へ？」

俺は回答に迷った。

「・・・えつとねえ」

黒い服と、十文字の仮面。具体的には、ジャージとか、ユニフォーム

ームの類だろう。ある程度余裕のあるサイズの、そろいの上下。仮面は、白。タテヨコに切り刻まれたような趣味の悪い仮面、とても言いたい。不気味でしようがない。

あとは、俺と同じか、少し低いくらいの背丈。太ってはいない。これまでの状況から確認すると、俺と同じ高校に通う人物・・・あ、あと異常者。

「そんなところ」

かなり踏み切った特徴まで挙げてみたものの、一つくらいは誤りがあるかもしれない。凡庸な高校生がテストで満点をとり続けるのは不可能なことと同じように。

この場合、採点者が答えを知っているとは限らないけどね。

「大体、私の考える犯人像と同じですね」

正解のようだ。

「じゃあ、その犯人、警察に捕まると思いますか？」

俺は即座に否定した。

「難しいってさ。刑事がそう言ってた」

「・・・刑事の知り合い、ですか？」

「ん、そんなところ。呉竹っていう人なんだけど・・・」

あの店の事件は未だに捜査が難航を極めているのだという。

「偽証拠が多い。一つ一つ、流通経路など丹念に調べ上げてはいるが、どれも犯人に繋がるものはない。体液、着ていた服の布地、髪の毛などの手がかりも、普段から不特定多数の人の出入りが激しい店だ。調べ上げるのは、不可能に近いだろうな」

現場の指揮を行う呉竹が、バスの中で高校生相手に愚痴をこぼしていたほどだ。よほど計画的に仕組まれていたのだろう。

「友達の誰かが犯人って事は？」

「全くない。それらしき人物は皆、アリバイがとれている。崩すのは、不可能だ」

呉竹から半強制的に聞かされた情報をまとめれば、犯人は面識のない人間ということになる。

しかし被害者にも殺される理由は、ない。

「被害者は、特に問題を抱えてはいなかった。近所づきあいにも、積極的だったらしいからな。恨みを持たれる様な人物でないことは確かだ」

これはまだわからないが、犯人に動機、つまりこの場合、殺人の理由が存在しないことになる。だが犯行は計画的なものだった。

そこで俺の半端な頭脳で考えられるのは、面白いことだ。

つまり犯人は、誰かを殺すことを前提として、計画を立てていった。当然そこには、被害者に確執もなければ、殺人を犯して得するようなこともない。

強いて言うなれば、ある種の猟奇的な欲求が満たされる。

リアリティに欠けるけどさ。

実際そんな奴等、この平和国家に何人かいるだろうね。いるにはいるんだろうけど。

普通があるなら、そのカテゴリーに洩れる異常も、存在する。

あらゆるものが全て普通であるはずもない。

これは持論だけどさ。

「短絡的な割に、冷静さも兼ね合わせている。さぞか面白い奴なんだろうね」

「そうは思えませんが」

「・・・悪い、冗談だ」

「ええ、悪いです」

短絡的なことを、口に滑らせてしまったか。怒らせてしまったよ
うだ。

「ところで・・・気になりますね。その呉竹という人のこと」

「あの人？ まー確かに、イヤなところあるけど」

「そういうことではなくて」

イズミは語気を強めた。

「・・・捜査情報を、簡単に一般の高校生に漏らしすぎてはいないか、と、私には少し気になります」

「そればかりはわからん。俺に訊くな」

第一、それを議論したところで、犯人とは無関係のことだ。無駄な話は、通話時間をいたずらに蝕むだけなんだけども。無駄

「そういえば、アンタよく生きてるね？」

ふと、素直な問いかけをぶつけてみる。

「いえ、そうではありませんよ」

「じゃ、なに？」

「あなたと同じです。犯人に生かされている、ということですが
途端に不愉快な気分を覚えた。

「なに、殺そうと思えば、いつでもってこと？」

「そうです」きっぱり言った。

「私が一年以上も生きている理由が、他に見当たりませんかからね
思わず、笑いの種が芽を出してしまった。

「あつそ。アンタにもわからないんだ」

「ええ。もちろん、あなたが生きている理由も」

「・・・結構、変、だよな。それって」

それはつまり、無関係の人間を殺すほどの奴が、その場に居合わせ
た俺やイズミを、なぜ殺そうとしなかったのか。

「でも、一つ言える事があります・・・明確な理由はわからずとも」

「なにが？」

俺は聞いた。

「あなたが今持っている、日記です」

日記が！

調子づいて、屋上に響き渡るような大声を、思わず叫んでしまっ
た。けれど風が強いので、校庭でサッカーをしている奴らには聞こ
えないはずだ。

「っと危ない危ない。犯人にでも聞こえたらまずかったな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・悪い、マジ悪かった」

「ええ悪いです」

また怒らせてしまった。

「・・・話を戻しましょう。日記、もちろん、持っているでしょう？」

「ああ」

記憶の糸を、手繰り寄せる。

「確かアンタ、言ってたね。俺が持っていたほうが都合がいいって」「あれは、そういう意味です。極端な言い方ですが、日記が犯人にとって、特別な、重要な意味を持っている、そう考えたほうがいいでしょう」

「・・・なぜ、そう言い切れる？」

「本来あるはずのない日記が、存在しているからです」

「・・・」

「思い出してください。公的には、氷室はどういう状況で死んだとされているかを・・・」

焼死。

つまり、彼女の家が火災にあって、何もかもが焼き尽くされて。

そう、燃える。

日記みたいな紙なら、すぐに。

でも、焦げ痕なんてどこにもなかった。

「火が出る前に、私が持ち出したからです。何か証拠を持ち出すことを、その時は考えていました」

「それは初耳だね」

「・・・あなたなら、推測すればわかることだと思いますけど」

まあそうだけど、と言おうとしたのだが、心にとどめておく。

「俺を持ち上げてるつもり？」

「別にそういうことはありません。あなたが頭の鈍い人間だった

ら、話にならないということですよ」「
酷い言い方だね。

ま、気持ちはわかるけどさ。頭が良くなければ死ぬかもしれない
し。

けれど口には出さないでおこう。

「じゃ、俺の意見を聞いてくれる?」

「はい」

あっさりと言ってくれるイブミ。

「ひよつとして、日記を世間に公表すれば、大変なことになるんじゃないかな?」

全焼した家。

しかし、部屋の中にあつた日記が燃えずに残ったのは不思議な話だ。これは、家が焼ける前に、氷室以外の誰かが持ち出したことになる。

もちろん、日記という特質上、「交換日記」でもない限り、外に持ち出すことはまずありえない。日付が途中で終わっているものならなおさらだ。

それでも、名前は書いてはいない。それが「氷室美月」のものであるという確証はないかもしれない。

しかし、彼女が残した「文字」は、他にもあるだろう。

例えば、彼女はどこかの中学校の教師を勤めていた。すると、遺された文字の筆跡鑑定でもすれば、すぐに持ち主は特定できるだろうね。

それに、こまごまとして綺麗だけどさ。

日付は、十五日まで続いている。つまり、事件当日まで彼女の手元に置かれ、家の中で綴られていた。これはもう、動かしようのない事実だ。

少なくとも、「事件」を示す証拠にはなる。実際のところ、あの事故には、疑問点が多いという。

「私は、事件だと考えるがね」

呉竹もそんなことを呟いていた。状況はたしか、殺された店長の友達として話題に上ったときだったと思う。

なんだかんだで、バスに乗る時間が長いからさ。

「これは、私があの場合の責任者として、一応調べてみた結論だ。あくまで、私論だがね」

「え？ てことは」

「ああ、警察・・・上層部は、私の意見を聞き入れようとしなかった」

それは、「火災事故」として扱われた瞬間でもあった。

「・・・何があったんですか？」

「それは、君には話せない」

呉竹は再度溜息をついた。

「犯人につながることは、当然出ないだろうね。けど、事件を示す証拠にはなりうる。そういうことだろ？」

火災事故として片付けられたのなら、それを覆す証拠があれば、仮説は大元から崩れる。残るのは、「事件」の可能性だ。

「いや、短絡的だったかな？」

「いいえ」

イズミは言った。

「間違つてはいませんよ。おそらく犯人も考えてはいるはずですよ」

「じゃあさ、まずいよね」

「確かにそうです。犯人にとって、事件を蒸し返されるのは好かないでしょうから。何としても、日記を取り戻そうとするでしょう」

「あ、やっぱりおかしい。そうすると益々アンタは殺されなきゃいけないってことに・・・そもそも、日記を持っていたのはイズミの方だったし」

「犯人がそのことを知っているかが問題ですが、ね」

「・・・アンタが日記を持ってるって事？」

「でも知っています」ささり、言った。

「近い人物なら、聞きだせるかな。それくらいは」

「いえ、私の場合はカバンにいつも入れていましたから。手元に置いておかないと、まずい気がして・・・」

「ああそう。変なこだわりがあるんだね」

誰だろう？ イズミって。

「三村先生みたいだ、と知っているでしょうが、違います」
本心を見透かされて、きっぱりと否定された。

青々と、高々と、俺を見下ろす空に、影をさし込む雲。けれど、雨をもたらず類のそれではない。

それでも少しの涼しさを与えてくれる。心なしか、この前よりもその度合いが強い気がする。

下を見下ろすと、半袖の生徒はちらほらと、数えるほどだ。校庭に植え込まれている何本もの木立は、所々色を変えていた。

聞きたいことは山のように積もっていた。

けれど、聞き出せないでいる。それはひとえに、イズミという人物が何者なのか、捉え切れていないからだろう。

素性のわからない人間に、全面的な信頼を託すほど、俺は人が良くない。

もうわかっているだろうけどさ。

だから、とりあえず言わないでいた。

「いつかは俺たち、殺される？」

「まちがいないでしょう」

これもあつさり、言われた。

「殺さない理由も、なくなれば殺すだけです」

自然の摂理だろうね。嫌なことこの上ないけど。

「問題は、それがいつなのか。こればかりは、私にもわかりかねます。私と、そして、あなたと、同時に、というところでしょうか？」

変な話ですけど

「……時間の長さじゃないと思うよ。俺にもよくわからないけど、しかし、そうなる前に、犯人を探さなければならぬ。

「どちら」が早いのか。

ヒントは、日記にある。

これが何を意味するのか、まだ別の意味が隠されているのか。

「店の事件から半月が経ちます。盗難事件もありますから、果たし

てこの町はどうなることでしょうか・・・」

自嘲気味に、イズミは言った。

どこからか予鈴が鳴り渡る。授業に入る前の、映画で言う予告のようなものだ。

「長々と話してしまったようですね。私の無駄話、まあ頭の隅にでも留めておいて下さい」

そういって、一方的に電話を切った。

ツーツー、と無粋な音が反復して聞こえる。

「・・・さて」

金網の外に広がる校庭と、その遙か先を流れる雄大な川に向かって、体を大きく伸ばした。

「ふう」

黒の携帯をポケットにしまいこんで、後ろを振り向いた。

一瞬だけ。

人影が見えた気がした。それは、屋上のドアの立っているところだった。

怪しく思った俺は、恐る恐る近づいた。

しかし、なにもない。

気のせいかと思ったが、しばらくするとある匂いを鼻腔がとらえた。

煙たい。

よく見ると、吸殻のような黒く小さな塊が、無造作にばら撒かれていた。灰皿を使わなかったらしい。しかし、まだ真新しいようだ。

俺の他に屋上に上がった奴でもいるのかな？

いたとしても、別にいいけどさ。

急ぎ教室へと戻った。

* * *

門の前に佇む。

辺りを見回して、手袋をはめた手で、そつと開ける。

もう、馴れた。

持っていた「それ」を鍵穴にそつと差し込む。かちゃかちゃ、という細かな音が耳につく。やがて、かちりという音が、重なった。開いた。

「それ」をしまい、ドアノブに手をかける。音を出さないように、そつと動かした。

中には誰もいない。

これはあらかじめ調べていたことだった。今、この時間帯ならばこの家は留守を決め込んでいると。それに、目的のものは、そう時間がかかるまい。

階段を登りきったところで目に付く、開ききったドア。そこが、彼の部屋なのだろう。躊躇いはない。左胸を押さえて、平静を保っているか、冷静でいるか、確認する。

落ち着け。

そつと足を向ける。部屋に入り、まず窓の外を確かめる。

カーテンが閉まっていたため、やけに薄暗い。

つまり外からはこちらの姿を視認できない。

私は安堵した。不確定要素となるものは、一つずつ消さねばならない。たとい小さなことであっても。

ふと、そばにあった机が目に付いた。

引き出しが一つだけ、半端な形で開いている。取っ手をつかみ、そろりと開けた。

手帳のようなものが入っていた。

開くと、細かな文字が、所狭しと並びたてられている。

そのとき、私は驚愕した。見覚えのある筆跡。間違いなく、彼女

のものだと。同時に、私は困惑の渦にとらわれた。どうしてこのよ
うなものを、彼が持っているのかと。

日記を持っていることは、知っていた。

しかしそれが、私と関係の深い人間のものであったことが、私に
ある種の驚きを生じさせていた。

この小さな手帳は、一体何なのか。

考えるより先に、持っていたカバンに差し挟んだ。

思考をめぐらせるのは後にしよう。

胸に手をあてて、心拍数を確かめた。少し乱れてはいたものの、
まだ正常の範疇にあった。

もう一度辺りを見渡し、痕跡が残っていないことを確かめると、
もと来た道のりを、ゆっくりと辿っていった。

* * *

三時ごろには、もうその日の授業は全て終わりを迎えている。

終礼のHRには、なぜか三村が教壇に立っていた。

「福原先生は、都合があるらしいので今日は私が行います」

「らしいって何だよ。つうか早く終われよ」

「今年で何回目の誕生日？」

とまあ、クラスは歓迎ムードに包まれていた。

「そこ、静かに！・・・学校から、伝達事項が一つあります」

ざわついた教室で、声を聞き取るのも難しいことだったが、俺は
とりあえず前の席に座っていたので、大丈夫。

「最近、署名などで個人情報を明記させるという事件が多発してお
ります。安易にそんなことをしないよう、注意してください。はい、
終わり！」

半ば投げやりな態度で叫んだ。すると、そろそろ教室を出て行く
ものだから、現金なものだ。帰れといわれたら帰る。当然といえば
そうだ。

さて、俺も帰らせてもらおう。

高嶋やほかの奴らは、部活で、不動は図書委員の当番。今日はそういう曜日なので、当番じゃない俺は、さっさと帰って寝ることを決め込んだ。

やらなければいけないことが、多くあるけれど、とりあえず眠気と相手する。

バスに揺られ、家路を急ぐ。

鍵を取り出し、差し込んだ。

すると開かない。もう一度鍵を回すと、あっけなく開いた。

つまり、最初は開けっ放しになっていたことになる。

姉が、そんなことを忘れるだろうか？

ずばらな姉のことだから、と思ったところで、撤回する。なぜかというと、ある種の勘というものが、俺の頭をよぎったからだろうか。

見えない糸に引きずられるように、一直線に廊下を疾走する。

足のすねほどの高さの一段目を飛ばして、階段を斜め上に駆ける。上がったところのすぐ右手にある、そこが俺の部屋だった。

扉は閉まりきっていた。

けれども糸はその硬い戸を越えたところにある。開くと、部屋はカーテンに包まれてるせいか、暗い影に覆われていた。

俺は静かに、目を動かし、机に向かった。

糸の先に、引き出しは閉まっていた。

しかしそれはおかしいことに気付く。俺の記憶では、引き出しは「半分ほど」閉めただけのはずなのに、机の中に綺麗に収まっている。姉が閉めたとか？ けれど、俺はまずその取っ手を掴むことを優先した。

机の引き出しを開く。

板の擦れる音と共に、中を覗かせる。

そこにきて、俺は納得した。

「勘というのは、これなんだな」と。

「・・・災難だ」

そこにあるはずの日記が、忽然と消えていた。

* * *

イズミという人間は、はたして誰なのだろう。

かりそめの身分、本名ではなくて。

一体、どういう人間なのか。

私に自分自身を推し量ることは、到底できない。もちろん、誰にも不可能だ。

つけたばかりのテレビに目をやる。相変わらずのくだらないワイドショーとか、退屈なドラマとか、見るに値しないようなものも。

ひっくるめて、電源を切る。

部屋に戻る。

途中、物置がある。といっても、大きな部屋なのに、あまり物がない。一人で暮らしているせいか、使わない部屋が一つくらいでてくるのだ。

何年くらい経つだろう。

もちろん、近所の人々はその事実を知りえている。だからときたま、その人たちが様子を見に訪れることもあるのだけれど、それ以外は一人だけで暮らしている。

だからといって、孤独というものを、疎んじているのではない。

むしろ一人でいたほうが、ましだというもの。

折角生きていても、たまにそれが不仕合わせなこともあるのだろう。周囲から見て、自分が急に消えてしまったり、あるいは見失ってしまうことが、たまにあるのだけれど、それは一時的なもの。日

記は、そんな根無し草のような、浮ついた雲のような私にとって、自分を思い起こさせるものでもあった。手に取るたびに、自分にも過去が存在した、と気付かせる。

けれど、心にできた空白は、時間を経て、大きく膨らんで行くのも、事実だ。

同時に、存在を見失うことも、多くなる。それはもう、とてつもないほどに。

何も無い日常。

昔のことがうやむやになったままの、日常。

そんな私が、果たして「事件」と向き合えることができるか？

折り合いは、つけなくてはならないのだけれど。

十月十日

バスに揺られながら、人にぶつけないよう鞆を足元にしまう。満杯の車内で、席に座る奴のマナーであって、余分なスペースを取ってはいけない。いやむしろ、必要のないスペースを陣取って、他の人間に「頭使え」とか蔑むような目で見られるのが嫌だからね。

馬鹿に思われるのも癪だしさ。

現にそういう目でじろじろ見てる（と思わしき）女の子が、通路を隔てた向かい側にいたりして。

ちなみに、このバスはいつも俺が乗るより一本後のもので。つまり間一髪のところ、前のバスに乗り遅れた。ひどいときには、これにも乗り遅れそうになる。通学としては一番短い時間で着けるので、その場合ほぼ間違いないアウトになる。

別に無遅刻記録に挑戦しているんじゃないから。

後で担任に説明するのが鬱陶しいから。

説教ともなると、福原の場合はそれが三十分にも及ぶ。

話を戻そう。つまり、普段のより一つ遅いバスに、乗っているのだ。

だから見る顔ぶれも違う。

あの女の子もその内の一人。ただ、彼女は前に、どこかで見た。それを思い出せないのが、また癪に障る。どうもはつきりしない。知っているかそうでないか、煮え切らない。

考えている間に、目的地にたどり着いた。席を立ち、人を掻き分けて出口へと向かう。

ちょうどあの女の子の前を通り過ぎたところだった。

「・・・風？」

ぼつり、自分の名前がどこからこぼれた。振り返り、そして女の子と目が合った。

けれども立ち止まると、後ろがつかえているので、一旦は降りなくてはいられない。

「あ・・・ちよつと！」

窓から見える女の子の顔に、やはり見覚えはない。聞こえないふりをして、さっさと校門に入っていった。

今はそれよりも、考えなきゃいけない事がある。

日記の行方はどこなのか。

そろそろ本題に入ろう。

茫然自失。

俺にそんな無意味な感情にふけっている暇はない。仮にも、預かりものだ。なくしていいはずがないし、取り戻さなくてはならない。もちろん、イズミには黙っていて。

さて、俺の知能で一晩考えたのだが、どうも日記は盗まれたものらしい。

家中を探しても、見つからないのだから。

失念したなんてオチのほうがある意味最悪かもしれないけど。

昨日の朝、俺は日記を机の引き出しにしまった。

そしてなくなったと気付いたのが、昨日帰宅してすぐ。ということとは、四時前ということになる。

つまりその間に日記が盗まれたと思われる。最近になって、盗難事件が多発している。おそらく、可能性としてはそれだろう。

盗まれたのが、金目のものじゃなくて、日記だけというのも気にかかる。確かに人の日記は見てみたい気もするけど、だからといって得することはない。

そうすると

犯人は、俺を襲い、「事件」を引き起こした黒服の人間ということになるかもしれない。

面白いことになりそうだね。

ただし、思い出さなければならぬ。

もし犯人がその黒服の人間だとしても、今まで放っておいた日記を今更になつて、こんな形で取り返そうとするだろうか？

俺なら、もつとうまい方法を考えるだろうね。

また、盗むにしても、「俺の家がどこにあるのか」を知る奴じゃないと無理だ。

最近は個人情報制限が厳しいというし。

それに家には当然、家族がいることを考えなくてはいけない。

犯人でなくても、それくらいは考えるだろうし、いない時間帯を狙つて、行動に移すだろうね。

でも、逆にそれは、犯人が「俺と姉しか家にいない」を知っていることになる。犯人が随分と絞られてくるだろうね。

要するに、犯人が俺の知り合いだとばれるリスクが高いということだ。

でも、それ以外に誰が盗むというのだろうか？

誰にとつても、意味のないものを。

どうして？

いつのまにか昼休みが訪れて、昨日と同じように屋上の戸を開けていた。すきまから流れ込む風が、外向きに開くドアに圧力をかける。そんな重たいドアを、ぐいと押し出した。

俺は一面に広がるコンクリートに向かい、金網に体を預けた。

特別な用事はなかったのだけれど、ここが案外落ち着けるところだということに気付いた。図書室には、委員がいる。誰もいないところで、ゆっくりと対策を練られる場所としては、ベストだろうね。さて、その対策というのは、もちろん日記の搜索。

大げさな言い方だけどね。
続けよう。

日記から持ち主を見つけ出した時のように、切り口を変えてみるか。

この際、盗んだ理由を自問するのではなく、どうやっていつ盗んだか、考えられるところから折り合いをつけてみよう。

まず俺の家には、実は防犯ブザーが至る窓に取り付けられている。それは姉の要望で、俺が買ってきたものだけど、とにかく警報音がうるさい。窓を開けるときは、スイッチを切ってからでないと、すぐさま鼓膜が破けてしまう上に、近隣の住民への謝罪巡りの旅に強制参加。威力は抜群なんだけどさ。

まあ、今回はそれが鳴らずに終わった。

窓以外で侵入可能なのは、俺の家では玄関だけだ。

しかも取り付けてある鍵が相当古いタイプのものなので、ピッキングに長けたものなら、いとも簡単に開けてしまう。

昨日調べて、家の住民がやっとわかつたくらいだから、なんとも間の抜けた話だ。防犯対策としては、欠陥だらけだ。

ということ、新しい鍵を取り付けることにしたんだけど。

それはまた別の話。

とにかく、玄関から入った可能性は高い。

付近の人は、それに気付いていないらしい。気付いたとしても、同じことだろうけど。

警察に被害届は出すつもりはない。

盗まれたのが、あるうことか日記だからね。

それに、警察官に対しては信用ゼロの俺だから。どうしても警察の手を借りたくない意地があるもので。

困ったものだね。

それはさておき。

かすかな潮風が、鼻をくすぐる。けれど灰色に覆われた空は、川を下るにつれどんよりと低く垂れ込める。つい先程まで、細かい雨が降っていたのだ。

小さな池の溜まり場にいた俺は、吹き付ける風を妙に生暖かく感じた。

湿ったような、気味の悪い風だ。

それでもグラウンドのほうに目をやると、大勢の人がなんかしている。俺にはその様子を中継する気力もないけどね。

今日は、タバコの吸殻はどうなっているだろう。

不意に昨日のことを思い出して、金網を離れた。

そこには誰もいない。

コンクリをじっと観察しても、それらしきものはない。今日は来ていないようだ。

誰であろうと、背後に人がいるのはどこか落ち着けない。

そう鑑みると、この場所も人が往来しているようだ。

どうでもいいけどさ。

けれど、昨日は少しまずいところがあった。

昨日はイズミと、電話越しに話していた。話した内容によっては、無関係の人間が聞いて、怪しむこともあるだろう。例えば、殺したとか殺されてないとか。

さぞ、奇天烈極まりないことだろうね。

犯人だったら、尚更タチが悪い。

この物陰から会話を全部聞かれましたらと、どうしようもなく不安に駆られてしょうがないね。

あまり聞かれていいことじゃないだろうし。

特に、日記の話。

屋上だからと安心しきって、周囲の目に気をつけていなかった。

少なくとも、ある程度まではこの吸殻の誰かに聞かれたかもしれないな

い。

可能性は、なくもない。

つまり、この吸殻を捨てた人間が、日記という語句に興味を引かれたことだ。

日記を盗むことと、屋上で俺達の話盗み聞きして日記を知ったことと、関係があるのか、わからない。

けれど疑ってみるのも面白いかもね。

全ては推測だ。

全てが根拠のないものだ。

しかし、犯人を疑えるところまででいいのだ。

俺は呉竹とは違う。

だから、俺にしかできない方法もあるということ。

* * *

二つ駅を通り過ぎたところで、電車を降りる準備をする。二分後、俺はホームの上に立っていた。

見知らぬ駅だが、見当はつきそうだ。前にあの人が、自分の家の環境について話題にしてくれたこともあって、大雑把な道のりはわかっていた。

克明に覚えている。

駅前に伸びる商店街を通り過ぎたところで、小さな川に行き着く。近くにミカン農園があるということらしいから、付近の家の表札を探せばいい。

五分後、俺は見つけた。

一戸建てなのだが、一人で暮らしているらしい。親は早くに亡くなっているのだとか。

そんなことはどうでもいいけど。

門をくぐり、中に入る。途中、どこのものともつかない古いサンダルが片方、目にする。

玄関に備えてあるインターホンを押す。静かな音が流れたが、誰

も出ない。

帰ってくるまで、まだ時間はある。

けれど、急がなくてはならない。

わきに入り、雑草の生い茂る地面を、ゆっくりと踏みしめる。中に入れるところを、探す。

なければ、割って入るまで。

どうせ被害届はだせないだろうしさ。

盗難事件の犯人だと知られたくないからね。

昼に俺の会話を聞いてから、俺がすぐ帰宅するまでの時間、学校を出られる人物は、いくらがいる。

特に、俺の個人情報をつかんでいる、身近な人間とくれば、もう一人しか見当たらない。

そのほとんどが推測だけど。

だが、確証はある。

なぜかというと、俺には記憶を見る力があるからだ。要するに、犯人と思う奴の持ち物をこっそり調べて、記憶を探ればいい。

自分の犯行なんて、強く印象に残っているだろうしさ。

俺はほどなくして、勝手口を見つけた。

無用心にも、ドアが錆びている。手をかけたところで、ゆっくりと開いた。

革靴を靴に入れて中に。そして勝手口は少し開け放したままにしておく。もしものために退路を残しておくつもりで。

台所だった。夕暮れ時で暗くなっていたものの、徐々に目が慣れてぼんやりと輪郭が浮かび上がる。中央には大きなテーブルが一つ。しかしあまり使われた形跡はない。

ひとつずつ歩を進める。すると、何かにぶつかった。

なんだろう？

足元を見る。新聞紙の束が、ひとくくりになされていた。

「・・・なんだ」

脈拍を確かめる、大丈夫、落ち着け。

家に侵入するということは、それなりのリスクもつきまとう。それに俺は今、日記を盗んだ奴と同じ事をしている。わかりきってはいるけれど。

台所を抜けて廊下へと出る。指紋にも注意しなくては。ハンカチしか持っていないので極力触らないように歩く。当然、明かりはつけられない。廊下の奥は先ほどその反対側にいた玄関、そして目の前には三つの入り口がある。左の二つは開いていて、右のひとつはしまっている。右の部屋は、なんだろうか。

静かに耳を立てて気配を感じ取る。全身の神経を研ぎ澄まし、逆立てる。血液の循環する音まで聞こえそうだ。

人がいないと確認し、ハンカチを握り、すばやく開けた。息苦しさに思わず胸を押さえる。

隅から隅を見渡す。しかし、中は空っぽの部屋だった。

一人で住むのだから、一つくらい使わない部屋があってもおかしくはない。

静かにドアを閉めた。

次に左の二つの部屋を見る。カーテンが閉まったまま、暗くてよくわからないが、誰もいないことは確かだ。そのうちの一つはトイレのドア。閉めたくてもできないのが、歯がゆい。

したがって、もう一つの部屋の中に入る。

そこには大きなベッド、机、これもまたスペースを大きく取る本棚が、横に飾られていた。

どうやらここが自室らしい。

そう思った刹那、聞きなれた電子音が耳を貫いた。

その場に立ちすくみ、耳をたてる。

電話がなる音のようだ。

一体誰から？

それは関係のないことだった。しかし音が出ることをこれほど嫌ったのも初めてだ。強く胸を抑える。落ち着け。

十秒ほどして、電子音は止まった。

呼吸が、酸素が堰を切って肺の隅々にまでなだれ込む。制服に汗が広がっているのが気になる。水滴となって落ちれば床に証拠が残ってしまう。見れば、手のひらにも、仕方なく制服で、拭う。落ち着け。

息を深く、吸う。吐く。もう一度、辺りを見渡した。すると見慣れないものが、机の上にあった。

「……」

書類だろうか？ A4サイズの封筒に、「持ち出し禁止」の文字。これだけでは、どういうことかわからない。

思い切って中を取り出した。

「……これって、あれ？」

呉竹の言葉を思い起こす。確か、校長室から学校の書類が何枚か盗まれたと。

その内容は、来年度の予算についてだ。

一方で書類には、わけのわからない名目で、だが桁を幾重にも踏み外したような金額の欄が、事細かに明記されていた。

もちろんそこには、校長を始め主だった教師の名前も書かれている。

俺は、たった今証拠を発見したということだ。

けれど、今は日記を探すのが先だ。

俺は机の中に入っていないか、と考えた。

引き出しをハンカチを使って、そうつと開く。

中をのぞいてみたものの、書類ばかりが目につく。

少しばかり焦りが生まれてくるのは、当然のことだった。

しかし、次に目に付いたものを見て、それは治まった。

鞆の中に、窮屈そうに挟まっているもの。化粧品とか、他の盗難品もあつただけけれど、俺は本当に、心から安堵した。

切り離されたページも含めて、日記が真白い顔をのぞかせていた。

日記と、書類をはじめ盗難品だとわかるものだけを持って、すぐさま台所へと引き返す。廊下に出たところで、奥から物音が聞こえた。

立ち止まり、耳を傾けた。

台所のほうからだった。物音はすぐにしなくなる。そういえば、食器が洗面台にあった、バランスが悪くて突然倒れることはよくある。その類の音だろうか？

どちらかといえば、ドアを開けたときの、さびの入った軋むような音だ。慎重に、歩を進めた。背後の玄関の物音にも注意しなくてはいけない。いつ、誰が帰ってくるのかわからないからだ。

台所に入ったところで、あることに気付いた。

あけていたはずのドアが閉まっている。

背筋が凍る思いをした。

さっきまで誰がいたのだろうか？

台所はさっきよりも暗く、不安が身を包む。勝手口まで近いのに、そこに至るまで永遠の時間を費やすかのように思われた。

家の狭いわき道に、強い風が吹いて勝手にドアを閉めるようなことはない。

俺は硬直した手首をほぐし、ドアノブに手をかける。そのまま引っ張ろうとしたところで、ドアの下に挟まっているものに目をやった。

一枚の紙切れがそこにあった。床に落ちていたため、埃を払って、その場で確認する。

細かな文字が、またそこに並びたてられていた。

これは・・・日記だ。切り離されたページのうちの、一つだ。

しかし、来る時はこんなものはなかった。俺が中にいる間、誰かがここで・・・

そう考えた時に、誰が落としたのか見当がついた。
奴だ。

俺を襲った、黒服の人間。

それは、おおむね正しい考えだった。日記の残りのページは全て、犯人が持っている。そのうちの一枚がここにある。

あとは、考えるまでもなかった。

さっきまで奴がいたことになるのだから。

すると、今は？

俺を待ち伏せている？

その可能性は、大いにあった。この状況が、喫茶店「アーク」の時と、酷似していたからだ。

暗い家の中で、奴が潜んでいる可能性だ。

俺は身を固め、カバンを手に持ち、そつと耳を立てた。

音がないことを確認すると、内側に開くドアに張り付く形で、一気に開放した。

奴が瞬時になだれ込むことを予想して。

俺は身構えた。

「・・・」

しかし、そこにはだれもいなかった。恐る恐る外を出ても、黒服の人間どころか、黒光りする害虫一匹すらも見当たらない。

「・・・?」

首を傾げる。一体、これはどういうことなのかと。

けれどいつまでもここでぐずぐずしていることはできない。早くしなければ、家の住人が帰ってしまう。

玄関に向かい、人がいないことを見知って、そつと家を離れた。

二十メートルほど離れた大通りに出て、安堵する。

侵入は成功したのだ。

それはつまり、犯人の決定的な証拠を掴んだことになる。まあ警察にはできない、違法な捜査だけだね。

呉竹ならやりかねないけど。

そんな冗談が、ふと頭についた。

この盗難事件の結末は、「事件」を解決する形と似ているかもしれない。

どこが似ているのかと言われると、まず疑って、そいつの記憶を覗き込んで、確証を得る。

あくまで俺は、この一連の流れで、盗難事件の解決を求めた。だから、確証を得た後にするべきことは、もう決まっていた。それは、決して正しくない解決の形なのかもしれないけど。

* * *

私は呆気にとられるしかなかった。

手に入れたはずの、数々の品が、わずかな期間で、忽然と姿を消したというのだから、まるで足が生えて、どれも逃げ出したのかと見間違うほどに、呆れるしかなかった。怒りすら湧いてこない。

私は、しかしそのことで殺意を抱くような残酷な人間ではない。何であろうと、同じ犯罪者の汚名を着せられようと、巷で起きている殺人事件の犯人と同列ではないという自負と、殺人そのものに対するある種の抵抗があったからだ。

血を見ることすら、私は嫌いだ。

その代わりどうやって、私の犯行だと特定されないか。机に向かってそのことばかりを想定していた。一晩が過ぎ、朝が訪れたところで、私は観念した。

あきらめるしかないのだろう。

深い溜息がつい、口に出た。私はおもむろに鞆を取り出し、身支度を整えて、玄関の鍵を開けた。

その時、気付いた。

鍵は旧式の物を使い続けており、ピッキング程度で簡単に開くことを、私は悟った。

私のしたことを、こつも見事な形で返ってくるとは。報いなのだろうか。

十月十一日

学校にたどり着くと、校長室の前に人だかりができています。何だろうかと疑問に思っただけ近くにいた三村に尋ねた。

「書類が、見つかって……」

そこで言葉に詰まった。非常に驚いた様子で、こちらと室内を見比べていた。中をのぞくと、笑みを浮かべながらも、少々困惑気味の校長が、年配の教師達と話をしているところだった。

「それで、教頭先生。この書類は一体、誰がどこで見つけたのですかな」

「はあ。それが、職員室にある机の上に、置かれていたようです。誰が持ってきたのかは、私には見当もつきませんが……」

「それに、盗まれたものも横に並びたてられていたと聞きますが？」

「盗んだ人間の仕業でしょうな」

イタズラにしては、酷いものだ。

全くですな。

そこに、私が話題に乗ることはなかった。

同時に思った。

私は一体、何のために盗みを働いたのだろうか。

先生

不意に、私の名前を呼ぶ声がした。
人だかりを離れ、辺りを見る。

「ここですよ、先生」

私は振り返った。

「・・・凧君か。どうしたんだ？」

平静を装ったつもりで、問いかけた。しかし、彼は持っていた鞆から、手帳のようなものを取り出した。

私の中で、冷静さを保っていた何かが、ぷつりと切れる音が出た。

「あれ、俺なんですよ。福原先生」

手に持っている白磁の日記に、私は圧倒され、ついには声を出すことができなくなった。

彼は確かに盗難事件の犯人だった。

しかしそこに至るまでの過程も、見逃すべきではない。

そう考えた俺は、誰もいなくなった教室の中で、一人の男と向き合った。

福原忍足。

俺のクラスの担任だが、今は窃盗事件の犯人として、教壇に立っていた。そして俺は、窓にもたれかかって、こう切り出した。

「やはり、盗難事件の全てが、あなたなんですね」

福原の顔に、笑みがこぼれた。

「ああそうだよ・・・もう何も言い逃れはできないだろうな」

教卓に肘をついた。どこか遠くを見やり、呟いた。

「どうしてわかった」

繰り返し、呟いた。鬱積した疑問をぶちまけた。

「・・・いずれはこうなると思っただけ。しかし、どうして、わかったんだ？」

俺は少しばかり、考えた。

「話、長くなりますよ？」

福原は、何を言っているのかと言わんばかりに、また笑みがこぼれた。

もちろん、答えるつもりではいる。もしもそのために、福原とは距離を置いた状態で、俺は一つずつ説明を加えた。

問題は、俺が昼休みにイズミと電話越しに話していた時、日記のことを口に滑らせていたことにあった。

「そのときあなたは物陰で煙草を吸っていたんです」

ヘビースモーカーなのか、普段からもヤニの匂いが絶えないと三村が言うほどである。生徒達の建前、屋上でいつものように吸って

いた。話声が聞こえ、耳を傾ける。すると、日記という言葉に興味を引かれる。

まず、ここが俺の立てた推測の一つ目だ。実際はそんな都合のいいことが起きるはずがないと反論するかもしれないが、それはひとまず横に置くとしよう。

「何を思ったのかはわかりませんが、あなたはすぐにその場を離れました。このとき、日記を盗む決意を立てたと仮定しましょう」

ここから、日記が盗まれたと俺が気付くまで、およそ四時間。時間はたっぷりである。そう思えるかもしれませんが

しかし、この学校では下校時間が三時前後なのだ。

そこから最も早く家に向かうには、バスが最も早い。

「俺はその日、何もせずに家に戻りました。そう、最も早く帰ったはずなのに、それよりもさらに早く、日記が盗まれた」

この時点で、俺は今までの推論を疑った。学校の人間が話を聞いたのなら、俺より早く家にたどり着けるはずがないと。

盗めるとしたら、俺が午後の授業を受けている間しかない。

「ポイントはそこでした。欠席、もしくは早退した生徒が盗んだとか、あれこれ考えました」

つまりは「生徒の誰か」が犯人だと考えていた。煙草を吸う高校生も、確かにいるだろうね。

しかし、まっとうな思考回路を持った人間なら、「大人」だと考えるだろう。

この学校で大人と呼べる人は、教師だ。

「教師なら、都合をつけて早退しても、あまり目立たないだろうってね。やはり、そこで三村・・・先生に、終礼の代行をさせた」

彼女を呼び捨てにするのも、何だかこの人の前では気が引ける。複雑だね。

「閃きってやつですね。あとは」

そして、推測の二つ目。

俺の家がどこにあるか、すぐにわかる立場にあるということ。

「生徒なら、俺の家を知ってる奴って数えるほどしかないんですよ。個人情報漏らさないようにって、三村先生もおっしゃっていましたが、赤の他人がそんな住所、すぐに知れるわけないってね」
しかし、担任というポジションなら、どうか。

生徒全員の住所録を持っていても、不思議なところはない。

もちろん担任であってもそんな簡単に個人情報を引き出せるのかという問題が噴出するだろうね。けれど、さつきも言った。ひとまず横に置いて、話を進めよう。

「煙草を吸う教師、そして担任という立場。あなたしか、考えられないと、俺は思いました。けど、日記だけは秘密裏に取り返したかった。盗んだ日記をどうするのか、不安でしたからね」

もしかしたら、すぐに捨てることだってあるかもしれない。

だから急ぎ、福原の家に向かい、日記を取り戻した。

その前に、確認のために福原の机に置かれていたメガネケースから、記憶を取り出して、かつ福原が職員室会議で帰りが遅いことをその時知った。比較的余裕を持って行動に踏み切ったのは、そのおかげでもあった。

「そうしたら、案の定盗まれた書類とかが、あった・・・それではつきりしました」

結局俺のたてた仮説は、ほぼ正しかった。裏を返せば、横に置いていた他の可能性が、ゼロになったことでもあった。

まあ、結果オーライということだ。

「・・・やれやれ」

俺の話を聞き終えた福原は、それでも、さっぱりわからないと言わんばかりに、肩をすくめた。

「で、どうするつもりなんだい？」

「・・・何が、ですか」

「君は折角、私の家に押し入ってまで、確たる証拠を得たんだ。それを、あんな形で手放すとは、少し考えがたいことだ・・・」

いや、私にはどうでもいい話だったか。

へんな事を聞いてすまない。

そう付け加えて、彼は苦笑いした。

表情から、福原は今何を思っているのか、少しばかり推し量れるような気がする。

困惑とか、安堵感とか、そんな相反するものが、微妙なバランスで入り混じったような、そんな顔。

これが、殺人事件の犯人なら、どうなるのだろうか？

ふと考えてみた。

口封じに俺を殺すとか？

けれどこの細身の男に限って言えば、そうするとは思えなかった。

「これから、どうするんです？」

不意にたずねた。

「このまま、そ知らぬ顔をして、教師を続けることも、できます。俺以外に犯人を知っている奴、誰もいませんから」

「そうだろうな」福原は淡々としていた。「まるで盗難など、最初からなかったかのようにされている・・・君のおかげで」

「そういえば、どうして盗みなんて働いたんですか？」

俺はいつもの好奇心から、尋ねた。

「何だ、ついでのつもりで聞いたような言い方だな」

「必ず聞かなきゃいけないなんてものじゃないですし。知ったところで、ああそうですかで終わりですよ」

推理小説で俺が違和感を感じるところだね、動機って。

「探偵には向いていないな」

そうですね、と俺は答えた。

俺は一通りの理由について、聞いた。

そこから感じたのは、福原の異常性でも、軽蔑でもない。

ただ普通の人間が、それでも逸脱した行動に踏み切れるということ。

欲しいという欲求が私を駆り立ててやまず満足感を欲するがゆえに欲求に従った。

その言葉を聞き、俺は同じ性質を自分の中に飼いならしていることを、目の前に見せ付けられた気がした。

普通という人間が存在すれば、必ず異常な人間もいる。

そうではなくて。

人が誰でも異常な面を背負っているということ。

見渡す限り、視界に入る全ての人間が、異常者。

殺人事件の犯人は、結局端から見て普通と思われているような、人間なのかもしれない。

それを見つけ出すのは、難しいのだけれど。

一通りの動機を述べた後、福原はひとことだけ告げて、教室を出て行った。

「・・・君とは、もう顔を合わせることもないだろうね」

何を思って、その最後の言葉を搾り出したのかはわからない。け

れど、その言葉通り、福原忍足とはもう二度と、話すことはなかった。

そう、二度と。

その先に、俺は予想もしなかった結末を迎えることとなる。

* * *

学校から戻ったとき、既に日は暮れて、夜が訪れていた。

古びた鍵穴に差し込み、かちりという音がして、ドアノブがゆっくり回った。

変えなければ。

福原は思う。いくばくか年季のはいつたサビが、やたら目に付く。そのとき、彼は勝手口のことについて、さして関心を持たなかった。そこは鍵すらも取り付けていなかったのだが、普段から台所に立って、まな板を使うことのない人間だった。したがって、そのことはすっかり意識の外に追いやられていた。

置き去りにされた問題とはよそに、福原はこれからどうしようか、どう生きていくべきかを、それとなく描いていた。

公にされていないとはいえ、窃盗事件を企て、実行に移した人間だと、一人の生徒に暴かれてしまったのだ。今はただ、物を奪うことへの関心、欲求はすっかり萎え、代わりに教師という立場を捨て、新たな人生を始めよう、ということを計画しはじめていた。

それはなぜか。やはりあの生徒に、担任として顔を向けることができないのか、それとも、ほかに理由があるのか。今となつては、それを推し量ることはできない。

ただ、この日、この夜、彼の決心はとうに根を張って揺らぐことはなかった。

辞表を提出しよう。

そう考え、部屋に向かうために、廊下を曲がった時だった。

気が付くと、福原は床に這い蹲り、生暖かいものがつとに頬をくすぐる。

何故だろう？

もう一度起き上がるうとする、けれど、頭が、眼球が、ヒステリ―を起こしたかのように、揺れて止まらない。意識すらも朦朧としてる。

また、突っ伏した。

霞んだ目で、背後を振り返った。

そこにいたのは、かろうじて黒い服だとわかるような人物が、一人。暗闇に溶け込むように、佇んでいた。そこにぼんやりと、白く浮かぶ、奇妙な仮面。表面が十文字にかたどられている。その奥の表情は、掴むことはできない。

そのとき福原はあるものに目を向けた。

右手に、黒っぽい液体がしたたる、太い棒のようなものだった。

彼は悟った、自分は背後からバットのようなもので、頭を殴られたのだと。

眼球がぐるぐると回り、焦点が合わず、吐き気すら催す。

このままでは危険なことすらも分かっていたのに、一刻も早く逃げなくてはならないのに、手足をばたつかせることくらいしかできない。

「・・・・・・・・」
背後の人間は、無言で立っていた。ゆっくりと、太い棒を振り上げる。

そのとき、福原は廊下の奥に目をやった。

勝手口から、ゆるやかに風が吹き付けてくる。顔に当たったところで、福原は気付いた。

台所の勝手口の鍵、壊れていたなと。

そして、思った。

彼女に言われたとおりに、つければよかったものを、と
思った。

そういえば、彼女も、もういないのだな、と。
氷室美月、という名前だった。

彼女の弟は、今どうしているだろうか

振り下ろした鉄の棒が、頭に直撃した。

十月十一日、未明、木造住宅から火災が発生。

火の勢いは強く、近くの住民は一時避難する。

火は一時間ほどで消し止められたものの、焼け跡の中から男性一人の遺体が発見される。

警察はその遺体を、福原忍足本人と確認する

十月十五日

焼け跡の周囲には、今日も人だかりができていた。俺もそれにもれず、中の様子をじっと見つめていた。

「君か」

横から声をかけてくるのは、呉竹だ。

「・・・現場主任っスか？」

「そんなところだ」ふう、と軽く息をついた。

ざわざわと騒がしい人の声。せわしく動き回る青い服を着た鑑識の姿に、俺はちよつと感動をした。本物を見たのは初めてなので、
餓鬼っぽいな、俺。

「大変だろう。君の学校の教師が殺害されたのだから」

ふと、呉竹が聞いた。

「しかも、その教師の家から、盗難品と思しき物が発見された・・・
ほぼ窃盗事件の犯人として間違いないだろう。まあ、被疑者死亡の
不起訴処分がいいところだがな。それに・・・火がついたような状
態なのは、学校側も、同じことだろう」

焼け跡を前に言う呉竹。

「ま、そうですね。あまり口には言えないですけど、酷い状況ですよ」

俺のクラスの担任が一夜にして殺されたというのだ。まとももへったくれない。今日から三村が担任の代行を務めることになったものの、しばらく授業を行えるような状態ではないのが、現状だった。

月曜日なのにこうして、早く帰ることになったのも、それが大きな要素を占めている。

「君は、このことにどう思う?」

「別に・・・なんとも言えない。正直、まだ気持ちの整理がついてないってことで」

「ふうむ、そうか」 呉竹は特に問い直すことはなかった。

戸惑っていると言えば、あながち間違っていない。

担任が窃盗事件の犯人で、それを知ったかと思えば、その男がすぐに殺害されたのだ。俺ですらこうなのだから、もつと言えば、他の奴らは驚きを隠せない。むしろ、学校全体に、動揺が、津波のごとく広がり、俺以外の生徒や教師を押しつぶしている。窃盗事件の犯人だなんて、すぐに信じられるわけがないさ。

けれど、信じたところで、今度は誰も信用できなくなるだけだ。

他の奴らが犯罪者か何かに、見えてくるわけだ。

それに殺人事件の犯人が捕まっていないというのだから、さらに不信感を煽り立てる。

だから、どうしようもないというのだ。

「どんなことになってます?」

何か話題を変えようと思って、俺は尋ねた。

「新聞でもわかるとおり、この火災は放火の疑いが高い。おそらく放火殺人といったところだろう」

相も変わらず情報を漏らす呉竹。いまさら気にすることもなかった。

「殺人・・・後頭部強打の後、放火。すさまじいですね。なんかこう、恨みでもあるみたい」

「そうだろうか？ 私は、その意見には同意できない」
「え？」

「・・・この事件は、半月前に起きた殺害事件の状況と同列に処すべきだというのが、もっぱら私の意見だ。当然、今のところつなかりはないがね」

「・・・」

俺も、そういう考えだ。

殺害した犯人は、間違いなく奴だと、この事件をはじめて知った時に理解した。

「・・・そういえば、呉竹さん。去年の時も、これと同じ手口でしたね」

「む？ 君も、気付いたか」

呉竹は感心したように細長く切れた目を見開いた。

「俺も、近くで起きたあの事件に興味があつて」

そう言つて俺は笑つた。もちろん、この場をつくろうつための笑みだが。

「・・・確かにな。けれど、それを知つたところで、もう一年も前の話だ。今更することはない」

「とかいって、本当は違うでしょ」

気まぐれに俺は言つた。

「もちろんだ」

「やっぱり」

「ただ、君には知る必要のないことだがね」そう言つてふいと背を向けた。

近くにいた刑事が、呉竹に敬礼した。その後何か喋っていたものの、むやみに近づくことはできない。

そのまま、青いテントの奥に消えていった。
帰ろう。

押し寄せる人に嫌気がさし、俺がそう思つたときだった。

「あ、いた！」

高らかな声が、俺の耳に届いた。

声のしたほうを見ると、人だかりの外に、別の高校の制服を着た女の子が一人。

「やっと見つけたよ、凧。久しぶり」

そういって、女の子は朗らかに微笑んだ。

ただ俺は困惑するしかなかった。

「ウチのこと、覚えてない？ ほら、中学の時一緒だったでしょ」

「・・・そうだったっけ？」

女の子はやれやれと、わざとらしく手を広げた。

「・・・？」

それでも思い出せない。この女の子に関して知りえている情報といえば、少し。十月一日にバスの中で、屈強な男達をかき分けて降りたのと、十月十日に、これもまたバスの中で俺を見ていたのと。そのくらいだろう。

シヨートカットの薄茶色の髪は、先端になるほど緩やかにカールしている。おそらくパーマではなく元々そうなのだろう。どこことなく幼さが残る小柄な体格の割に、肩にかけているカバンは見た目どこか重さを感じる。黒いブレザーに、同じ色のスカート。さて、主な外見の特徴を述べたところで、こいつは誰だろうか。

「・・・どした？」

女の子は首をかしげた。

「・・・はつきり言おう。うん、この際恥を捨てて、聞こう」

「へ？ 何言ってるの」

「お前、誰？」

「だれって、あたしだよ」

「ごめん、知らない」

しょうがないね、と女の子はがっくし、肩を落とす。

「クロキだよ。クロキイズミ」

漢字は、と聞く。

「文字通り、黒い木に、温泉の、泉。だから、黒木泉。思い出した？」

全然。

けれど、遠い昔、その文字を、どこかで見た。でもその記憶自体あやふやで、実際はほとんど覚えていないといってもいいだろう。

「・・・悪い」

「あれ？」

ただごとではない、と感じ始めていたのだろうか。泉は怪訝そうな顔を向ける。

「・・・凧和也、だよ、アンタ」

「そうだよ」

自分の名前くらい知っている。俺はそこまで重症ではない。

「ね、中学のこと、覚えてる？」

「いつのこと？」

「アタシが凧と一緒にクラスだった、中三のときのこと」

「どうだろう？」

去年のことだ。仮にも、今年の三月までは俺も中学生という社会的な部類に組み入れられていたのだから。忘れるはずがない。

「あまり話してない奴なら、覚えてないかもね」

「む」と口を真一文字に結んで、ぶすつとしている。機嫌を悪くしたようだ。

「うーん、不動とかとよくつるんでたよね、確かにさ。じゃ、同じクラスにいた人全員、アイウエオ順で言ってみれば？」

「そう言われても、とっさにはできない」

「歩いてみるといいかもね。ここ、何だか焦げ臭いし」

彼女が指摘したとおり、ここはなんといっても火事のあったところだ。悪臭とまでは行かないが、鼻につく。ならばここを離れるべきだ。

と近くの公園で、かつての級友を諳んじる事に。

なんだよ、それ。

奇妙に感じながらもぎっくばらんに一人ずつ言ってみる、すると「ストップ」

と鶴の一声。

「あ、言ったね。黒木って」

そこに来てようやく、古き良き中学の思い出が甦ってきた。といつても、今のところ二つか三つくらいのものだけだ。

でも、彼女の顔は、そこには見えない。

「……」

まだ思い出せないとわかると、今度は本当にだんまりを決め込んだ。

と思いきや、五秒ほどして

「……ねえ、話変わるけどさ」

唐突に言った。

「そういえばこの前、キミあの家に入ってたよね」

「へ？」

「ほら、あの焼けちゃった家。人が中で黒焦げになったでしょ」

「……」

見たのだろうか。

「なんか怪しいなって思ったんだよね。玄関から入るのかと思えば、横道に入って、それっきりだし……もしかして、ひとんちに勝手に入ったとか？」

はいそうです。

「いや、別人でしょ」

「嘘。その制服着てて言い訳しないで」

「……」

なんなのだろう、この人。

それでも言い逃れできる状況じゃないことは確かだけだ。

「……俺だよ、そうだよ、俺だ」

「やっぱり！」

信じられないとも言いたげに、眉をひそめる。

「何でそんなことしたの？　もしかして……放火したのも……？」

「知らねえよ」

「知らないってねアンタ。犯罪行為だよ？ こっちがわけわかんないよ」

「だから違うっての」

そこから五分ほど必死こいて説明する俺。当然のことながら即席の嘘にはえてして、矛盾を孕むものだ。こうして自爆の後この人に追い詰められていくことになって、とうとう論破され、言い負かされてしまった。

仕方のないことだけども。

どうやら、経緯を説明するしかないのだろうか。

「ね、どうして？」

俺は判断に悩んだ。住居侵入の理由とか、それに関わる事件とか、全てを、俺の知らないこの人に話すべきか、黙りとおして、何も喋らないか。逃げてもしかたないので、とりあえずこの二つの選択肢から選ぶことになるのだが、俺は後者に賛成する。「事件」のことはあくまで、誰にも話さないつもりでいるし、無関係な奴にまで口を滑らせてもいいような軽いことではない。けれどこのまま黙っていても、俺は空き巣を働いたと認めてしまったわけだし、これ以上隠し通す意味もない。むしろ俺の立場が悪くなるだけだ。

だから、俺は渋々、決めざるを得なかった。

一から十まで、話すことを。

そこにきて俺は観念した。

自分に非があるとはいえ、最悪なことには変わりはない。

「日記？」

彼女は、突然その言葉が出てきたことに、首をかしげた。

「それが、一番の理由？ ひとつちに入るまでのことがあった、理由？」

「ああそうだよ」

「ねえ、その日記ってどんなの？」彼女は言った。おそらく彼女の頭には、日記という単語からとてつもないイメージが出来上がっていることだろう。が、あの白い手帳が、別段めずらしいわけでもない。

「俺の家にある」

「なら見せてよ」

やはりこうなるか。

「・・・見たいなら、来れば？」

「うん、気になる」

あっさり、うなずいてしまった。

しょうがない、面倒でも話すことにするか。

* * *

そして、俺はこの黒木という知らない奴に、「事件」のことについて事細かに話した。

随分時間がかかったのだけれど、それでも足りないくらいだ。

この後の展開は、先に述べたとおりだ。日記を手に入れたことから続く、突拍子もない話。

俺が今まで体験したことを、若干の補足を加えて、説明したつもりなのだけれど、やはり黒木は納得がいかない様子。

そして俺も、彼女がどういう人物なのか忘れてしまっている。実はこれ、もっぱら俺のほうに原因があるのだけれど、そのことはひとまず横に置くとしよう。

物語はこれから、「現在」に移る。

最後のほうでまだ伝えなかったこともあるけど、肝心なことを話さなかったのだけど、とりあえず、回想はここまでにしよう。

十月十五日。

それが、現在俺の周りを取り巻く時間だ。

凝り固まった体を反転させる。すると、窓の外が地の色を出したように、一面に黒く塗りつぶされていた。

それまでは確かに、青があつたり、あるいは薄汚れた白いシャツのような雲に包まれていたり、ともかく色があるのだけれど、夜はそれより、はつきりとしている。純粹な黒に囲まれているから、月は存在感を放つ。昼に見える月が目立たないのは、そのせいだろう。ともかく俺は、もう一度捻った体を戻し、黒木泉と向きを同じにした。

「も一つ気になるんだけどさ」彼女は切り出した。

「夙って、事件を解決する気持ち、ある？」

どうして、と俺は聞く。

「話としては、何となく大変なんだなって、わかるんだ。けど、その肝心のこと、どう考えてるのかって」

言葉を途切れ途切れにさせながら選ぶ。その様子に、少し距離を置いた物言いだと、俺はつと思う。

当然のことながら、「事件」は解決しなくちゃいけないものだ。

俺が警察に頼らない方法で、自分の力だけで、犯人を割り出さなくてはいけない。

けれどそれは、何のために？

おそらく、彼女はその部分を訪ねたのだろう。話を聞いただけじゃ、想像しがたい、曖昧模糊なところだから。

その答えは、言ってみれば、好奇心だ。

強制的に、解決しなきゃいけないのではなく、俺が望んだことで、退屈な生活よりも、興味を引かれたことだから、真実を知りたいと思っただけだ。

「……キミってそういうところ、昔から変だよ」

「そう？ 俺は不思議に思わないけど」

「まあそれ、私も同じかな」ふぶん、と鼻を得意げに鳴らした。俺は改めて、この人の人間性を割り出してみるつもりはないけれど、少しは気になるというもの。けれどそのうち思い出すだろうと信じて、無駄なことを省こうとも考える。全ては俺の記憶が、芯が通ったようにしつかりしていればいいのだろうが、実際は何も憶えちゃいない。

この原因は、どこから来るのか。

明らかに記憶障害ともいえる事態に、それでも俺は驚きはしない。驚いたところで、対処の仕方、日記を拾うずっと前から分かってきたことだし、考えることでもなかった。

「風？」ふと、泉が口を開いた。「まだ、思い出せない？」

「ん、まーね」

「暢気だね」口先尖らせた彼女は、どつかりとベッドに腰掛けたままだ。

「予想は、あったからね。俺の中で、どこかの記憶がブチ壊されるだろうなってさ。それが、アンタに関する記憶だった。それだけだよ」

泉は暫く、顎を引き、さして綺麗だとも思えない床を、ぼおつと見ていた。今しがた俺が言ったことを、ひっくるめて飲み込めない。そんな気持ちを抱いているように、不可解そうな顔で、俺に振り向いた。

「どづいつこと？」

泉は尋ねた。

「そういえば、言ってなかったな」俺は窓を離れて、再びイスに腰掛けた。

「予想はあったんだ・・・副作用がきたんだなって」

それを、ひとことで表わすのなら、至極簡単なことだ。

記憶破壊。

人の記憶をのぞくということとは、本来人間のできる能力じゃない。ましてや生身の高校生に、超能力を使えるなんてことは滑稽なこと甚だしい。

「ただ、本当にできてしまうのだ。」

「いとも簡単に」

それがどんなに恐ろしいことか、俺は知っている。足の長さに合わないシューズを履いてしまうと、靴擦れを起こして、かえって足を痛めてしまうのと、それは似ているのかもしれない。けれど、もっと状況は悲惨だ。

人の力を遥かに超えた能力だからこそ、起こる副作用も、それに比例する。

人の記憶を覗ける代償として、俺は「自分の記憶をばらばらに壊してしまう」のだ。

忘れるのではない。ちょっとしたことで、破壊され、こなこなに砕かれてしまうのだ。

俺がむやみやたらと人の記憶を覗かないのには、こうした理由がある。

もちろん、どの程度までなら副作用がおきないか、長く付き合ってきたからこそ心得てはいる。けれど、その「憶えているという記憶」すらも、失う可能性だってあるのだ。

その瞬間に、俺という人間はなくなってしまう。今まで自分を支えてきた過去が、気付くと跡形もなく壊れてしまう。

その先は、どうなるのだろう。

「ま、むやみやたらに使わなければ、いいだけの話。裏を返せば多用しなきゃ、どうってことはない」

俺は説明を加えた。あくまでも客観的に、自分の覚えている体験をもとに、細かに話す。けれど、泉はさして驚かなかった。逆に、はあと溜息をついて、すっかり感心したような面持ちだった。

「・・・わかった」

泉は微笑んだ。

「さっきから話聞いてて、何で片っ端から記憶を見て探さないのかわかって、思ってた。・・・そういうことなんだね」

暴論になるけど、もし殺人事件の犯人が学校内にいるのなら、学校中の人間の記憶をしらみつぶしに見れば、済む。けれど、能力を多用すると、俺の記憶が壊されてしまう。

したくてもできないのだ。制約を抱えている限り。

けれど、先程も述べたとおり、少しくらいなら、何事も起きない。

「じゃあ切り札と考えるべきだね。いざという時以外に、使わない」

「まあそうなるね」

俺は答えた。

ともあれ、「事件」を解決しようとする、どうしてもその概要を知らなければならぬ。何が起きたか、整理しなければ、糸口はつかめないだろう。

「結構大変なんだね。色々することがあって」

回想を話し終えた時に出てきた、泉の最初の言葉は、むしろねぎらいのようなものだった。

「どうかな？ 実のところ、俺は何もしていないけど」

「何それ」

けたけたと頬を弾ませて笑う。だけど俺としては、一ヶ月手をこまねいていることしかできなかったといっている。

「俺は元々、部外者だからね」俺はそう言った。

「うん。だけど、事件の記憶を見て、被害者のことを知って、犯人に襲われて、イズミさんだけ？ その人にも知り合って。もう、部外者って感じじゃないよ」

「裏を返せば、俺はそれだけのこと」俺は手元にある日記をちらと見た。白い手帳も、確かに氷室のものだ。しかし、

「被害者にしたって、表向きには焼死と扱われている。殺人事件なら、もう少し事件についての詳しい情報が、それが偽かどうかは別として、流れてくる。しかし、一年も前に起きた、事故だ。それで片付けられた以上、他に彼女のことを知りようがないってことだ」

「日記を見ればいいじゃん」

「それがさ、大した事が書かれていないんだ。まるで、どうでもいい話ばかり。今日は雨が降っていました・・・誰でも書けそうなことを、細々とね」

ふうん、と泉は日記を手に取り、ぱらぱらとめくる。途中、二枚のページがふわりと浮いて、下に落ちた。すぐさま彼女は拾って、それにも目を向けた。やがて、誰かさんの溜息が部屋中に洩れた。

「あてにならないね。これじゃ、この人のことなんにもわかんない」
「だろ？」

俺はわざと両手を天井に向けた。けれどそれは、心の底から示した身振りでもあった。

「じゃあ他に、調べることってできない？」

「さつきも言ったろ？ 事故として扱われているから、事件として調べるには無理があるって。しかも、隣近所があるだろ？ 俺も片端から訪ね歩いてみたが、逆に怪しまれて終わったよ・・・警察じゃないしさ」

「警察に頼らないの？」

「それはしたくない」

「ならなんで？ イズミさんも言ってたけど、日記がここにあるんだし、それだけで事件があつたっていう証拠になるんでしょ？」

俺は暫く、その理由を考えていた。そこにも、原因は俺にあつたのだが、口に出すのも馬鹿らしく感じられた。けれど、補足として言うべきだ。その意見が、自分の中で通った。反対する理由も、別段あるわけではなかったから。

「警察がもし・・・もし事件のことを掘り返して、犯人が絞られれば、面白いだろうね」

「じゃあさ・・・」と更に言葉を次ごととするのを、手で制止した。「けど、その可能性は低い。第一、現場となつた氷室の家が、もう取り壊されて跡形もないからね。そこに昔あつた家の中とか、調べようがないんだ。それに、仮に犯人が捕まつたとしても、一年たつて証拠もないだろうし。あのイズミも犯人の顔を見たわけじゃないし、この日記にしたって、犯人に繋がる痕跡なんてあるはずもない。あつたとしたら、とつくの昔に犯人がイズミを殺すなんかして、奪い返そうとするだろうさ・・・俺としては、何よりも犯人と会つてみたいというのもあるけど、結局俺達だけで探さなきゃいけないんだよ」

むっ、と黙り込む。彼女なりに理解はしたようだが、納得できな

いといった顔をする。俺にも泉の本心はわからないけれど、言いたいことがのど元から出てこない、といった様子だった。

「犠牲者、増えるかもね」

俺はひとまず自分の考えを続けて話す。むしろその方法が早く事が済みそうな雰囲気だったから。

「そう、店主が、教師が、それぞれ殺された。このまま犯人が捕まらなければ、俺が奴を追い詰めなければいけない。それができなければ、最悪俺が殺されかねないだろうね」

「あ、うん。それ、ウチも思った」

泉は語気を強めて言った。

「・・・今のところ、二人のつながりはない。店主のほうは、氷室美月というつながりがあった。しかし、福原にはそれがない・・・今はね」

「何、今はって」口をへの字に曲げて、意味を問いただす。俺は答えた。

「可能性さ」俺は再び、日記に視線を戻した。「切り離されたペーシの中、八月九日、十日の日記に、それらしき人物の記述がある。

具体的には記されていないけど、そこに書かれている友人の高校教師。そいつが福原だと思うんだ」

「ああ、これ」といつて一枚、何気なく取り出して目を向ける。

「でも、スイソクでしょ、それって」

もちろん、と答えた上で、加える。

「けれどそうすると、面白いんだ。福原と氷室とはつながりがある。すると、犯人が命を狙う人間のことを、絞れるんじゃないかって、そう考えることもあってさ」

無論、そこに根拠はあるはずもない。けれど、可能性としては否定できないだろう。犯人が「選ぶ」人間。次に、殺されるであろう人間。それを予測できるかどうかは別として。

もともと、その前に犠牲者が出ないことがベストなのだが。

それは俺は切に願うことでもあった。くだらないことで命を落と

してしまうのには、少なからず自分にも責があるのだから。

やはり警察の手に委ねるか、自分で何とかするか。

どちらに転んでも、ハッピーエンドは既に存在しない。

「ほんとに・・・からまった紐みたいに、身動きが取れない」

それを俺は、机に放り出されていた紐に喩えて表現した。

「いや・・・何をしたらいいか、わかんないのかな」

「イズミさんから何か言っただけなの？」

知らん、と吐き捨てる。「第一向こうは非通知で俺に電話して来るんだ。こっちからは接触できないし、メールだったら違うけど、電話だし」

「考えてるね」感心したように、ほおと溜息をつく。

「アイツが、自分のことを何も話してくれないから、困るんだ。いや、情報制限と形容したほうが、しっくりくる」

「・・・もどかしそうだね」

俺は何も答えなかった。

この一月、特に十月に入って以降、俺は殆ど何もできなかった。

「事件」に関する情報が探しようがない上に、関係者はほとんど沈黙を貫くばかり。被害者が増えつつあるのに、俺は無力さを感じ始めていた。

手詰まりなのだ。

嵐の夜、あの家では何が起きていたのか、俺はまだその外形すら知らない。

ジグソーパズルにはめ込まれているのは、まだ四隅と真ん中だけで、肝心なところは抑えてあるけれど、完成図は予想できない。誰かが、まだピースの大部分を持ち去ったままだから。

大きな障害はそこにあった。イズミが、全てを話してくれないことが。

「記憶」の中で、彼女は何を見たのか。
そして、何を知ったのか。

記憶から、氷室美月の死後のことを知ることはできない。イズミが犯人と対峙し、そこで何があったのか。「事件」の核心にもせまれるだけに、彼女がそれを話そうとしない。なぜだろうか？

「毛嫌いしてるのか？」

部屋にいる少女は呟いた。

「俺を？」

「うん、だって最初会った時、そんな風に、事件と瓜を関わらせようとしなかったでしょ。前に犯人とケンカしてたから、無理な話だったけど」

「大体そんなところだろうね。けれど、俺はそうは思わない。つか好き嫌いの話じゃないと思うよ」

じゃあなにと聞く。俺は暫く答えに迷う。

ここは「事件」にまつわる、大きな謎だった。誰にも真実を隠し、他人に話すことを拒もうとする。殺されるかもしれないのに、何が彼女をそこへ駆り立てているのだろう。死ぬことへの恐怖を感じてはいながらも、それに勝る何か、今の彼女を作っているとしたら？

少し、というよりあまりにも抽象的な思考だったので、俺は途中で投げ出した。

「・・・やっぱわかんないかあ」

残念そうだったのは、黒木泉も同じだった。俺に期待していたのだろうか、と勘繰る。

「いつかわかるのかな？」

「彼女が自分から話してくれない限り、無理だとは思つ」俺はそう言い切った。

時計をしばらく見ていなかったの、現在の時刻がどうなっているのか見当もつかない。袖に隠れていた腕時計を見やると、ああ成程な、と感じることはあった。長い話をしたものだから、それだけ多くの時間を費やしたことになる。

俺はそれをベッドに腰掛ける彼女に見せた。すると、あどけなさの強く残る顔がみるみる変わってゆく。そして、叫んだ。

「見たかった番組終わってるじゃん！」

左様ですかと、俺は歯牙にもかけない。一方で彼女は、携帯をとりだして何処かへと連絡するのだろうか、ボタンを素早く押す。

この部屋は生憎住宅街にあつて文字通り、静寂に包まれている。だから会話の内容をとどこどころ聞き取ることができた。けれど、途中で番組の録画を母親に頼んでいると知り、とたんに興味を失った。

数分後、電話を切った泉は、そばに転がっていたカバンを手に取り、よいしょ、と立ち上がった。

「帰る？」

俺は言った。

うん、とうなずく。

「お腹すいたし、夜怖いし」

餓鬼だな、と心の中で呟く。けれど、夜は犯人が徘徊することもあるだろうし、あながち間違ったことを言っただけではない。

「それにしてもさ、よく俺ん話に付き合ってくれるよな」

「そりゃ、殺人だなんて言葉でも出たら気になるでしょ」と答える泉。そこに特別な感情ももっていなかった。

ただ純粹に、「事件」を知りたかっただけ、なのだろう。

そこに、俺と共通する彼女の人柄のようなものが、垣間見える気がする。俺が話したことは、殺人も含めて、全て事実なのに、彼女はそれをごく普通に受け入れる。謎めいているのは、この人も同じだろう。

階段をとんとん、足元に気をつけて下りきつたところで、泉が振り返った。

その先には俺が、一人後ろに残っていた。

「危険って、感じない？」

彼女は唐突にそう言った。危険というのは、どのことが？

「・・・事件のこととか」

「漠然としてるね」俺はそばにあったスイッチに手をかけて、一階廊下の電気をつけた。

「どうなの？」

「・・・感じてはいたけど、今はそうでもない。今は、それほど命の危険つてのは、ないかな」

俺は本心に従うように、呟いた。

「今はって・・・いつから？」

「そうだな、やっぱ、俺が福原の家に立ち入った時」

十月十日。俺は福原の家への侵入を試みた。

そこで俺は、奴と再び出会っている。姿こそ見なかったけれど、犯人が持っているはずの日記のページが、勝手口の残されていた。間違いなく奴は、俺の気配に気付いていただろうし、わざわざ勝手口にいたというのも、何となくはうなずける。じゃあ、俺がそこで殺されたとすると、怪しむべきは誰だろう。福原？ 福原の家で起きた殺人事件だ。それに、殺された俺は空き巣まがいのことをしているとくる。それでなくとも一人でいたのだから、少なくとも、犯人には殺すチャンスも、あつただろう。

それを、みすみす過ごしたというのだろうか。

もう一度考えてみよう。

俺はここにいる。

生きている。

それは紛れもない事実なのだ。事件と関わって、一月だろうか。殺されない理由が何かしらなくては、説明なんて到底つかない。

つきようがない。

奴を信じているのではない。

ただ、何か合理的ではないのだ。

もちろん当の本人が助かっているのだから、とやかく言っても無駄なことだけど、いずれはその謎にぶち当たることが、あるのだろう。

それは、ただの推測だ。

ただの、ね。

とまれ、死の危険というものは、俺の中でいくらか和らいでいた。

心に思ったことを、声に変換して話した。それを、泉はただ、聞いていた。

「危険だとは思っけどさ」

俺は最後にそう言った。玄関のスイッチを入れ、足元を見やすいように明るくする。

「下、気をつけるよ」と声をかける。知らない人なのに、なぜか頭の中がそれを否定も肯定もしない。そのかわりに、この人に対して諭えようのない親近感を抱えていた。

強いて言葉にするのならば、それは赤ん坊の頃に一度会っただけの親戚に、高校生になってから再会したときの、印象に似ている。ひどく懐かしいような、それでも覚えていない。

彼女は自分の靴を見つけると、黒い革靴に足をうずもらせた。

「しっかし、久しぶりに会ったらさ、大変なことに巻き込まれて、アンタも運が悪いね」

「そう？ 確かに日記を盗まれたりしたけど、今は別に」

「ふーん」とだけ、言葉にする。

「じゃ、死ぬなよ坊主」

誰が坊主だ。

「あはは、冗談」

本当によくわからない女の子だ、この人。

この一日で、すっかり調子が狂ってしまった。

「・・・ま、またなんかあったらウチに連絡しなよ。って、まだアドレス持ってる？」

「さっき確認したら、二、三個知らない奴のアドレスの中にあつた。黒木泉って名前の入つたやつ」

携帯を取り出して見せる。それを見て、

「うん、ちゃんと思ひ出すんだよ！」

最後にそう言って、足早に玄関を出て行った。

こうして、俺の不思議な一日は、やっと終わった。

45 日記・1 (10・20)

* * *

八月一日

新しく日記をつけ始めようと心がける。
けれど、怠惰な自分にそれが続くかというところ、些か心もとない。

前の日記帳は、大きなノートを使っていたため、今回は小さなものを選んだ。

あまり書くことに時間を割きたくはないので。

だから、少しばかり文章も乱れることもあるだろうし、品格を疑うような題材に足をつっ込むこともある。

あとこれだけは言わせてもらおう。

私は、続けることに何の意義も感じない、そういう人間だ。

日記をサボるときの口実になるだろうか。

二日

(小説の話。作家のことだけを書き連ねている)

三日

(記述なし)

四日

(一日の献立を書き留めている。それ以外は記述なし)

五日

家族はどうしているだろうか。

最近、弟とは連絡がつかない。

午後になって雨が降り始める。

傘を持ってはいたものの、途中で強風にあおられて、折れ曲がってしまふ。

結局、同じことなんだ。

台風が近づいて来ているというし、その前には、人は無力なものだ。

無気力極まりない私がいうのも、おこがましいことだが。

六日

(喫茶店の話。氷室美月の友人についての記述)

七日から、十四日の記述は、ページそのものが欠けている。また、十五日は日付のみ。

欠けたページは、いくつか見つかっている。

ページその一

九日

(友人と再会した話。ここに書かれている「友人」とは、福原のこと)

十日

(その続き)

ページその二

七日

視力がこのところ弱まっている。

原因はというと、どうも仕事疲れらしい。うだる暑さにさんざ悩まされた拳句、立ちくらみも激しい今日この頃。夏休みなのに、午前は夏期講習、午後はプリント作成等の仕事。今日から暫く、この

生活スタイルが続く。

帰省するのは、いつのことやら。

(この後、裏ページに講習の問題作成のためと思われるメモが残されている。日付は八日とあるが、八日の記事はない)

* * *

俺は日記を閉じ、引き出しの中にしまいこんだ。

取り付けたばかりの鍵を、そつと差込む。簡単には開かないのを確認し、部屋を出た。

思うに、今俺が過ごす日常は、砂だ。

手にとって握めないから、ただぼつと過ぎゆくのを静観するしかない。

だから、書き留めなくちゃと、危機感を抱く。

少しでも「あったこと」を保存するために。

記録、するために。

じゃあ何のために「日常を記録」する？

俺には、答えられない。

なぜなら、その人にしか解かり得ないからだ。

十月二十日・日曜日

丘の上は強く風が吹きすさぶ。まるでこの辺りだけ冬を迎えたように、寒い。とにかく、寒かった。

坂の上を半分ほど進んだところに、その空き地はあった。こちらもひどく寒々しい、何もない、寂寞とした風景だ。

茶色の地肌を足踏み入れる。しゃり、という音が出た。かまわずその空き地の真ん中にまで進む。

空き地の奥、つまり俺が今見ている方向には、緩やかな川が、遠くを流れていた。町を見渡すことのできる丘の上だから。けれど、流れてくる風は強い。というのも、周りには家が建っていて、ちょうどこの空き地が、川に向かう風の通り道になっているからだ。背後に当たる風に押されるように、更に空き地の奥に向かう。

仮のフェンスが敷かれていた。ここを越えてはならないという意味を表わしている。もちろん、越えたりはしない。下は崖だ。

つまり、この土地が急斜面の上に立っているのだ。大きな地震が起きれば、ひとたまりもなく崩れるだろう。

すると、背後に誰かの気配を感じた。

「誰かそこにいるのか？」

振り向くと、見知らぬ中年男性の姿があった。

「危ないぞ」

「・・・すみません」

俺はひとまず謝った。男はしわの多い顔を緩ませて、微笑む。

「なんだ、また君か」

どういう意味だろう、と考えてみる。

「最近しよっちゅう、この近所に尋ねてくる高校生がいるとは聞いていたが、君だろう？」

そこでようやく理解できた。つまり、俺は氷室美月という女性の素性を知りたくて、この近所を歩き回っていたのだ。現にこうして彼女の住んでいた場所に立っている。それを、男は俺だと思ったのだろう。

学校の帰りだし、制服を着たままだ。

「氷室さんのことを知りたいのかい？」

「ま、そんな感じです」俺は答えた。空き地の前に、木材が積み上げられている。その上に男は腰掛けていた。

「どうしてだい？」

俺は少し考えた。

「中学の時の知り合いの先生でしたから。亡くなったと聞いて、どうしてなのか、知りたくなって。まあ、大体のことは聞きましたけど」

嘘をついているわけではない。あながち間違ったことは言っていないかった。

確かに、彼女は俺の通っていた中学の教員だった。もともと、俺の担任ではなくて、顔も知らないけれども。

ただ、同じ年に、同じ中学にいた。それは、事実だった。

殺された店主も、そんなことを言っていた。けれどそれは、実は今日になって思い出したのだけれど。

「君の中学の教員？ 確か、神谷中学だったっけ」

はい、と答えた。神谷中学とは、この町の名前を冠した、地元の学校だ。

そして当然のことながら俺は、その学校を卒業している。それはつまり、神谷中学の卒業アルバムも持っている、ということだ。

氷室美月は、去年なくなったとされている。

だから、アルバムの中でも特別の扱いを受けて、写真と共に記載されていた。

俺はそこで初めて彼女の顔を見た。

けれど、別に懐かしいとも思わなかった。感慨はなかった。それは「記憶破壊」の影響で、覚えていないのだろう。

けれど、全く見知らぬ赤の他人ではなかった。俺と彼女とは、少しは面識があったのかもしれない。

「ここで火災が起きたというのは、知っているだろうね」

「はい。けど、詳しいことは俺もわかりません」

「そうかそれでこの近所を回り続けているのか」

男の言い方に、俺は疑問を覚えた。

「だが別に、事件じゃなかるうに。人が死んだとはいえ、火災事故に、どうして入れ込む？」

俺は答えに詰まった。

「・・・いや、聞き方を変えよう。もしかして、君はここで起きた火災事故を疑ってはいないかね」

「・・・」

その時、男は笑みに富んだ表情を、硬く引き締めた。

「疑うとは、また大層なことをいいますね」

「冗談を言っているつもりはないけれどね」

「じゃ、何ですか？ ほんとうはここで殺人事件が起きたとでも言う気ですか？」

「そっだよ事件だ」

俺は薄気味悪く感じた。この男には「事件」のことがばれている。直感的にそう悟った。

「根拠は？」

男は、ふつと笑った。

「見ていたんだよ。目撃者ってやつ」

「・・・」

「これでも近くの公園で、ホームレス生活を送る身でね。よくこの道を通るんだ・・・一つ、私の話を聞いてくれるとありがたいが、いいかな？」

「・・・どうして俺に？」

男はしばらくうーん、と、わざとらしく考える。

「君のほうがわかっているとは思うけど？」

さあ、どうでしょうね。

「はは、冗談だ。まあ、君とこうして話す機会が欲しかったのは、事実だ。君には悪いけどね」

男は頭を掻いた。

身なりの貧相なこの男は近所の公園に寝泊りしている。けれど日雇いにしては、裕福な生活を過ごしているとか。男は、去年の夏に起きた「事件」を、鮮明に覚えていた。

「これでも記憶力はいい。それに、あれは忘れたくてもできないこ

とだったからね」

その夜はにわか雨が降っていた。日雇いの仕事を終えて公園に戻ろうと、真夜中に人のいない道を駆ける。帰路を急いでいた。

やがて、雨が止んだ。あっという間に分厚い雲が消えて、月の光が辺りを照らす。

不意に男は立ち止まった。

氷室美月の家に、黒い影を目にした。

その影は明かりの灯っていない玄関から出て行く。やがて、男とは別の道から、何処かへと立ち去った。

おそらく雲が空を覆っていたのなら、気付かなかっただろうし、見えなかっただろう。が、とにかく目撃したことになる。

「・・・警察には言った。けど、この身なりじゃ、何を言っても聞き入れてくれなかったさ」

ただ、一人を除いて。

「呉竹、とか言ったな。この間、その刑事さんが尋ねてきたよ。もつとも、事故を覆せるほどのことでもないと言われたがね」

呉竹と聞いて、俺は納得した。

あの刑事は、警察内で唯一「事件」を疑う男だ。

「そう言われて、少しばかりがっくりしたな。・・・君は、どう思う？」

男は唐突に言った。

「事件だと思うか、火災事故だと思うか」

この男は、「事件」だと主張する。

それに俺は、正直に答えるか、否か。

俺の考えは、こうだ。

「事件っぽい、と思います」

別に日記の話を引き出されているのではないから、差し障りはな

い。

「そうか」

男は笑みをこぼした。

「・・・ソレを聞いて、もう一つだけ君に話したくなった」
なにが、と尋ねる。

男は答えた。

「・・・家から出てくる奴が、二人いたんだ。一人は黒服姿。それと、若い男だ」

若い男のほうに、先に家を出てきたという。

詳しく聞きだすと、どうやら男が見た黒い影というのは、その若い男だった。しばらくして、黒服の人間が出る。

隠れて、様子を窺っていた男は、不審に思っていた。

すると、黒服の人間は、これも若い男と同じ方向に行った。

「それで、しばらくして車の出る音が、聞こえた。ついさっきまで雨が降っていて、真夜中のことだから、きっと誰も気にしていないんだろうけど」

その五分後、どこからか火の手が上がる。

男はその時、先程の人影をいぶかしみながらも、公園に戻っていた。火の手を見るや否や、男は火の出る方向に向かう。見ると、そこは氷室美月の家だった。

そのとき既に、家は半壊していた。

恐ろしいほどの速度で、焼け落ちる。

「けど、誰も近くにはいなかったな」

男は急いで公園に戻った。公衆電話を探そうとするも、どこにも見当たらない。だが、

「そのうちに、サイレンの音が聞こえたからね。誰かが、通報した

のだろう。とにかく、もう一度ここに戻ったんだ。その時には、もう人だかりができていたがね」

火がようやく鎮火されたのは、空がうつすらとしらみがあった明け方だった。

だが氷室美月は、焼死体で発見された。

遺体の損傷の激しさは、崩れた木造に押しつぶされたものとして扱われた。実際に、遺体には、偶然折れた柱が脇腹に突き刺さっていた。

また、出火元は台所とされている。つまり、何らかの原因で引火した。

これも偶然か、台所と彼女の部屋は、隣りあわせだった。

他にも色々と、怪しむべきところはあるのだけれど、状況から、「事件」だとは認められなかった。

結局、うやむやになったまま、放火とも認められず、それは事故として処理された。

ただ呉竹はその事実疑問を覚えたまま、こうして今に至っている。

存在しない「事件」は、紐解いてみれば、単純だ。
完全な偶然でしかない。

もつとも、今更「事件」が事故か、証明することは、俺にはどうでもよかった。

空き地にいた男には悪いけど。

* * *

男の話では、犯人が、二人いたということになる。

俺の見た、黒服の犯人と、もう一人。

その「若い男」の正体は、誰なのか。

イズミはその男を知っているのだろうか？

と付け加えたところで、ひとまずその疑問は横に置くとしよう。

今、俺は氷室美月という人物を調べて、神谷中学を訪れていた。

神谷中学は、二つの校舎に分かれている。

もっぱら俺がいたクラスは第一校舎だった。しかし、中学生生活を通して、ほとんど第二校舎に行くことはなかった。

そういうこともあって、知り合いの先生も第一校舎にしかない。その中で、三年間同じ担任だった中原という男に、俺は会いに行つた。

「久しぶりだねえ」

がらんどうの教室に案内してくれた中原は、感慨深げに言った。

「別に、懐かしくもないと思いますけど。まだ卒業して半年だから・

・

「ははは、僕にとってはそうでもないよ」

陽気で人懐っこく話しかけるのは、相変わらずだ。彼は、どんな生徒でも一日で慣れてしまうという特技があった。だから俺は、ちつともこの人と再会を果たしたという気にはなれない。いいことなのだろうけれど。

「それにしても、久しぶりに会ったと思ったら、氷室のことをねえ・

・

「俺、よく知らないんですよね。けど、何となく気になって」

もちろんこれも嘘だ。

最近、正直な話をしたことがない。

「ま、いいけどね。ただ僕も、あの人とは少しばかり同じ仕事で顔を合わせたただけ。何せ、校舎が違うからね。僕は第一、あの人は第二の方だったから」

俺はひとまず、氷室の家族関係を尋ねた。中原は、快活に答えて

くれた。

「弟が一人、いるとは聞いているな。会った事はないけど」

「初耳ですね」

「はっは、あまり自分の身の上話なんてしない人だったからね」

俺は窓にもたれた。夕暮れ時の太陽を背に受けた格好だが、秋の日差しは程よく心地よい。やわらかな日差しを浴びて、少し冷えた体を温めていた。

「寒いな。冷房を消すか」

中原はそう言っつて、冷暖房のスイッチを止めた。教卓に戻って、イスに腰掛ける。

「で……どこまでいったかな？」

「弟の話ですよ」

「君の？」

「違います。ボケないで下さい」

「ははは、冗談だ気にするな」中原はまた、高らかに笑った。

ああ、こういう人だったなあ、と少し懐かしさを覚える。

誰に対しても、こんな感じだった。

俺でも、不動でも、黒木でも、真部でも、とにかく、誰でも。

黒木？

なぜ、その名前が出てきたのだろう。

「弟の名前、確か宗そうと言ったな。確か、あの人は五歳ほど年が離れていると聞いたな」

「……」

「聞いてるか？」

俺はふと、我に返った。

「はい」

「うん聞いてたか。えっと……どこまで話したっけ？」

「ボケてると日が暮れて帰れません」

「おいおい、折角久しぶりに会ったというのに、帰りたいたは随分冷たいね」

本心を暴露すれば、話だけ聞いて帰りたいたい。もっとも、それは相手に失礼なのだが。

「・・・ま、その辺りが君らしいというかね」

時間はかかったものの、できる限りの話は聞き出した。裏を返せば、それほど中身は薄かったのだけれど、整理しておこう。

氷室美月には弟がいる。

その弟は、今現在二十三歳。どこに住んでいるかは、さすがに中原の知らないところだ。

おそらくこれ以上は、他の教師も知らないことなのだろう。

「もう一度言うけど、身の上の話はしない人だったからね」
中原は苦笑した。

俺は中原に礼を告げて、第一校舎を出た。

ただ、ひとまず言わせてもらおうと、まだ殆どのがわかってないままだ。

氷室美月は、それほどに謎の多い人間だった、ということ。

近所づきあいも少なかつたらしく、彼女の知り合いと呼べる人も、おそらくは数えるほどだろう。

その中で、店主、福原忍足、中原。

このうちの二人は、殺害された。

今生きている知り合いは、ついさっき会っていた、中原しかいない。

俺の知る限りでは、の話だけだ。

だが、これでもし彼の身に何か起きたとしたら。

氷室美月の関係者が、犯人の狙う人間だ、ということになる。

酷い話だけれど、中原もそうなる可能性もあるのだ。

推測でしかないが。

当たっても空しいだけの推測だが。

ただ、日記には彼のことは、一行たりとも書かれていない。

殺害されていた二人は、なぜか日記の記述にあつたからね。

だからあの先生だけは殺されない、と信じたい。

学校を出て、大通りにたどり着く。一つずつ、自分の家までの道のりを思い出しながら、まずは信号を渡る。

氷室美月の弟。

彼は今、何をしているだろうか？

せめて、その人に会えないだろうか、と考えてみる。けれど、居場所も知らない自分には、無理なことだった。

呉竹なら、何か知っているのかもしれないけれど。

ただあの人は、たまにバスの中で鉢合わせする程度にしか、顔を見ない。

刑事という職業柄、仕方のないことかもしれないが。

数分ほどで、家に着いた。学校から帰る道は、まだ忘れてはいなかったようだ、胸をなでおろす。

暗中模索。

この状態がいつまで続くのか、俺にもまだわからない。

十月二十一日

「欠席です」

日直の天美が、声の調子を落としながら呟いた。

「そうですか、わかりました」

三村はそう言って出席簿に記入した。いまクラスの臨時担任を務めるのは、彼女だ。

「窃盗犯という汚名を残して、殺害された」福原に代わって。

見ると、憔悴しきったとも言つか、今すぐにも白旗を揚げたしまうような様子だった。

ここ数日の騒動で、何かが変わっていた。

その原因はもちろん、福原だ。

こういったときには、責任を負わされるのは学校側だ。窃盗犯が、教師だった。悪い冗談ではない、もう事実として残ってしまったの

だから、周囲がもつと賑やかになる。

だから、大半の生徒が欠席する。

一週間程経つて、ようやく騒ぎが収まるうとしていても、誰も座らないイスの数が減ることはなかった。

今日は、そんなある晴れた日の朝。

学園祭の取り決めを行っていた。

この騒ぎで、予定が少しばかり延びてしまったようだが、それでも残り一ヶ月を切っていた。

中止すればいいものを、と乗り気ではない人もいるようだけれど、俺はどっちでもいい。

無責任極まりないことだけれど。

学園祭の実行委員は、天美と藍園だった。

二人は欠席している生徒にも、学園祭当日に来てもらおうと言う。

「また学校に行こうって機会にもなるからね」

天美は軽く言った。けれど、クラス全員が来るかは、誰にも保障できないし、強制できるものでもない。要するに、言うことが無意味なのだ。

ただそれでも、この異常事態に何もしないわけにもいかない。

彼女なりに、考えて言ったことなのかもしれない。

とにかく、学園祭は全員参加だということを決めた。半ば、無理な注文かもしれないけど。

普段通りの授業だったとは言えない。けれども、何事もなく放課後に至った。

「委員長マンガ読まないで仕事してください」

図書委員の集まりも、このところ少ない。この日も貸し出し本のチェックをして終えた。

ちなみに委員としては、学園祭での活動はない。それが俺にとっではせめてもの救いだった。

面倒事は増えて欲しいものではないし、今はもめているクラスのこともあって、委員会の活動にかまけている暇はなかった。

「先生、終わりました」

「ご苦労さん、と普段通りのあいさつが返ってきた。」

図書委員の当番を終えた俺は、不動たちとも別れて、しばらく新聞の記事をあさっていた。

「帰っていいぞ?」

小田島の言葉にも耳を傾けない。それはというと、面白い記事を見つけたからだ。

「事件」の話ではない。ただの、猫の大量失踪のお話。

長々と綴られている文章を、一つ一つ目でなぞる。

何故これに関心を寄せてしまったのか、俺にもわからない。

けれども、偶然この古い記事を見つけて、書かれていた内容に、引かれた。

日付を見た。

一年前の、八月八日とあった。

帰り道、久しぶりに一人で帰ることになった俺は、停留所でバスを待たず、あるところに向かった。

オレンジがかかった空に染まる雲。どこからか昇りたつ月。けれど、時計はまだ五時半を過ぎたばかりだと主張する。

「日が落ちるの早え」

言葉に出さず、心の中で嘆いた。

「ここ」は見通しがきかないのだから、もう少し太陽に頑張ってもらわないと。

「遅かったね」

その場で呆けて突っ立っていると、暗い影が草むらの中から出て

きた。その手には、小さな懐中電灯が一つ、俺の足元に向けられていた。

「委員会で遅れてさ。行こうか」

俺は黒木泉に、そう告げた。

* * *

午後六時を、少しまわっていた。

そして俺達は今、河口沿いに位置する、ただ広だけの埋立地の入口にいた。

確かここ、半月ほど前にも来たはずだった。

十月に入った頃だ。

覚えているだろうか？

と、自分に問う。

「キミも来た事あるの？」

「一応ね」

「立ち入り禁止」と書かれたステッカーを見て、ふと思い出したのだけでも。

背後には、四斜線ほどの広さの道路が横たわって、その頭上には高速が走っている。俺達はその歩道の端っこにいて、金網に目を向けていた。

ここの街灯からあふれ出て、さらに目の前にある金網というフィルターを通った光だけが、金網の向こうの風景を照らしてくれる。その限界は、半径五メートル。あとは、残りわずかな空の光に頼るしかない。

「どっから入るの？」

金網に沿って歩く泉に、俺は尋ねた。

「えっと、この辺りなただけだね。入口」

風が来るのが遅いからだよ、と一言文句をつけて、声を上げた。

「あつた」

見ると、これもまた金網のドアが、線の細い外見を晒していた。対照的に、取っ手には金属製の鍵が備え付けられている。

「このカギ、壊れてるんだよ」

「・・・ムイミだな」

俺はせせら笑った。

空は蒼い。

槍のような風が、制服を貫いて体を冷やそうとする。暖かな場所を求めて、辺りを見回すけれど、土埃の舞うだけの大地に明かりはない。わかりきっていたことなので、俺も鞆から懐中電灯を一つ、手に持った。

あらかじめ持参したそれは、鈍い光を出した。

「向こうに倉庫みたいなのが見える？」

前を歩いていた泉は、足を止めて言った。ライトから目を離し、顔を上げた。

「大丈夫、見える。あの倉庫みたいな建物だろ？」

「そう。ウチがいつも行くところなんだ」

ふうん、とだけ付け加えて、二人ともまた歩き出す。草むらの囲う中、先に行く泉のライトは、足元だけを照らし続けている。何のためかとたずねると、地肌の出てる道を進んでるだけだという。

「雑草に足をとられると危ないからねえ」

表情は暗くてよくわからないけど、彼女は朗らかにそう言った。

空は黒ずみ、濁る。

暗闇の中で慎重に進むほど、その速度は比例して緩くなる。自分が牛にでも成り代わったのだと仮定して、歩幅を狭めて歩いていると、唐突に泉が言った。

「人の記憶、見えるんだよね」

「・・・急に、なに？」

「ほら、この間の話」と、後ろにいた俺に振り返った。「日記を拾

つてから色々ありました云々って話してくれた時にさ、言ったじゃん。記憶を見る力があるって」

「ああ、それが？」

「・・・あの話、最初は信じきれなかったんだよねえ。いきなしそんなこと言われても、やっぱ、なんていうか、それ無理あるでしょってね」

それが普通だと思うけど、と自嘲する。

「でもアンタ、あからさまな嘘はつくような人じゃなかったし。そんな話も、世の中に一つぐらいあっていいかなって思ってたさ」

「・・・珍しい人だね。そんな簡単に、人の話を信じるなんてさ」

自分の話したことだけれど、わざとらしく食って掛かる。

俺が泉だったら、記憶を覗くなんて誰が信じるだろうかと嘲る。

馬鹿らしいと一蹴する。

御伽噺だと相手にしない。

それが、「普通」なのだ。

けれど、返ってきた言葉は、少しばかり違っていた。

「うん、信じてる」

「俺の言ったこと、全て嘘だとしたら？」

「え、だって本当にあった話なんでしょ？」

「作り話って可能性も考えない？」

「・・・あのねえ、今更そこを疑ってどうするの」

何だか、変な話になってしまった。

ふう、と息をついた。何だかさっきから、自分で自分を疑っているようで、こっちが自己嫌悪に陥ってしまいそうだ。

「キミのその疑り深い性格、変わってないみたいだねえ」

そう言っつて、泉は相好を崩した。

思考の柔軟な人間は、得てして純粹さも兼ね合わせているものら

しい。

ある意味で、子供みたくありのままに捉えようとする。

それが、おそらく彼女の特質でもあり、長所なのかもしれない。

俺にはどうだっていいことなのだけれど。

それよりも、

「ここだよ」

くすんでいるけれど、目の前に立ちただかる建物に、俺は圧倒された。

形容する言葉が日本語という枠組みにあるとしたら、どう表現するべきか。

巨大な容器いれもの？

監獄？

だが便宜的に、「倉庫」と名づけることにする。そこに歲月という錆びを混ぜ合わせたら、ようやく実像に近いイメージとなるだろうが。

婉曲的に述べてみたものの、俺はまだ納得がいかない。この場所がそれほどひどく、廃れきっていたからだ。

「酷えな、ここ」

「馴れればだいじょうぶ」

天井にライトをかざしたつもりが、それは埃を照射するだけだった。泉はお構いなしに、懐中電灯を水平に向けた。

「電灯のスイッチは、と」

さつさと前に進む彼女を尻目に、俺はまだ入口に佇んでいた。ずっと密封された部屋を思わせるようなこもった臭いと、塵と、外よりも暗い色をした倉庫の殺風景さ。うち捨てられた金属製の廃棄物が、ところどころにちりばめられている。

「あつた」

そう言うなり、暗闇に溶け込んだ中身に、光が燈った。急な光に目が慣れきらない俺は、思わず目を背けた。

「意外に明るいでしょ」

「そういう問題じゃない」俺はライトの電源を消して、うつむきながら中に入った。

うず高く積み上げられた、鉄製のコンクリートが、瓦礫の山をなしていた。そのために倉庫内が入り組んだ地形に変化しており、入

口からは奥の壁すらも見えないでいた。

「どこにいるかなあ・・・」

いち早く目が馴れたらしい泉は、そう呟いて一匹の猫を探し始めた。

「何でさ、ここに猫がいるって知ってるわけ？」

「昔ね、ここに一人で入ったことがあってさ。そうしたら、すごい数の猫がいたの」

「それはいつのこと？」

十歳くらいのこと、と言う泉。

「この近くに住んでるから、それより前からよく来てたんだ。それでもこの倉庫にまで入ったのは初めてだったから・・・」

にゃあ。

「・・・いた」

泉が指差したところに、小さな猫が待ち構えていた。

体格の割に、偉そうにコンクリートの頭上から見下ろしている。

「ふてぶてしい猫だな」と俺はあまりいい印象を受けなかった。

ぴよんと飛び降りて、駆け足で餌付け親のもとにやってくる。だけど、愛らしいとは感じない。

むしろ公園に居座るホームレスを想起してしまう。

絶対にその二つを、同じ部類に入れてはいけなけれど。

「たままないだよね」。この愛らしい仕草とか

動物愛玩者にも言っではいけない。どんな顔をされるだろうか。

泉は、毎日ここに来て猫に餌を与えている。

とはいっても、一日一回だ。以外にも、この近くの家の飼い猫らしい。真新しい首輪が鈴の音を鳴らしていた。

「でもさ、ここって埋立地だろ？ 周りに家なんてないけど・・・」
「うーん」

考え込む。けれど、

「不思議だねえ」

どうやら彼女にもわからなかったことらしい。

「相当な距離を歩き渡ったってことか。随分おかしな猫だ」

静かな倉庫に、餌を貪る音が、小さく響く。

「ね」泉が切り出した。

「記憶を覗くのって、どんな感じなの？」

「また何だよ、急にさ」

俺は欠伸をかけた。

「何となく。折角だから聞いておこうと思って」

「ああそう」

といつても、うまい表現が咄嗟に思い浮かばない。今まで他人に説明したことの無いものだから、なおのこと考えねばならない。

「・・・ダウンロード」

そんなところだろうか。

「ファイルを落とす時みたいなのと、大して変わらない」

見たいファイルを探して、ダウンロード。しかしファイル自体にウイルスが入り込んでいれば、大変だ。自分のパソコンまでも、おかしくなってしまふ。

だから、俺には覚えていないことが沢山ある。覚えていても、断片的なだけで、全く繋がらない。

黒木泉に対しての記憶。

おそらくは、もう思い出すこともできないかもしれない。

「ここ」

俺は自分の頭を指して言った。

「ずっと前に殴られたことがあって。しかも記憶を読み取るうとしていた時だったから、おかしくなったのかもね・・・それ以来、思い出せない記憶があったさ」

「・・・マジで大丈夫？」

「別に」とうそぶいた。けれど、もう一回同じことが起きたら、今度はどうなることだろう？

記憶喪失？

「ま、そんなところかな」

制服についた埃を払いのける。

と、俺は近くの壁に、細長い傷がついているのを目にした。

違和感を覚えた。

首をかしげながらも、そっと撫でてみる。細長い線が、二重にも三重にも、低い位置で重なり合っていた。

離れて全体を見ると、そこだけ壁の色が違うことに気付いた。おそらくは暗いままだと見えなかったかもしれないほど、薄れてはいたけれど、確かに違う。

「・・・」

その様子を、泉は何も言わずに見ていた。

「これ、なに？」

そう言った時点で俺は、近くの床にも同じ色が張り付いているのを確認していた。

その刹那。

猫が全身の体毛を逆立てて、俺を威嚇した。

今にも食いかかろうとするかのように。

思わず、のけぞった。

「・・・」

けれど、俺は確信していた。シミの原因が、なんなのか。

猫が威嚇したのは、その辺りが関わってくるのだろうか？

「・・・虐殺」

俺は、その言葉を泉に浴びせかけた。泉は、露骨に嫌な顔をしてくれた。

「その言い方、やめて」

正鵠を得ている、ようだった。

ここに来る前に読んだ、新聞の切り抜き記事。そこにあった、猫の大量失踪事件。

神谷町から、多くの猫が消失するという、奇怪な話だ。

その記事は、そこで終わっている。

結局は見つからないままに時が経ってしまったから。

それはつまり、未だに発見されていない、ということだ。

この倉庫に、多くの猫が集まっていたことは、確からしい。

おそらくは失踪した、というよりただここに集まっただけの猫。

その真意なんて、今更凶れるはずもない。

ただ、ある日を境に、その猫達も消えた。

何者かによって。

そいつが、倉庫の入口を堅く閉ざして、密室を作って。

猫達は逃げ惑うけれど、かくれんぼの要領で、やがては見つかる。

その先は、言うまでもないことだ。

殺されたのだ。

一匹残らず。

「酷かった」

泉は大きく、ため息をついた。

「この傷跡を見れば、それがどんなことか、記憶を探さなくてもわかるでしょ？ とにかく、嫌なものだったよ」

正視できるものではない。

それこそ、「事件」よりも、むごたらしい。

あの黒服の犯人が、しでかしたのだらうかと、思えて仕方がない。

「覚えてない？ キミは知ってたはずだよ」

ここに俺を連れてきた目的。

というのでもないけれど、意味はあった。

俺の、泉に関する記憶を取り戻して欲しいということだ。

「キミは、あの時ここに来て、記憶を読み取ったみたい。こんなことをした犯人が、誰だかわかったって、言ってたから」

それは夏休みの真っ只中、夏期講習があつて、その際泉に話したことだった。

「もちろん、私が餌付けしているってことを知っていて、その上で私だけに話してくれた。けど、肝心のことだけ、教えてくれなかった」

犯人。

つまり、この虐殺を行った、人物の名前だ。

「話そのものは、嘘だとは思えなかった。けど、その人の名前は、言ってくれなかった」

「・・・思い出して欲しいってこと？」

うん、と頷いた。

「確かに、こんなことをした人は許せない。けど、やっぱり、私だけ知らないままじゃいけないって、思ってた・・・」

髪をかきあげて、俺のほうに向けた。

「思い出せない、かな？」

「・・・」

回答することはできない。どう反論されようが、俺のその部分の記憶が、壊れているのだから。過去の自分が何をしていたようと、今の自分には繋がらないのだ。

泉を落胆させることだけれど。

今は、犯人を覚えてない。

それに、思い出したところで、また彼女には言わないでいるだろう。おそらく、その時の自分は、隠しておきたかったのだから。

「・・・そっか」

泉は、しかしながら落ち込む様子ではなかった。

そして、朗らかに微笑んだ。

「うん、しょうがないか。そうだね、ごめん。今更こんなところに呼んでさ」

「・・・別に」

かける言葉がなかった俺は、つい言葉を濁した。

誰だって、愛情を持っていたものを失う悲しみは、筆舌に尽くせない、庇う事もできない。彼女がどんな心境にあったのか、俺には推し量ることすら許されない。

けれど、それは突き詰めると、「逆」なのだ。

関わりがないなら、関わらなくてもいい。

昔の自分がどんな形で、これを捉えていたのかは霧の中に包まれ、知る術はない。けれど、今の俺に、何もできることもないのだ。

解く必要もないのだから。

おそらくではあるけれど、思い出してはいけないのだと思う。

記憶の断片だけが散らばった床に響く、形のない声。そいつが、俺を足止めしている気がしてならない。

何も言っではならないと、警鐘を鳴らす。

酷い話だけど。

不意に猫のほうに向く。

食べ終わったのだから、しきりに舌を出して、口のまわりについた味を舐め取っている。

ただその大きな眼球は、俺を咎めるようにキッと見据えていた。

俺達はむせかえる倉庫を出て、埋立地を後にした。

泉とも別れて、暗い道をぼつと歩いていった。

やたらと寒い。

そんな夜だった。

十月二十六日

俺にできることがあるとするなら、一つ。

イズミの正体を明かすことだと考える。

やはり「事件」を解決するに当たって、彼女の存在は外せないのだ。あの八月十五日の夜、何を見て、何を見ていないか。沈黙を貫くイズミから、聞きだす必要がある。

彼女がどう思っているのだ。

今この町で起きている事件とは、無関係ではいられないのだから。「非通知ねえ・・・」

俺は携帯のディスプレイに表示されている履歴をじっくりと眺めながら、目頭を押さえた。眼球が疲労を起こしているからだ。

イズミからの電話は、通常非通知にされ、従ってこちらから向こうにかけることは許されない。

そこに、激しい拒絶の意思を感じ取れてしまうのは、考えすぎだろうか？

ともあれ、俺はイズミの正体を突き止めなくてはいけない。向こうから明かさないので、こちらから、ということだ。

図書室からドアを一つ隔てた資料室に入って、数枚の紙を山ほどたまった名簿の中から取り出す。日付は、九月十日から十五日、つまり俺が日記を手にした日までだ。

この名簿は、入室記録だ。

つまり図書室に入るたびこの用紙に、自分の名前を記載しなければいけない。これで、一日どれくらいの人が入り出るか、チェックできるのだ。

その中に、イズミの本名も含まれているはずだった。

日記を落としたところは、この図書室だ。

つまりその日イズミは、この用紙に自分の名前を書いて、入室したことになる。

もう少し加えれば、彼女は日記を探しに、遺失物箱の前によく来ていた。それは、いつか委員長が述べていた事実だ。箱自体は部屋の前に置いてあるため、記録はとらない。

よく図書室に来るのだろうか。

「……えっと、男子は違うな」

イズミは女。従って、男の名前は除外。

けれど、そうやって絞りきっても、未だ三十名ほどの名前が残ってしまった。

……学校全体の生徒数を考えれば、少ないほうだろうか。

もう少し狭める条件は？

背が低い。

ということは、一年？

しかし背丈は、学年に比例するとは関係ない。そこは、小学生とは違うのだから。

あとは、何が考えられるだろうか？

少しばかり思考をめぐらす。けれど、頭の悪い俺には、何も浮かばない。

しかし、名簿から搾り取った名前は、一人ずつメモしておくとする。その中には、俺の同級生も含まれているのだけれど。

黒木泉ではない。

彼女はそもそも、俺とは別の高校の生徒だ。

「さって、帰るか」

と、名簿をしまつて資料室を出ようとして豪快に転倒した。

「うおっ！」

そして後頭部を強打した。

「いてて……」

勢いで、棚に載せられていたファイルが、一気に襲い掛かる。

どさどさ

ありきたりな音と共に、俺は下敷きになった。

「・・・最悪」

起き上がって、すぐにファイルを片付ける。こんなところを、司書の小田島が見たら、怒り狂って、終いにはあのスラヴ系民族のごとく長い顎鬚を逆立てるに違いない。

そしたら笑えるけどさ。

そんな悪い冗談はさておいて、俺はあるものを目にした。

「・・・」

古い写真の入ったアルバムだった。ファイルには、十二年前の日付が至る所にちりばめられていた。

当時の図書委員を写したものらしい。

臆面もなく、皆につこり笑っていた。

俺には彼らの真意を汲み取ることができない。

それよりも、一際俺の目を引く写真があった。

在りし日の二人が、そこにいた。

「・・・」

その二人ともが、俺の良く知る人物だった。

白地の裏面を見た。

「左・氷室美月、右・福原忍足」

そんなところだ。

要するに、二人は同じ図書委員、ということだ。

遠いようで近い、そんな曖昧な年月を隔てた、俺の先輩だった。

日記に書かれている、氷室美月の友人。

八月九日、十日の記事で取り上げた、「友人」という記述。

やはり、福原なのだろうか？

今になって、彼の影が頭上に降りかかってこようとは。

十二年前のファイルだけを残して、まずは崩れたところを片付ける。程よく棚におさまったところで、改めてイスに腰掛けてファイルを見た。

しばらく読みふけていると、小田島がやってきた。

「なんだ、お前が来るとは、珍しいな」

「いえ」とだけ返答して、写真を一つ一つ眺める。すると横から、小田島が割り込む。

「お、懐かしいな」

俺は顔を上げた。

「そのころからここにいたんですか？」

「この年度からな。司書になって最初の年だったから、よく覚えてるぞ」

淡々と、過去を話し出す小田島。福原と氷室の話がよく出ていた。「あの二人が中心になって、頑張っていたからなあ……」

しみじみ、懐かしむかのように、頬を緩ます。長い顎鬚をつまんで、整える。

「うーん、残念だなあ。同窓会を開こうにも、できねえしなあ……」

「俺は嫌です」

「うん？ 何もお前と言ったわけじゃないぞ」

「私も嫌よ」

と、委員長がいつのまにか部屋に乱入していた。

「……お前ら、酷いなあ。そんなに同窓会が嫌いか？」

「委員会の同窓会って聞いたことありませんよ」

俺の偏見かもしれないけれど。

「冷たいなあ、全く」

「冷房が効きすぎているせいでしょうね」

そう言う委員長の右手人差し指はスイッチを押さえたまま、冷房

の温度を極限にまで下げていた。

その日の当番を切り上げて帰宅したとき、テレビを見ている姉が玄關越しに見えた。

「遅かったね、もうご飯食べたよ？」

俺はリビングに上がり、いかつい体つきのテレビに目を向ける。

画面に浮かぶ重厚なニュース番組が、意外に思えた。

「珍しいね、姉ちゃんがそんなの見るなんて」

「何よその言い方。人の勝手でしょー」

そう言っつてせんべいを一かじりついた。

俺は姉をよそに、部屋に戻る。

「ごはんは？」

「もう食ったよ」

姉にそれだけ告げ、リビングの戸を閉めた。

テレビの音声が遠くなるにつれ、耳に静寂が走る。その中で、新聞の擦れる音が、一際大きかった。

テーブルに置いていたものを持ち出したのだが。

部屋に戻り、うるさくきしむイスに腰掛ける。新聞記事を大雑把に、目の勢いに任せて読み上げる。

と、番組表の裏面に差し掛かったとき、勢いをとめた。

ちやちな四コマ漫画にはなく。

例の殺人事件についてだった。

「神谷町で立て続けに起きた、連続殺人事件の謎」

公には、そう捉えられているらしい。

内容は、これまで報じられてきた情報をかき集めたものにすぎない。

要するに、進展はありません、ということだ。

「……………」

新聞を折りたたみ、リビングに戻す為に、また部屋を出た。

ここは、時間の止まった場所。

誰にも見放されて、私ですら見放して、孤独にも取り残されてしまった

倉庫内の至る所に、爪を深く立てなければ生じない傷が見受けられる。そうして残った痕の周りは、あの時は朱色の絵の具を撒きちらして、鮮やかに見えたのだ。今もその名残だけは、私の前に晒してくれる。

全く、生々しい爪痕だ。

私はわざとらしく、嘯く。

禍々しくもあり、けれど無機質でもある。

そんな次元の違う二つの要素が、ここでは強引に引き合わされている。

けれど、かつては私にとり、居心地のいい場所でもあった。

誰もいないから、という至極単純な動機をもって。

つまり、ここにいれば、誰からも無関心でいられるのだ。

それは私の思考回路の中枢を占めて、取り除くことのできない想いだった。無関心でいなければ、他人とは距離を保たなければ、たちどころに私というものを失ってしまうのだから。

言ってみれば、私の心に、常に内包してしまう癌なのだ。

だから、他人と接触することを恐れた。

そう、私はいつでも、自我の喪失しかかった生物なのだ。私というカテゴリーに唯一入りうる、「**私**」という自分を、絶えず守らなくてはならない。

だから。

私は接触のない場所を、好んだ。

この廃墟も、光に群がる蛾たちから、いつも離れていられる。自分と向き合え、確かめることのできる場所。そう確信して。

けれど、そんなある夏の日のこと。

黒木泉たちがここに来てしていると知った。

その事実、私を極限までに苦しめた。

彼女がここに来て、鉢合わせたときの気まずさに、恐れを抱いたのではなく。

私にとり、絶対的な孤独を求めうる場所ではなくなったことに、耐えられなかった。

他人が混じりこんでしまうことが、何より嫌だったのだ。

あらゆる思いが、私の中で渦をなしていた。

けれどその結論だけは、明白だった。

私は、ここにくる「彼女の目的」を失わせようと試みた。そうして、私は自我を守りきろうとした。浅はかな考えであつても、たとえ一時的なものに過ぎずとも、少しでも長く、関わりを持ちたくなかったから。

たかが、そんな下らないエゴイズムの塊のような理由で、私は実行に踏み切ったのだ。

虐殺。

その後に、私の期待した孤独さは戻らなかった。

それはつまり、私は虐げて尚、平然としているほどの異常性を持つていなかったのだ。

否、そういう人間になりきれなかった。

無感動無感情な人間に。

そのかわり、眼前に横たわる結果が、私に自己認識を押し付ける。結局、自分は臆病なだけなのだ。

自分では何もしないでせに、ただ死にたいと望む。

生きる意志もないのに、死にたくない和我儘わがままを通す。

そのくせ自分のエゴを貫き通そうとする。

他人と関わることを拒否する。

何もかもから逃げ出す。

どうしようもない人間なのだ。

そう、私は自分を守り通すよりも、まず卑劣な自分を否定されなくては、どうしようもないのだ。

がさり、という音がした。

振り返ると、真新しい首輪を下げた、小さな猫だった。

「・・・まだ、残ってたんだ・・・」

猫は私の言うことなどお構いなしに、しばらく私を見据えていた。餌をもらえない、と思ったのだろうか？

くるり、向きを変えて、やがてコンクリートの瓦礫に、姿を消した。

「・・・」

また、ここで猫を見ることになるとは。

もう二度と、ここに足を踏み入れることのないものだと思っていた。

それでも、私は来てしまった。

理由はなかった。

理由があるものなら、即座にそれを、否定しにかかっていたらどう。

だが、逆に考えてみよう。

この場所から、逃れることもできなかったのだと思う。

逃げ出しても、いつかは自分のしでかしたことと、向き合わなく

ちやいけないから。

増えすぎた罪の重さは、私自身をも呑み込み、やがて潰してしま
う。

仮初めの存在すらも、保てなくなる。

耐え切れなくなつて、それこそ私は自我を失うだろう。

無関係でいた結果、守ろうとしていた自分が、壊れてしまいそ
うなのだから。

皮肉なものだけだ。

それゆえに、自分を守るために、凧に全てを託そうと思つたのだ。

凧と関わつて、私は再びあの「事件」の記憶を掘り出してしま
つた。

揺り起こしてしまった。

その大きな流れは、もう堰き止めることすら不可能なのだ。

「事件」は再び起きてしまった。

その一方で、彼はいずれ、私の正体に迫るだろう。

全ては、「事件」のために。

私はとうに、彼らから逃れる術は、ないのだ。

ならば。

再び、無でいられた日常を取り戻せるのなら。

日記に綴られる平坦な日常が、この手に戻るといふのなら。

私は喜んで話そう。

そして、全てを託してみよう。

* * *

休日の駅前広場は、鍋が煮詰まったように、人で溢れかえつてい
た。俺と黒木泉は、駅前ロータリーで待ち合わせをしていた。

ビルに大きく張り出された時計台は、未だ待ち合わせ時刻に達していない。

「本当にくるの?」

黒木泉は訝っていた。それもそうだろう。俺ですら、こんな急なことになるとは、考えていなかった。

「多分、来るとは思うけど。仮にも向こうから、言い出したことだからさ」

「今まで姿を見せなかったのにね・・・」

言いつつも、口元を緩ませる泉。

「・・・謎に包まれた少女の正体。いよいよその素顔が暴かれる、ってか」

「とんだスクープだね、それ」

俺が言うと、さらに泉はほくそ笑む。

彼女が冗談半分なのは仕方のないことだとして、俺もまた気がかかっていった。

イズミの正体。

「事件」の核心部に関わる、人物。

そいつは、誰、なのだろうか。

俺は何気なくメモを取り出した。このあいだ、図書室の名簿から書き留めた、三十人ほどリストアップされた名前が並ぶ。このうちの誰かが、イズミなのだ。

しかし、こうなってしまう以上、もう用を為さないだろう。

俺はそう判断して、近くのゴミ入れに捨てた。

程よく聞きなれた水の音が弾けた。

それは、ただ空を舞う水滴の一部に過ぎなかった。

雨が降っているのだと、俺に判らせる。

ただ、その中に混じって、消え入るような声が耳に届いた。

「・・・アンタか」

俺が呼びかけた先に、少女の姿はあった。

見上げると、湿りきった雲が、低く頭をたれていた。ぼやけた色に、傘を差した少女は答えた。

「雨、降ってるね」

「……」

俺は答えることができなかった。まるで普段の同級生と、似ても似つかない、比べようもない。そこまでに、藍園優の容姿も、印象も、いつもと違っていたから。

十月二十七日

黒色に染まったようなセーターに、白のジャケットを羽織って、その上にポーチをにかけていた。人より肌の色素のない彼女の容姿とあわせて、全身が白と黒のコントラストを成していた。

無造作に下ろした髪は、わずかに水分を溜め込んでいるようだった。それが、肩に到達して、黒い糸のようにも見える。つけていたはずの眼鏡は、コンタクトに切り替えたのだろうか、それとも元から度が入っていなかったのだろうか。濁りを含んだような、黒い目の色だけが、際立っていた。

そして、俺を捉えて離さなかった。

「……藍園、だよな？」

俺はそう尋ねざるを得なかった。確証が、ほんの少し持てないでいる。

「ええ、そうよ」

「イズミ？」

彼女は何も言わず、ただ苦笑していた。

「驚いてるの？」

「……そつでもないけど」

見た目こそ違えど、小さな、か細い声に、覚えはあった。

電話口で話したときのような、無機質な音。ボイス

それが、本来の彼女の声なのだろうか？

ともすれば、今目の前に在る藍園が、本来の姿なのだろうか？

すると、俺は学校で目にする「藍園」という記号に対するイメージを払拭しなくちゃいけない。嘘偽りの、イメージになるから。

「どいつが本当の藍園なんだかな」

俺は笑うしかなかった。

「それと、久しぶりね。黒木さん」

「・・・うん」

泉は、呆気に取られていた。この二人は知り合いなのだろうか、少し疑問に思う。

俺と泉は、中学での同級生。

主に、第一校舎出身だった。

もちろん、藍園も同じ中学にいた。

けれど、彼女は第二校舎出身だ。

二つの校舎の交流は、ほとんどなかったもので、黒木と藍園は顔を知らないだろうと思っていたのだ。

「知り合い？」

泉はうなずいた。

「・・・ちよつとは、ね。中学の夏期講習で一緒だったくらい」

「ああ、成程ね」

俺は藍園に言った。

「だから、イズミ、なんだ」

藍園はまた、苦笑した。

「電話で名前を言わないのも不便だからね。咄嗟に浮かんだ名前が、彼女だったの」

互いが互いを見知っている。

接点はないと思っただけに、少しばかり驚きを隠せない。

けれど、ひとまず心の中にしまいこむことにした。

「じゃ、行こう。雨が降ってるし、ここじゃ話ができない」
藍園の呼びかけで、俺達三人は近くの喫茶店に立ち寄った。

俺はふと、昨日の電話の内容を再生した。

いや、無意識のうちに、頭に蘇っていた。

「つまり、アンタが俺に会って、話をしてくれるってこと？」

俺はもう一度聞いた。久しぶりにかかってきた彼女からの電話に、少しばかり聞きたいこともあったのだが、心に留めておくとする。

「そうです」

「……今まで、姿を明かさなかったのに、どうしたんだい？」

もちろん願ってもいないことなのだが、どうにも急すぎて、腑に落ちない。それに、この一ヶ月の俺の努力を、あっさり否定されたようで、どこか腹立たしい。

すると、相手は答えた。

「このままでも、あなたは私のことを探ろうとするでしょうね。そうしていつかは、私に聞き出してくる……それなら、私から話をしたほうが、いいのでしょうか」

彼女の心情に、どんな変化が起きたのかは、推し量れない。けれど、どのみち、無関係ではいられなくなった。

それが、彼女にとり不愉快なことでもあつて、諦めのつく事となつたのだろう。

俺にはどうでもいいことが。

その後、俺は泉のことを話した。俺が日記を失くした事から、彼女に「事件」を話さざるを得なかった事情を。電話の相手は、少しばかり嫌味を言ってくれたけれど、日記を失くさなかったことに、安堵した様子だった。

そうして、難なく泉と藍園を合わせる事が、できるようになったのだけだ。

こうして三人が顔を合わせる事になった。

もちろん、藍園は全てを話すだろうし、俺にも聞き出したいこともある。

「事件」当夜、ホームレスの男が見たという、二人の人影。

氷室美月の弟の存在。

藍園が、どのような形で関わっていたのか、俺は知ることになる。

喫茶店「レイ」はかつて、小さな規模の店舗に過ぎなかった。けれど、駅前という地の利を生かして、業績を上げていった。その結果、今では倍の広さにまで、店の敷地が拡充していた。

俺達はその一番奥、入口からは決して見られないような席に腰掛けた。

適当なものを注文する。従業員は無駄のない動きで、キッチンに去っていった。

「何頼んだ？」

泉は言った。

「俺はコーヒー。藍園は？」

何気なく視線を向ける。

「ミルクティーだけ。あまりお腹は空いてないから」

ああそう、とだけ答える。特にウィットのきいたことは言わない。ともかく、まずは持っていた鞆から日記を取り出した。藍園に持つてこいと厳命されたものだった。

「はい」

テーブルの向こうの相手に手渡す。日記を落としたのが藍園だったので、俺は本当に返却するつもりでいたのだけれど、ばらばらと確認するだけで、彼女はまた俺に返した。

「これ、返します」

「・・・元々アンタのдар。俺が持つこともないよ」

俺がそう言うのを、手で制止する。

「私が持っていて、仕方ありません。あなたなら、まだ使い道があります」

「それってというのは・・・」

「日記に残っている記憶、見れませんか？」と、あっさり告げてくれた。

確かに、できなくもない。

日記に見えるのは、「事件」の記憶だけだとも限らないだろう。探れば、いずれは別の記憶が出てくるかもしれない。

けれど、その前に、どうしても気が引けてしまう。

何度見て、その何度とも同じ「事件」の記憶しかなかったとしたら？

あの惨殺死体を、好んで見るほど、俺の神経はイカレテはいない。つまり、藍園はそれを承知して、別の記憶を探してくれというのだ。

何となく敬遠していた、日記の記憶探し。

それを、頼まれたことになる。

「……あまり見たくはないんだけどね」

言いながらも、俺はまた鞆に戻した。

「私だって、思い出したくもありません」

「けど、アンタはわざわざ話してくれると言った」

「ええ、そうです。ただの、独り言ですよ」

無粋に回答した。やはり、いつもとは違う面の彼女に、まだ戸惑いを保ってしまう。

一方で、長らく会っていなかったはずの泉は、そうでもない様子だった。

「ね、何でそんなに話すのが嫌だったの？」

彼女は、おそらく純粋な疑問をぶつけたのだろうか。

そこには、皮肉というものはない。

けれどもそもそも、藍園が沈黙を守り通してきたことは、言ってみれば異常なのだ。

彼女が「事件」を通報していたなら。

もう少し早く、話してくれたら。

おそらく、そこには迷いがあったのかもしれない。けれど、事実を隠していたことはいただけない。「事件」とは無関係だという彼女の態度には、賛成できない。

隣の窓際の席に座る泉に、藍園は溜息混じりに、答えた。
「少しばかり、話すのが長くなるみたいね。まあ、しょうがないか」
また、独りごちた。

* * *

「あのひとは、昔からの知り合いだった」
そう言っつて、ミルクティーを口に運んだ。

「だから、あの人に弟がいたことも知ってたし、中学でもよく面倒を見てもらった。凧や黒木とは違う校舎だったけど、あの人が教師だったつてのは知ってるよね。で、私とは三年間同じクラスの担任だった」

個人的なつきあいも、少しばかりあったようだ。そこには、それなりの理由が背後に控えていた。

「私ね、今は一人で暮らしてんだ。母親が『事故で』、亡くなってあまり言いたくないけど、父親は単身赴任、とでも言っておこうかな。ともかく、そんな時期でも、あの人にはよく面倒を見てもらったの」

親しい間柄だったから、氷室は事情を知っていたのだろう。

そして藍園にとつても、頼ることのできる人だった。

おそらくはそんなところだろう、と自分なりに分析する。推測だから、当てにはしない。

「でもね、私は後悔しなくちゃいけないの」

どういう意味か、尋ねる前に、藍園は言った。

「あの人の飼っていた猫をね、殺したんだ」

そのワードを耳にしたとき、頭に浮かんだのは紛れもない、倉庫にいた猫だった。

「……猫、ね」

あざとく呟いたのは、泉。そう言った理由は、考えるまでもなかった。

倉庫ないで起きた虐殺だろう。

俺の知る限り、ごくふつうの女子高生である彼女も、ことその話になると表情を曇らせる。

一年経った今も、見知らぬ人物に抱く、怒り。

行為を行った人物が誰かわからないから、歯がゆくもある。

そういった負の感情が、「猫を殺した」という藍園に、わずかながらに向けられていた。

「ねえ、どうしてなの？」

紡いだ言葉の裏に、微かな震えが加わる。

「……それは」

「何で、そんなことできるの？」

「……殺そうと思った。ただ、それだけ」

「わからない！ ねえどうして」

「やめるよ」俺は苛立ちながらも、さらに食って掛かろうとする泉を手で抑えた。「……あれは、藍園のしたことじゃない。話が逸れてる」

俺の制止に、泉は不満げな顔をする。

結局唇を噛みしめて、何もいわずにしりぞいた。

俺も、自分の言葉に、違和感を覚えていた。

果たして、藍園の告白と、虐殺と、関係がないのだろうか？

心の底から、ふいに声がこだまする。

知っているはずだと。

俺なら、わかりきっているはずだと。

俺は声を、「関係ないこと」として、割り切った。

けれど、布地についた墨は、染み付いて拭い去れない。

一抹の不安はあったが、俺はそれ自体を隠すことを決めた。

テーブルの向こうに、一人座る少女は、おもむろに目を閉じた。

何かを呟いているようだったが、聞き取ることはできない。

「・・・ごめんなさい」

やがて藍園は、弱々しく答えた。

「あの人の飼っていた猫、確かに殺した。言いたくないけど、ささいなことだった。でね・・・その次の日に、あの人、私を呼び出したの」

次の日、というと、氷室が死を迎える、数日前だ。

「ばれたんだろうなって、思った。実際に、そう思われて仕方のない状況だった。でも、隠し通したくて、嘘をついた。当然でしょ？

私は他の人のように、正直になれない。正直に白状するのが、恐くて、怖くてできなかった」

しかし、彼女が「した」ことは、明らかなのだ。嘘をつく意味もなかった。

もはや、見苦しいだけだった。

それでは、相手はどう思ったのだろうか？

氷室美月は？

答えは、見逃した。

「あの人は、何も喋らなかつた。どうしてなのか、わからないけど、私の言ったことを聞いただけで、それ以上追求はしなかつた」

どうしてなんでしょう？

彼女は自問する。

「私は、納得がいかなかった。

どう考えても、不自然だと思わない？ 私は、罰せられて当然だ

った。でもそうならなかった。それどころか、あの人は笑って赦してくれた。私は違うって、あたりまえのように済まされた・・・」
これでいいのになって。

「じゃあ」そこで俺は口を挟んだ。「どうして、それならどうして、氷室は藍園を呼びつけたりした？」

問いただすことが用件ではなかったとするのなら、何をもって、呼び出したのか。

藍園は、しかし溜息をついて、答えない。

しばらくの沈黙の後、再び告げた。

「あの人がこう言ったの。」

私とは関係ないことだけど、もしかしたら近いうちに自分は殺されるんじゃないかって」

俺はとてつもない、大きな違和感を覚えた。

彼女は、自身に降りかかる災難を予見していた、というのだ。わかっていたと、いうのだ。

「私には信じがたいことだった。嘘をついている自分を、からかっているのかとさえ思ったわ。でもあの人の表情は本気だった。真実ほんとうだった。何がなんだか、理解できなかつたけど、あの人はそれきり、何も言わなかつた。」

後味が悪いって言うのかな？ 後ろ髪を引かれるようで、ぬるま湯に浸かるみたいで、私にはもう、気持ち悪さしか残らなかつた」

藍園の脳裏に、不安がよぎる。

否定したい予測は、しかし時を経ずして現実となってしまう。

数日後、氷室美月は何者かによって殺害される。

「八月十五日。確か、にわか雨が通り過ぎた後だったわ」
顔を俯けて、ぼつり、呟く。

「やっぱり、謝らなくちゃいけないって思ってた。飼い猫を殺したの
は私だって、正直に伝えなきゃって。だから、夜遅くだったけど、
電話をかけた」

午後十一時半を過ぎた頃だったか。

鳥の啼く様な電子音が数回こだまして、電話はつながった。

「でも、何も聞こえなかった。呼びかけてみたんだけど、何も言っ
てこなかった。それで電話は、すぐに消えたわ。後からかけなおし
ても、今度はつながらなくて」

不意に氷室の言ったことを思い起こす。

「まさかとは思ったわ。だってあの人、夜遅くに帰らないことはな
かったし、一回だけ電話に出たのも、不自然だった。いてもたって
もいられなくって、私は家に向かったの」

* * *

どしゃぶりの雨の中を疾走する。着っぱなしの制服は、既に濡れ
ていた。

坂を上り、氷室の家へと急ぐ。

焦りと不安が、彼女を駆り立てる。

やがて、下痢のような雨が通り去った頃、家に辿り着く。

薄暗く、カーテンが閉まっている。けれど、玄関を見ると、少し
だけ扉が開き、中をのぞかせていた。

何かがおかしい。

ドアを開け、玄関を抜けて、階段を上がる。廊下の先に、藍園は
見た。

その奥に転がっていたもの。

「・・・言わなくても、もうわかるでしょう？　そこで、何があっ
たのか」

藍園の言葉が、俺達に重くのしかかった。

「即死だった」

空ろな目を浮かべて、藍園は続ける。

「信じられる？ 目の前に人が胴体を裂かれて、その横にわけのわからない仮面を被った人がいて・・・いいえ、ヒトじゃない。そう見えなかった。・・・そこに、私の入る空間は無かった。何もできなくて、ぞつとして、立っている事すら恐くなって

・・・想像できる？ あなたたち」

うつむいたまま、濁りきった眼球だけが、俺と泉に向けられる。どこまでも鬱屈して、底が見えない。

ああ思い出しなくなかった。

そんな非難を寄せているみたいで、何故か視線をそむけてしまう。だがこれは、彼女のほうから言い出した事実なのだ。

最後まで細部まで、聞き届けなくてはいけない。

「話、逸れたみたいね。それにそんなの、あなたたちに話すことでもなかったね」

藍園は目を閉じて、ゆっくり深呼吸をした。

「・・・風の見た記憶って、あくまで氷室美月という一個人の見たソレ、なのよね？ つまるところ、そこから先のことは、知らない」俺はうなずいた。

欲しい情報は、限られている。

氷室美月が「完全に死んだ」その瞬間から、家に火の手が上がってホームレスの男が駆け寄るその終わりまで。

閉ざされた短い時間に、藍園は見ていた。

核心となるシーンを、記憶としてとどめているはずだった。

俺は、彼女の次の言葉を待った。

喉がひどく渴く。

ふと鑑みると、俺の頼んだコーヒ―は、容器から一滴も失われて

いなかった。

「何があつたの？」

純粹な疑問を抱えた。まるでそんな面持ちの泉が、俺がコーヒ―を飲み干す間ふと問いかける。

「・・・・・・・・」

藍園は、俺達を突き放すような、冷めた目をしていた。

* * *

力なく倒れる少女に、黒い影は近づく。

「誰、かな？」

ぼつり、呟いた。その声はどこか中性的ではあつたものの、男なのだろうと判別する。

けれど少女の脳裏には、どんな思いが表示されていただろう。

混濁した意識の中、一つの現実だけが、少女を苦しめる。

殺される、という感情だろうか。

いや、それは後になって肉付けした感情なのかもしれない。そんな数秒間で、取り巻く状況を認識し、かつ判断できるほど冷静にはなれなかつただろう。

いや、無意識に死というものを嗅ぎ分けたのかもしれない。それは、理論ではなく、本能としての認知だ。

少女は何を思ったのか。

知る術はない。

しかし、これも咄嗟の行動なのだろうか。

少女は、無意識のうち「日記を手にした」

「不思議と近くに転がっていたの。そのうち数ページかは、切り取られたみたいだけど。・・・何しろ、あの仮面の人を持っていたから」

右手には、血をすすったナイフ。

もう片方の手に、切り取られた紙。

おもむろに奴は、読み上げていた。

そばにいた少女には、目もくれないで。

「その反面、私は身をかがめて、日記を守るようにしていたと思う。・・・どうしてなのか、あの場の私にもわからなかった」

ただ、沈黙が流れる。

それを引き裂いたのは、部屋にいた二人のうちの、どちらかだったのだろう。

だが、そうはならなかった。

「背後に誰かがいたわ」

気配を感じた少女は、振り返ろうとする。

その前に、顔の正面に重い棒のようなものが目に入る。

そのまま気を失った。

「共犯者がいた。そうとしか思えない」

深い溜息をつく。アンフェアだとも言いたげに。

「寸前まで目の前にいた人に、背後から襲った人。つまり、二人いたの。一瞬だけ視界に入ったその人は、若い男だった。そんなはずはないって、思ったわ。でも、疑問に思う前に、私は気を失って、気づいた時にはもう・・・火の手が上がっていたの！」

吐き捨てるように言った。

「あの人の体が焦げて、嫌な臭いだったのははつきり覚えている。そこにはもう誰もいなかった。だから、夢中で逃げた。目に入った靴を持って、裸足で逃げて。」

玄関先には誰もいなかった。それどころか、火の手に気付いて集まってくる人もいなかった。それで、私は公園まで逃げたの。途中、誰かが住んでいるテントはあったみたいだけど、そこには誰もいなかった。多分、それ以外に私に会った人は、いなかったんだと思う」

公園に暮らす、ホームレスの男。

そのときおそらく、彼は現場に向かい、あるいは火の手を見て、

通報するために公衆電話を探していた。だから、テントには居残っていなかったのだろう。

「落ち着きを取り戻すまで、随分かかったと思う。靴を履いてないことに気が付いて、日記も手に残っていた。今から思えば、唯一の手がかりを得たことになるわね」

そう告げて、俺に視線をよこした。

日記を拾っていなかったら、今俺が「事件」を知ることにはなかった。

当然ながら、泉も。

そうやって藍園の中だけで、自己完結してしまっただろう。

「それで、人目につかないように、家に戻ったわ。なんにも考えられなくて、誰もいない家で、しばらく明かりをつけて、ぼうつとしていたわ。

でもね、そのうち震えが始まって、止まらなくなった。もしかしたらこの家に誰かがやってくるんじゃないかって、恐かった。あのひとたちが、わたしをころしにくる。だから、いくらたっても眠れなかった」

少女の神経を摩滅させる。

緊張が極限に達したまま、部屋の隅にうずくまって何日も震えて過ごしている。

おもむろに立ち上がる。けれど、洗面所につくや否や、胃の中に溜まっていた液体を一気に吐く。

その度に思考が鈍く働くけれど、また戻って、毛布に身を埋める。そうしたことを何度か繰り返して、彼女の華奢な体はとうとう音を上げてしまった。

いつしか深い眠りについていた。

やがて、重たい目を上げて、おもむろにテーブルにあったものに目をよこす。

チャンネルを拾いあげ、テレビに突き出す。

しんとした孤独な家に、静かに流れる音。

テロップには、八月十八日午後六時十九分とあった。

世界を覆いつくす時間の渦に、こうして彼女は戻った。

八月十四日まで当たり前だった彼女の日常は、げんじつこうして還ってき
た。

……歪な形で。

「そこに映っていたニュース番組には、あの事件が歪められていた
わ。……火災事故として」

それこそ偶然としか考えられない。現実として、完全な偶然が、
彼女達から世間の目を逸らすこととなった。

彼女は愕然とした。ある意味で、「事件」の流れを把握できてい
ない人間だったから、何が起きているかすらわからなかったに違
い。

ただ、彼女は受け入れることしかできなかつた。

あれは「事件」なのだ、反論する思考能力もまだなかつた。

呆けているうち、電話が鳴り響く。

誰だろうと思う術も無く、ふらついた足取りで向かい、受話器を
手にする。

かすれた声で返事をする。

風邪か何かと思ったのだろうか、相手は気にもとめない。

その相手は、ヒムロソウといった。

「あの人に弟がいたって、もう知ってるよね？」

俺はうなずく。ただ、どの程度かと問われたら名前を聞いたくらいのものでらう。いずれにしろ、俺とは縁が薄い、というのが、結論だった。

一方で、泉はまだ、このことを知らない。彼女の「事件」の知識は、あくまで俺の話に限られるのであって、そこから先の内容は、語っていない。つまり、「共犯者がいたこと」「氷室美月の弟」は、今しがた藍園の話聞いて、初めて出くわす情報だった。

横を向くと、案の定押し黙っている。話の情報量に、ついていこうと精一杯なのだろう。

「・・・ならいい・・・」

電話の相手は、その弟だった。

込み入った話が続く。

葬式に参加するかどうか尋ねられる、だが疲労が彼女を押し留める。まだ胃が痛んで、空っぽの筈なのに、生暖かなものが今にも競りあがってきてそうだった。

既にぼろ雑巾と違わない状態であった少女には、到底無理な話だった。

その結果、彼女は全てを断った。

「事件」のことは、結局話さずに。

少女のよく見知った相手は、風邪かと勘違いしたのだろう、お大事にと声をかけて、電話は切れた。

視界が歪み、少女は再びその場に倒れた。

つけばなしのテレビの音が、遠く耳に入る。

けれど、消すこともままならない。

傷は消えない。

消えてくれないから、立てなくなるほど痛い。

痛い。

でもそれは殺人から比べると瑣末なことで、けれど彼女の記憶についた傷となつて、放つ痛みなのだ。

自分でつけてしまった、決して塞がらない傷。

その正体は、なにか。

自己嫌悪だ。

あの「事件」以来何よりも、彼女は自分自身を嫌っていた。人格そのものを否定したいくらいに。

だから、立つという己の意思すらも打ち消したかった。

だから、床に倒れこんだまま、動こうとはしなかった。

その根底にあったものは、まちがいなく自分なのだから。

「つまりね、あの日猫を殺した私は嘘をついたまま、とうとうあの
人に謝ることができなくなったの。これはもう、殺されたあの人に
とつて、取り消せないことなの。機会すら、もう訪れないの……
」

どうしようもなく後悔した。

藍園はそう吐き捨てた。

顔をひきつらせて、強く握り締めた手が白ばみ、震える。

「正直に話すべきだったのに、しなかった。猫を殺したのは自分だ

と、素直に言えなかった。ちゃんとあの人に向かって、正直に伝えるべきだったのに、あまつさえ嘘を通してしまった。

なんだか自分が醜くなったようで、いやになったわ。でも、もうあの人に謝ることすらもできない。

この先一生、赦されることはない。
分かる、この気持ち？

信用していた人を裏切ってしまった。そのくせ、そ知らぬ顔をしただままでいる自分だけが、無意味に生きてしまっている。それに気づいた時からね、本当に自分が許せなくなったの」

震えた手が、突然に動きを止めた。

まるで体中が一斉に機能を失ったように。

長く下を向いていた顔を少し上げ、その両手をじっと、見つめていた。

感情の、まるでこもっていない目で。

「耐え切れなくて、自分を否定したくて、自殺しようかとも考えたんだけどね」

表情を硬く、ただ口だけを動かして、無機質に語る。

「でも、自分にそんなこともできるはずがないわ。何度もしようと試みたけど、恐くてできない。できるはずがないのよ、そんな大それたこと。」

最悪よね。

だからもう、私はどうでもよくなった。

……このまま、誰からも無関係でいて、無関心で、自分を見捨てていたかった。一年経って、また似たような事件が起きて、そうしていられなくなったけどね。

ああ、すっかり愚痴っぽい話になったかな？」

どこで逸れてしまったんだろう。

そう呟いて窓の外を向いて、藍園は続ける。

「……正直に言うとなね、事件に関してはもう、あなたのほうがよく知っている。だから、最初から話せることは、なかったかもしれないわ。」

「……そうね。参考には、ならない話だったね」

眉をひそめて、独り言のように告げた。

糸のような水滴が、ときたま俺達の座る席の窓につたう。

店のウィンドウを覆う雨は、いくぶんか強く感じられる。通路側に座る俺は、テーブルの横の床に目が入った。

無数の足跡に残る、大量の泥水。

それは掃除を怠ったわけではないのだけれど、朝から一日中降り続けていることを物語っていた。

先程まで静かだった店内が、にわかには騒がしくなる。

どうやら雨宿りのつもりで店に立ち寄った客が増えたのだろう。

当然ながら、彼らがもたらした水滴は、この場所にまわりつく湿度を高くする。

とにかく俺は、不快な気分だった。

そう、この不快さを、湿気というありふれた理由に押し付けたかった。

少し話を整理しよう。

俺なりに解釈して、という意味で。

もちろん、藍園の言った事が、全て事実だったという前提で。

まず氷室美月だ。

彼女は藍園とは親しい知り合いだった。藍園にとり、信用できる人だった。

そして彼女は「自分の死を予測していた」可能性がある。

いや、予見していたにもかかわらず、数日後に殺されている。

藍園の話が本当なら。

自分の身を防ぐことはできなかったのだろうか？

またどうして、「それを藍園に伝えたのか」。

藍園は、「飼い猫を殺した」のだ。おそらくは、氷室には分かり

きっていたのだらう。

聖人君子でもない限り、許せることではない。けれども、藍園を「見逃した」のだ。憤りを抑えるほどの相当な理由が、そこになくてはおかしい。

理由。

ともすれば、自分の身の危険と、関係があるのかもしれない。

あの日記に、何か書かれていないだらうか？

藍園の心情は、俺には計り知れない。

いったいどうして、親しかった人物の飼い猫をその手にかけてのか。

俺には納得がつかない。

その後、氷室美月に呼び出されて、「嘘をついてしまった」

しらをきり通したものの、このことが藍園をさらに苦しめてしまふ。

結果、「事件」が起きたことよりも、氷室美月の死によって、彼女は自己否定を始めてしまふ。

自己嫌悪と、嫌悪する自分が同一であるという矛盾を抱えたまま、今に至る。

彼女の自分に対する話を聞いても、推測しかねる部分が多いのは、否めない。

さて、「事件」に的を絞ってみよう。

その夜、雨が降り続いていたが、いくぶんか小降りになっていた。氷室美月は、背後から鋭利な刃物で刺されている。ということは、「刺されることを寸前まで気付かなかった」

そんなことがありえてしまった。

と同時に、偶然にも藍園が現場を見てしまふ。

実は、それ以前に藍園は「氷室の家に電話をかけている」のだ。

不思議なことに、その時電話は「一回だけ誰かが無言で出て、そ

の後はつながらなかった」。

藍園は不安に思い、彼女の家に向かった。

ここに、タイムラグが発生している。

つまり、「氷室が殺害された直後に藍園が来た。その逆で、藍園が家で電話をかけたときは、まだ氷室は刺されてすらもいなかった」ところが、「その電話には誰も出なかった」。

ここは推測しても仕方のないところなので、話を進めよう。

現場に着いた藍園は、一人の死体と、例の仮面をつけた犯人を、そこで見てしまう。

犯人にすれば、彼女の来訪は意図しなかったことだろう。

ところが、犯人は冷静に「日記から破れたページを拾い上げて読んでいた」

藍園には目もくれない。

しかし、「犯人は二人いた」のだ。

藍園の背後にいた、もう一人の「若い男」。

彼女は襲われ、気絶する。

犯人達は、おそらく「そのページを持って、火を放って逃げた」のだろう。公園の男が、「玄関から出る二人の影」を目撃している。

火は次第に、家全体に広がる。

藍園は目を覚まし、日記を手を持ったまま逃げる。

その時男は公園にいて、通報をしようとしていた。

他の人も、藍園の姿を見ていない。

藍園は家に帰り、そのまま「事件」は事故として片付けられた。

氷室美月の死亡状況に、事故として見られる偶然が重なったため。

疑問点が増えてしまった。

何故だろうか？

藍園の話に、「嘘」が含まれているのか。

けれど、ここまで来て彼女に嘘をつく意味も見当たらない。
一体どれが真実で
どれが嘘なのか。

少しばかり頭を抱えてしまう。

だから俺は、さつきから不快な気分だった。

* * *

「そういえば」俺はふと、考えた。

「あの事件で、警察に通報とかはしなかったのかい？」

藍園に尋ねた。彼女は、まだ窓の外を向いたまま、顔を合わせない。

「・・・私があの事件の顛末をまともには知ったのは、事件から一週間くらい後だった。それまで、何もする気になれなくて。証拠が日記しかないっていうのも、変に聞こえるでしょう？ それに、通報する意味も、私にはなかった」

「というと？」

「自分がもう、どうでもよくなったっていうこと。馬鹿らしい話に聞こえるかもね。でも、本当よ。勝手な理由だけど、私にはもう関わりたくないことだった。いいえ、思い出したくもなかった。

いずれにしる、世間では火災事故として扱われた。私にはもう、それでよかつたんだ」

そう言っつて、残ったミルクティーを、一気に飲み干す。かちやと
いう陶器でできたカップの音は、店内の賑やかさにかき消された。
と、

「じゃあ、日記は捨てたくなかったの？」

たったいま話の内容を理解し終えたという様子の泉が、そう尋ねた。

「・・・」

「あ、そもそもさ、学校でその日記を落としたんだよね。それって、日記を学校に持ち込んでいるってことでしょ。」

「・・・どうして？」

藍園は黙っていた。それはというと、答えに窮する、という意味合いのものだった。

日記の本体は、俺が持っている。

一部は、犯人が持っている。

藍園は前に、「日記を全て取り戻す」といったのだけれど、俺には納得がいかない。どうしてわざわざ、「思い出したくもない事件の遺物」を気にかけるのか。

俺が再会した泉に話をしたときにも、確かに不思議に思っただけだ。だが、当の藍園はというと、少しばかり複雑な面持ちだった。

「ね、どうして？」

子供のように、ストレートに質問をぶつける泉。

しばらくの沈黙で、藍園は困りきった顔をして、ようやく告げた。

「私にも、わからない」

「・・・？」

「捨ててしまっていていいものを、どうして手放さないのか、自分にもわからないわ。捨てようと思ったことはあるけど、日記を手に持つたびにどうしてかできなくなる。

それどころかね、肌身離さずを持っていたくなかった。

・・・多分、私は今も、日記を通してあの人の幻影を追っているんだと思う」

そんな謎めいたことを呟いて、彼女は微笑んだ。

それはここに来て、初めて見せる、笑みだった。

「あの人が何を思って書いたのかはわからない。でも、それを見るたびに、何回も読んでしまう。だから、ずっと持っていたいって思うのかもしれない・・・でも」

不意に、表情を曇らせる。

「やっぱりあれは、私が持つべきものじゃないわ。確かに今は風

は預けているけど、いずれは彼に、返すべきだと思っただ」
氷室宗に。

彼は、氷室美月の弟だが、同時に「唯一の遺族」でもある。
「あの人には、親戚も親もいなかった。だから、せめてあの人のものは、彼に返さなきゃと思っただ。」

「……あ、もしかしたらそれが、手放したくない理由なのかもね」
言つと、再び表情が和らいだ。

「でも、すぐに返そうとは思わなかったのかい？ 氷室美月とは長い付き合いだったんだから、弟とも」

俺が口にしかけて、藍園は遮った。

「今は、連絡がつかない」

その一言で、俺は合点がいった。

「つまりね、今はどこにいるか、わからないの。何処か別のところに引っ越したみたいで、連絡先も言わなかったみたい。……だから、私が持っているしかなかった。今は風に預けているけど」

唯一の家族である氷室宗に返すために、また愛しむように持っていた日記。

ある面では「事件」の証拠になるけれど、一方でわずかに残された氷室美月の遺物だ。

藍園はそれほどまでに、彼女を大切に思っていた、ということかもしれない。その想いが、少女にとってこの白く小さな手帳の存在する意味となっっているのだろう。

俺には、その気持ちなんて察することは難しいけどね。

* * *

途絶えていた視界が、わずかに窓の外に広がっていた。

空が薄く光をあらわして、遮られていた風景が、徐々に俺の目に

回復する。幾分か小降りになった雨は、あとほんの少ししたら消えることを、容易に推測させる。

「うん、私に言えるのは、ここまで。……もう、これ以上は話すことはないわ」

「別にいいよ」

俺は気楽に言った。長く正体を隠していた彼女の正体が掴めたことで、調べることが減ったのだから。

後は、「事件」の共犯者と、犯人を、俺達だけで探さなくてはいけない。

今更ながら、警察に「事件」の話をして、おおよそ信じてもらえるはずがない。今この町で起きている事件の犯人を、俺達が知るはずもないし、全く以って意味のないことだ。

だから、ここにいる人間だけで、犯人を見つけ出さなくてはいけない。

とても危険なことなのだけれど。

「気になったんだけどさ」

再び晴れ上がった町に繰り出した時、泉は藍園の鞆を指して訊いた。

「その鞆、旅行用のバッグだね。……これから、どこかに行くの？」

その言葉に、俺は引っかけかりを覚えた。

「明日は学校だけど？」

「ええ。少し休むことになる」

またそれは、謎めいたことだ。

「……ちよつと、行きたいところがあったね。学園祭にまでは間に合うと思うけど」

「そんなに休む気が？」

藍園は、無言でうなずいた。

「……そういうことかい。まあ俺には関係ないことだけど

さ

言いつつも、少しの不安が、脳裏に滲み出る。その正体は、馬鹿らしいものだったので、かき消すことにした。

やがて駅の前に辿りついた。

「それじゃあ、私はここで」
どこか気の抜けた口調で、どこか危なっかしい足取りで、改札口を通り過ぎた。

あっという間に、人ごみの中に紛れて、その姿は消えていった。

駅を迂回し、少し離れたバス停へと向かう。

道行く人々の傘は、濡れてはいたものの閉じられていた。今は晴れ間をのぞかせる淡い空が、雲の間からくつきりと浮かび上がっていた。

「藍園さん、あんなので大丈夫かなあ・・・」

傘の先端を地面に突っついて、泉は呟く。

「心配？」

首を縦に振る。

「あんなに自分を責め立てなくてもいいのに。心配しないほうがおかしいよ」

「・・・」

「それに、自殺しようとしたなんて、間違いだよ。凧もそう思わない？」

「ああ、それは俺も同じだ」

泉は肩をいからせて、憤る。その様子も、どこか幼さを感じてしまふ。

彼女は、純粹に怒っているのであって、藍園に軽蔑の念を抱いているのではない。

「なんか、機嫌悪そうだね」

ふいに俺も、冗談じみたことを言ってみる。

「・・・だってさ、猫を殺したって言うんだから。理解できない」

「そんなに猫が好きだったの？」

「ううん、違う」泉は持っていた傘を、かんと叩いた。「・・・人でも猫でも、命を奪ったりすることが、アタシには許せないだけ。もちろん、簡単に自分を傷つけたりする人も

藍園さんは、いい人だと思っていたけど、話を聞いて何だか・・・

言葉を濁して、そっぽを向いた。

泉がどんな表情をしているのか、俺には見えない。

「それが普通だと思うけど。俺も、アイツのことはよくわからない」
そう呟いた時、定刻通りにバスは到来した。

バスの中は休日にもかかわらず閑散としていた。それでも車内を覆う空気は、水分を含まずに乾いている。窓に差し込むオレンジ色の光が、鉄格子の影をゆらゆらと動かしていた。

「・・・だな」

一人呟いた。後ろに座っていた泉は、首を傾げる。

「いや、犯人をどうやって、割り出せるか。これ以上日にちが経ってしまつと、犯人だつてまた何をしでかすかわからないだろ。どうやって、割り出す？」

俺は泉に問いをかけた。

この「事件」の元凶を、どう絞り出すのか。そして、どう解決するべきか。悩んでいた。

一番いい形は、すぐにも犯人を突き止める。日記の残つたペーシは、おそらく犯人が持っているだろうから、全ての日記が俺達の手に戻る。それを、返すべき人に返す。

無論、犯人は自首させる。そこは、動かせない。

ただし、それはあくまで理想の形であつて現実とは乖離した答えに過ぎない。それに近づけるようにすることは、不可欠だが。

泉はしばらく考えて、ぶっきらぼうに答えた。

「共犯者から捜す」

「成程ね。確かに監園も、そいつのことは若い男と言つてた」

公園のホームレスから聞いた、信憑性のなさそうな話からも、その存在は出てきた。

二人とも嘘をついたわけではない。とすると、本当に「共犯者」は在るのだ。

犯人の手がかりが全くといっていいほどないので、その男を探し出すことから、優先すべきなのだろう。

「じゃあ、聞くけど。その男は誰だと思つ？」

俺はわざと、無理な注文をしてみた。「冗談のつもりで尋ねてみたのだが、しかし彼女は素直に答えてくれた。

「一人、思いつきで失礼だけど、いる」

「……へえ」

「弟さん、だと思っんだ」

とんでもない思いつき、だ。

「らしくないね。人を槍玉に挙げるなんてさ」

「うっん、違う。そんなのじゃない。けど、どうもね、じっくりくるんだ。

じっくり、きてしまっつて言ったほうがいい、かな？」

氷室美月を殺害するには、家の中に押し入る必要が出てくる。

無論、彼女の知らない人物が突然入り込んだら、ふっつは気付くだろうし、背後を刺されるほどの隙を見せるはずもない。

では、その人物が、弟だったら？

例えば、彼が理由をつけて、姉の家に来てくる。

夜遅くだが、不審がられることは少ないだろう。あるいは、泊まりに来た、ということもありえる。

藍園がかけた電話は、彼が出る。何も言わず、いったん電話を切って、気付かれないように回線を絶つこともできる。

トイレに行くふりをして、犯人を家に引きずり込むことも、できる。広い一戸建てに住むのは一人だ。使用しない部屋があってもおかしくはない。そこに、招き入れることも可能だろう。

そうして、「事件」を起こすことも、できる。
迷推理だ。

だけど、可能性がない、ということもない。

「馬鹿らしい！ 実の姉を殺すのかよ」

俺は運転手に聞こえないように、小声で叱責する。なぜかという
と、俺にも姉が一人いるからだ。

成程、俺も愚鈍な姉に、怒りにも似た感情を抱くことはある。その大半が、ささいなことだけど。

でも、だからといって「行動」に踏み切る人間は、限られているのだ。

多くの人間は、結果を恐れて人を殺すことはしない。

もしくは「そんな発想をすること自体」ありえないのだ。

だから、この推理は、「弟が殺人を厭わない異常者」でなければいけない。

「・・・変なこと考えたかな？ うん、なんでもない」

言つて、泉は無邪気に笑う。

本当なら、「事件」とは無縁のはずだった黒木泉は、俺の些細なミスから、それを知ってしまった。

けれど、彼女も、むしろそれに興味を寄せている。普通じゃない接し方で、「事件」を捉えている。

不思議な知人だ。

と、改めて思う。

「ん、どうした？」

「別に」

それから、しばらく他愛もない話をして、その日泉と別れた。

藍園の話に、少なからず疑問を抱えたまま。

夜。

再び俺の携帯から、非通知の電話がかかってきた。

非通知でかけてくる奴を、俺は一人知りえている。

「何か言い忘れたことでも？」

俺は部屋のベッドに腰掛けて聞いた。

「・・・いいえ、あなたにだけ伝えたいことがあって」

電話越しに、藍園の声があった。

車輪の擦れる音が電話越しに聞こえる。

聞き続けていると、不思議と自分の体が揺れてしまいそんな錯覚を起こしてしまう。

「どこからかけてるの？」

俺は何となく聞いた。すると、車内、と最低限の言葉だけ、藍園はついて済まず。

「ああ、そう。それで、話って？」

「黒木さんには、言えなかったことがあって」藍園はそう口にした。「本当なら、あの場で話すべきだったんだけど」

本当ならば、黒木泉はこの「事件」の関係者ではない。

強いて言うのなら。

彼女は無関係だ。

「来たのがあなただけだったら、あるいは言ったのかもね」

「・・・つまり、アイツにだけは話したくなかったことがある」
そういうことか。

ここに来て、俺は納得した。

藍園の話を聞いて、多くの矛盾や疑問点はあったのだけれど、「それ」はその最たるものだろう。だから、わざわざ泉に悟られないように、「前提として嘘を含んではいけなかった」話までもを偽ったのだ。

褒められるべき事ではないけれど。

「猫か」

俺は尋ねた。

「飼い猫を殺したのと、あの倉庫内で起きたこととは、考えれば分かる。時期が同じだ。つまり、お前が殺したのは、一匹の猫だけじゃない」

虐殺を行ったのは、藍園。

とは言えど、その話の詳細は俺も知らない。あくまで黒木から聞いただけなのであって、しかし確証は持てた。

それに、俺が倉庫に行き、残った猫の爪あとの記憶を辿れば、分かることだ。

「そうよ」

藍園は力なく答えた。

「私が、そうだったの。だから、あの場で話したくなかった」

そこに泉がいたから。

泉は、今もその犯人を知らない。

そのうえ飼い猫を殺したと言った藍園を、それでも疑おうとはしなかった。

彼女自身が、藍園を信じていたのだろうか。

そういう人間ではない、というある種の観念を。

だとすれば、酷い裏切りだろう。

「いいのかい？」

俺はもう一度聞いた。

「あの場で、アンタが正直に言えば、多分アイツのことだ。どんなに責めても、結局は許してくれたと思う。だけど、またアンタは嘘をついた」

「……」

「もし犯人がお前だと、泉にわかるようなことがあれば、それこそ酷い話だよ。」

「……俺にはどうでもいいけどさ」

「今更もう、遅いわ」

わずかに語気を荒げる。藍園は苛立っていた。

「覚えていて。結局ね、私はそういう人間なの。あのことで誰が私

を非難しようとも、別にいい。だけど、彼女にだけは言いたくない！

「・・・いいえ、自分の口からは、どうしてもいえない」
「どういう意味か、尋ねる。」

すると、藍園は言った。

「私はね、あの人が怖いの。」

「・・・恐くて、仕方がないのよ」

「コワイ？」

藍園が、泉を？

どうして？

「わからない。私には、うまく説明できない。この感情が何なのか、一体なにか、全然わからない。だから、嫌だけどまた嘘をつくしかなかった。」

それでも、こんなこと、一人で抱えていたくなかったから、あなたにだけ伝えることにしたわ。

ねえ、このことは、絶対に言わないで」

「・・・・・・・・・・」

俺は、頷けない。

元々、猫殺しに関心はないから、放っておきたいことだった。けれど、放っておけないだろう。

つまり泉に事実を伝えるか、伝えないか。

その二択を迫られたのであって、俺次第で、どうにでもなってしまうのだ。

不快な気分だ。

いってみれば、藍園優という人間は、哀れだ。

あの「事件」の被害者でもあり、ある意味で共犯者だから。

だからといって自分を否定したくても、憎むべき相手が自分そのものという矛盾を抱えてしまっている。

哀れだね。

全く、腹の立つことだ。

「・・・お願い、何も、言わないで」

沈黙を縫うように、途切れ途切れに、言葉が伝わる。

伝えるのが、精一杯なのだろう。

ともすれば、こんなことをしたくない、という彼女の表れなのだろう。

俺は、ひどく不快だった。

けれど、約束はした。

言わない、という約束。

この選択が、正しいとは思えないのだが。

酷く、不快な気分。

その理由は、ひとつではなかった。

「・・・死ぬ気？」

俺はどこか予感めいたものを持っていた。藍園が、俺にだけ事実を伝えて、学校を休むこと。俺達と会って、全てを話して、どこかへ去って行ったこと。それらの要素が、負の方向に絡み合い、俺の不安に行き着く。

「まさか、言うこと言って、それはねえよな」

だが、藍園は否定する。かすれた声で、忌々しげに呟いた。

「さつきも、言ったでしょう。私は、自分を嫌いこそすれ、傷つけることすらできない、臆病な人間だって。

・・・私が行くところは、氷室美月のかつて住んでいたところ。

あの人の弟が今、どこに住んでいるのか、調べに行くだけ。

安心して。学園祭には、必ず、戻ってくるわ」

「おい・・・!」

車輪の放つ金属音に、思わず受話器を耳から離す。その間に太い糸を引きちぎった音がして、もう声が届くことはなかった。

俺は舌打ちして、ベッドに寝転がった。

実に不快だ。

だから、溜息しか出ない。

「ご飯は？」

下にいる姉の声も、無視する。何回か同じ言葉が聞こえたが、やがて言葉は文句に切り替わり、声はしなくなった。

まどろみの中、いつしか、深い眠りに陥っていた。

* * *

「すると、君は人の記憶を見ることができるのか。興味深いことだね」

そう言って、氷室宗は俺に微笑みかけた。

この男といつ、どこで、どう知り合いになったのかは、もう俺の記憶にはない。ただそこに、落し物という単語が絡んでいたようで、氷室宗はひときわそこに、関心を寄せていた。

つまり、俺が記憶を見る力を持つ、ということを嗅ぎ取ったのだ。「そんなこと、果たして人に信じ切れると思うかい？」

「思えないね。だから、隠しているんだ」

成程、と頬を緩ませる。この若い男の、中性的な顔立ちとは、よく似合いそうな笑顔だと素直に認める。

「しかし、アンタも勘がいいね。ずっと秘密にしておくつもり、だったんだけどさ。」

「・・・初めてだよ。あの力を人に話すのも。人に言って信じてもらえたのも」

「はは、褒め言葉かい？」

「別に」と吐き捨てて、昼下がりのがらんだこの電車、そこに二人が向かい合って、座っていた。車輪の金きり音に、思わず耳を塞ぎたくなる。

けれど、面を向かい合わせたこの男は、平然としていた。

「でも、僕には少しばかり、説明できる」

「どういうことかと、聞く。」

「いや、ちよつと興味深い話だからね。それで、僕の思ったことを、きいてくれるかい？」

人から説明を受けるのも珍しいことなので、俺はうなずく。

「記憶、と言ってもね。ものを覚える、という単純な行為にも、過程はあるんだ。銘記、保存、再生、忘却という四つの要素に分かれるみたいだけど。」

例えば、自分のパソコンにファイルをダウンロードするでしょう。

自分のパソコンに取り入れたファイルに、名前を銘記して区分けする。そうして保存したままのファイルを使うことがあるとする。その時、ファイルを再び開き、再生を行う。ただ、ファイルを取り込みすぎて、パソコンの容量がいっぱいになってしまう。そうすると無意識のうちいらぬファイルを捨てて、忘却する。・・・こうなるかな？

君のそれは特殊で、他人の保持するパソコンにハッキングしてファイルをとりこめる。他人の所有物なら、物からでもファイルを引き出せる。

これが、記憶を読み取る行為の正体だと考える」

「・・・へえ」

俺はただ、彼の話に耳を傾けていた。

「あと、記憶の方法も色々あるんだ。視覚はもちろん、聴覚、触覚、味覚や嗅覚も、記憶として刻まれる。まあ、君の場合は、味覚はわからないが、視覚と聴覚、それに嗅覚のみを再生できるようだね。君、殺された人の記憶を見たことがあるかい？」

俺は否定する。

「実はね、触覚があるのとないのとで、大きく違うんだ。さっきの君の話によると、人の痛みは君自身には感じないみたいだね。でもそれはいいことなんだ。

痛覚は、記憶に残りやすい。もし痛みまでも共感してしまうようなことがあるれば、激痛に精神的なショックを引き起こして君自身も死ぬ。ま、僕の説なんてあてにならないけど、そういうことだ。それが、おそらく君の能力の特色だ」

小刻みに揺れ動く車内で、俺は聞き入っていた。

「・・・なんのことが、難しくってわかりません」

結論は、これ。

中学生にこんな話をされても、よほどの秀才でもない限り、わか

らない。でも、なんとなく話の大筋はつかめる。

宗はまた、頬を緩ませて微笑む。

「君にはまだ理解できなかったか。もう少し説明を加えたかったが、僕にもその自信はない。何しろ、体験したわけじゃないからね。．．．でも、覚えていて欲しいことだ。

君の言う能力の欠点。それを防ぐためにも、その能力のことは理解しなきゃいけないだろうからね。．．．ああ、そうか」

この「今ここで話した」という記憶が壊れたら、元も子もないか。．．．」

「二つ、と言ったな。君の脳に外的なショックを受けてしまうのは仕方がないとして、記憶を引き出しすぎることによる負担の増加。何しろ、人にはない超能力みたいな代物だ。それにかかる負担も大きい。．．．疲労骨折と同じで、間違えると君の脳は破壊される。

君の話に依ることだけど、これだけは、注意したほうがいいよ」

「それくらいは自分でも何となくわかります」

体に訴える疲労は自分でも感じとることはできる。だから適度に控えれば、いいだけの話だ。

そうすれば、記憶破壊は起きない。

走る電車の外は、のどかな風景が広がっていた。青い空に、夏の到来を思わせる入道雲の存在。近くを流れる大きな川が、その下で悠々と流れていた。

「それにしても、惜しい」

不意に宗が呟いた。

「使い道はいくらでもあるのに、君自身が普通の人間として過ごしたいと願う。だから、他人には披露せずに、隠れて落し物の搜索に使っただけとはね。全く、惜しいね」

「別に。それって俺が望むことだし、アンタには口出ししてもらいたくはない」

「．．．でも、賢い選択だとは思っ」

ずっと話しているのに、車内には未だに俺達以外の人間がいない。閉ざされた空間で、宗は言った。

「超能力の存在を認めたら、それこそ社会を混乱させてしまうものだ。だから、隠していたほうがいい。」

結局、みんな同じものじゃないと、社会は納得してくれないものなんだよ」

含みを抱えた言葉に、俺は疑問を感じた。

「つまり、この世界では異常者であってはいけない。そういうことだ」

「何スか、それ？」

また何を言い出すのかと、鼻先で笑う。

「いや、大真面目でいったつもりだけど。うん、冗談半分で聞いてくれてもいい。」

これは、僕のことについての話だからね。大げさに言えば、独り言として捉えてくれてもかまわないさ」

「ああそう」と、座席に思いつき寄りかかる。首を後に向けて、窓の外の景色をぼんやりと眺めていた。

「そもそも、異常なんてカテゴリーはない。これが僕の考えなんだ」

こちらにおいでと呼んでもいない、けれど入道雲は膨らんでいく。遠目に見つめているうちに、外の熱気にやられてしまいそうだ。

「人はね、みんな何かしら異常なんだ」

宗の言葉は、そこから始まった。

「いや、正確に言えば、どこから見ても全くの平均値を保った凡庸な人間は存在しない。だがこの世界は普通でいることを生存の条件とする。だとすれば、人間が世界を生きることが否定されてしまいかねない。これって、矛盾だろうか？」

俺は窓を眺めていた。

「だがその矛盾がまかり通っている。どうしてか。」

それはね、人が表面的には普通であるという演技を行っているからなんだ」

俺は入道雲を眺めていた。

「人の心なんてものはその人より他に知るはずもない。だから、演技している人間を見て、その人は普通だと了承するんだ。演技力が低い人間は、つまり異常の隠し方が下手なだけであって、異常者と

して認知されてしまう。

前者は普通に生きる人間であって、後者は、そうだな。犯罪者とか、知性を持たない子供とか、俗に言う精神異常者、といった類いだろう。

うん、まあこれくらいにしておこう。

もっと深く突き詰めることは、ひとまず止めておく。僕も君も、もう頭が痛いだろうからね。

僕の結論は、要するに、ごく普通の人間はいない。

何ら批判を加えてくれてもかまわないさ。あくまで僕の持論であつて、つつこみどころなんて山ほどあるだろうから。堂々と非難してくれても、構わない」

「それと俺の能力と、なんか関係がある？」

少し突っかかってみる。この男は、よくぞ聞いてくれたとばかり、相好を崩す。

「いいかい、もし君のその力は、人の理解を超えているから異常なんだ。ほら、スプーン曲げとか実際にありえないと、皆思っているだろう？ いやそんな超能力があつてはならない。この普通の世界においてね。

だが君の力は、本当なのであつて、人の前で証明も可能だ。そうしたら、面白いことになる。

普通がまかり通つてきたこの社会を、歴史と共に根底から覆せるんだ。

僕にとっては、痛快なことこの上ないさ」

あきれるほどに、興奮した口調で宗は話す。だが俺には興味が無いことだ。

「……惜しいものだ。いや、そうしたほうが、普通に生きたいという君の理想に沿う形なのだろう。僕も、さつきはあんなことを言つたけれど、普通に生きたい。だから、僕はそれに否定はしないさ」

平行を保っていた車内が、急に傾きだす。どうやら、停車駅に着

くよつだ。

「ああ、着いたか。僕はここで降りるよ。君は？」

「・・・いや、俺は降りない」

告げると、微笑をたたえた宗は、ドアに立って答える。

「最後に一つ、君に話したいことができた」

「・・・」

「僕の異常とは、殺人衝動だ」

長らく閉まっていたドアが開扉する。

「ふふ、こんなことは人には言えないだろう？」

そう残し、蒸し暑い外に一人出て行った。

* * *

まどろみの中から目を開ける。

夢を見ていたのだろうか？

忘れていた記憶を、俺は見つけたらしい。

「・・・」

氷室宗という人物を、追わなくてはいけないのだろうか？

少なくとも、もう一度その真意を問いたくなってきた。

* * *

暗い倉庫に、一人佇んでいた。

おぼろな明かりを頼りに、宗は傷跡を辿る。この傷が、猫によつてつけられたものだど、彼は理解していた。

「・・・」

この中性的な顔立ちの男は、どこか微笑む姿が似合う。そして彼は、また笑みを作った。

「藍園。こんな消えない傷を作るほど殺しちゃあダメだよ」

一人、ほくそ笑む。宗にはこの倉庫で起きた惨劇が、脳裏に浮かんでいた。

赤い絵の具に、ぽつり佇む藍園優の姿。

そして、こちらを向いた時の、呆然とした表情。

宗は、間違はなくこの現場にいた。

偶然なのか、予測していたことなのか、知ることはできないけれど、彼はその時、目の前にいる少女の異常性を、すぐに悟った。

彼女の異常性とは、なにか。

やはり殺人衝動だ。それは、彼と同じ。

しかし氷室宗と決定的に違うものがあつた。

「それ」を実行に移せるか、移せないか。

この違いは、けして一跨ぎで超えられるものではない。つまり、氷室宗には「殺人を犯す」ほどの実行力がないのであつて、彼女にはそれが、確かな形として目の前に存在していた。

違いを見せ付けられた格好の宗は、しかしほくそ笑む。

彼女の姿と、「あの少年」の姿が重なる。

宗と少年とは、いつ知り合つたのかは測るに難い。

けれど、彼らは互いの「異常性」を、知りえていた。

「人が仮面を被っているって？ アンタ面白いよ」

少年はせせら笑い、相手にはしなかった。宗とはちょっとした知り合いなのだが、その経緯は知る術もない。単に意気投合したのかもしれないが、二人はお互いの抱える「異常性」に気付いている。もっぱら人を殺すことに、関心を寄せる部類の人間であった。

それでも、この荒唐無稽な宗の理論に、少年は笑わずにはいられない。中学生に理解できる類のものでもない。

「なあに、気にしなくてもいい。あくまで、持論だからね」

凧にした話を、同じように彼にも伝える。純粹な笑みをたたえていたごく普通の少年は、するところ言った。

「じゃあ、アンタの持つ異常性って、なんだよ」

宗は答える。

「殺人衝動だ」

意外そうな表情で、返す。この優男のどこに、そういった願望が潜んでいるのかと、不思議でたまらない。

けれど少年も、同じような願望は抱いていた。

「面白え面白え。アンタ、病院行けば？ ふつつさ、人に言うかよそんなの！」

マジ引くと付け加えて、少年は年上の男をからかう。けれど男は、にこやかな表情を崩さない。そのうち、少年はあざ笑うことを止めた。

少年は、真剣な顔つきだった。けれども男の、その作り物の笑みが気に食わないだけであって、少年は苛立ちを覚えていた。

「人、ころせんのか？」

率直に問う。けれど、相手は首を横に振るばかりだ。

「できない。僕には無理だ」

「でも人を殺したいって言った」

「そうだよ、恐くて人を殺せない」

大げさに両手を挙げて、やれやれと息をついた。

「だからねえ、僕は非常に困っているんだ。僕の中に在る僕がずっと考えていることなのに、できない。日に日に、その願いは強くなる一方だ。」

だから君が代わりとなつて、人を殺して欲しい。

・・・僕の言うこと、これだけは理解して欲しいな」

宗はずっと、その笑みをたたえていた。まがい物の笑みをいくから見せ付けられたからといって、少年には作偽的なものにしか捉えられない。

男の、そういう演技する態度が気に入らなかった。

だが、何の前触れもなく、少年はあることを発見した。

彼のその笑顔は、「そのために」あるのかと。

少年は気づいた時から、台本を見ていた。

普段親しく接する人間は、本心を偽っている。自分達にもあるはずの異常性を悟られないように仮面をつけて普通であろうとする。

世界が作り出した、「普通」という名前の台本に従い、形式的なだけの生活を同じように繰り返し、決められた演技して、心を曝け出すことを禁じられた。

少年には、あらゆるもの全てがまがいものにしか感じられなかった。偽わられた演劇の中で、自らも台本に従うことを、暗に押し付けられていた。

けれど彼はその演技に没頭することができなかった。

いや、演技をしつつも自分と他人との違いを、はつきりと悟っていた。

人を殺してみたいという願望だけが、誰かに教えられることなく覚えていた。

少年は初め、愕然とした。「これ」は人とは違う。殺人はいけないうことだと。自分の中の異常性を恐れて、必死に消そうとも試みた。

けれどもなぜ人を殺したいと願うのか、原因を考えても答えが出ない。

人を殺したいにも関わらず、そこには何の理由もないのだ。殺人衝動を、合理的に説明できるような明確な動機が、少年にはわからなかった。

ある時、少年は「天命」という言葉を知った。そして、少年は答えを得た。これは「彼にだけ定められた」宿命なのだ。生まれ持った、先天的なものなのだ。

それゆえに、人を殺したい理由は、存在しなかった。加えて、それは目の前に数多くある台本のように、決して表面的なものとはなりえない、彼にとっては唯一の「本心」であった。だから少年は、この異常性を異常として捉えることをやめた。自分の存在が、「人を殺すこと」に収束されている。けれど彼は、それを拒むことはなかった。

そして今、少年は気付いた。この男の見せる笑顔も、自らの異常性を隠すために在るのだと。

その仮面の下で、胎動する殺人意識。

少年はその時点で、彼に対して「偽る」ことを止めた。

「結局、俺とアンタと、同じ性癖を持った人間なのか」

少年はうれしそうに呟いた。

「・・・わかってくれたのかい。有難いことだ」

言って宗は笑った。本当に心の底から沸き起こった笑みを、少年は快く受け入れた。

そうして、彼の口から説明が始まった。

「もう一度尋ねる。人を殺すことはできるかい？」

少年は偽らず、頷いた。

* * *

そうしてあの夜、「事件」は起きた。

「今、どうしているかな・・・」

宗は一人、言葉を漏らした。

声は倉庫にか細く響き渡り、すぐに消えた。

「いや、それよりあの日記を早く取り戻さなくてはな。なるべく早くしないと、いけない」

そう吐き捨て、急ぎ倉庫の明かりを消し、どこともなく去っていった。

ドアを閉め、私は久しぶりに足を踏み入れた自分の家の玄関に、腰を下ろした。

身体中が痛い。

それもそうだろう。この数日間、学校を休んでまでして、氷室宗を探していたのだから。ろくに休んだ覚えがない。更に、彼を探し出すという目的が果たせなかったのだから、徒労という他あるまい。私はその場に転がった。頭上に降りかかる、つけたばかりの淡い光に、しばらく身を委ねていた。沈黙がこの場を流れ、覆い尽くして、私の心を落ち着かせる。

仰向けになって、天井を眺めていた。ここにずっといると、今何時なのか、外で何が起きているのか、さっぱりわからない。

この家はマンションの一角にあるのだけれど、まるで世界から遮断されたようなこの空間に、心が安らぐ。

「・・・風邪引いたらまずいわね」

立ち上がって、五日前から同伴していた鞆を、改めて背負い込む。さつきまでなんとも思わなかった鞆の重さに、眉をひそめる。リビングに入ると、外は穏やかな明かりが空を包んでいた。

鞆を下ろし、窓を開ける。マンションの十階から見下ろす風景に、飽きることはない。ベランダに出て、手すりから俯瞰する。扇ぐ風に、のびっぱなしの髪がたなびいた。

けれど、その風はいくらか冷たい。

世界は昨日、十月を終えた。同時に秋が、急速に、この町から消え去ろうとしていた。

何でも今年は冬の到来がかなり早いとのことらしい。つい一ヶ月前は清涼であった空気は、今では突き放すような寒気を帯びている。けれど、まだ今日は昼時だ。

しばらくはこの柔らかい季節に、感傷に浸っていよう。

十一月一日

スクリーンに映し出される映像には、取るに足らないものばかりだ。購買意欲を削がれるような宣伝、結末が見透かしてしまう陳腐なドラマ番組。私に楽しめといわれても、拷問に近いものがある。昼の時間帯にまともに見られるものといえば、国营放送のニュース番組ぐらいだろう。

あくまで私の偏見かもしれないけれど、局を変えると、報道番組が目についた。

私の知らない町で毎日起きる、犯罪。遠いところで人知れず起きてしまう、犯罪。次々と押し寄せる事件に、この町で起きた二件の事件は、世間の関心を失いつつあるようだった。

一つは四十日前に起きた、店主殺害事件。

一つは二十日前に起きた、教師殺害事件。

二十日周期でサイクルが巡るものだから、きっと今頃第三の事件でも起きているのだろうかと予測してみたのだが、見る限りその気配はない。

このまま何も起きなければいいのだけれど。

でも、そう願って、私は報われるのだろうか？

犯人を捕まえて欲しいとは、思えない。それよりも、無関心でいたい。

そう願って、報われるのだろうか？

巡る日々に、いつしか事件の数々はさび付いて、やがて人々の記憶から忘れ去られていく。

けれど私のような、「関わりのある」人間にとっては、消しゴムで簡単に消えてくれないものだ。

記憶についた傷は、そう単純に忘却できるものではない。あまつ

さえ、ふとしたきっかけで繰り返し再生されて、意識の中心に保存されてしまうのだから。

だから、私にはこれ以上関わってほしくない人たちがいるのだし、凧や黒木には、もう嫌な「事件」を記憶して欲しくなかった。

けれど、それはもう遅い。

彼らは関わってしまったっているのだ。

私がこの数日出ていたのは、私自身の心変わりによるところだ。つまり、彼らが追う「事件」の真相を、私も触れてみたくなったということだ。

あの日、彼らには伝えなかった、もう一つの推測。

氷室宗が、「事件の共犯者」であるということは、私にとって推測の域を出ない。けれど、私は見ているのだ。

背後から殴られる前に、ほんの一瞬振り向いた時に。

確証は持てなかった。けれど、追ってみる価値はあるのだ。

「・・・今どこにいるんだろう」

不意に呟いた。テレビを消し、部屋に戻ってひとまず眠ることにした。

明日からは学園祭の準備だ。今のうちに体力回復に努めることにしよう。

* * *

「だからこの位置には置いちゃいけないんだって。そうするとイスの数が足りなくなるだろ」

金曜日の午後、担任である三村の授業を割いて、俺達はクラスの出し物について話し込んでいた。前担任の福原の起こしたあの一件で、一時は欠席した生徒が大半を占めていたが、現在は八割の生徒が戻っていた。

もちろん藍園は、少ししたら戻ってくる。学園祭にまでは、おそらく全員が集まるだろう。他の生徒達の間にも、その期待が高まっ

ていた。

二十日前の事件を、みんな忘れ去ろうとしている。

けれどそれは意図的に隠し通しているのであり、蒸し返される可能性もあるのだ。

まあ今は、この学園祭だけに、集中しよう。

ふと、実行委員の天美が問題点を指摘する。

「えと、この計算だと机の数があと五十個必要なんです！ どうしましよっ？」

三秒後、計算そのものが間違っていたことが判明し、一件落着。

とまあ、話し合いは緩やかに進んでいった。

十一月二日

学園祭の準備を早めに切り上げ、不動たちと暇つぶしに

「ケケ、俺の勝ちダ。テメー後で百円ヨコセ！」

賭けトランプに興じていた。

「俺もう金ない。っーか賭けんのやめない？」

市村広は気が気でない。しかし三人で大貧民というのだから、革命の嵐が吹き荒れてしょうがない。でも全員が一回くらいは負けていいはずなのだが、なぜか不動だけ一人勝ち状態が続いている。

どうせあからさまなイカサマだろう。

「気付くのおっせーナア。ヒヤハハ！」

こういう奴なんだから、仕方がない。まあイカサマに気付かない俺達も悪いが。

「面白くねーよ。なあ風、そもそもこれ、犯罪だろ」

市村は不満げな顔で言う。

「麻雀で賭けはまずいからね。トランプはどうだか知らないけどさ」
そのとき、教室に体格のいい男が入ってきた。

「何やってるお前ら！ 早く帰れ！」

巡回中の小牧に怒鳴られたら、アウト。体育科の教師だけあって、今日も張りのある怒声が、そこらへんにいる俺達の鼓膜を突き破る。

うん、うるさいから帰ろう。

「チエ、まあいっか」

どこか不満げに呟く不動。

「ま、金は取らないでヤルヨ」

元々ナシだろ。イカサマしやがったくせに。

帰る時間帯も、歩く足以外は暇をもてあましていたので、他愛も

ない話をする。

「へえ、皆勤。市村が？」

「そつだ」

でも全く以って興味なしの俺達。

「冗談だけどさ。」

さて、皆勤というのは遅刻ナシ欠席ナシというのを一年間続ける、実は非常に難易度の高い競技スポーツのことだ。この偉大なる記録を達成するには忍耐力、サボタージュという誘惑にも動じない強おい精神力を要求される。

もちろん、怪我を負って欠席リタイア、といった類は論外。突然のアクシデントにも切り抜けるほどの、強運の持ち主でなくてはいけない。

例えば、間口修まぐちしゅう

彼は神に愛された少年だ。

なぜかというところ、この人物は何と三回も交通事故に遭っているが、今なお無傷で皆勤を狙う資格を有してるのだ。

でもそれが三回とも自分の乗ったバイクでという、そもそも校則禁止事項にも堂々違反していることなので、後日停学を受けることは目に見えている。

免停食らうのもご愛嬌。

どうせ他人のことに興味ないし。

「冗談だけど。」

「市村がいまのところ、皆勤。で俺は、一回遅刻だから・・・精勤か」

一回だけ、どうでもいい日に俺は遅刻をしたことを思い出す。

「皆勤ついたら何かくれるんダロ？」

「ああ、くれることはくれるけどさ・・・」

でもそれって、りんごジュース三本という安上がりなものだけだ。

帰宅してまっさきに手を入れる郵便ポスト。そこに入っていたの

は、何処か見覚えのある紙切れだった。

「・・・三枚目ゲット」

俺はその内容が、容易に推察できた。ほんの少し悪態をついて、玄関の扉を乱暴に閉めた。

* * *

八月十一日

弟の宗から連絡が来た。

なんでも、今度引越すとのこと。さしあたって理由が思い浮かばないので、住所を変える理由を尋ねると、「気分が変わった」からだという。

やはり、弟の言動は私には理解できない

物心ついたときからずっとそっだ。

今更。

かといって、何とかして（理解しよう）、ということにはならない。

私に何かできる、ということには（ならない）。

無力無気力の私。

八月十二日

また昨日の記事に書き忘れがでてしまった。

三日前と同質の愚考を犯してしまうとは、情けない。

ともあれ、愚痴を連ねるとページが足りなくなる。このくらいに留めておこう。

弟が、今度私の家を見学に来るらしい。

泊まりにくるとか。

珍しかりけるかな。

さて今日は教え子のことについて書こう。

Aという名の彼女は、私の受け持つクラスの生徒だ。
(一行空白)

なんといつていいのか、私はAを哀れに思うのだ。
一般的な法則として、人間は心が弱いということか。
どうでもいい話。

今年は・・歳の誕生日を十一月二十四日に迎える。
いい気じゃない。

惨めだね。

そう、哀れだ。

* * *

読む限り、この表裏の記述に出てくる人物は、二人。

一人は氷室宗。

そしてもう一人は、Aという少女。「彼女」という呼称を使っているからね。

さて、この記述は、十一日と十二日。

「事件」の起こる、数日前だ。

藍園の話を、もう一度思い出そう。

彼女が倉庫内で猫を殺し、氷室美月に呼び出されたのが、ちょうどその頃だ。

氷室は事実を知りえていた、しかし、罰することはしなかった。

十二日の記事に目を戻そう。

この日、氷室が教え子のことを書いた背景、それはなんだろうか？
加えて、「哀れ」と表現した理由とは？

二つの事実が、結びつくだろうか。

つまり、藍園が呼び出された事実と、氷室が哀れみを覚えた事実。
そう、このAという少女は、藍園だ。

俺が言いたいの、そこ。

あの店主や、福原の例を思い出さなくてはいけない。

それは、日記に書かれた人物がいずれも殺害されている、という
ひどく馬鹿らしい推測だ。

かといって、俺にはどうすることもできない。

藍園の居場所なんて知るはずもないし、彼女は学校を休んでいる。
携帯の連絡すらも、絶っているのだから。

* * *

何もできないまま、週末は過ぎ去った。

幸い、俺の危惧した事態は起こらず、月曜日、藍園は普段どおりに登校。そのまま、何事もなく三日経った。

福原のように、「日記に書かれた人物が殺される」という、荒唐無稽な仮定は、外れたのかもしれない。

仮定は、それ自体が正解とはいえない。間違うこともある。

俺が仮定したところで、所詮そんなものだろう。

だが、郵便受けに送られた三枚目には、もう一人の人物が登場している。

氷室宗。「事件」の被害者の弟だ。

つまり、仮定が成り立ってしまったのなら、彼が人知れず命を奪われてしまう可能性だって、考えられる。その場合だと、藍園にも同じく、可能性が残りえてしまう。

だが、それはあくまで俺の推測だ。

推測は、それ自体が正解とはいえない。

いずれにしろ、氷室宗という人物を、今は調べるべきなのだろう。先に述べたとおり。

* * *

月曜日。登校してきた藍園に、俺は日記の話を伝える。

彼女は、すると何かを呟いた。

小さな声は、俺には聞き取れない。

まるでそう、自分にはどうでもいい、というような、態度。
藍園は弟の居場所がつかめなかったと言いつつ、またどこかへと去っていった。

火曜日、藍園は欠席。担任の三村に話を聞くと、風邪だという。
委員会活動は、この日が最後。

水曜日、藍園は登校。何事もなく一日が過ぎる。
町は平穏であった。不動が賭け大貧民をやるうともちかけるけれど、断る。

木曜日、商店街で泉と会う。
そのとき、なぜかコンビニの店長と話込んでいた。

十一月五日・火曜日

学園祭前で最後の委員会活動に、相変わらず本の整理という退屈な仕事を押し付けられていた。

「キミ、どうしてそう変わってるの」
仕事をサボる委員長に、そう揶揄される。
唐突にも程がある。

「いきなり何ですか。ヒマなら猫と追いかけてっこしててください」
嫌。この前かりんとうごとと噛み付かれたから

ああ、既に遊んでいたのか。
「なら仕事を手伝ってくださいよ。今日の当番、俺と委員長だけなんですよ」

「嫌」

「何ですか？」

「質問に答えてないから」

つと、ひとさし指を以って俺を指す。

「質問て？」

「なにゆえに凧和也が変人^{へんじん}であるか」

「変人、ていう箇所だけ強調しないで下さい」

「さ、答えて」人差し指が、反転して手のひらに変わって、俺にどうぞとぞと表現する。はて、この質問に、真面目に答えれば、話は済むだろうか？ 委員長のことだから、回答したらきつと解説まで加えられるに違いない。

けれど無視すればするで、よけい働かなくなることは目に見えている。

じゃあ回答。

「気のせいだと思いますよ」

会話、終了。

「気のせいにしては困るわね」

しかし相手は食い下がる。

どうしても俺を変人にしたてあげたいらしい。

「要するに、気付いていないのかしら。まあいいわ。あなたの何処が変人なのか、この私がいじぎきに指摘してあげるわ。

それはあなたの態度よ。いいえ、いつもあなたは、第三者としての立場から、物事を考えているように思えるの」

「ああそうですか」

適当に受け流す。けれど、話としては興味深い。

「もちろん、人と接する限り、常にその立場でいられるはずはない。でもね、あなたはどこか、そういう態度をとろうとする。傍観していたいという意思を、あなたには感じるわ。

孤立しようというんじゃない。関わりは持つけれど、心の中では他人と一定の距離を保っている。そう思わないかしら？」

「なんだか珍しい。何の前触れもなくボケるあの委員長が、今度はかりは正当なことをおっしゃっているではないか。

「・・・で、どう？ 演劇部のコンドウさんの台詞なんだけど」

成程、演技だったか。

「あ、変人って言うてごめんなさい。確かに風は変態だけど、変人というほどじゃあないわよ」
「どっちも御免です」

* * *

さて、他人の記憶を覗く時、常に第三者の視点で俺は見ている。だから、自然とそういう性格になってしまいうらしい。物事を考えるスタンスも、第三者としてであるらしい。

記憶を少し見れば、その人の性格は判り得るものだ。相手の「そういう」一面をも、覗けてしまう訳で。

普段俺と接する時と、別人のような行動を記憶の中でとる人間も、いるのであつて。

大抵は、腹黒い奴だな、と済ませるのだけれど。

何人も記憶を覗いてしまうと、いつしか人間不信に陥ってしまう訳で。

だから、必然的に俺は、傍観者になりたいと願うのであつて。

「事件」に対する、今までの行動も、そう。

俺は係わり合いを持ってはいるけれど、心では第三者でありたいと願う。

いつだって、そう。

* * *

ぴんぽん、繰り返し、ぴんぽん、押す。
でも出ない。

「あつれえ？ おかしいなー」

藍園の家の前、泉は不機嫌そうな顔つきで尋ねてきた。聞きたいことが山をなす、とはいうけれど、それ以前に当事者がいないとは納得がいかない。ひよっとしたら、まだ帰っていないのかと考えたりするけれど、かれこれ十日たっている。

メールも送ってみたけれど、ただの一通も返信なし。

そもそも彼女が、藍園のアドレスを覚えていたのは、本当に不思議なことだけれど。しかし覚えている。登録されている。何ら、不思議でもない。

さて、がんがん、叩く。

「おい。いないならいないって返事してよ！」

非常手段を使う泉。これも不思議、彼女には羞恥心という単語を知らない。何ら、不思議じゃなくもない。

晩秋の季節、吹きさらしの廊下に、この寒さが舞い降りる。外は闇。空は曇。

昼間だったら、見晴らしがいいのだろう。

でも下を見るのも恐くて、この人はさっきからドアにばかり向いていた。

「アンタ、どうしたね？」

点滅を繰り返す電灯の下買い物袋を抱えたそれできて皮下脂肪を蓄えたオバサンが廊下の幅を取って突っ立っていた。

「その人に会いに来たんかね。無駄だよ」

一瞬だけ、呆けた顔を見せる。なしてか、問いたてる。

「だからあの子、今日は戻らないのよ。たまにどっかに行っ たつき

り、朝まで戻らないことがあってねえ。おばさん、ちょっと心配だわぁ……」

手を口元に持ってきて、いかにもといった仕草をとる。けれど、心から心配しているという気ではない。

「あの、それはどうしてなんですか」再び、といたてる。

「ん？」

「親は、どうして……」

しかし、口を無理矢理に押さえて、喋ることをとめる。言いかけで、勘が働いたのだ。

知っていたのだろうか。

目の前にある、1012号室のプレートに刻まれている名前を、おそらくは見て。

一人しか、載っていない。

つまり、ここには一人で暮らしている、ということ。

「いえ……なんでもありません」

気が引けて、ちょっとばかり困り顔だ。

「ふうん、アンタも知っているのかい。なら、その質問はそこで終わり。人の事情なぞ、きいちや悪いだろ？」

言って、おばさんは呵呵大笑する。

「……ま、一言だけ話してもよくなってよ。あの子の母親は、亡くなっている。そんでもって、父親は、もうあの子とは関係なし。ようするに、帰ってはこない、ってこと」

* * *

徘徊を、まるで儀式のように執り行うのは、まぎれもなく私だ。けれど、なぜ自分がこんな行為に踏み切るのか、思考しても、答えが出ない。

寒空の覆う夜、私は川のそばのひっそりとした公園に、しばらく佇んでいた。すぐそばには緩やかな流れを見渡せる。けれどそこに

は、転落防止用の、凝った作りの手すりが敷かれていた。

大きな広場は、その手すりを中心として、半円に切り取られた形をしていた。階段状にもなっているため、周囲に放射するほど、段差を上ることになる。その途中の段差に、私は腰掛けていた。

熱を失って久しい空気を、吸い込むごとに体温を奪っていく。心なしか、私の身体が重く、鈍く感じられた。

このところ調子が悪いようだ。
どうしてだろうか。

無理を重ねてしまったのだろうか。

別に、自分のことはどうだっていいのだけれど。

ぼんやりと眺めていた。見下ろす川は、地理学的には河口に位置している。だから、磯の香りがするのもうなずける。

暗闇に染まり、黒く濁る対岸にあるのは、例の埋立地だ。そこに大きな倉庫は、独り取り残されている。

確か、再開発計画が頓挫したままだというけれど。

今は、知らない。

「・・・明かりだ」

倉庫に灯る、小さな点。埋立地という、辺りに光のない世界にあつて、光は静かだった。

「誰か、またそこに来ているんだ」

人に言うまでもなく、呟いた。言葉は突き刺すような風の前にかき消され、私は深くうつむいた。

あの場所に来るのは、黒木くらのものだろう。すると、猫に餌を与えているのだろうか。

対岸の私に、知る術もないことだけれど。

妙に家に戻る気分になって、ふらり自分の住処へと帰ってきた。

玄関の前には、当然誰もいなかった。

倉庫にいる猫の名前は「ちゃーこ」。首にだらり、ぶら下げた鈴の裏にある小さな名札。そのちっちゃなところに、細い鉛筆で書いたような「ちゃーこ」という文字がある。だから、「ちゃーこ」。今、名前を呼んで見よう。

「ちゃーこ」

うん、どこからか忍び寄って、足元にスタンバイ。ごはんはまだかと、大きく開いた目が訴える。

「ごめん、遅くなった？」

餌を皿にのせて、泉はちゃーこに問いかける。さっそく我を忘れて目一杯ほおぶるこの生き物に、答える口はない。その容姿に、仕草に、思わず頬が緩む。

でも、毎日エサをあげなきゃいけないのも、楽じゃないなあ・・・

がつつく小さな猫をよそに、いつものようにメールを打ち始める。この時間帯はいつも倉庫に来ているので、ずいぶんと暇をもてあます。一人でボーっとしているのも寂しいので、時間つぶしくらいにメールチェックをしていたのだけれど、相変わらず藍園からの返事がない。

「どっこいっちゃったのかなー・・・」

首をぽきぽき、鳴らす。小さな骨のきしみが、瞬く間に倉庫に広がって、また別の音が返る。

「あれ、今日も・・・？」

泉は顔を上げて、うず高く積もったコンクリートの向こうに焦点を合わせる。

「・・・ん？ 邪魔したかな」

「いえ、別に構いませんよ」

若い男は、「そうか、それならいい」と、また壁に向かい合う。

傷ついた壁に手を合わせ、静かに目を閉じていた。

その傷を見るといつも、悲しい気持ちになるのだけれど。

今はほんのちよつとだけ、この人に共感を覚えた。

いつものことだが、何をしているのか、は聞いたりしない。

たまに来る人、とだけの印象で、それで十分だった。

作業を行っていたクラス全員が、一度に視線を集める。

「いー加減さあ、テープルの配置ぐらい間違えんなよボケ！」

こんな具合にやたら怒りっぽい声の主は、確か吉木という吹奏楽部の男子生徒で。

「ひいー！ ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

で、怒鳴られているのはまたしても実行委員の天美。

今にも泣きそうな彼女を見て、大半の生徒が納得して作業に戻る。

「なんだ、またか」

誰一人として庇おうとはしない。

奴が失敗するのはいつものことだからね。

馴れっつて怖いな。

「ケケケ、ガン無視かよ！」

卑下た笑い声が隣に。そいつは不動。高嶋や俺とよくつるむ悪友つていうのは、コイツのことだ。

悪友とは、きこえが良いか。

とことん性格悪いし。

「オイ天美、グズグズすんナ。テープ足りネーから持って来イヨ」

「ひいひい！」

ドスをきかせるものだから、彼女は怯えてしょうがない。

「不動、テープはこっちにある」

俺は近くにあつたのを不動に投げた。

「ウス、サンキュー」

「ん？」

作業に取り組みながら、考える。

俺達、今日は何をしているんだろう。

そつだ、学園祭の準備を仕上げている。

そつだ、今日は当日だ。

十一月十日

今日一日だけ、学校が熱気に溢れかえり、アホになる。その中で俺達のクラスは、教室で喫茶店を執り行っていた。

まあ、開店早々からドジのフルコースを披露するアホが約一人、足を引つ張ってはいたが。

その一人は仕方ないので、サンドイッチマン 広告塔として出張宣伝に出て行く。するとどうしたことが、客足が増えていった。

「風、ウーロン茶が空になった」

「わかった」

店の隣、小さな空き教室で準備にとりかかる。小型の冷蔵庫にしまっていたペットボトルから一本、冷えたものを取り出す。

「コップある？」俺は尋ねた。

「ううん、足りない」藍園は即答する。彼女は二人いる実行委員の内の一人名だ。もう一名が今は外で宣伝（見せしめ）中なので、彼女がこの模擬店を取り仕切っていた。

「・・・わかった、ダンボールあけるね」

「いいよ」

同意を得て、机の下の茶色い箱をこじ開ける。その間にも、客は途切れることなく教室を訪れる。

「市村、伊地知。オーダーをとってきて」

「了解」と二人は仮設の厨房から出た。不動、吉木らは午後から担当なので、残りは久村と女子の舟木、俺で注文を聞いて、お茶と菓子を出さなくてはいけない。タスクを手際よくこなし、しばらくして接客についていた高嶋がキッチンに戻ってきた。

「風、交代して」

「時間か」手を止めて、エプロンを脱ぐ。オーダー表を受け取り、空き教室を出た。

いったん廊下に出たところで、思わぬ人物と顔を合わせた。

「お、いたいた」

「・・・お前か」

別の高校の制服を着た泉が、他の女子生徒を引き連れていた。

「お、凧！ 久しぶりだねえ」

懐かしい顔ぶれが揃っていた。中学時代の同級生が、一様に集まっている。

教室に招待してみると、当番の奴らの何人かが歓声を上げた。

「どうしたの？」

担任の三村はぼかんと口を開けたまま、状況がのみこめない模様。実は、神谷町に中学は一つしかなく、別の高校にいても見知った生徒が多い。第一校舎と第二の違いこそあれど、俺もそれに洩れず、神谷中学出身だ。

かといって、思い出なんてものはあまりないけど。

思い出しにくい、というのだろうか。

まあいいさ。

ニット帽を深々とかぶる一人の男に、注文をとる。

「ご注文、何でしょうか？」

男はしばらくメニューを凝視して、「アイスコーヒー」とだけ答えた。

どこか聞き覚えのある声だ。

けれど、忙しさにかまけて、思案する余裕はない。続けて俺は、

泉のテーブルに向かった。

「よ、少年」

「坂下か。久しぶりだな」

中学時代では頭の良かったこの少女は、相変わらず黒縁の眼鏡をかけている。見た目も変わり映えがない。

「さっき天美に会ったんだけどさ、アレ一人でやらせて大丈夫なの

「？」

「どういうこと？」

坂下はさつぱり、といった風だ。

「何度も転んで、なんか泣きそうだったし。かわいそうだったよ」

「広告が汚れて読み取れなかったしねえ」

「それならいつものことだよ」

相変わらずだねえ、と二人は苦笑いする。

「・・・ま、アイツも結構さ、頑張ってくれてる。なんだかんだ言つて、欠席してた奴ら呼び戻したのも、殆ど天美のおかげだし」

「あれ、そうなの？」

泉が聞いた。

「ほら、十月に起きた窃盗事件の犯人がウチの教師だって大騒ぎになつただろ？ あの騒ぎで、休む奴が出てさ、学園祭の出し物も中止に追い込まれそうになつたんだけど・・・」

実行委員の藍園の欠席は、確かに痛手ではあつた。

しかしそのあいだ天美は、三村を説得して、彼女を通じて何とか学校側から許可をもらったのだという。

ただでさえ登校拒否を続ける生徒達を呼びつけるのに大変だといふのに。彼女なりに、学園祭にかける思いはあるのだろう。

「一生懸命なんだね。そこも、相変わらず、かな？」

「それしか取り柄がないぞ」

でも、感謝くらいはしているさ。

「で、注文は？」

「あの男の人と同じアイスコーヒー、お願いね」

つとに疑問が手に転がってくる。

「男って？」

「ほら、あの人。ニット帽をかぶった」と指をさしたその先に、男は静かに目を閉じていた。

「知り合い？」

俺は泉に聞いた。首を縦にふり、応える。

「あの倉庫でたまに会う、くらいかな。ちょっと意外だね」
「ふうん」

適当に受け流して、さっさとキッチンに戻っていった。

模擬店の当番を交代し、午後に入ってから俺は暇をもてあましていた。ひとまずコンタクトを入れ替えて、トイレから出たところで、近くの教室の中をのぞく。

射的コーナーをやっていたようだが、見てはいけないものを捉えてしまう。

「いやっほおおおい！」

担任の三村が的を当てて喜んでいた。

その隣にいた親子連れの客の白い視線にも気付かない。あまりの空気の読めなさに、店員の生徒達は呆れていた。

何を考えているんだか。

「・・・つて、え？ 学校の人は景品がもらえないの？」

がつくし肩を落とし、まるで人生の敗者さながらふらふらと店を出て行った。

恥さらしにもほどがあるね。

「つたくもお・・・」

見ていて滑稽なだけけれど、いかんせん「あれ」がクラスの担任なのだから、頭が痛くなる。

いつものように、「冗談じゃなくって。

ホントに痛い。

「頭を叩かないで下さい」

「少年、仕事を手伝いなさい」

背後にはげんこつをつくった委員長が。

「またなんですか？ 仕事って、今日はないはずじゃあ・・・」

「何を聞いていたの。あなたの耳は右から左にちくわでも通っているのかしら？」

それはまた大層なちくわだな。

「一言も聞いてませんよ」

「いいえ、聞いた」

「聞いてません」

「・・・ぼそぼそ（馬鹿八死ンデモ直ラナイ）」

「聞こえてますよ」

「あら、やっぱり聞いていたのね。嘘はいけないわよ」

「・・・こんな子供じみた会話に乗せられる俺も俺だな。

くすくすと嫌味な笑いを浮かべる委員長も調子に乗ってるけどさ。

もういいや。何でもさ。

このあと、委員長と小田島と俺の三人は、校門の前ですつと落し物の管理を行うことになった。このメンバーは根本的に、タイプが違うので、共通の話題がない。

でもまあ、ものは試してみるものだ。

三人で会話のキャッチボールを始めた。

なぜかボールがスタンドインしてしまった。

「・・・」

しょうがないので、落とし物からこっさり、記憶を見ることにした。

うまくいけば、持ち主を探しだせるだろう。

すると、出てきたのは酔っ払いの口からナニが出ている映像だった。

「・・・うええ・・・」

こっちも気分を悪くする。

たまにこういう爆弾のような記憶が垣間見られるのだけれど。

だからむやみに、人の記憶を見たくないんだけどさ。

結局、学園祭が終わる時刻まで三人は、俺が不動から借りたトラップに興じていた。もちろん、イカサマばかりしたけどね。

気付かなかった二人も二人だけだ。

時間が来て、俺は教室に戻る。廊下に居残る人もまばらで、一様に校舎の入口へと向かう。それを尻目に、上に向かった。

と、そこに疲労の色をたたえた監園がいた。

「先生は？」

首を振って答える。

「いない。みんなはここと空き教室のどっちかにいるんだけど・・・」

不意に横を見やると、サンドイッチ用の看板が、無残な姿を露呈していた。確かこれは、天美がずっとつけていたものだ。

「何でも、子供にいたずらされたりして。最後はベソかきながら戻ってきたわ」

重い足取りで看板を持ち上げ、ふらついた足取りで空き教室へ戻ろうとする。だが一歩踏み出したところで、また振り返った。

「片付け、お願いね・・・」

「わーってる」

俺は適当に答えて、店じまいを手伝うことにした。

さて、学校の恥さらしは今、なくした時計を探しに、遺失物管理所にいた。

「ねえ、私の時計、知らないの？ いいかげん言いなさい！ 隠してないわよね」

ものすごい剣幕で委員長を責め立てる。この二人、珍しい組み合わせだね。

「知りません」

「答えなさい！」

「I don't know」

「(同上)！」

「我不知道」

「日本語で答えなさい！」

「帰れ」

そんなやりとりを延々と続けていた。

あの人、自分の時計はいつもポケットに入れているのに、忘れたのかな？

もういいや、何でもぞ。

教壇に立って、実行委員の天美が叫んだ。

「皆さん、今日一日お疲れ様でした!!」

湧き上がる歓声に、ねぎらいの拍手が、クラスを包み込む。

「ええつと、片付けの内容は、先程申し上げたとおりです。でもひとまず、ご苦労様でした!・・・正直言うと、ぜんっぜん楽しめなかつたけどさ」

最後の本音は華麗にスルーだとして、このクラスで学園祭を成功させたのは奇跡ととらえて、まず誤りはない。まばらだった生徒達が、今は全員がここに集まっているのだからね。

そういうことで、全員が紙コップを手に、りんごジュースを一気に飲み干す。乾杯というものだけれど、どうにも安上がりなものだ。不意に、辺りを確認する市村。

「どした?」

「・・・風、先生は見なかった? あの人がいないと俺、帰れんのだが」

「ほつとけ」

人事のように呟いた。

案の定、片付けが終わるころには、既に夜が更けていた。当たり前なのかもしれないけれど、巷ではまだまだ、殺人事件が騒がれている。早めに帰宅するのは、学校側の指示によるものだった。

* * *

疲労を訴えながら、バスに揺られる。けども、眠ることはなかった。

ぼんやりと眺めていた。流れるような景色を、さしたる感傷もなく、呆けて見つめている。

窓ガラスに触れると、冷たい。

おそらく外は冷え込んでいるのだろう、冬が降りているのだろう。俺の意思とは関係なく、日々は過ぎ去ってゆく。

その日々を、記憶して。

その日々を、書き記す。

行為は延々と続くのであって、止むことはない。その全てを記すことはできない。

だが記したところで、糧となるのでもない。

そう、日記を書くことそのものが、俺には無意味に思えるのだ。

無駄で、無意味で、不毛であって、退屈な行為だ。

偏見なのかもしれないけれど。

存在する、意味を感じない。

どうだろう、この暴論が、まかり通っていいだろうか？

「お前は」

不意に、前の席に座る一人の少女に、話しかける。

「ん？」

「だから、お前だよ。なんでここにいるんだ」

泉は答えた。

「んーいいところを聞きましたねえ。キミのところの学園祭に行つてからね、友達の家遊びにいったんだあ」

ほんわかと愉しそうに、快活に話す。他にすることもないので、

彼女の話をずっと耳に聞き入れる。でも俺の耳は委員長曰く、ちくわなのだそうだ。右から左に、言葉が筒抜け、まるで頭に入らない。

入れる必要もないと思うけどさ。

「・・・お疲れ？」

「別に」

いつものように言う。けれど、相手はそうだと思わないようだ。

「スマンスマン。いやあ、学園祭だから疲れるわな。

みんなけっこう、がんばっていたよね」

「そう？」

「なんていうか、うん。ウチが知る限りでつてこと。中学の時とは大違いだなあって。藍園さんも、あんなに元気そうだったし」
「ふうん」

必要最小限の反応だけで済みます。

「でも、そこであの人に会ったのは、奇遇といつかなんといつかね」
「」

「・・・誰かに会ったつて？」

「うん」こくり、うなづく。「さっきも話したと思うけど倉庫によく来る人だよ。なにやら傷跡を調べたりしてさ」

「呉竹か」

「ううん、知らない人。見た感じだと、うちらとはそれほど、年が離れてないっばいけどさ」

「・・・ふうん」

聞き入れて、バスが止まった。

動きだすとき、乗客は俺達以外に誰もいなくなった。

「みんなのこと覚えてた？」

「・・・坂下ならね。後の奴らはそれほど」

頬をついて、泉はうんうん、うなる。

「じゃあじゃあ、中学の頃の思い出とか、覚えてる？」

「そんなの、覚えちゃいないさ」

「本当に？」

「本当」

「・・・」

「そんな顔をするな。まあ、お前のことも、覚えちゃいけないけどさ」手を振って示す。けれど、不機嫌そうにほっぺを膨らませるばかりだ。

そして、声を張り上げた。

「いいかげん思い出そうよー！」

「なんで？」

「人の事を忘れていいわけないでしょ」

「……………」

何も、答えない。頭を掻いて、横を向くけれど、俺に答える気力もない。根こそぎ学園祭に使い果たしたからね。

でも、相手は引き下がらない。

「だいたいさ、そんな簡単に人の事を忘れるはずないよ。キミはウチのことを忘れたって、いつか言ってたけど、そんなのおかしい。ありえないよ？」

わかる？ 誰だって、そう。憶えてないって言われると、それっでもものすごく悲しいよ……？」

「だが知らない」

俺はそれでも、相手と向き合う。少女は険悪そうに、けれどさらに食いかかる。

「じゃ、キミはそのまま思い出さなくてもいいって、言えるんだ。酷いよ」

「いいじゃん。別にアンタのことをすっかり忘れたんじゃないからさ。つーか俺、ここで降りるから」

立ち上がり、タイミングよく停車したバスを降りる。背後で泉が、何か非難していたけれど、思い切り無視を決め込んで、さつさと家路に着いた。

気付いてはいたけれど、今日は疲れのあまり、身体から緊張がとれずに、眠れないでいた。ヒマだから、パソコンを開いてはいたけれど、ほんとうに暇潰しにしかならない。

それでも長く画面を見続けていると、目が疲労を訴える。急にまぶたが重くなる。

「そろそろ寝るか」

電源をけして、さつさと布団に転がることにした。

かちこち、と無機質に音を出す、この部屋はしんとしていた。

* * *

ふいに、さつき泉の吐き捨てた言葉が、耳の中で復唱する。

そんな簡単に人の事を忘れるはずない、と。

「思い出せない、とでも？」

でも、できない。顔と、名前と、性格は、情報として知りえている。けれど、彼女にしる他のやつらにしる、どこで知り合ったのか、どう関わっていたのか。覚えていないのは、その起源から現在へと連綿と続くはずの思い出。高校の奴らは、確かに覚えている。見知っているのだけれど、それ以前の俺の記憶は、とても曖昧で、あやふやだ。

「ある特定の人物だけ、存在そのものまで忘れてしまう」というのは、どう見ても異常だ。記憶の仕方が、他の人間と俺とで、違うというのだろうか？

ありえるかもしれない。

ありえていいのかもしれない。

なぜなら、俺は「他人の持っている記憶を記憶する」のだから。

人の記憶を、再生する、ということとは、自分もそれを見て記憶に保存してしまう、ということ。無意識下であるのならともかく、俺の能力は意識的に記憶を読むのだから、保存する記憶の量も、人の数倍も多い。

人の余計な記憶まで入れてしまうのだから、俺は必要ない記憶を効率よく忘却しなければ、脳の処理が追いつかない。

それでは、俺の思う不必要な記憶とは、何だろう？

自分なら、知りえているだろう。

退屈な記憶。

退屈な日常。

退屈な生活。

経験したことを、どうでもいいと、すぐに忘却する。人の記憶を読めば読むほど、その行為は繰り返される。

何度も。

そう、何度も。人より早い速度で、忘却しては更新される。

だから、泉と再会した、その時点で、俺はもう百年も会っていないような感覚に、捉われていたのだ。

もう今更、アイツと関わった一年前の記憶なんて、海の中から日記を探し出すほど、無理なことだろう。

「違う」

幻聴のような、言葉が現れる。

「それでも、人が記憶する量は、お前が思っているより、ずっと多い。お前がその力を使うことを極力避けていれば、尚更だ。だから、生まれてからの、全時間の記憶は、まだお前の中に留まっているはずだ」

「でも忘れたんだ」

「いいや、忘れたというのは、お前が見た限りの記憶でのことだ。つまり、忘れたという記憶は、表面には見えないだけであって、ふとしたきっかけで、またすぐに再生されるよ」

「それは、偶然で、だろう?」

「いいや、お前の場合は必然にできる。自分の深層に眠る記憶を、探ってみればいいことだ。一年前の記憶なぞ、すぐにでも出てくるだろう」

「探しても無意味だよ。だってその記憶は、取るに足らなくて、消したからね。それは、アンタの日記の中身くらい、無意味で退屈なものだ」

だが、言葉は否定する。

「どうしてそう言い切れる? 例えば、お前が泉と再会して、『再会した』と、思わなかったのか?」

「いや。思い出す、というより初めて会った、という感覚だった。だから、元々は覚えていなかった。」

日記と同じだ。昔の日記を見て、覚えていない事だってあるだろう? 要するにそれは、取るに足らない事だった」

「はは、おかしな暴論だな」

言葉は笑う。

「確かに、日記に書かれる内容は、毎日が劇場の脚本だということにはならない。そりゃあ、毎日三流ドラマのような展開を書き込む輩も存在するが、普通書かれる内容は、今日は晴れました、くらいものだろう。そんなの後から見ても、覚えちゃいない。」

だがな、それでも脳の中に残る記憶は、それとは違う。

人は、『完全に忘却する』ことはないのだよ。

unnecessary記憶と判断しても、消えて二度と思い出せないことは、

ありえない。たとえ忘却する速度が速いお前であっても、だ」

言葉は続く。

「それに、お前が切り捨てる日常は、私には不必要とは思えないがね」

「何を言っている？」

「決まっていることだ。お前がくだらないと思っっている行為そのものに、意味はあるということだ。」

もしお前の言うように、くだらない記憶はすぐ忘れるというのなら、あの時なぜ、思い出せたんだ？」

「いつのことだよ」

「・・・お前が、泉と再会して、事件の話をしたときのことだ。覚えてるのか？」

手を頭に寄せて、考える。

それは、成程覚えている。

回想話が十月に入って、一度何があったのか、つながりを忘れてしまったことがあった。

必死に考えても、すぐに頭に表示されず、しかたなく俺は、取るに足らない『三村が時計を失くした』ことから、順を追って思い出
し・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

成程。今、思い出せるはずもないのだけれどね。違ったか。

「『すぐに思い出せた』ようだな」

言葉は、続く。

「その記憶から、話す時まで、おおよそ二週間離れていたはずだ。そのくらいの時間があれば、どこかに記録せねば、すぐにでも忘れてしまうだろう。だがお前は、覚えていた。」

思うにそれは、たまたまお前の見える範囲に、その記憶が残っていたからだろう。

だからな。決して、いや二度と思い出せない忘却なぞ、ない。私が言いたいのは、それだけだ」

しかし俺は、素朴に疑問をぶつけてみる。

「一つだけ聞きたい。」

アンタの言葉を整理すると、淘汰される記憶はない。生まれてからの記憶は、新しいとか古いとか、そういう違いはあるけど、全部頭に残っている。でも、人が記憶できる容量は、それ以上に大きい。そういうことだろう?」

「ああそうだ。・・・地層累重という言葉を知っているか」

「いつか委員長からも言われたよ。それくらい知っている」

「そう、要は同じなのだよ。例外を除いて、新しい記憶は古い記憶に積み重なる。結果、赤ん坊だった頃の記憶は覚えていないのだから。」

「・・・で、回り道をしたがところで、質問というのは何だったのかな?」

「けっきょく、俺が泉を覚えていない、というのは、どうして?」

「・・・それ以前に程度にも拠るだろう。『その人だ』と認識できるくらいなら問題はない。」

それに、お前は初めて会ったと言い張るが、それは己の感覚に依拠しすぎというもの。

普通、初めて他人に会うときは、タメ口で話したり、異性を『アンタ』呼ばわりするはずがないと思うがね。

結論として、お前は気付いていないだけだよ・・・曖昧に過ぎるかな? 他の言い方が思いつかないが、うん。そういうことだ」

にしても、自分では気付かなかったのか? まあ、人の癖なんてものは、意識に難いか。

・・・そう、言葉は告げる。

随分と、自分にはわかりづらい矛盾論破だ。

後は自分の思考力で補うとするか。

「ちょっと、横道にそれるけどさ」

言葉に、語りかける。

「何だ？ まだ何か不満か？」

「いや、アンタの事で、ちょっとさ。・・・ああ、アンタ呼ばわりするのも癖だね。でもいいや。」

アンタは確か、日記を残しているよな。

確かにあれがあつて、俺は事件と関わるようになった。事件を示す証拠にもなる。けど、その中身は、取るに足らない記録ばかりだ。正直に言つと、なぜ残したのか、俺にはその意図が判らない。

・・・日記をつける意味は、あつたのかい？」

しばらく、言葉は途絶えた。

知らないはずの、見知つてはいないはずの、言葉は、少しして回答を出した。

ただ一言、「ない」とだけ。

「無意味だ」

「ああ、不毛だね」

ならどうしてと理由を聞く前に、言葉は明確に、明らかにした。

「・・・それが？」

「そう。理由がない、というのが日記を書いていた理由だ。別に言葉遊びをしているつもりではないが、そういうことになる。」

つまりはね、私は退屈な日々が、それでも嫌いじゃないんだ」

「わからない」

「そうだお前にはまだわからないだろうな。だかしかし、お前の言う、取るに足らないことが、私にはとても大切なのだ。毎日を漫然と過ごす、この生活が、愛おしいとさえ感じる。」

なぜなら、物心ついたときから、私は死の不安にずっと付きまわっていたからね。

いつ殺されるのか、それを恐れてしようがなかったな。けれど、相手を糾弾するにも、あいつは何もしていない。けれどその裏の、私への殺意だけは、ずっとあった。だから、いつもいつも、藍園より遙かに長い時間、死ぬんじゃないかって怯えていたさ。

だからさ、私は平穏な退屈が、何よりも好きだった。けれど、ある時私は、いよいよ殺されると悟った。

あいつにはもう、何を言っても無駄だとあきらめていたよ・・・そう、その時期からだな。私が、日々を記録するようになったのは・・・日記をつけることにしたのは、ほんの些細な想いからだった。

『退屈でも、つまらない一日を、記録したい』。だから、内容なんてないに等しい。お前がつまらんと評価するのも、反論はしないでも私には大切だった。私にとって、大切なら、それだけでよかった。

・・・日記について、お前はあれこれ考えているようだが、本当の意味は、私にしか解かり得ないだろうよ」

言葉は全てを語り

俺は不可解にも納得してしまった。

あまりに呆気ない回答に、すんなりと理解が雪解けたものだから、かえって驚いたりする。それでいいのかよってさ。

ほんとうに、つまらない事実だ。

「納得してどうするんだか」

呆れたものだね。

「・・・いや、お前も納得できたのか。それもそうだな。

お前も二ヶ月近く前に、日常を愛おしく思えたことがあったのだからね。

そうだな。藍園にも、ひよっとしたら日記を残した意味、わかっ

ているんじゃないか？」

「どうだか。大事に想っていることには違いないけど」

「それは傑作だ。まさか自分の残したメモ帳が、大層に扱われているとな。大げさにもほどがあるというものだ」

言葉は、大笑した。風船が割れたように、急に笑い出した。

幻想の言葉は、いつまでも俺の脳裏から放たれることはなかった。

「・・・わかつただろう？ 日記の真実は、事件のそれとは違う。だが、その前にお前はあいつを探し出すことだ。」

わかっているとは思うが、お前の記憶障害は、記憶を失くしたことを、記憶障害だと大げさに思い込んでいるにすぎない。

落し物の記憶は、お前自身の能力で探し出せ。

一年前に、破壊された記憶は、ばらばらでもつなぎ合わせる。

そして、再び記憶に保存しなおせ。

お前は黒木泉と、藍園優と、氷室宗と、私の全員に、会っているのだからな」

* * *

俺の意識の中で投影されたのは、かつて一度だけ会ったことのある言葉だった。

そいつは彼女自身の言葉ではなく、おそらく俺自身が、彼女に語らせた言葉なのだろう。

死んだ人間だから、本人は語っていないのだ。

だがもう語らせることも、なかった。

十一月十一日

学園祭が昨日だったこともあって、月曜日の今日は休校となっていた。朝はやく外を出た俺は、まずあの倉庫へと向かった。

自転車を漕ぎ、川沿いに河口へと向かう。

やがて広々とした道路に出た。その先に、どこまでも広がる埋立地に、小さな建物を見出した。

「立入禁止」と手書きのそれを、思い切り無視し、カギの壊れた金網の扉を、きいと鳴らし、入る。

雑草ばかりが行く手を塞いでいた。

だがかろうじて地面を見せる道を、辿り進むと、巨大な鉄の塊が、錆びた外見を曝していた。

中に入る。

すると、不思議なことに明かりがこうこうと、笑みを湛えていた。俺は確信した。先客がいることを。

昨日、泉の述べていた、若い男が、いるんじゃないかと。

その男は、おそらく

「やっと見つけましたよ」

氷室宗は、しかし久しぶりの対面にも、穏やかであった。

その男は、一年前とは何も変わらない。姿も、顔つきも、白いワイシャツに、青いズボン。その下に見える、土埃をかぶった黒いスニーカー。およそ地味な印象の受ける、裝飾もない若い男は、あくまで普通でありつつけたいという心情の表れであるかのようにだった。

「君か」

壁を背にした格好の宗は、うん、とうなずいた。

「一年ぶりだね。あまり変わっちゃいないようだけど」

「あなたも、でしょう?」

冗談のつもりで、俺は言った。

「はは。そうだ、一年という歳月は、人を変えるには短い。しかし、過去と呼んでいくくらいに、昔だ」

ある種独特ともとれる、この男から紡がれる語りにも、俺は生ぬるい懐かしさを思い出した。

そう、気味の悪い、温かさ。

男は問うた。

「なぜ、ここに来るのがわかったんだい?」

氷室宗がよく、この崩れかかった倉庫を訪れているとは、俺は聞いたことがない。けれど、可能性を信じたただけだ。

泉の言う、若い男が、こいつかどうか。

果たして予想は当たった。

まぎれもなく、記憶を思い起こすまでもない。壁に背を預ける彼は、「事件」の最深部に関わる男だった。

全てを知る。

全てを見ている。

一方で、誰からも存在を気付かれることはなかった。おそらくこの先、一生をごく普通の人間として終えるのであろう。

背後に蠢く、「異常」を隠しながら。

だが俺は気付いている。

異常を、捉えている。

だから相手がまともには見えなかった。

「普通のふりをしたヒト」が、どんなにも恐ろしいことか。

もっとも、俺が「事件」に関わっていることは、まだ彼は知らない。

いはずだが。

「ふむ、あの女の子が教えてくれたとはね。知り合いだったか」
うつすらと影を落とすその表情は、変わらず柔らかかに微笑んでいた。一つ一つの彼の仕草に、全身が反応してしまう。身体中がぴんと糸を張ったように、硬直する。

「・・・これでも、少しばかりは不安でしたよ。あなたを探せるの
かって。昨日までは学園祭に追われていましたから、そんな時間は
ありませんでしたが。」

・・・昨日も会いましたね。ニット帽を被っていた、何処かで見
たことのある男を、あなたは演じていた」

「演じていた、ねえ。まあ、君にバレやしないかって、内心は震え
ていたけど。折角の行事だから、行きたいと思うのは、道理とは思
わないか？」

笑みを絶やさず、安らかに語る宗に、俺は不気味さを感じる。

「もし、あのとき俺が気付いていたら、どうしていました」

「どうもしない。今も君は、僕と対面しているけれど、別にどうも

・・・僕も君も、世話は好まないだろうから、特に話すことも
ないさ」

俺には沢山、問い詰めることがありますよ。

と、わざとらしく口ずさんだ。

俺の意図を感じ取ったのだろうか。

氷室宗は、それでも笑みを絶やすことはなかった。

「氷室美月。あなたの姉ですよね。」

藍園優。あなたの知り合い、でしょうか？

・・・この二人を挙げれば、俺が何を知り得ているか、どうして
あなたを探していたのか、おのずとわかるでしょう？」

一考する余地のある、含みに富んだ言葉に、しばし男は口に手を
当てて、考え込んでいる。やがてこちらを見据えて、云った。

「知ってしまったのか」

宗は、うんと頷いて、続ける。

「僕の考える限り、藍園が君にでも話したのだろうね。彼女が話したのか」

「いいえ違いますよ。ちょっと、記憶を拝見させてもらっただけです」

「どこから見た？」

「……どうでもいいと思いますけど？ 重要でもない、でしょう」

「意地の悪いことだけれど、彼を前にして正直に話すことは、しない。」

俺は、正直者じゃないからね。

できることなら、彼に「犯人の正体を知らない」と悟られないようにして、その名を宗の口から引きずり出したい。もっとも、この男にそんなハツタリが通用するとは思えないけれど。

……きい……

「……ならいい。少し語り合おうか」

うそぶいて、彼はもたれかかった体を、雑草の生い茂る地面に下ろした。

「君は、僕の事を殺人鬼かなんかと、誤解しているんじゃないかな？」

沈黙を置いて後、宗は静かに語りかけた。

「・・・それに近いものは、ありますが」

「『しかし、近いというからには、必ずしもそうではない。だから、僕は人を殺してはいない』。至極勝手な解釈だが、そう捉えていいかな？」

「構いませんよ」、とばかり、手を振って示す。

「・・・だって、あなたはかつて、俺に言ったじゃないですか。殺人衝動は、人に曝すべきものではないと。」

ならば、簡単ですよ。

あなたは人を殺せないのです」

沈殿した土埃に、思わず俺は咽こむ。

しばらくして、落ち着く。

「・・・そうでしょう？」

これも、推測だった。

けれど、宗のにこやかな反応を見る限り、あながち外れではない、ともとれる。

「詳しく言いましょう。あなたは『人を殺したいと望む』けれど、自分で人を殺せるというのなら、わざわざ人の手を借りない。

それに、『殺したい』なんて、人に話したりすることでもない。

だのにあなたは、他人の手を借りた。

これって矛盾して、いますよね？」

いえ、矛盾しているから、よけいに複雑なんだ」

殺人衝動を抱える宗は、しかし人を殺せない。

しかし、欲求が駆り立てて止まない。

これがもし、福原のように「人の物を盗む」行為ならば、人の手を借りずに成せることだ。普通の人でも、そのくらいなら平気でしてのけるだろう。

だがもし、殺人なら？

欲求に従ったとしても人は、平気ではいられないはず。

ごく凡庸な人間に、耐え切れるはずがないのだ。

ごく順当に考えてみれば、当然だろう？

「人の命を奪うことは最も罪の重い行為」だから。

誰しもが、幼い頃から、親に、世間に、そう刷り込まれてきただろう。

氷室宗という、ごく普通の刷り込みを受けた人間も。

だから彼には、恐くて人を殺せない。

……常識の範疇を簡単に越えてしまう人間の手を、借りない限りは。

「否定はしないよ」

床に座り込んだ宗は笑みをたたえた。

そして、彼は認めた。

自分が「共犯者」としてあつたことを。

「君の推測は、完璧に当たっている。そうだ。僕には、無理だから、共犯という立場に収まることにした。」

自分にできないことを、手を汚さない方法で補ったまでだ。

そして、目の前に横たわる死に、幼い頃からの願いは叶ったんだ。
……ああ、幼い頃というか、物心ついたときから、人を殺して

みたいとは思っていたんだ。

なら、まず誰を対象に定める？ 友達？ 教師？ 知らない人？
いいや、一番身近な、自分に近い人だ。

それが、姉だった。

ずっと想っていた。

ずっと焦がれていた。

けれど、罪を恐れた僕には、到底不可能な願いだったよ。そうして、僕はいつか、消えてしまうものだと思っていた。

でも、願い通りにはなっただけだ」

氷室宗は、己を平然と述べ終えた。

そこに生まれた、この男への感情は、まぎれもない、恐れだった。理不尽な言葉への憤りでもなく、醜悪だと見下げ果てるのでもなく、逆に共感でも決してなく、ただ、存在そのものを避けたい気持ちに囚われた。

なにゆえか、考えてもわからない。

だが、元凶はそれでも、微笑んでいるばかりだった。

「そのあと、つまり姉さんを殺した後、僕は少し考えたんだ。

僕はどうして、自分で人を殺せなかったのかって。なんで、弱気だったのかなってね。

考えたさ。

この弱虫を治す手段はないかって。

でも、結局たどり着いた事実は、期待に沿うものではなかった。

どうしてかというとな……」

人は、「境界を越えられないもの」と、「越えるもの」とに、最初から分かたれているからなんだ。

「生まれついた性、というものだろう。

僕にとっては、一種の才能だ。いつか、人はみんな異常な面を持

つていると言っただけで、その願望を充足させること、一線をこえてしまうことは、できない。みんな、身の破滅は嫌だからね。

でも、たまに例外という人種も、存在するんだ。

命を奪って、なお平穏としていられるもの。でもそれは先天的な性質だから、僕が努力してもなれるはずもないさ。

・・・考えると、藍園はうらやましいよ」

最後に耳についた言葉に、俺は限りない違和感を覚えた。

「・・・ありきたりな言い方ですけど、どういことですか？ アイツに、人を殺すことなんて、できませんよ」

首を振って、全力で否定する。すると宗は、壁にもたれかかりながら、すっと上を指した。

「この壁の傷、どういう経緯でついたものか君も知っているだろう」
そうして、俺に笑みをもちかけた。

「猫が必死につけた、この傷跡は、誰のせいだと思う？」

薄ら笑いを浮かべる。

「・・・君ならわかってるだろうね。」

まあいいさ。この痕を見て、僕自身が思っただけの話だ。『彼女はそういう人種に含まれないかもしれない』。これは僕が知るはずもないさ」

一步、俺は奴から遠ざかった。

ぎい、ぎい、と音がする。

ところどころ穴の開いた天井に、日はこぼれ落ちる。

一步、そして一步、引き下がった俺は、かりそめのスポットライトを背に受けていた。対する男は、陰とした壁に、ぴたりと寄せて動かない。

「・・・この傷のことは、知りえていたけどね。思うところがあった、ここにいろけれど。」

「いいや、君にはどうだっていい話だ」

ゆつくりと、笑みを作つて、後ずさる俺を離そうとしない。得体の知れないこの男に、時折垣間見える冷酷さに、俺はただ身体を震わせるだけだった。

男は、また笑う。

苦々、と。

「だって、君は犯人が誰かを知りたくつて、僕を探していたんだろ
う」

苦々しく、唇を噛みしめる。

「・・・そっいいきれる根拠は何ですか」

「決まっているさ、はったりは通用しない。」

君は犯人がわからない」

ふう、と一呼吸、ついた。

彼の笑みはそのままにして。

噛んだ唇に、うっすらと鉄の味が、塩辛い。

「……」

「……僕を探している、といったよね君は。だけど、何でだい？あの殺人を知りえている君が、犯人がわかっているのなら、そもそも僕に会う必要はない。君が僕を探す意味も、ない。」

それに、君は人の記憶を見る力を持つ。とすれば、犯人の記憶を盗み見れば、いいじゃないか。

……何も、僕を探す必要も、ないだろう」

滲む血液を、俺は一旦手で拭った。

けれど、どうにも苛々する。

犯人の正体が、これじゃ見破れない。もどかしくも、あった。

俺は仕方なく、こう呟いた。

「それでも、あなたに会う目的は、違います」

彼の記憶を、今ここで引き出してやる方法もあるが、まず先に述べておきたいことも、俺には課せられている。

「……これは藍園の言い出したことなんですけどね。」

藍園は言いました。あなたを探し出し、日記を返したいと。

つまり、行方がわからないあなたを捜索する必要があった」

しかし。

その男は、「事件」の元凶でもあった。

矛盾というものは、どこまでもつきまとう。

犯人達が持っていた日記の欠落ページを、俺達が「都合よく」拾い、返す相手がこの男なのだ。冗談に過ぎる。馬鹿らしい循環だ。

藍園はこの倒錯に、気付いているのだろうか？

つまりは、氷室宗が「共犯者」であったという、可能性を。

俺は、推測として疑っていたし、今この場で彼は認めた。

だが、彼女はこの事実を知らない。

識ったところで、認めないだろうけどさ。

・・・いや、もしかしたら、逆に彼女が「この男は何も関わっていないと信じて」、確かめるために、探しているのか。

「そうじゃない」と信じて。

きい、きい、きい。

一定の間を置いて、波のように揺れ動く音に、天井に小動物でも飼っているのかと、思わず見上げてしまう。しかし、そこには錆びた細いパイプが、網を成しているばかりだった。

「日記、かあ。そうか藍園が持っているのか。

・・・いや、君が殺人の記憶を見るには、現場にあったものしかない。もしかして、君が日記を持っていて、記憶を見てしまったとか？

風君。持っているのは、君かい？」

「ええ。藍園から預かっている、という形で、ですけど。そうなった経緯は、別に話すこともないでしょう」

「じゃあ、気付いているかい？」

あの日記は、今更世間に公表しようだったって、もはや意味を成さないことを」

「わかっていますよ。

まず筆跡鑑定なんて、警察がしてくれれると思いますか？

それに、見た目はごく普通の手帳だ。

当たり前ですけど、急に『一年前の事件の証拠だ』つつたつて、警察には相手にしてもらえませんかよ。

だから、持っているしかなかった。

警察に、『事件』を示す手段は、最初からなかったのですからね」
「ならば、それでいい」

・・・重い腰を、すっと立ち上げた。

きい、きい、きい、きい、きい・・・

その動作がスロー気味に見え、反比例するように鼓膜に伝わるものが、よけいにはつきりと聞こえる。

俺はゆっくりと、また一步引き下がろうとして

・・・もう一度、前進する。

震える足を、無理に戻して。

逃げては、いけない。

この男から聞き出すことは、まだあるのだから。

「日記は、そうか、君が持っているのなら、いい。

捨ててくれても構わないし、僕に返すというのなら、喜んで受け取るう。」

・・・欠落したページは、君は何枚持っているんだい？」

「三枚」と答える。

「そうか。欠けた箇所は、ないな。

・・・しかし可能性は残る。

偶然、というものはありえることだ。その一枚から、殺人の存在が浮上してしまうことだって、ありうる。

あの手記が「姉さんのものとわかって、焼けた家から持ち出された」可能性を、認知されると、まずい。それでは、それじゃあ、僕の計画は、完成とはいえない」

笑みを浮かべながら、一人事を粒粒と漏らす宗の姿は、どこか滑稽だった。

けれど、やがて滑稽さは、悪寒へと変貌する。

「そうだ。やはり日記さえなければ、事件は消える。

当初僕が思い描いていた『抹殺』は、完成する。

・・・姉さんの存在こそ消えないけれど、痕跡は絶つべき。そう
だ、姉さんの死が、疑われることすら、あつてはならないんだ」

きい、きい、きい、きいきい

・・・細い鉄パイプが、無機質に振動する。

「同じ言葉を多用するのも嫌ですが、「事件が消える」って、どういうことですか？」

「・・・」

答えない。もう一度、問う。

「・・・日記を、いや持ち出された日記の、抹殺だ」

「なぜですか。もう意味を成さないあれを、どうして今更に？　そこまでして、あなたは・・・」

言いかけて、その先の言葉が出なかった。何故だろうか？　急に喉の奥が詰まり、声を吐き出せない。

「僕は、姉さんの痕跡を、残らず消したいんだ」

・・・その間隙を衝いて、宗は言い放った。

「そうだ。僕は、僕の願望は、『事件の存在を含めた、姉さんの抹殺』なんだ。姉の存在を、残らず否定しなくちゃいけない。確かに姉さんは死んださ。だがまだ、人の心には存在しているんだ。君たちが覚えている限り、ね。」

だがその痕跡を全て絶つことは、不可能だ。姉さんを知る人間は、計り知れない。全員を消去することは幻想にすぎないし、僕は人を殺せない。

だから僕は、『姉さんの象徴として』日記を始末するんだよ。

君たちにとっても、あの日記は殺人と関わる、唯一の象徴だろうか？　要するに、『僕は』それさえ抹殺すれば、いいんだ」

一年間、彼はそのためになつた。
事件の隠匿。

いいや、「事件」は世間に認知すらされず、やがて記憶から忘却されていく。

宗が殺すべきものは、すると日記しかない。

藍園の持っている、それだ。

「だが彼女は、肌身離さず持っていたからね。最初は、まさか僕に返すなんて思いもなかったから、盗むことを考えていたけど。盗る機会なんてものは、なかつたさ」

直立したまま、弁を振るう。俺は静かに、聞き入った。

きいきい、きいきい、きいきい

・・・病的なまでの殺意を、俺は見せ付けられている。

ただ一人の人間を殺すだけでなく、この日常に「あつた」という記録すらも、殺そうとしている。それが男の願望だ。それが男の欲求だ。どこまでも理解不能な、他人には絶対に理解させない、動機この「事件」の根源を辿るのは、もはやできない。

・・・なぜなら、原因を求めることは、それ自体が無意味だから。所詮、人の心なんて、共感できないもの。

この男の場合、理解したくもないのだけれど。

きいきいきい、きいきいきい

・・・うるさい。

「話は変わるが、姉さんを殺したあいつは、日記の回収という点で、僕を邪魔したんだ」

唐突なまでに、宗が口を開いた。

「巷で起きた、二つの事件の犯人のことですね」

「そう。全部、あいつのしたことだ。もつとも、今年になって起きた二件の殺人は、僕の知らない所だがね。」

何を考えているんだか、あいつは姉さんの日記を何枚か引き離して、今も持っているんだよ。僕に渡すとすぐ捨てるだろうからって、くれないけどさ。」

「でも、日記をあんなふうに使ったりするのは、理解に苦しむね。巷の殺人事件の証拠として、わざと現場に残そうとしたりさ。……君が全部拾わなければ、危うく世間に暴露されかねなかった。まるで僕の意図することと、逆だ。」

正直に言つとね、あいつは僕の邪魔をしきりに行っている。僕の、計画を、妨げようとしてる」

「計画っていうのは、よくわからない、日記の抹殺のことですか？」

「違うよ。根本的な部分は正しいが、他にも色々あってね。君には、関係のないことだ」

「……何をしようとしているんです？ あなたは、一体何を……」

「もう一度言う。抹殺だよ」

「わからない」俺は吐き捨てる。「俺には何も判りません。第一、あなたの口ぶりは、まるで矛盾している。あなたは、殺せないのでしょうか？ だとしたら、たとえ日記であっても、『殺そうとは思わない』。」

「……何もかもが、俺には理解できません」

「される必要もないけどね」宗は笑みに富んだ表情で、俺に正面から向かい合う。「僕が殺せないのは、人だ。それだけは、どうあってもできない。」

だが、意味的な抹殺なら、話は別。物を捨てることくらい、誰だつてできるだろう？ そこに特別な意味をつけたところで、変わらないさ。」

結局、僕は抹殺はしても、殺しちゃあいない」

「それも違います。あなたは勘違いしている」

「どこを？」

俺は、再び唇から噴出す、血の味を覚えた。憤慨するあまり、切つたらしい。だが、身体の震えがとまらないし、頭の中がぐちゃぐちゃに混乱している。血を出したなんて瑣末なことは、どうでもいい。

それでも、言わなければいけない。

・・・この男の矛盾を。

「あなたは人を殺したんだ。

・・・たとえ間接的にでも、あなたにはその意思があった。動機があつた。手段があつた。

それが、それが殺人じゃなくて、何だというのですか？」

溢れるほどの笑みが、そのとき消失した。

「何をいうんだ」

「・・・事実を言ったまで、ですよ。当たり前のことをね」

冷静に、しかし確実に、言い放つ。宗は、口元をびくびく、しきりに動かし、顔をひきつらせる。

「罪の意識を感じないというのなら、それは嘘です。あなたは気付いていないだけで。」

・・・矛盾しているんですよ。あらゆることが

回答はない。

だから俺は、切り出した。

「あなたの記憶を、俺に見せてください。

あなたが記憶した日記を、渡してください」

きいきいきいきいきいきいきいきいきいき

・・・しかし、宗は拒んだ。

「それはできないな」

「何故」

「君も、僕の邪魔をしようとしているからだ。僕の計画は、まだ完成していない。君に記憶を渡すことは、その妨げになるものでね。情報を渡すわけには、いかない。」

・・・君とは、これ以上話すことはないな」

歪んだ笑みを、俺に突きたてる。狂いきった、憎悪に満ちた、嗟い。氷室宗は、一步、俺に向かって歩み始めた。

「・・・どうしてもって言うなら、あなたから力づくで引き出すまでです」

「構わないさ。僕も、その気にいるつもりだからね。」

・・・殺すつもりはないさ」

一步。

二歩。

歩みを止めない。

俺は直立して、相手の動きを、じっと待っていた。

倉庫の出口は、一つ。

その行く手を、俺は塞ぐ格好でいた。

ぎいぎいぎいぎいぎいぎい

・・・いつまでも、いるぞい。

ギイギイギイギ

・・・刹那、宗は上を見た。

その様子を、俺は見ていた。

落ちる。

かすかに聞こえた言葉に、俺は気配を感じた。

ギッ

天井からこぼれる光が、影を落とした。

頭上を上げた俺は、その影を至近距離で捉えることになる。
金具が外れ、さび付いた鉄骨が

・・・きい・・・

頭部を直撃した。

視界が揺らぐ。

鉄骨の下敷きに、地面に伏せる。

きい

遠く、幻聴をとらえた。

「偶然、というものは恐ろしいな」
眼前に歩み寄った宗は嬉々として呟いた。

「幸運だったか。君にも、僕にも」
相変わらずの笑みを湛えた男の、幻聴はするりと俺の手から落ちた。

もう二度と会わないことを、祈ろう

幻聴を失った俺は、暗澹とした海の中に、放り込まれた。

生ぬるい感触に、ふと目を開けた。

「冷てっ！」

某かを払いのけ、起き上がるうとする。けれど、撫で声に、俺はひたと耳を澄ました。

にゃあ。

「猫？」

見ると、ネームプレートが、しっかりと首輪に備え付けてあった。

「ちャーこ」とかいう気の抜けるような名前が目につく。

と、背後から覆いかぶさる影が視界を遮った。

見上げると、

「・・・あ、大丈夫？」

そこには泉の姿があった。

プロフィール的な情報は知りえているが、彼女に関する記憶は、欠落したままだ。

「ちよつとまつてて！ 今、キミに乗つかつてる土嚢つとをどかすから」
うつ伏せになったまま、更に身体を捻らせて、振り返る。すると、足元ほんの数センチ先、鉄骨が無残な姿を曝していた。重力と硬いコンクリートの床にひしゃげた、それこそ真下にいたなら即死はまず間違いなかっただろうという推測をかき立てるような、ものだった。

一方で、俺の身体に張り付くものは、数個の土嚢。

どうやら、屋根が飛ばされないように天井に居座っていたものが、鉄パイプが落ちた祭に平衡を崩し、勢い土嚢も降りかかってきたのだろう。

それも、ほとんど土が破れ出ていた土嚢が、俺の頭を直撃した、

ということか。

ふと気付くと、たまった雨水が加わった砂利は、しょっぱい。

「顔中が土まみれだよ？ 近くに水道があるから、洗ってくれば？」

「そうする」と、近くに寄り添う猫を、そっと床におろして、出口へと向かった。

外はもう、黒一色だ。

「ちゃーここにエサをあげようとしたら、アンタが倒れていたし。・

・ここで何かあったの？」

「いろいろとね」

「ふうん」

背後で、興味なさそうな声がする。

「ここに来る時は、いつも上を確認しなきゃダメだよ？ 天井、崩

れかかってて危ないんだから」

「最初に言えよな」

錆びた水道管に手をかけ、水が出るのを待つ。しばらくして、どつと湧き出た。

その色は、意外と澄んでいる。

「驚いた」

褐色がかっているだろうとふんでみたのだが、だがしかし飲めるくらいに、透明な色を保っている。

「毎日さ、そこで皿洗いしてるから、大丈夫だよ。そりゃあ、最初に来た頃は汚なかったけどさ」

そこにきて、納得。さっさと洗顔を済ませることにしよう。

「……」

冷たいな。

それも、そうだ。十一月が来てどれくらいになると思う？ もう、

冬と呼称しても、違和感がない。
だから、それほど水も冷たい。

「・・・何で・・・」

思い出した？

「なんで、冷たいと思った瞬間に、思い出すんだか」

ふと気付くと、俺の手に届く範囲の記憶に、妙なものが混ざっていた。

というより、そこはちらかっていた。

おそらく、土嚢に頭を打ったから、整理されてあった本棚が崩れるように、記憶が入り混じってしまったというのか？ アホらしい・・・いや、違う。

そこにいくつか、見慣れない記憶が転がっているだけであって。

手に取ると、それは全く以って、『取るに足らないもの』だった。

ああ、馬鹿らしい偶然だね。

でもいいさ。思い出したのだから。

「ふうん、ウチの記憶とかが戻った」

意外にも、冷静に言い返す泉。どうやら、さほど驚きはないようだ。

とりあえず理由を聞いてみた。

「だってさ、いつかは思い出すものだよ。」

今は覚えていなくなっただって、そのうち戻ってくるものじゃないの？
「ウチはよく、わからないけど」

「随分適当な根拠だね」

「そんなもんでしょ？ 記憶って」

「うん、まあ・・・曖昧だよな」

頭の後ろ、丁度こぶが手に触れる位置を撫でた。

「で、記憶をなくした原因で、そのこぶなの？」

「そうだよ。何時の日か、交通事故にあつてさ。高校になつてしばらくしたら、アンタのこととか、すっかり忘れてた」

「ふうん、それって、原因なんだか、そうじゃないんだか、ハツキリしないね」

「だから曖昧なんだよ。・・・おい、エサこぼれてる」

泉が気付いたときには、ちゃーんことかいう猫が下でおこぼれを預かっていた。

「こら、意地汚いよ！」

俺は鼻でせせら笑った。

コイツは、やはり会った頃から餓鬼だ。

などと、少しの侮蔑と嘲笑を含みながら。

別に悪い意味はないさ。

そういうことで

「・・・なにその手？」

だから、アンタに貸した十円玉だよ。

「さあつて、忘れたなあ」

「とぼけたって無駄だよ。アンタはあるとき、自販機に百円だけ入れて十円足りないからつて、俺に金銭を要求したはずだ。今思い出した。返せ」

「・・・なんか反則。そういう思い出し方つて」

ぶすつと顔を膨らませて、いかにも機嫌の悪そうな彼女に、思わず噴出してしまう。

やっぱり餓鬼だな。

と、無駄な記憶を思い出してばかりいた、一日だった。

・・・中には、とんでもない記憶が、混じっていたけどさ。

* * *

忘却という過程を経て再び意識の中心に据え置かれた記憶は、それでも不完全なものだった。

過去を「再生」するためには、やはり今一度、深層から手繰り寄せる必要があるようだ。

それでも、足りないのだが、彼女にも協力してもらおうとして……。

……再生する目的は、唯一つ。

真相を知ることだ。

ずいぶんと抽象的かもしれない。だが、それでいい。

物語は再び、蘇る。

八月十五日の「事件」以後、少年はいつもと変わらない生活を淡々と送っていた。

彼は「人を殺してなお平然としていた」。ひとえに、そういう性質を身に付けているのかもしれないし、他人の知るところでもない。だがそれは、決して人と相容れることのない本質だった。もちろん彼自身もそのことは自覚していたし、その上で自分を繕っていたのだけだ。

その少年は、とある少女の動向が気がかりであった。

彼女の名前は藍園といった。彼女は、「事件」における唯一の目撃者だ。ただ少年は彼女の家を知らず、その行方がわからない。たので、夏休みの間は彼女を殺すことはできないでいた。「事件」は隠されなくてはならない。氷室宗と同じ思いをこの少年も抱いていたのだけれど、氷室宗とは「事件」以後は連絡がつかない。

いつどこで彼女の口から少年の人生の終わりを告げるのかと考えれば、夏休みの間少年が不安を膨らませたことは容易に想像がつくだろう。

ところが。

この九月一日になっても、少年の周囲に変化はない。それどころか、藍園は何もなかったかのような顔つきで登校し、いつもの日常を取り戻していた。

少年は不思議で仕方がない。「事件」隠しを手伝うことで、彼女にはなんのメリットもない。考えればそうするほど、おかしいことに少年は疑惑の目を向けて行く。なにか、他の目的があるのだろうか。そう、思いながら。

一方で、藍園のほうは「事件」の存在を否定していた。氷室美月

という支えを失って、さらにとある理由から自らを嫌悪していた彼女に、犯人を憎む心はどこかへと追いやられていた。

許されざるものは、彼らよりも自分だ、と。

少女は複雑な感情の渦に身を絡め取られていた。後生大事に、という言葉通り常に日記を鞆に携えたりするのは、氷室美月という人への後悔が働いたのか、それとも別の理由があつてそれを持つているのか。いずれにしろ、これも他人には理解できないものだろう。

少女は氷室宗という男を捜していた。この日記を、せめて彼女の弟に返すために。

氷室宗の狙いは簡単だった。「姉の存在の抹殺」と、言うべきだろうか。彼はそれほどに姉への殺意を抱いていた。だがそれは憎悪から来るものではなく、ただ姉を殺したいという子供の頃からの歪んだ願いからきていた。彼は異常な人間だった。それでも彼には人を殺すことなどできない。そんな理由から、少年と協力して、「事件」を引き起こしたのだが、今は彼とは会っていない。お互いのことを快く思っていないからだ。少年は彼を嫌っていたし、宗も少年とそりが合わない。「事件」を隠匿することでは考えは同じだったものの、それ以外で「同じもの」はなかった。

ところで、姉は既にこの世にはいない。だがまだ彼にとって、姉は「殺しきれていない」のだ。

それはつまり、彼女の遺品とかいった「痕跡」が残っているのだ。一方で宗の願いは「姉の存在を殺すこと」だった。単にその人を殺すだけでなく、人々の記憶から全て消し去るまでに抹殺しなければ、彼は納得できなかったのだ。

もはや人の理解を超えていた。だから、少年もその意図を知ろうとはしたくなかったのだろう。

だが実際に「人の記憶から消し去る」レベルにまで消すことは、一個人には不可能だ。消したとしても、宗の知らないところで誰か

が「覚えていた」のなら意味がない。宗はあきらめざるを得なかった。

その代わりに。

「事件」という条件に絞って姉の抹殺を図った。

つまり、最後に残った日記の抹殺だ。彼女の家は全焼し、その痕跡はないと見てもよい。だから、氷室美月の日記を全て回収しなくてはならない。ただしこれも、藍園がどこに日記を保管しているのか、もう捨ててしまったのか、把握することはできない。その上、少年も日記の何枚かのページを持ち合わせているのだ。

結局のところ、彼は手詰まりに陥った。要するに何もできなかったのだ。

……どこか心の奥で、日記をあきらめきれないでいたけれども、一年後に起きた二つの事件に、彼は関わっていない。

それは少年の起こした行動だった。なぜ唐突なまでに二人の人間の命を奪ったのか。少年以外の誰にも知るところではない。

* * *

少年は狭い廊下に目を向けた。

カウンターを抜けると調理室が控えている。そこを突き抜ければ、この廊下に出るのだが、調理室から洩れる一筋の光に、彼は視界を委ねていた。うつすらと輪郭を浮かび上がらせる光は、廊下の奥の階段にまで届いていた。

だがその先にまでは達しない。

階段を上った先にある「死体」まで、照らしてくれない。

その「死体」はさきほど、少年が作ったものだった。背後に忍び寄って、ナイフを引くように頸動脈を切る。後は、血痕が黒服につかないよう、すぐに離れる。幾度かの痙攣の後、店主はあまりに無抵抗なまま、息絶えた。

これでいい。

少年は密かに、笑みを溢した。

あとは用意した日記の欠けたページの一枚を、血のつかないように適当に置いて立ち去るだけだった。なぜわざわざ証拠を残すことをするのか。答えは明快だった。

氷室宗ともう一度接触するため。

この紙は「事件の証拠」としてニュースに取り上げられる。別に報道して差しさわりのないものだし、犯人の残した「重要な手がかり」としてテレビに映し出される。すると、氷室宗は黙ってはいられない。彼は少年が「日記の一部」をいくつか持っていることは知れているはずだ。おそらく、少年を糾弾にでもしにくるだろう。それが少年の狙いだった。要は、もう一度彼が現れるきっかけがあればいいのだ。

ひどく幼稚な行動だけれど。

殺人自体は、あらかじめ計画していたものだから、手順を踏めば犯人が割り出されることはない。周到に準備していたのだろうか。

……そもそも人の命を奪うことに、ためらいなどなかった。むしろ愉しんでいた趣があつた。ひとえに、少年の特性だろう。

少年は愉快そうに、また笑つた。吹き出すあまり唾を飛ばさないように、含み笑いだつたけれども。

と、そのときだった。

入口のドアを重たそうに開ける音が、少年の鼓膜を唐突に揺さぶつた。

「……っ！」

身を翻し、廊下の横に身を隠す。調理室の光は直進的に廊下に延びていた。その光が当たらないところに、ちょうど人が入るくらいのスペースがある。少年は息を潜めて、ことの成り行きを見ていた。やがて、調理室を抜ける影が、間近に現れた。

……凧和也だ。

彼の死角に位置しているため、振り向かれることはなかった。だ

がゆっくりと歩を進める少年の動きが、そこで止まる。少年はその視線を追った。

つい先程、廊下を歩いているときにナイフから垂れてしまった血痕が、床に点々と転がっていた。

その瞬間には、少年は凧の背後に襲い掛かっていた。

その後、彼の手元に置いた一枚の紙は、「事件」を追う凧の意図によって隠匿されてしまう。

鍵となるべきものは、記憶。

だから、そこに手がかりを探し求める

* * *

扉が開くと、藍園の姿があつた。

「・・・何か用？」

特に邪険もせず、しかし無表情を貫いて、俺に問いかけた。

突き刺すような風を切るマンションの昼下がりには、暖かな日差しに包まれていた。十階ということもあって、少しばかり見晴らしがいい。

そんな藍園の家は、エレベーターから直進した廊下の端っこに位置していた。その玄関先で、俺は記憶を見せて欲しいと頼みを入れた。

「・・・どうして？」

藍園は、いつもどおり、静かに問う。

「私からあなたに、話すことはもう」

「氷室宗が、俺の前に現れた」俺は忌々しい記憶を呼び起こしながら、そう伝えた。

すると、装甲が剥がれ落ちるように、藍園は顔色を失った。

「・・・何が、あつたの・・・？」

蒼白な色を浮かべる彼女に、俺は昨日あつた出来事を語る。どうともない。要は逃げられたのだから、相手はどんなに怒るだろうかと予測していたのだけれど、しかし藍園は落胆するばかり。

「・・・仕方がないわね。また、探すしかないわ」

俺を責めることはなかった。

「・・・なんか、顔色悪いぜ？」

「大丈夫・・・気にしないで」

そう呟く彼女は、どこか自分に言い聞かせているかのようだった。

一通りの経緯を語り終わると、藍園は静かに目を閉じた。

「・・・私の記憶を見て、あなたはどこうするの？」

当然のことを聞かれる。それもそう。相応の理由がなければ、俺もここを尋ねたりはしない。

けれど、確認したいまでだ。

・・・藍園という人物を。

彼女の過去を。

立ち止まって、検証しなくちゃいけない。そうして、あらゆる謎を、解き明かす。

無駄な回り道かもしれない。「事件」とは関係がないことだから。だがそれでも。

横に未完成のパズルが置かれていれば、取り組む気にもなる。

倉庫を出て、家に戻った俺は、ひとまず自分の記憶をあら捜しする。

自らを再生した結果、「とある疑問」が浮かび、今ここに至る

「一つ訊くけどさ」

俺は目の前にいる少女に、真正面から向いた。

「氷室宗という男が犯人じゃないかって、疑っているだろ？」

「・・・いいえ。それは違うわ」

「だがあの家で、アンタは二人の人間を見たはずだ。『背後にいた』若い男と、アンタは言い換えたが」

「・・・」

「・・・俺と会った時、氷室宗は認めたよ。もう、なにもかもね」
藍園は、どうしても「共犯者だという事実」を受け入れたくない。
なぜなら日記を返すという目的と、「事実」とが、矛盾してしま
うのだから。

返す相手が、犯人側の人物で、その相手は酷い話、日記を抹殺し
ようとする。決して、返してはならないだろう。

いいや、日記を返す意味が失せてしまう。

それはつまり、日記を持ち合わせる意義すらも、ないことになる。

だが、その前に。

眼前に横たわる、この小さな身体の少女は、どう思っていたのか。
彼女自身の提示した目的が矛盾していると、気付かなかったと？
「アンタは最初、俺達に姿を現して言った。宗という男に日記を完
璧な形で返すためだと。それが、アンタにとって嫌だった「事件」
に、今も関わる目的だと。

つまり、欠落ページを探す目的もそこにある。俺も、納得はして
いたさ」

「・・・」

押し黙ったまま、藍園は耳を澄ます。目を閉じて、ぴくりとも動
かない。

「だがアンタの話を聞いたり、あの男と語るうちに、言いがたい齟
齬を覚えた。

アンタは、もしかして『宗が犯行に加担している』んじゃないか
って、気付いていたはずだ。

曲がりなりにも、アンタは犯行現場にいた。そして、一年という
時間もあつた。

可能性として、考えていても、おかしくないだろう？

だがアンタは俺達には、『その可能性』を、言ったことはなかつ
た」

当初、俺達に渡された目的は、矛盾を抱えている。

その欠陥を、彼女は隠していたのだろうか？

つまり、大げさな言葉だけれど、彼女は嘘をついていた。

「・・・だが、それを補うほどの目的が、俺には浮かばない。

アンタは本当に、矛盾に気付いていなかったのか？

それとも、違うのか？

「・・・一つだけ訊きたい。答えてよ」

藍園は、顔を上げて口を開いた。

「気付いてはいたわ」

俺は、首を一度、うなずかせる。

「だけど、それでも信じ切れなかった。弟が殺人に加担しているなんて、誰がうのみにできる？ いいえ、あの人を知っている私だから、余計に納得がいかなかった。

だからね・・・あの人に直接会って、聞き出したかった。そういう意味で、目的は本当なの」

「・・・納得、していい？」

嫌悪感を、露骨に示す藍園。けれど、心なしか、また彼女自身に向けたような、嫌悪感のようにおもえた。

「・・・あなたが好きないように思っているわ。もっとも、目的なんてとつくに無いものだけれど。

そう、私に残された意義は、とうにないの。

あなたに話すような、目的なんて、ない・・・」

少し、話が逸れたか。

俺は、薄笑いを浮かべながらも、居心地の悪い思いだった。

玄関口で、二人の生徒が佇んでいた。だが近い距離に立つはずなのに、彼女の心の闇は、果てしなく深く、どこまでも見えない。真実が、どこにあるのかすらも、計りかねる。

まるで、他者の存在を拒絶するように。

俺という人物に、心を知られないように彼女は嘘をつく。

一体、彼女にとっての本当とは何か？ 本当は、どこにあるのか？

今、こうして向かい合うだけでは、捉えることはできなかった。

だったら俺は、彼女の記憶を見て、その事実を掴むまでだ。

記憶は嘘をつかない。

かつて、俺がよく考えたことだ。

・・・こんな俺の「目的」を話すと、記憶を渡したくなくなるだろうから、言わないでおくけどさ。

彼女も事実を隠そうとするのなら俺も隠すさ。

「・・・なにか、あなたに考えがあつて私の記憶を見る、というの？」

「なければ、アンタの記憶なんて、見る価値もないけどさ」

「・・・」

「悪い、冗談」

「そうとは思えない」

さすがに腹が立ったのか、思い切り眉をひそめて、俺に軽蔑の念を与える。

少しばかり居心地の悪さを覚えた。

さつきからそればかりだな。

「・・・いいわ。別に、大した記憶は持っていないからね。

でも、プライバシーの侵害だつてことは、頭に置いてね」

そして、きつちりと釘を刺されてしまった。

「別に、んなもん覗く気はないけどさ」
「何を言って・・・（いいえ、揚げ足をとることはしない）」
怒気を含んだ口調で、またなにやらブツブツと文句を垂らし始める。このままだと断られかねないので、早速とばかり、記憶を回収することにしよう。

その場で、彼女の頭に手をかざす。

滑稽なことこの上ないけど、直接読み取るので、保存するにも量があった。しばらく姿勢を保ったまま、五分くらいして、終えた。

「ほんと、不思議な力ね」

藍園はどこか、あっけらかんとした様子だった。

「ん、そう？ 俺は気にしてないけど」

「・・・やっぱプライバシー無視も、甚だしいね」

で、またも嫌そうな顔つきをする。そっぽを向いたり、腕を組んだりして、見た目で機嫌が悪そうだと確認が取れるほどだった。

「基本的人権の尊重に違反しているつつても、取り締まる法律がないから、合法」

「何か憎たらしいわね」

そう吐き捨てる藍園をよそに、俺はさっさと帰ることにした。

* * *

見送ることもなく、ぶつきらぼくにドアを閉める。

カギをかけて、私はまたリビングに戻った。勝手に記憶をコピーされることが嫌で、少し腹が立っているのだけれど、同時に襲う虚脱感に、気力が萎えてしまった。

「・・・やっぱりか」

苦々しく、呟いた。

「うん、絶対そうだ。私が背後に見たのは、あの人の弟・・・なの？」

それでも合点がいかない。いいや、違う。それは、問題を解かないうちに、答えを見ただけの状態だ。計算式や数式の証明をしたのではないし、凧に言われたことを、鵜呑みのままに納得することは、むしろ許せなかった。

でもさつき凧に伝えられたのは、「事実」だ。私のように、彼は嘘をつくはずもない。

「いいや」

だから、よけいに認めたくない。

氷室宗が、実の姉を殺そうと企んだなんて。

「・・・そんなひどい裏切り、私は認めない！」

誰とも相手取らず、虚空に向かい、空しく叫んだ。ひとり佇むこの部屋に、怒声は一瞬にして消えた。

その瞬間、私に carousel であつた「意義」も、消散した。

弟に日記を返したいという、私なりの「あの人」への罪滅ぼしを、もうしたいとも思わない。

なぜなら、意味がない行為だから。

それゆえに、いま落した物は、二度と私の手に戻らないだろう。

「・・・」

思考を、止める。

もう、何も関わる必要はないと。

そして、逃げる。

もう、「事件」は私には関係がないのだと。

過去の自分を、また否定したいという思いに駆られる。
できることなら。

自分を殺したいと。

抛り所を失った自分は、ただ意識の中に、漂うばかり。

意識はあるけれど、そこにおぼれて、自分の立つ位置すらも、覚束ない。

見失ってしまったのだ。

答えを受け入れてしまったから。

知ってしまったのだ。

知りたいと願ったから。

ずっと、知らないでいればよかったのかもしれない。

「……………」

空白となった思考回路が、暇をもてあまして勝手に動き出したようだ。

ふいに記憶を手繰り寄せ、思い起こした。

境界を越えるもの、越えられないもの。

かつて、宗が語りかけた言葉。そこに感銘なんてものはなかった

けれど、今もその口の上る。

「殺せるものと、殺せないもの」

あのときは、冗談にしか聞こえなかった。

「じゃあ、私はどっちなの」

だが今は、言葉を真実として受け止めている。

「……………私、は……………」

その手を、私は今見た。

その血を、私はかつて見ていた。

呆然と佇む、私。

消えてしまいそうな意識のなか、私は自分に、もう一度向き合った。

「……………なんだろう?」

純粋な問いに、思考をめぐるさせる。けれど、答えは返ってこない。

もう、自分はわかっているはずだと。

……………これからなすべきことを。

* * *

そうして、記憶は再生される。

俺と、藍園と、別の視点から。

そこにはもう、謎なんて残っていないのだろうが。

それでも残さなくてはいけない。

示さねば、なるまい。

・・・事件の鍵となった出来事を、目に見える形で。

「ありのままの日常」を、手記に書き留めるように。

ただ、予感は働いていた。

この先、誰かがいなくなるのではと。

そういうこともあって、若干の焦りと不安が、俺の中にはあった

のだけれども。

不安が的中したのかは、まだ先の話。

いつか、人に裏切られるんじゃないかって、おびえていた。
いつか、自分を信じてもらえなくなるんじゃないかって、安らぐ
ことはなかった。

だから、人と関わることなく、生きていけたなら。

私は常に思う。

いつからか、そう思い始めていた。

* * *

独りで暮らす分には、余りある広さのこの家は、住人と呼べる人
が私しかいない。父親も、母親もいない、気楽な毎日に、私は形容
しがたい空白を、心の奥に膨らませていた。

「気楽な、とねえ。額面通りに受け取らせてもらおうか」

・・・そして今、私の遠い親戚にあたる、氷室美月という教師を、
家に招待していた。

「それにしても恵まれた所だな。贅沢に過ぎるといふものだ」

「それは、先生もでしょうか？」

氷室は笑った。

「ははは、違ういな」

開きかかったリビングのドアが、きいきいと音を立てる。風邪は
その度に通じ、私達を無視してベランダへと抜ける。暖かな風に、
私はせきこんだ。

「窓、閉めてくるな」

「・・・すいません、先生」

ソファをたつて、氷室はベランダに通じる窓を、ゆっくりと横に

引いた。窓ガラスに映る十階からの風景が、いきなり閉じ込められたような錯覚を、私は奇妙に思う。

「話を戻すが、金銭面ではもんだいないんだな？」

再び腰を下ろした氷室は、ふいに私を見据える。

その表情は、どこか真剣だ。

「そんな顔をしなくつても、私は大丈夫ですよ。これでも、生活費は送ってもらっていますから」

「・・・あんな親でも、それなりに保護者としての役割は果たしている、か」

それで親子関係とは、なんとも味気ないものだな。

・・・その言葉の裏に潜む本音を、私は確かに聞き取っていた。遠慮なんて、しなくてもいいものを。

「ふむ。いや私もお前の担任として、放って置けないものでな。こうして見舞いに来ているのだが・・・元氣そうで何よりだ」

「『風邪』はもうすぐ治りますって、医者に言われました」

「そうか、ならばいい」

うなずいて、氷室はソファに深くもたれかかる。ときおり足を組んだりする彼女の仕草は、いかにも大人の女性という雰囲気を持たえていた。元々頭の切れる所もあって、学校では生徒の人気を得ていた。むしろ私にとつても、尊敬に値する人物だった。ただ、こうして彼女には、遠い親戚という関係で、何回か来てもらっている。風邪をこじらせた自分が、彼女に迷惑をかけているように思えて、ちよつとばかり心痛む。

淹れたコーヒーを、彼女は静かに口に含む。空のカップをそっと置いて、私に言った。

「そろそろお暇させていただく、とするか。早く、風邪を治して学校に来いよな」

「はい」

柔らかな笑みを振り向けて、リビングを出る。私も玄関までつい

て行くことにする。

「また時間があったら、ここに来るよ」

呟いて、玄関のドアをきい、と鳴らして外に出る。別れを告げて、廊下を横に長くのびるマンションの廊下を、通り去っていった。

私は背後から、ぺこりと頭を下げて、扉を閉めた。

「……………」

立ち込めるアロマが、今も色濃く香る。心なしか、またベランダの窓を開けて風通しをよくしようと、思えなかった。

「うん、大丈夫だよ……………」

無意識のうちに、口にした。

あの人は、母親のことはよく知っていたはずだ。さっきも口には出さなかったけれど、別にその話をもちかけても、悲しくはない。あの人なら、そのことで同情してくれたって、私にはそれが本心から来る感情だつて分かっているから、みじめにも思わない。

でも、言わなかった。

「…………酷い裏切りだよって、言うはずもないよね」

また独り、呟いた。

…………あの一瞬に見せた、母親の『最期』の顔を、もう一度思い起こしながら。

醜く、歪んでいた。

それだけだ。

気の狂った母親にナイフを突き立てられた時、私は何を思ったのだろうか？

うる覚えだけれど、すごく悲しかった。

「あのとき、先生がいなかったら」

そう、私はこの気持ちを抱いたまま、母親と共にいなくなっていたに、違いない。

だから、私にはあの人の存在が、大切だった。

もちろん、命の恩人とかいうやつだけじゃなくって。
とにかく、不安定で錯乱しっぱなしの自分を、かろうじてつなぎ
とめてくれるような、そんな存在。

* * *

けれど、一旦ここに染み付いた墨は、そう単純に消えてはく
れない。

きっかけがあれば、すぐにでも広がる。

・・・あの人は、『猫』を飼ってはいない。

「馬鹿かこの屑八？ クソだマジ死ネ、ハッ！」

そのとき不動は、方向に調子こいていた。若干キレ気味で額に汗ならぬ青筋をびくびく、立てている。

「オイ凧ア！ これハドーいうことダ！！」

「どうこうもねーと思うが」

俺はいつものように、適当に受け流して相手にしない。コイツのキレやすさはもう馴れて久しいし、だいいち怒りの矛先を俺に向けられても知らん。テメーが弱いだけだ。

「・・・チツ」

机の上に、どかりと腰を下ろし、前にそれとなくあったかよわいイスを、容赦なく蹴飛ばす。そうしたところで何度も何度も、俺に向かって放送禁止用語連発。

「・・・やれやれ。「10万ボルト」。

「そろそろ負けを宣言したほうがいいんじゃないの？」

「・・・ルセエヨ。ブチコロスゾ？」

うし、「でんじは」で相手が「まひ」にかかった。

「死に曝セ*****！！」

聞くに堪えない悪態について、もう一度イスを蹴り飛ばす。

「備品壊れるぜ？」

俺は失笑した。それでも心のうちではまたか、とばかりに溜息が出てしまいそうだ。心に口なし、だけどさ。

「にしても、弱えなああはは」

フリーザー相手にピカチュウで勝てるとは思ってもなかったけど
な。

・・・通信対戦の話しているんだけど。

三月十二日

日の暮れそうな校舎に延びる影は、気付くとまた少し長くなっていた。

さっきまで日直の当番をしていたはずなのだが、いつからか教室に残った不動と二人で某有名ゲームを始めていたらしい。そのましま、眼前の勝負に椅子を蹴飛ばしたりして（主に不動）愉しく遊んでいた。

あれ、実はゲーム本体とは別売りの通信ケーブルなるものがないと通信対戦とかできないのだけど、GBAではワイヤレスアダプタが使える。これが意外に便利で、携帯するにもいちいちケーブルを輪ゴムで留めたりする必要もなくて、通信中にうっかりコンセントが外れたりすることもない。まあ、このまえ発売されたらしいDSライトでも機種のにできるかどうかは知らんが。

・・・今時このゲームをやっている、というのも年齢的に少し痛いかもね。

でも俺、中学生だからギリギリセーフだと信じたい。

机の中に溜め込んでいた教科書を、適当に鞆に放り込む。

「オイコラ。テメエのカビゴン、ありや一体何だヨ？ 『ねむり』にカゴのみつてそりゃあ反則ジャネーノ」

「戦術的に結構有名どころだし。ていうか、お前はパーティーが打たれ弱いだけだろ。回復技を誰一人持つてないのはまずいぞ」

「アア？ 俺は攻撃しか頭にねえんだヨ」

「状態異常にかかればなんにもならないと思うけど」

鞆を肩にかけ、さっさと教室を出た。日誌を渡せば日直の仕事は終わる。一応、職員室にいた中原に手渡しして、校舎を出た。立派な門構えの校門だが、「神谷中学」と偉そうに刻まれた字が、これ見よがしに夕日を浴びて輝いている。

こっちは眩しいだけだ。何となく腹が立つ。

「・・・ニシテモヨ、盗難事件ってどうなった？」

ふと思いついたように不動は尋ねる。

「あーあれ。犯人捕まってるない」

「マジ？」

「で、昨日もまた天美のサイフが盗まれたって」

「アイツのは違うダロガ」

それもそうだな、と肩をすくめる。大体、彼女は自分で失くした前科が、文字通り桁外れに多い。盗まれたというより、むしろ自分で落としたと見るべきだろう。

例えば、彼女は支給されたその五分後に、誤って生徒手帳を捨てたことがある。

ある意味学校に喧嘩売っているね。

「じゃあ、最近は起こっていないことになるな。盗難事件って言うても、まず二件しか起きていない。連続事件と考えるにしては、偶然の可能性もあるだろ？」

「ソレモソウダケドヨ」

欠伸をかいて、退屈そうに言った。

「・・・犯人て誰だヨ？」

「しらねーよ」

一言、吐き捨ててその話題を打ち切った。

知っているんだけどさ。

でもそいつが、信じられない奴で。

「絶対にするはずがない」って、信じていた奴で。

だから口にするのもためらってしまっし、今ここで不動に話しても、到底取り合わないだろうね。

だけど。

・・・興味本位で記憶を見たせいで、こっちが人間不信になっ
てしまっそうだ。

記憶は嘘をつかないから、尚更に。
なぜか。

記憶を読む、ということとは、人の行いを見るのに等しい。だから、普段見られない態度を出す奴も、ばつちりとこの目で見てしまう。フィルターを通して見える事実は、やはり見かけとは違う。ダメダメ、自分の行いは、誰かしらに見られるものだよ。

でも盗難事件を起こした奴のそれは、えげつなかった。

彼はまず、盗んだ金で何をしたと思う？ それは

だから最近、ちょっと疑心暗鬼モードに浸っているんだけどや。

ちなみに、盗まれた人は、盗んだ生徒とは友達の間柄だ。

・・・「利用」するためのだけの、という意味が付随する。

身近なトモダチに裏切られるっていうほど、残酷なこともない。

そんな奴が、この世界にいくらがいるから、俺もやりきれなくなる。

そう、この時も俺は「またか」くらいに思っていないと、平然と見過ごすことはできなかった。

人はみんな、ウラの顔を隠している。

記憶を見続けた、俺の感想だ。そして普遍的な法則だと思いたい。神の啓示でもないけれど、そう信じなければいけない。悪意がない聖人の様な人だっているなんて反論は、聞きたくもないし目を背けたい。だから、このままでいいんだ。要は俺が納得さえすればいい。・・・「普遍的な法則」以下、かつて宗という男が俺に告げた言葉だった。

なぜだろうか。

彼の放つ言葉に、いつも俺は悩まされてしまう。相手にしなければそれまでなのに、気が付けばその意味を追い求めてしまう。

それは、後に「事件」の犯人となる少年にも同じことだった。

ある時期まで少年は、神谷町とは別の町で暮らしていた。平凡な家庭と、平坦な毎日。あと一年過ぎれば高校生になるうかという年齢に達していた彼は、「見た目はごく普通の少年」という役割を演じていた。

例えば、彼は猫が好きだ。彼はいつも、周囲の人間にペットの持ち込みが許されないマンションにさえ住んでいなければ、親の反対を押し切っても飼いたい、と言う。周りの人たちは、その話を聞いて彼を猫好きとでも認識するかもしれない。

だが違うのだ。

彼は猫を、特に好いてもいなければ嫌ってもいない。つまるところ、猫には何の感情も持ち合わせていない。

ではなぜ、彼は猫が好きだと述べたのか。その答えは、ごく些細なきっかけだった。

彼はある日、友達（彼自身にとっては表面的な）と話していた。そのときふとしたことから、猫についての話題が上り、盛り上がった。少年にはどうでもよかつたのだが、他の友達も皆、猫がかわいいと言う。「だから彼は、自分も猫が好きだと話に合わせた」。するとどうしたとか、周囲の人たちがそう解釈をして、いつのまにか「彼の虚像イメージが創られてしまった」のだ。

それは正しくはないのだけれど、こうして少年は「猫が好き少年」という役割を演じるようになった。ひどく、不毛な話だけれど、少年は何に対しても興味を抱けなかつた。たとえそれが、殺人であつても。

ある年の夏、近くで殺人事件が起きていた。現場が少年の家の近くだったので、彼はいつもの半袖のシャツに短パン、サンダルという格好で外に出た。その日はうだる暑さに、道ですれ違う人々の表

情は険しくあつた。少年も例外ではなく、現場にたどり着いた時点で、汗だくになつていた。流れる汗が目にしみる。体温の高い手でごしごしと粗く拭いて、それから現場に目を通した。

太陽ののぞく昼間に、立ち寄る人は少なかった。

まず、むせ返るような内臓の臭いに、少年は吐き気を覚えた。

次に、周囲何メートルにわたつて延びる、汚い赤色のものを捉えた。

少年はその時、横たわる「もの」を真正面から視認した。そばにいた汗だくの警備員が気付いて、ものすごい剣幕で彼を追い返そうとするまで、彼はずっと見続けていた。

不思議と、嫌な気分には落ちない。

けれど興味が湧くこともなかった。

・・・という内心無感動な少年は、三月二十五日に神谷町へ引越すことになる。

七月一日

「趣味とかは持ってないのかい。例えば、僕は毎日、公園で散歩をする。・・・君は？」

氷室宗は、そう言つて少年に微笑みかけた。ひどく曖昧な空模様となつたこの日の公園は、温かく湿つた風に扇がれるばかりだった。この天気のせいか、人の気配なんというものは皆無に等しい。

「本当に心からしてみたいことつていうんなら、ありません」

「・・・少し寂しいな」

「放ってください」少年は苦笑いして答えた。確かにこの男と知り合つて、自分が人を殺してみたいという本能的な欲求を持っていると知つただけけれど、やはり興味という類いのものとは違う。

少年は異常でこそあれ、殺人に快楽を見出すことはなかった。

おそらくそれは、物欲と同質のものだろう。ないと命に関わるこ

とでもないけれど、それとなく欲しいと思う。

そもそも少年の「人を殺したい」という願望に、理由はなかった。それは彼にとつての本質であつて、当然のこと偽りではない。

少年はもう一度再考してみる。

自分はこの男によつて、人を殺してみたいのだと気付いた。でもそれは、麻薬のように、そこにある種の快楽を覚えるからじゃない。彼はあくまで、「人を殺したいとは望む」程度なのだ。

・・・すると少しおかしい。なぜか。

「人を殺したいなんて、誰もが一回は思いませんか？ 思うでしょ。ふいに少年は問いかけた。「つまりそれって、俺だけが思っている事じゃないって、思うんですけど。なら、みんな心の中じゃあ同じ。同じ、『異常性』を抱えていることになる」

「ひとくくりにしてもらつても、困るけどな」青年は頭をこしこしと掻いて、「だがそれは心の中での話だ。確かに君よりもアブナイ欲求を隠し持つ奴だっているだろうね。だが、それと『境界を越える』ことは、絶対的に違う。

要するに、多くの人は殺したいと思つても行動に移さないってこと。君は、『そこが違つんだ』」

ならその区切りとは？

「・・・さあ？ 僕にもわからない。もつとも、これまで見てきた多くの人の中で、君が一番の適任だったのは確かだがね」

「なんのことやら」

少年は腰を回転させて、背後を振り向いた。見ると、時計台がぼつんと、寂しく時を刻んでいる。表面のガラスが光っていた。雨水が張り付いているのだ。

思ったとおり、上には濃い灰色の空が、ちょうど槍のような雨を落とすところだった。

「屋根のあるところに行くか」

宗は言つて、近くの建物の軒下に移動する。

「……」

少年は、考える。

「……」

少年は、口をもごもごと、何か言いたげだ。

俺だけが、汚れ役か、と。

「自分で殺せたら、それで一番なんだけどね」

少年の意図を察したのか、ふいに宗が呟いた。

「やっぱり、姉だから遠慮するとか？」

「僕がそんなことを気にすると思うかい」

質問をオウム返しされたような感覚だった。つまり、いまさら質問することもないだろう、と。

「遠慮なんていらぬよ。僕はただ、『人が死ぬところを見る』だけだ。姉が死ぬのは、僕の望みだ」

雨がけたたましくコンクリートに跳ね返る、騒々しいこの空間で、少年ははつきりと、彼の意志を聞き取った。ゆるぎない信念を語つたにもかかわらず、ふりまく笑みは穏やかであった。

要するに、氷室宗は愉快そうに、語っていた。

「……まあ、俺も不満はありませんよ。捕まったとしても、それだけだったってことでいいんじゃないスカ」

けれども少年は興味なさそうに呟いた。

だが、もし彼だけが罪を逃れようとするなら、少年も沈黙に坐してはられない。黙ってはられないだろう。

警察に捕まった時のことを考えて、何か彼との関わりを示す証拠をこっそりと、持ち出しておくべき……

……もつとも、肝心なのは「どのようにして捕まらないか」、という問題だけだ。

* * *

日記から切り離されたページは、今も少年の手にある。

「事件」ごとそれを抹殺しようとする宗の意志を、敏感に嗅ぎ取って、隠し持っていたからだ。

そうして、日記はひとかけらも失われることはなかった。

夏休みも目前に迫ったという頃、俺はある懸案を抱えていた。

「・・・・・・・・」

それは暑さによって汗疹が出るのではなく、夏休みに決まって配られる宿題プリントの数の多さでもない。それでは何か。

「強制参加？」

「イエスザッツライト」

全く笑えないジャパニーズジョークだ。例によってテストの点数がアレなものだったし、補習確定というのも理解できる。だが

「俺一人って淋しくない？」

つまり、この夏休みは俺だけが登校しなきゃいけない。定期とか使っていないから、余計なバス代がかさんでしまう。

「がんばってネー」

ギャハハハ、と頭の悪い笑い声を、横から不動が出す。俺は内心で舌打ちした。

そんなやりとりを縫うようにして担任の小西が言った。

「とにかく、凧は英語と数学が補習科目だからな。夏期講習を受けるつもりで来い。来なけりゃ、留年という手もあるが？」

「中学生で留年かよ！」

「二つとも一ケタはネーヨナア。ケヒヒ！」

とことん夏の蚊のようにしつこく小馬鹿にする不動。もう一度言うが、コイツはこんな奴だ。人の不幸を目一杯笑って見下したりする、おそらく友達としては最低レベルの男子生徒だと分析してみたり。

まあ、俺にはどうでもいいけどさ。

・・・・少なくとも、目の前の補習よりかは。

渡された紙には、補習の日程がプリントされていた。期間は八月

一日から十日間。十日までである。と、俺は二つの科目の教師の名前に目がいった。

数学と英語は、別の科目だ。

だからそこには最低、二人の名前が記入されているはずなのに、英語の欄に約一名だけ記されていて、数学には名前がない。

「数学はまだ決まっておらん。おそらく私が夏期講習との兼ね合いで行うと思うが」

左様ですかと、特に思うところはなかった。

「この英語の先生、なんか見えない名前ですね」

「第二校舎の先生だ。私も普段は見かけない」

つまり、どんなタイプの教師か、判別できないということだ。つまり、極力適当に補習を受けようという俺の、怠惰極まりない態度を許せるような心優しい人か。それともアレか。

「ま、なんにしる第二校舎の人はそいつで、補習は別にある。個人レッスンと思つてありがたく思え」

さらりとのたまわる数学の教師に、俺は思い切り眉をひそめた。

「ケケ！ 個人レッスンかア、いい響きダナアオイ。ヒヤハ！」

再三にわたつて毒づく不動。一応まだこの教室に残っていた。

まあ、アイツが馬鹿笑いするのも無理はない。この個人レッスンとかいうものの教師が

「・・・ひむろみつきって、読むんですか？」

この女の人だからね。

彼女は第二校舎の先生だ。

* * *

その後、補習についての説明を延々とされて、教室を離れたのは一時間後だった。当然のこと、一時間も待ってくれるほど、不動は甘くない。さっさと帰ってしまったので、俺一人ぶらぶらと廊下を

歩いていた。

教室という教室を過ぎるたび、洩れる冷気がひんやりと頬に当たった。けれど階段を降りる頃には、

「暑っつい……」

汗がここぞとばかりに噴き出してきた。歩くたびに流れる汗。動くたびに伝う汗。汗っかきという特性をもった人間が俺と同じ境遇にあつたら、どんな事態に陥るだろうか。きっと、見ていて恐ろしいことになる。

まあ、汗をかかないやつは殆どいないから、汗をかく量なんてみんな同じようなものだけだ。

「で、お前はそこでナニヲシテルンダ」

後半を強調して言ったのは、わけがありません。

「ん？」

「校舎にネコを持ち込む馬鹿がどこにいる」

踊り場の先に、暴れる猫をたったいま取り押さえた女子生徒の姿があつた。

彼女の名前は、黒木泉。俺の同級生で、単語でくくると、性格は能天気。もしくは無邪気辺りが、表現として近い。

つまり、この場に猫を持ち込んで平然としている能気さと俺の問いかけを無視してあははと笑っているその無邪気さ。このクソ暑い状況で笑顔を見せる余裕があるとは、羨ましいね。

多少皮肉交じりな心持ちになる。

「見てみて、この猫さ、ウチの靴箱にいたんだよ」

「で、何でこんなところにいるんだよ」

「いやーいきなり現れたって感じだったし向こうもびっくりしちゃって」

「人の話聞けよ！」

一刻も早く、冷房の当たるところへ移動したいものだから、少しばかり苛立ってくる。俺のその切なる願いを踏みにじる形で、少女は朗らかに喋り始めた。

話の内容を要約すると、猫が驚いて靴箱から逃げてしまった、それを追いかけて、この踊り場でやっとのこと捕まえた、そこに俺がやってきた・・・

・・・下らない話だ。

「先生に見つかるやばいんじゃないの」

姉の口癖を拝借しながら俺は言った。

「うん、だからこれから帰る」

「その猫は？」

「近所の家の猫だからその人に返してくる」

うん？ と首をかしげた。

「知ってるのかよ？」

「この辺りの猫ちゃんに関しては、ウチが一番よく知ってるよ」

そう言うてにんまりと微笑んだ。イメージとしては、小学校低学年の児童の見せる笑顔を想像して欲しい。あんな、あどけない笑みを何気なく見せるのが、この人の性格をよく現していた。

男女問わず誰にでも気さくに話しかける彼女にはどうしても、幼さというものが付き纏って離れない。

「じゃ、これから返しに行くから。またねー」

そう言うて猫を抱きしめて、駆け足で階段を降りていった。俺も同じ方向に向かうつもりだったので、彼女の後を追うように一階へと向かった。

ふと後を見ると、十メートルほど先で見知らぬ女子生徒と話していた。

その少女はどこか、心浮かない表情だった。

* * *

「へえ、この第一校舎に来たのって初めてなんだ。職員室とかの場所、わかるの」

胸に大きなトラ猫を抱きしめながら、快活に話す女子生徒は、私

の知り合いでもあった。

「うん・・・いちおう、昇降口に校舎の見取り図があったから大丈夫」

「・・・でも、職員室はこの先にはないよ？」

え、と私はおどろいた。確かに、この辺りにあるはずの職員室は、見当たらない。なくって、今私は困り果てていた。それならば、

「地図が古かったのね」

「そうだよ！ あれね、上下が反対になってるの。だから、職員室も反対側に回らなきゃ、ないよ」

この第一校舎は、コの字型になっていた。中央から延びる二つの建物は、校庭をはさんで互いに面している。私のいる建物に、職員室はなかった。

「藍園さんは何か、用事でもあるの？」

不意に、黒木は問いかけてきた。

頷いて応える。

「・・・夏期講習のプリントを取りに来た。枚数が足りないから・・・」

私は、氷室に頼まれた用事を思い出しながら、確認するように彼女に話した。うまく伝わったかは疑問ではあったものの、彼女は「ほうほう、それは大変だねえ」と答えた。

それと、私としては胸のトラ猫の存在が気にかかる。

「・・・ああ、これね。近所の猫。今から返しに行くんだ」

「??・・・ああ、そう」

手短に話されたのでは、理解に苦しむけれど、それより先は聞かないことにした。

私は、黒木と別の方向へ別れた。

* * *

俺の頭から欠落していた記憶は、これだけではない。もう一つ、

宗と話しをした記憶があった。

夏の公園は人に溢れている。

公園の噴水台の近く。そこで俺は紙くずにしたテストの答案を広げる気になって、不気味な点数をこれでもかと思っていた。

英語、八点。

数学、七点。

「……………」

これ以上何をコメントさせる。

「つかしいな」。勉強したはずなのに」

ぼりぼり、と頭を掻く。その手にあった答案用紙を前に、悩んでいた。反省ゼロの俺だけど、さすがに中学レベルの問題で一桁というのは、問題があるね。

どっかのバカ小学生は全教科零点というが、それは二次元でのお話。自称・二十二世紀から来たという青いタヌキの道具にすぎるともできないし、何よりテストは終わってしまった。

この事実に変更不可だ。

だからこそ、腑に落ちない。今までこんな点数取ったことがないだけに、先行きが不安になるというものだ。

「俺ってそんな頭悪かったっけ？」

と、確認を求める。もちろん周りには答えしてくれる人なんていないけど。

ところが、そうでもなかった。

「一言で頭が悪いといっても、いくつか種類カテゴリーがあるだろう。例えば、勉強だけできてあとは駄目な人。点数は低いけど、機転が利く人。僕としては、前者はごめんだね」

「……誰でしたっけ？」

「僕だよ。氷室宗だ」

俺は目の前でまったりと微笑む優男と向き合いながら、記憶を手

繰り返せる。この人と、いつ、どこで、どんな状況で会ったのか。

「バスの中で会ったじゃないかい？　それが、僕だよ」

「・・・ああ、言われてみれば、そういう気がします」

俺の能力を唯一知る男。彼は・・・

・・・境界・・・衝動・・・？

覚えていない？

「どうしたんだい。人の顔をじろじろ見て」

「顔に蚊が引っ付いてます」

「ええ！」と驚く大学生くらいの男を他所に、俺は複雑な感情を抱いていた。

また、忘れたのかと。

つまりは、自分の記憶が、抜け落ちているのだ。

それがどうしてなのかはわからない。ただ、ここ最近物忘れが激しくなったり、人に言われても思い出せなくなったりすることがある。かと思えば、長く忘れていた赤ん坊の頃の記憶を、突然に思い出したりする。

これは一体、なんなのだろう。

まるで、自分自身の記憶が、混ぜこぜになったような・・・。

俺は首を左右に振って、思いを振り払った。

「宗さんこそ、そこで何してるんですか」

「僕かい？　いつもの散歩だよ。日課、とも言っかな？」

宗は頬を赤く腫れさせたまま、苦笑いで答えた。どうやら、刺されたらしい。

「また、記憶について話してくれないかい。非常に興味深いものがあるからね」

「いいですけど・・・物好きですね？」

「物好きというより、過去を覗くという行為に魅かれるものがある

んだよ。僕は、全ての事象の原因は過去にあると考えている。例えば、『殺人犯の生い立ちを知る』上で、過去を振り返ることは欠かせない。だから、興味深いんだろうね」
「なんのことやらね」と、俺はいつもながら適当に流した。

* * *

「人を殺す理由」を、今更ながら宗は知ろうとも考えない。俺の能力を、どう捉えていたかは、問題ではなかった。

ふとしたきっかけで、宗のたてた「計画」を知られてしまうことが、問題だったのだろう。

過去を覗くということは、人には見えない一面を覗いてしまうのと同じだ。

自分の記憶は、操作する事ができない。
だからこそ。

宗と知り合ったことは、彼にとって決まっていたものではなかった。もっとも、その頃の俺の知るところでもないが。

人を殺そうと企んでいる最中に、赤の他人にばれてしまったのは、意味がない。

何も知らない俺のほうから、頻繁に話しかけてくるものだからむしろ下手に避けるよりは、近づいて俺の動きを監視していたの
だろうね。

嫌な友人関係だ。

* * *

「最近になって記憶が飛ぶことがある、とね」

そう言っつて、宗は近くで買ったアイスをほおばった。屋根のつい

た休憩所は、あまり涼しいとも思えない。

「それどころか、勉強したはずなのに補習ですよ」

「それはね。テストの時は緊張して、思い出せないこともあるんだよ。だから今見れば、できる問題とかあるはずだから。要は気持ちの問題じゃないかな」

「違いますよ」と、遮った。

「今見たら、全部の問題ができないんです」

「テスト後は遊んだりするからな。折角学習したのものも」

「そういう問題じゃないんですよ」

うん、と首をかしげた。

「・・・どうということだい？」

「勉強した、ということすら、思い出せないんです。他の奴に言われるまで、ずっと気付きませんでした。」

これって、記憶がないってことですよね・・・？

自嘲気味に、呟いた。

壊れかけた机に向かいながら、氷室美月はため息をついた。

第二校舎・二階に位置する職員室に他の教師はいない。夏休みで休日ということもあって、彼女以外は机に座る人はいない。休暇というものに興味がないのか、彼女は夏期講習のプリントの作成に気を傾けていた。

だが彼女が頭を悩ませているのは、それだけではない。

「・・・日記、つけようかな」

おもむろに呟いた。だがつけるにも、余分なノートがない。氷室の使うノートは全て事務用のもだった。かといって今からコンビニへ行って新しいものを買うのにも気が引ける。そうしてあれこれと考えているうちに、ふと彼女は思った。

「ま、私の意気込みなぞ、所詮はその程度だな」

今までの考えを無駄に帰すような、そんな一言を漏らす。そうして心が折れかけたところで、彼女は机の端に置いてあった「あるもの」に目を留めた。

それは白色のメモ帳だった。そろそろ新しいものを買ったのはいいが、まだ前のメモ帳は半分のページしか使っていない。メモ帳を使うペースを考えれば、まだまだ新品の出番は先だった。「・・・書く量が少なくて安上がり、ときたか。随分と手軽だな」手にとつてまじまじと見つめたまま、左手で最初のページを開く。空白だらけだった紙に、もう片方の手にあつたペンでこう記した。
八月一日、と・・・。

ここに書くのは、魂の告白ではない。

ただのとるにたらない日常だけだ。

* * *

「・・・でね、アイツ友達のサイフ盗んだんだよ。ほんっと、許せないよね、そんなこと」

夏期講習の初日から肩をいからせて憤る黒木泉の姿に、私は尻すごんだ。正直に言つと、どう言葉を返せばいいのか迷うのだ。

「それは、残念、だったのかな？」

「残念どころか、その友達の女の子泣いてたよ。犯人も、自分で盗んでおきながら『こんなの許せない』って言ってたからねえ。だますなんて酷いよ」

ほつぺたをぶつぶつ膨らませて怒りを露わにする。怒っているのはわかるけれど、この人の場合どうしてもその仕草が幼く感じられる。それに早口だから、私は彼女の会話についていくので精一杯だった。

この人とは、通う校舎が違うのだけれど、そんなことはおかまになしだと言つばかりに顔が広い。そしてなぜか私とよく話すことが多かった。

「・・・」

「藍園サンはどう思う？」

ふと、泉は尋ねる。

私は逡巡して、答えた。

「・・・酷い、裏切りだと思う」

確かに、盗みは卑劣な行為だし、どんな理由であっても許せるものではない。

だがそれ以前に。

自分を棚に上げて犯人を糾弾するなんて、性根を疑ってしまうというもの。声高に避難すれば、自分が怪しまれないで済むとでも考えていたのだろうけど、もはや呆れてしまう。

痴漢をした男が別の中年男性を指して、「こいつが犯人だ」と糾弾するようなものと同じだ。

私はそんな人間を否定しなくちゃいけない。

・・・そう、盗みを働いたこの人は、嫌悪すべきものだ。

講習といつても、普通の授業と何ら変わったところはない。ただ、受ける生徒の顔ぶれがいつもと違うというだけで、教室の雰囲気はがらりと変わるものだ。全校生徒が入り混じった授業ということも会って、私語をする人はいない。ともかく、授業時間はあつというまに、過ぎていった。

時間は四時を少しまわったところだった。蒸し暑さの残る廊下に出て、洗面所へと向かう。するとそこに泉の姿があった。

「ハンカチか何か持っていない？」

不意にそう問いかけられた。

「どうしたの」

と言ったところで、気付いた。

見ると、辺り一面に水滴が散っていた。

そして、何と云うか、彼女自身が一番ひどく濡れていた。

「この蛇口がねえ、爆発して。ウチも服もこのとーり濡れちゃって

あはは・・・」

蛇口に栓でもはいつていたらしい。近くに大きなトイレットペーパーの切れ端が丸まって転がっていた。

「悪意のある人って、どこにでもいるものね」

私はため息をついた。仕方なく、たまたま持ち合わせていたハンカチをポケットから取り出して、相手に手渡した。

「おお？ 黒一色に統一されているではないか。また随分とシンブルなハンカチだねえ」

「・・・そう？ 珍しかったから買ってきたんだけど」

言われてみれば、地味にも程がある。一面が黒く塗りつぶされたようなそれは、見た目を切り捨てた、実用性を重視したものかもしれない。ただ、記憶にある限りでは、これだけが売れ残っていた気がする。

「ともあれ、ハンカチは洗って返すと言われてしまった。おかげで、
「・・・あっ」
手を洗う機を逸してしまった。

ハンカチを使っても制服についた水分をふき取れなかったのか、泉は半乾きのままで外を歩いてきた。遠くから見ると、汗のしみのようにも見える。それでも特に気にした様子はなかった。

「今度の日曜日に友達と映画を見に行くんだけど、一緒に来る？」
夕暮れの帰り道、ふいにこんなことを聞かれた。

「あ、いえ私は、いい」

「んーどうして」

不思議そうな顔をする。それでも彼女の表情は、子供のような笑みに包まれていた。

私はなぜか、その表情を正視することができなかった。

「・・・うん、用事があるんだ」

済まなそうに、答えた。彼女は「そっか、仕方ない。じゃ、また今度ね」といって、それ以上問いかけることもなかった。

私は少し呆気にとられた。

「・・・用事の内容とか、聞かないの？」

「え？」泉は立ち止まって、「もしか、あたしに関係があること？」

「ううん、そうじゃないけど・・・」

私は言葉に詰まった。

実は、さし当たった用事なんてものはない。ないのに、私は嘘を ついてしまった。

理由はすごく単純で、それが私の性格をよく現している。
人と関わりたくないから。

母親のように、親しい人に裏切られるのが、怖いからだ。そう、目の前にいる女子生徒だって、親しくはなっただけでほしくなかった。

私は誰かと気兼ねなく話したく、ないのだ。

・・・だから、泉という人が怖い。

「いつも」私が誘いを断っていることに、何の疑問も抱こうとしないこの人の、純粹すぎる性格が、どうしても私には理解できないのだ。

普通、こんな人間は誘おうとも思わない。

なのに、彼女はそれを考えもしない。ただありのままに、赤ん坊のように屈託なく接しようとする。

・・・わからないな・・・

私は、心の中で呟いた。

人の理解を超えた幽霊が恐れられるのと同時に。

私はこの人がわからなくて、よけいに不気味だ。

「なんか考え事しちゃって、どうしたのん」

そんなささくれ立った私の思考を遮るように、泉は朗らかに語りかけた。

「え？」

「うん？」

・・・

しばらく、沈黙する。

気まずい「間」が流れて

「わーーーーっ!」

と、妙なテンションで叫ぶ泉。

「あはは、黙っちゃ駄目だよー。ちゃんと人の話を聞いてないと!」
変に大声で話す。どうやら考え事をしている間、何か話していたらしい。

・・・この人と話すのは苦手だ。

「ごめん」

と、なぜか謝ることにした。

どうもさつきから調子が狂う。主に人間レベルでタイプが違うこの二人が、話していることが原因らしい。

そんなわけで、かみ合わない話を続けること一時間。家にたどり着く頃には、気力を使い果たしてしまった。

「……夕飯、作らないと」

鞆を部屋に置いて、台所へと向かう。冷蔵庫の中身は、一通り揃っていた。

「……でも、明日辺り買い物にいかないといけないかも」

そしてなぜか落ち着かない気分だった。

* * *

氷室宗の居所は聞いていない。だから少年は、特定の場所に集まって「計画」を立てるほか、彼と会う機会はなかった。

「姉さんは一人暮らしをしている。だから、空き部屋とかもあるらしいんだ。その窓から、入って欲しい」

この日も喫茶店「レイ」という所で話を続けていた。小さな店だが、客足が途絶えることはない。繁盛しているだろうなと思いつつも、人に聞かれないか一抹の不安を抱えていた。

「大丈夫。こんなに騒がしい店内で、僕達の話に耳を傾ける輩は存在しない」

「万が一ってこともあるけど」

「……ふむ。でも僕が話す内容に、『殺人』とか、『姉を殺す』とかいった語句は含んでいないつもりだが」

割と小さな声で、話す。それから辺りを見回して、今の語句を聞き取って訝る客がいないことを確認すると、ようやくこちらに目を戻した。

「でも用心は重なるに越したことない、ね」
につこりと微笑む。脇に寄せた鞆を手に取り、それから何かを書き始めた。

「計画の整理をしようか」
左利きらしい。こまごまと書かれた文字がすぐに、手に食いつぶされるようで、新鮮な感覚に囚われる。

「計画」

八月十五日、午前零時。

それが、いわゆる決行日というやつだ。

宗は、その日泊まりに来ると姉に伝えているらしい。あらかじめ中にいる彼が窓を開けて、少年はそこから侵入する。「速やかに殺害」し、真つ先に逃走するのは宗。

「・・・」

少年は不満そうな顔だった。

「本当にゴメン。シナリオとして、どうしてもこうしなくちゃいけないからね」

その「シナリオ」では、「たまたま泊まりに来た弟が犯人に追われて逃げ出した」という状況を生み出す。もちろん、彼にも役割というものはあって、近くに留めてあった車を出し、玄関の前に止める。犯人を迎え入れて、二人は逃走する。

もちろん、少年は車の免許を持っていない。つまりこれが宗の役割というものだった。

「ふん、観客のいない三文芝居だな」

「いたら困るけどね」

二人はせせら笑う。その声すら、店内の賑わいにかき消されて聞き取るものはいなかった。

店を出て宗と別れた。

コンクリートで舗装された道路を一步踏みしめることに、薄汚れた靴から伝わる熱。あるいは、背後から照りつけるオレンジ色の太陽に、全身が汗をかいて反応する。けれど、少年にはささやかな苦痛でしかない。それよりも、不安という面が少年の心で大きなウエイトを占めていた。

この「計画」は本当に成功するのだろうか？

失敗したとしたら、その人生は終わる。

自らの「異常性」を曝してしまうのだから。そうして暴露された殺人願望は、自分の人格と共に否定される。

それを、知っていたからこそ、不安が隠せないでいた。

だが転じて、少年はこうも考えた。

ならばどうして、宗の「計画」に賛同したのかと。

別に、少年は殺人に快楽を求める人間ではない。そこに興味はないけれど、だが一方で「人を殺したい」とは考える。それが、少年の特性だった。

「……………」

機会を与えてくれたのは、まぎれもなく氷室宗という男だった。だがそれでも、納得がいかない。

別に、自分が彼に比べて損な役回りだということは承服している。

だがもつと根本的な部分で、納得ができなかった。

それは……………」

「……………」自分が、利用されているから？」

……………」都合のいいように扱われている、のだろうか。

「いや、違っただろうな。機会があったから利用しているのは、こっちだ」

少年は意味もなく呟く。

補習三日目。

第二校舎二階、三年某組にて。

俺は机に伏して、寝る準備を終えていた。

「・・・ぐがー」

そして頭を小突かれた。

「んもう・・・何ですか先生。補習までまだ時間があるじゃないですか」

「それ以前にお前の態度が気に食わん」

と、はきはきと喋るこの女性は、氷室美月といった。

「大体だ、お前さえいなければ私は余計な仕事を持たなくてもよかつたんだ。だからその分、厳然とした態度で臨もうとこっちは意気込んでいるというのに、何だそれは」

・・・まっとうなことを言ってるように聞こえて、個人的な事情が多分に含まれている気がする。

「俺だつてこんな補習の予定立てた覚えはないツス」

「だがテストの点数は、お前だけが赤点だ。もちろん、一ケタというのもお前だけ。私は、そんなに難しい問題を作った覚えはないのだがな」

肩をいからせてくどくどと話す。どうやらこの女の先生、補習というものを目の上のたんこぶのような仕事と捉えているようだ。そこに一人の生徒を救済させようという積極的な意思は微塵にも感じられない。

・・・というのは、俺の推測だが。

一応、教師という立場では、しっかりと授業を組み立てていた。個人レッスンに近いものがあるので、ものを教えやすいのだろうか。それともこの人が俺の状況に応じた授業を立てるほどの有能な教師なのか、俺にはどうだっていいことだ。

俺のほうはというと、このところ記憶があやふやになるといったことはなかった。

授業は滞りなく進む。

氷室という人はどうやら、厳しい教師として通っているらしい。ただし、人望はあるとかなないとか。比較的若い部類に入る教師なので、生徒達から甘く見られることもあるという。

話を聞く限り、親戚の女の子がいて、氷室は彼女のクラスの担任を受け持っているという。

授業がひと段落したころ、俺はその辺りを話題に振ってみる。

「ふむ、確かに一人、いる」

氷室はあっさりと答えた。

「とても手のかかる子だ。お前よりも違う意味でな」

「へえ・・・？」

「こうして赤の他人であるお前のほうが、まだましに見えるというものだ。全く、困った奴だよ」

言いながら、表情は和らぐ。まるで手のかかる赤ん坊のことを聞かされているような気分だ。

「親戚がいるっただけで、気まずいと思いますけど」

黒板を綺麗に消しながら、氷室は首を振る。

「さあ、私もあの子も気にしないさ」

ふうん、とだけ応えて、俺はまた机に突っ伏した。

つまり、それだけ仲のいい親戚なのだろう。教師と生徒という立場は差し置いて。

もっと言えばそれは互いに信頼を寄せているということ。

俺には関係のないことだけだね。

他人の噂話には興味を持つような、ゴシップ記者のような俺だけだ。

退屈な授業を終えて、俺は早々に帰宅する。

「一人だけ補習つっーのも、空しいというか」

ああ、この間のテストの出来にはまだ納得したわけじゃない。勉強したはずなのに、その時の記憶ごとまとめて失くしたものだから、やりきれない。

今まではこんなことはなかったけどね。

原因は、わかっている。

おそらく、これまで人の記憶を見続けた代償が、押し寄せてきたのだろう。

・・・人の理解を超えた力だから、それだけ脳にかかる負担も馬鹿にならないということか。

「あ痛・・・」

また。

頭痛が、また始まる。

後頭部を針で刺すような痛みは、治まらない。
とにかくこの時は寝ないと駄目だ。

教室であっても、どこでも。

そうして、家に向かう道を急ぐ。

講習の合間、つまり昼を過ぎた辺りからだろうか。

「うつわあ・・・雲いっぱい」

私が昼休みに食堂へと向かう途中、泉は大きな窓が灰色に染まっているのを見てうなだれていた。近くには友人らしき生徒が騒いでいる。

「これじゃあ外のコンビニに行けるかどうかわかんないし、どうする泉？」

と、ショートカットの女子生徒が問いかけた。

「んー、仕方ないから食堂で食べよっか」

「はーあ、しよーがねーな」

「柳はどうする？」

長髪で眼鏡の女の子は、うつんと唸ってしばらく考えている。でも、こっくりとうなずいた。

「よし、じゃあそっういこと」

彼女達を尻目に私は教室へと戻ろうとした。

すると、泉がこちらに気付いた。

「藍園さん！一緒に食べる？」

即座に首を振って断る。

「もう食べた」

「んー残念・・・」

今度は違う意味でうなだれる彼女のそばで、「あの子は？」とショートカットの女の子は泉に視線を投げる。何か話しているようだったが、小声で聞き取れない。

「・・・ふっ」

そのまま帰ろうとすると、また泉に呼び止められる。

「・・・何か」

泉は、ポケットから何かを取り出した。特に装飾のない、黒地の

地味なハンカチだ。

「こないだはありがとね」

にっこりと笑みを作って、私に手渡した。

ほんのちよつとだけ、まごついてしまう。

「え、ええ・・・どうも」

「うおーい早く食べよーぜ。休み時間なくなっちまうじゃん」

「あー今行くから・・・(じゃ、また!)」

そう言って、食堂のほうへと向かっていった。

「・・・また嘘ついちゃった」

食堂で食べようと思ったのに昼ごはんどうしよう、と窓の外の曇り空に問いかける。

* * *

泉は用事があるといって、授業後すぐに帰ってしまった。一人ぼつんとこのさされた私は、ゆっくりと鞆を片付ける。教室に誰もいなくなつたところで、携帯の電源を入れた。

「・・・先生か」

メールが一件、届いていた。ただそれは、たまに送られてくる広告のようなものだったので、すぐに消す。携帯をパチンと折りたたんで、ポケットにしまった。

予測したとおり、外は雨に包まれている。

水溜まりを避け、暑さの和らいだ雨空を、眺め歩いていた。時折道を我が物顔で通り抜ける車は、水たまりを踏むごとに泥水を撒き散らす。よりもよって、私のほうへと。

「最悪」

水気を含みきつた皮靴と靴下を見て、私は不快を感じる。早く、家に戻って脱ぎたいものだと、帰り道を急ぐ。

だがしかし、不運というものは私を止めてやまない。

「講習の帰りかい？」

道の五メートル先、傘をさしたにこやかな青年がいた。

彼の名前は、氷室宗。先生の弟なので、私とも知りあいだった。

「・・・はい」

「ちょっといいかい、君に話したいことがある」

私は心の中で、即座に拒否する。だが、わざわざ私のために、帰り道に待っていてまで話すことというのは一体何なのか。少しばかり気にもなった。

「急に、話さなきゃいけないことですか」

「いいや。だけど、君の家に僕一人が押しかけるのもどうかなんて思ってた」

「構いませんよ」私はなんの気もなく告げた。「ちらかっていますけど、こんな雨の中で話をするより、まだましです」

「・・・珍しく機嫌が悪いじゃないか？ どうしたというのだい」と問いかける宗の暢気な態度に、私はさらに機嫌が悪くなった。

雨は、降り注いで止まない。

マンションの十階にある私の家はどことなく、閑散としている。金銭的なこともあって、家具という家具が少ない。ただの中学生が家を持っている、というのも変な話だが。

「久しぶりに来てみたが、やはり物が少ないというか。お金のほうは大丈夫なのかい？」

「ああ、心配しないでください。ちゃんと大丈夫です」

「コーヒーを淹れながら適当に受け答える。正直、家庭的なことに関しては大抵は慣れた。」

「生活力があるんだね。・・・すごいと思うよ」
「本当はしたくてしているのではないけれど。」

「たまたま、私の周囲の人たち『のせいで』、こんな生活になっただけ。『あの人』がいれば、多分大丈夫。」

改めてそう確信して、自分に対してかりそめの自信を作る。しょちゆう、不安を抱く、ちっばけな自分に対して。

「コーヒーカップを差し出して、スプーンを宗のそばに置いた。

「ふふ、ありがとう」

つくづく、笑みの絶えない人だな、と思う。裸足になった足をテーブルの下に放り投げて、しばらくイスに背を預けていた。

「・・・姉さんは元気かい」

ふと、宗は尋ねる。私はうなずいて応えた。

話の内容は、引越しの手伝いをしに来ないかというものだった。聞けば、今月の中旬にはもう移り住むのだという。

「この近くの町に越すことになってさ。仕事の都合で」

「へえ、じゃあ、隣町ですか？ あそこは最近、再開発とかが盛んだって聞きましたけど」

情報源は主に、隣に住むふくよかな中年のおばさんだったりする。ちなみに隣町も、同じ湾に面した、磯の香りのする土地だ。

「うん、そうだ」

「ならいいですよ。別に隣町なら遠くはありませんし、夏休みは基本、暇ですから」

とりたてた話ではないけれど、こういうことだったのか。私は納得する。

「・・・姉さんも手伝いに来てくれると有難いけどなあ」
不意に疑問を感じた。

「あの、もしかして先生には話してないのですか？」

「ん、そうだ」口元をほころばせながら答える。「中々忙しいみただし、連絡はいれてないな」

コーヒをすすりながら話す。言われてみれば成程、夏期講習のプリント作成はおるか、誰かは知らないけれど、ある一人の生徒の補習を行っているらしい。

「ああ、僕からいずれ連絡を入れておくから。君の手を煩わせることはしない」

「・・・そうですか」

そつとコーヒークップを差し出された。おかわりだと分かったので、また台所へと戻る。

「知人に君と同じくらいの子がいてさ」

「はい？」

コーヒーマーカーを手に、慎重に注ぐ。割と重たいこの魔法瓶は、使い古したものだ。

よくコーヒーを飲む私としては、手放せない。

「その子の話だと、近くの埋立地に倉庫がポツンと置かれていて、そこによく猫が来るらしいんだ。知ってる？」

「ええ知ってますよ」

リビングに戻って、テーブルの上にそっと置く。ミルクを入れて薄まった黒の表面が、かたんという音と共にわずかに揺れた。

「私、しょっちゅうあそこへ行くんです」

それは、どうしてだろう。

気が付いたときには、あの場所の存在を知っていた。

元々、いつも一人きりでいられる場所を探していた私にとって、そこは居心地のいいものだった。特に、母親の一件以来は。

従って、猫が住み着いていることも知りえている。とはいっても、その猫たちがどこから来ているのかは謎だ。広い埋立地のどこから入ってきて、どこへ行くのか。彼らは気の赴くままに、どこへでも行く。

私にはその自由が、羨ましくもあつて。

「・・・面白いですよ。彼ら全員が飼い猫ですから」

「それは初耳だな」

「ほら、首輪とかあるじゃないですか。私が見る限り、全員がつけているんですよ。」

食べ物もないし、本当にどうやって暮らしているんでしょうかね
考えたこともないけれど。

とにかく、居心地がよければ、深く考える必要もない。
そう思っていたのだが。

「捨て猫だな」

氷室宗は、しかし冷静に告げた。

「……………」

「おそらく、捨てられた猫が集団で集まっただけのものじゃないかな？ 僕にはよくわからないが」

「そうであっては、ほしくないものです」

「ふむ、今度行って見たいものだな」

そう言つて、二杯目のコーヒーをすする。

二杯目でストップして、宗はすぐに帰った。引越しの準備が控えているのだという。

私は部屋に残ったコーヒーカップを手に、流し台にいた。泡の含んだスポンジをこしこしと当てて、軽く洗う。

ある程度水を落としたところで、カップをタオルの上に乗せて乾かす。今度はコーヒーマーカーに目を向けた。

まだ少しばかり、黒い液体が残っていた。

「もつたいない、かも？」

処分すべきか、しばらく悩んだ末に答えを出す。

棚から別のカップを出して、なみなみと注いだ。

小休止のつもりで、

「……ぬるくなったなあ」

口当たりが悪い砂糖無しのブラックをそのまま、ぐいと飲み干した。

あの倉庫に、人が入っていないはずがない。

そこは、私が一人でいられる場所なのだから。

学校の屋上も、道端も、川の土手も、一人きりで暮らすこの家ですらも、私は落ち着かない。うまくは形容できないのだけれど、そういう次元の「孤独」とは違うのだ。

あそこには私を引きつける「何か」があつて、だから独り占めしなく思うのだ。

だから。

宗の言った「同じくらいの子供」が誰なのか、どうしてあの倉庫のことを知っているのか、不安に駆られる。

誰かがいつもそこに来ているなんてことは、認めたくはないのだ。

「・・・嫌だなあ・・・」

胸に湧きおこる様々な思念を、振り払うように首を振る。口をつけたカップをテーブルに置いて、私はあの場所へと足を運んだ。

土埃で化粧を施したような倉庫は、薄暗かった。私は近くの明かりをともし、改めて中を覗いた。

「・・・・・・・・」

あちこちからくる、猫の鳴き声に、私は耳を傾ける。するとそばのドラム缶の隙間から、一匹の子猫が身を乗り出してこちらを見上げる。

不意に目が合った。

「・・・そんな目で見つめられると、なんか気まずいなあ・・・」

ぶつくさと一人ごちて近くの鉄材に腰掛ける。割と静まり返った倉庫に、猫たちは忍び足で私に近寄る。

数はそれほど多くない。

彼らの特徴と名前を、全て記憶の片隅にインプットしている。だから、至る所から現れた彼らに、さほど驚いたりはしない。

彼らも頭では理解しているだろう。私は猫に餌をやったことがないのを。

「そんな目で見て、食べ物を持ってないよ」

囁くように猫たちを諭す。すると言葉が引き金となったかのようになり、彼らはゆっくりとした動作でどこかへと去ってゆく。

そして再び静寂は訪れた。

時が止まっていた。

今にも夕闇に暮れそうな、明るく晴れ上がった空だけが、私の腕時計を動かしているようだった。けれどもやがて日は落ちて、空は黒く包まれてしまった。

この倉庫は埋立地の奥にあつて、近くには大きな川が流れている。だが、それだけだ。他に私と世界を結ぶものはない。

ここはあらゆる世界から切り離され、時のない空間だけが支配していた。

それはまるで日々を記録する日記を必要としないかのように、確かにこの瞬間は止まり、動かない。

そんな退廃とした場所に、私の居場所はあった。家や、学校にはけしてありえない、自分だけの世界、^{スペース}といったところか。

こんなことを考えている時点で、私の性格のほどが知れるものだけれど。

ここにいることで、私の心が落ち着きを取り戻してくれるのなら、構わない。

深く呼吸する。

もう少しだけ、この場所に一人でいたい。

* * *

翌日の朝にはもうすっかり雨は上がっている。その代わりに焼き付けるような暑さが私の気分をまずいものに変える。

だがそれはお構いなしと、この人は清々しくもあつたりする。

「今日が講習の最終日、いえい!!」

私の背中をばんばんと叩く泉に、私は痛いと思いつつも呆れて仕方がない。

「・・・夏期講習ってたしか、有志で申し込んだんだよね。自分から授業をとっておいてそれはないと思う」

「いやいや、ウチの場合さ親がとれとれってうるさくて。半強制だったんよもつ」

一気に機嫌を悪くして、むすつとほっぺを膨らませながらぶつぶつ愚痴る。とても感情表現豊かなこの人に、私は羨ましくもあつたりする。

「・・・うらやましい」

「え、なにがよ?」
なんでもない、そう言っただけだ。

最終日ということもあって、その日の授業はどこか浮ついたようでもあった。中原という教師からプリントの復習を心がけるようにと言われて、教室にいた生徒が一斉に席を立った。

「ね、藍園さん」

鞆のチャックを開いて数学のプリントをしまいこむ私に、泉は話しかけてくる。

「はい?」

「今日、ヒマ?」

「・・・それは、どういう」

「いやいや、大した事じゃなくって。猫にエサをやるの」

「エサ・・・?」

私はオウム返しのように言っただけ、思わず首を傾げる。いまいち要領を得ない。

「そういえばあなた、この近くの猫にも餌を与えていたわね」

「あ、ううん違う。そっちは基本、飼い猫だから。ウチが言ってるのは、倉庫のほうなんだ。」

「それで、そこにも捨て猫がいるんだ」

「にわかには、私は今の言葉を疑った。」

「倉庫にいる猫、にこの人は、餌を与えている・・・?」

うつむいていた顔を上げる。朗らかそうに話す彼女と視線が合った。

「それでさあ、友達って冷たいんだよ。青木とか、『そんな退屈で馬鹿らしいことはしたくない』だってさ・・・ん?」

「・・・」

「聞いてるー?」

「え、ええ。でも、一つ聞かせて」

「ほえ？」と気の抜けた声を出す泉に、私は思い切って尋ねた。
「あの倉庫って、『誰も入れない』じゃないの？」

誰も、入って欲しくない。

・・・しかし、泉は手を横に振って否定する。

「いや、抜け道を使えば簡単。ていうか、そこ知ってるの私だけじゃないし。みんなもよくエサやりに来てるけど」

例えば、倉庫の猫たちは自分の食料をどうまかなっているのだろう。

ネズミでも貪るのか。かつては飼い猫だった彼らに、そんな狩猟技術を求めるのは不可能だろう。

私は餌を与えたことはない。

すると、彼らの餌は誰が・・・？

そう考えた時、私は自分の歯で唇を噛んでいた。

いつのまにか染み付いた黒い点が、今まで真っ白だと考えていたものについていた。

それはいわば、お気に入りのセーターの生地に、大きなシミがあることに気付いたときのような、不快感。

自分だけの空間だと考えていたそこは既に、「他人」が割り込んでいたのだ。

他人という存在は、私をいつも不安に陥れる。私は、彼らとは関わりを持ちたくないのだ。

だから。

自分だけの空間を求めたのに。

「・・・・・・・・」

・・・自分の勝手だろうか。
とも、私は思う。

別に、あの場所が私だけのものだ、法的に定められたのでもなければ、彼らがそこに入る許可みたいなものを、私が決める権利もない。

「他に、誰かが来ることって、あるの？」

私は、尋ねた。

「うん。だって倉庫まで遠いし。みんな、面倒臭いんだよ」

そう言っただけで苦笑する。つまり、倉庫には私の他に彼女だけが来ている。

泉は、自分だけが来ると思い込んでいる。

それなら、いいかな。

と私は思う。

他人であつても彼女ならば、自分は受け入れられると信じられるのだ。

それは、友達だからだろうか。

自分は裏切られることが恐くて、他人と関わりたくなかった。

だけど、この人なら信じてもいい。

・・・どうして、私のような腐った人間にも接してくれるのか、理由は知れないけど。

「うん、いいよ行こう」

「ふえ、その口ぶり。ひよっとしてキミも行った事があるのか？」

ちよっとね、と言葉を濁した。

革靴に履き替えたところで私は気付いた。

「あ、ふではこ・・・」

机の上に一つぽつんとあるプラスチック製ケースが、頭に浮かぶ。

「ごめん、取りに行くから待っててね！」

そう泉に頼んで、駆け足で教室へと向かった。

自分としたことが、さつき取り乱したせいなのかな。

余計な考えをしたくない、首を振る。

窓の外から突き刺す光が、廊下をじんわりと蒸してゆく。どうせあと数時間もしたら日が暮れて、光の源が断ち切られる。それにあちこちの教室は冷房を強くかけていたのか、そこを通り過ぎるたびにドアの隙間から、眉をひそめるほどの冷気がこちらにあたる。

「こんな寒い、不自然だ」

ぶつくさと文句を垂れながら、階段をさらに上へと突き進む。

すると、一つ上の階から人の話し声が聞こえた。

何だろうと思いつつも、踊り場で足を止める。階段を上りきったところに、彼らはいたからだ。

見知らぬ二人組の男子がそこにいた。

「調べたけどヨ」

そのうちの一人はリンゴジュースを手に、奇妙な口調で話し始めた。

「風。お前のところの補習の先生、姪がこの学校にいるらしいナ。

聞いた力？」

「直にね」

それを聞いて、奇妙な口ぶりの男子はケタケタと卑下た笑いを作

る。

「で、不動。それがどうしたっつーんだ」

「それがヨオ。同じ授業の奴から面白ー話聞いたんだケド。その姪っつーのがなんともアレな性格なんだとヨ。ヒキコモリ？ んー、よくわかんネエけど、ともかくそんな感じノ」

凧という名前の少年は、肩をすくめて

「・・・話の意図がまるでつかめない。どうしたというんだ」

「ハブられてるんだってサ」

「その姪が？」

「だってそうダロ。その姪、補習のセンセイが担任のクラスだぜ？ 鼻屑もイトコじゃねーのヨ。ああそう、現に何かソイツだけ扱いが優遇されてるトカ。他の奴らもやりづれーったらしょうがネーダローナア。傑作。キハハ！」

「身内は可愛いとか、そんなレベルの駄目人にも見えないけど。つか、お前知らないけどさ、アイツ厳しいぜ？ 今日授業前に寝てたら頭シバかれた」

「ふーん、ソイツDS？ 良かったナアオイ。DMの凧クン。つか、お前頭悪イ上にマゾって最悪だナア」

「つるせーよ死ね」

凧という少年は舌打ちする。リンゴジュース片手に、不動という奴は下衆な笑い声を、階段にとどろかせていた。

踊り場のそばにいた私は、

「・・・」

彼らが消えてなくなるまで、ひたすら堪えるしかなかった。

だが凧という少年はさらに続ける。

「・・・もしさ、そいつが同じクラスにいたらどうする？」

「触らぬ神に祟りなし。ま、そいつが泉みたいな奴だったらまだ見て楽しいけどヨ。」

ぶっっちゃけ、そんな根暗野郎と付き合う奴なんてイナイダロ」

「そもそも、その姪ってのは誰だ？」

「・・・さあ、シラネ。名前聞いたガ忘れタ」

「やれやれ、お前つて本当に人間として腐ってるな。そんだけけなしておいて肝心の名前忘れたとね。笑えるよっーかそいつも含めて笑ってやりたいね。こっちは補習と頭痛を抱えてストレスが溜まっているんだ。どうだスゲーだろ」

「全一然。アホかオマエ」

彼らの馬鹿笑いが、再び階段に響き渡った。

ただそれが、私の「限界」だった。

「・・・っ!!」

私はその時、階段を降りて彼らからなるべく遠ざかるように逃げ出した。

これ以上彼らの言葉を耳にすれば、「現実」を見てしまいそうだったから。

・・・自分と周囲かれらと差がある、という現実は、以前から感じていた。

とてつもなく広いのだと。

自分が、氷室美月という教師の親戚というだけで。

彼らは思い込んでいるだけにすぎないのだ。

私だけが、特別視されているのだと。

廊下を曲がったところで、足を止めた。

息が上がリ、思わず近くの壁に手をつけてしまう。全体重を右手に乗せて、私は体を立て直した。

「・・・気にしなくてもいいんだ」

途切れかかった息を無理に抑えて、自分に諭すように、言葉を紡ぐ。

彼らに陰口を叩かれても、無視すればいい。

どんなに「ひどいこと」を言われようと、それが彼らの本音なの

だから、自分が納得すればいい。

彼らの、自分への評価は、こんなものだ。

・・・なのに。

気が付くと、壁を食いつぶすように、右手が震えていた。

まるで、爆発してしまいそうなのこの感情を無理に押さえつけようとする自分自身に抗うかのように。

「でも仕方、ないよ・・・」。

だって、自分はそういう人間だもの。自分が、周りとは関わらないって、選んだことだから、『みんなそう思っている』んだから「言い聞かせるように、ゆっくりと私は語る。自分のせいであって、こんなことで自分が傷つく権利はない。もう一度考える。

悪口を言う彼らに純粹な悪意はない。それこそ、悪戯の類であって、彼らのそれに憎しみとかいった感情は含まれていない。

要は、からかっているだけだ。

「・・・だけど、成程。みんなが、私に近寄りたくない理由が、わかった気がする」

続けて、自分を説得させるように、言葉を重ねる。

「私と関われば、その人もおんなじ目にあう。おんなじ悪口を叩かれる。不幸になる。だから、誰も私に話しかけたりしないんだ。

そんな殊勝な人なんて、いるはずもないんだ」

私が求めたのは、「ただ一人」という孤独。

周囲とは崖を隔てて、一人きりになることを望んだのだから。

そう、永久に孤独であって、決して彼らと交わることはできない。

私には、彼らと笑い合うことは、できないのだから。

「だけど、それでいいんだ。あの人たちから、離れていたほうがさ・・・」

あきらめなさい。そして、仕方のないことだと割り切るのです。

・・・そうして、私は心を落ち着かせて、息をつこうとした。

だが、

「あれ、こんなところにいた？」

もう、探したよ

廊下の先に立つ彼女の姿に、私の心は更に、醜く歪む。

「忘れ物はとった？ 早く行くよお」
そう無邪気に話しかけ、私に一步近寄ってくる少女が、そこにいた。

「……………黒木、さん」

私は、再び思考を働かせた。

彼女は、私にも普通に接してくる。

まるで、自分と周囲との間で作った垣根を、無視するかのよう

に。

そして、思考回路を存分に動かす。

泉が、私と関わる理由は？

どうして、「こんな私」に話しかけたりするのだろうか。

そこまで考えて、

私は彼女の微笑みを、目にした。

行くよ、と。

それは、純粹な感情から溢れる、ごく自然なものだった。
それゆえに私は言った。

どうして、と。

「ほえ？」

どうして、あなたは何も思わないの。

どうして、こんな私に満面の笑顔を見せるの。

私には、わからない。

その笑顔は、理屈に合わない。

と、

「どうしてそんな簡単に笑顔が作れるかって？ そんなの決まってるでしょ。」

友達といると、楽しいからだよ」

にわかに信じがたいことだった。

そもそも、そんなことをためらいなく口に出れること自体が、ドラマの台詞のように芝居じみている。友達といるから楽しい？ だったら、私の母親は何だったの？

『どうして私を殺そうとした？』

親子ですら、そんな関係なのだから、友達なんて都合が悪ければ、裏切るに決まっている。

それが、恐くないの？

陰口を叩かれていても、私のように周囲と絶縁していれば、受ける傷もそれほど深くはならない。

だけど、信頼すればするほど、それはどうしようもないほどの傷を負ってしまう。

理由がなければ、彼らと付き合っついられないのに。

そう、泉が話しかけてくることも、理由がなければおかしいのだ。じゃあ私に接しようとする理由は？

あるはずもない、理由とは？

と、そこまで考えて。

「・・・あ」

私は気付いた。

気付いてしまった。

それしかありえないという、打算に満ちた理由を。

「・・・ふうん、そういうこと」

突き放すように、熱の冷めた口調で話しかける。

そして、逆の意味でごく『自然の』笑みを見せる。

醜悪な笑顔。

「あ・・・はは」

壊れた人形のような、むしろ不気味に思えるような笑い声。
さぞ奇妙なものに見えるだろう。

私は、言った。

「あなた、そんなことを考えてたんだ。

ごめん、私、『そんなの』に付き合えないから。どんなに酷いことを言われても、構わない。だけど、『それだけ』はされたくない。だから、さよなら」

「え？」と、あからさまに戸惑いの表情を見せる泉に、私は背を向けて離れた。

呆然と立ち尽くす彼女を、置き去りにするように。

私は、震える拳を握り締め、教室に入った。

そして、

「つぎけるなあアアッ!!」

私は、強烈に否定した。

要は、こんな寂しく孤独な私に同情しているんだ。

泉に同情されているんだ。

一人もまともな友達がないことは、彼女もわかっているだろう。

それを知りえた上で、彼女は哀れに思ったのだ。

後は不登校児に対する母親のそれと同じ。

わざと自分と同じ目線で語りかける。

陰口を叩かれるような、哀れで、無様な自分を慰めようとして
いるんだ。

だが、

それは自己満足のつもりか？
それで、私を救おうとした？
白々しい限りだ。

同情なんて、誰にもされてたまるか。

「あなたには分からない！」

私には、それが気に入らなかつた。

反吐が出てしまうくらいに。

誰もいない教室に、机を叩く音がこだまする。

「あなたには分からない。分かつたつもりでも、あなたはなんにも理解してないんだ。

私は、誰とも関わらないままでよかつたのに。

あなたが私を無視してくれたらよかつたのに。

あなたが下手に関わろうとしたから。

・・・この何日、あなたのせいで、今どれだけみじめになつたか。
あなたが私を、みじめにさせたんだ！」

そうして、私の心は歪む。

誰にも見えないところにまで自分を隠し、閉ざす。

孤独であることよりも、憐れまれて、中途半端に自分に関わられることが、私には耐え難い苦痛だつた。

それは、些細な心の行き違いだつた。

何も知らず、ごく普通に接する泉と、人をどこまでも疑おうとする彼女の、人間としての違い。

結局は、素直であることができなかった。

人間不信という言葉に、集約されるほどに。

「・・・ひどい」

自虐的に、私は小さく呟く。そうして爆発するような怒りの収ま

った後に残るものは、冷やかな感情。金属が、急速に冷却されるように、私は硬い氷に覆われた室内へと、自分を押し込めて閉ざす。もう、ありのままの自分を保つことなど、できるはずもなかった。今の自分を、支配するものは・・・

「ひどいよ

・・・

あハハ」

今まで押さえ込んできた、全く別の感情だった。

私は汚く笑い続けていた。かみ合っていた歯車が壊れて、空回りを続けるように、私は同じように愉快そうな声を出す。

「同情ねえ、それは気付かなかったわね。でもそれって、ものすごくムカつくわ」

あさましい限りの言葉を、口にする。そうして自分を傷つけることを知らずに、彼女は我を失ったまま、行き場のない笑いを放つ。けれど、心には別の感情が、私を支配していた。

「・・・・・・・・」

私は、他人に同情されるのがとても嫌でイヤで仕方ない。憐憫という言葉を借りて、他人は私を侵食しようとする。

手前勝手な思いを押し付けるのだから、自分への理解は微塵にもないのだから。

泉という人間が、そうやって私を蹂躪しようとするのなら。

私は彼女を傷つけることをいとわない。

私は私を守るために、泉という他人を排斥する。

「・・・八八」

そうして、また吹き出す。どこかおかしくって、私は崩れた笑みを浮かべる。

そうして、

「こんなところで、何してるんだ？」

氷室美月は教室のドアの前に佇んでいた。

「・・・・・・・・」

「うん？ 忘れ物、か」

ええ、そうですよ。と、私は自分を偽るように微笑む。

「そっか、早く、帰れよ。車に気をつけてな」

温かな声だった。私は、その言葉を頭の中で、何度も反芻し、「はい、さようなら」

・・・それすらも、打ち消した。

今の私は、別の感情だけがうごめく。

そいつは、氷室美月を遠ざけると言う。

そうしないと、自分の『決意』がぐちゃぐちゃに、揺らいでしま
うから。

私は、あの人と反対側のドアから、出て行った。

あの人と別の道を、正反対の方向を、歩むようにして。

「決意」は揺らぐことはない。

こんな自分を前に。

結局は、先生も同じように哀れに思っていることだろう。

今となっては、それに甘えることすら叶わない。

自分自身が、気付いてしまったからだ。

同情されているんだろう、と。

赤ん坊をあやす母親のような眼差しで。

それでも私は、あの人を恨むことはできない。

どこかで自分を信頼しているんだという想いが、まだ尾を引いて
いるから。

その分だけ。

私の憎しみはもう一人の少女に加える。

全ては自分を守るために。

あまりに近寄りすぎた彼女を、遠ざけるために。

「愚行」だとは感じない。

いや、そういう感覚すら麻痺しているんだと思う。

「あ八」

不意に、我に返る自分があった。

その時私はあの倉庫に佇んでいた。明かりはついている。がしかし、窓から見える空の色は暗く、夜が更けたのだなと私に思わせる。そして、

恐ろしい光景が、目の前に繰り広げられていた。

戦場で目にするそれと、全く変わらないでいた。

切り刻まれ、皮を剥がれ、目を抜かれ、足を切られ、つめをはがされ、おなかを裂かれ、背骨を断たれ、首を折られ。もはや骸とも屍とも呼べないそれを、捨て猫だと頭の中で認識するまで、少しの時間が必要だった。

ふいに、私の手を見た。どこで手にしたのか、家に戻って持ってきたのか。制服を着たまま、そのてににぎられていたのは。

「気持ち悪い」

・・・肉片のこびりついたナイフを、ポケットから取り出したハンカチで拭う。黒く染め上がったそれは、またたくまに滲んでいった。このしみはもう、取れない。

ハンカチをその辺りのコンクリートに放り投げる。臭いもとれそうにないだろう。

それを見て、私はもう一度、行為を思い起こした。

「・・・ああ、私が、この猫殺したんだな」

そう肯定する。罪悪感というものは、とうに失せた。

だから、背後に誰かがいることに気付いても、私は驚かない。悠然と、振り返った。

「・・・・・・・・・・」

青年がそこにいた。いや、私の見知った人物だ。

「宗、さん」

その青年は入口に立っていた。何も言わず、ただ笑みを見せるばかり。

無言に包まれて、埃っぽい空気が辺りを覆う。私も彼も、しばらく目を合わせるだけだった。

やがて、彼はどこかへと立ち去ってゆく。

その背中は、闇に紛れて消えてなくなった。

「あハハ」

一人きりになって、もう一度こみ上げてくる。

次の瞬間には、張り裂けそうな笑みを盛大にこぼしていた。

いつまでも、止むことを知らずに。

十一月も半ばにさしかかったせいだ、と俺は白い息を吐き出しながら思う。

その日は特別授業で、正午を過ぎると生徒達は一斉に帰ってしまった。いつものようにクラブ活動に残る生徒もなく、俺はしんとした廊下をゆっくりと歩いていった。足を踏みしめることに、齒をかちかち鳴らしながら。

本当に、校舎というのは寒いところだと思う。

気温が低いのと、無機質な生気のない建物の造りと、無人の冷たさ。そういうものが、押しかけて寒い。

「高校生つつつても、なにも変わらないもんだな。校舎のつくりとか、教室の配置とか」

さしあたり建物に文句を言いつつ、階段を一段飛ばしながら駆ける。行く先は、教室ではない。

昼過ぎという時間帯が一番温かい。それに、屋上には太陽を遮るものはない。海風が強いけれども、それを差し引いたとして、寒くは感じない。

「いた」

俺はぶつきらぼうに呟いた。目を向けた先に、藍園は金網によりかかってぼつととしていた。

もちろん、他に生徒はいない。そもそも屋上に上ることは禁止されているのだ。むろん、意味のない規則だと誰もが考えているけれども。

藍園はため息をついて、

「何か用？」

と無愛想に尋ねる。

「なけりゃ、とつくに帰っていたところだけど。」

アンタの靴箱だけ、上履きが入っていなかった。それを見て、まだこの学校にいると思つてさ。全く、随分と探したもんだよ。

それよりアンタ、いつもこの屋上にいるのかい？」

「いたり、いなかったり、かな」

「ふうん、まあいいや。」

・・・アンタに聞きたいことがあるんだ。昨日、アンタの記憶を見て、どうしても知りたいたいことが出てさ」

感情のない視線を送って、藍園はまた、溜息。

「あなたのその好奇心、どこまでも貪欲っていうか。呆れるわね」
冗談、と付け加える。

「別に。納得できないから聞くだけだよ」

『事件』の全てを知りたいっていうのは、最初から変わらないけどね。

大きな川が、金網越しに広がりを見せる。晴れた冬の日は空気が澄みきつているせいか、遠く海の景色まで見渡せる。十月に入ったばかりのあの時は、見えなかったけれども。

「猫を殺した理由？」

その中で、藍園はふいと首を傾げる。

「わからない、かな？」

「記憶を見た限りではね」

過去をのぞいたといつても、人の心の中なんてわかるはずもない。言外にそういう意味が含まれていた。

「だから、知りたいんだ。アンタが泉を避けた理由。アンタがそれを『みじめだ』と思った理由。どう見ても、あの時のアンタは錯乱していた。正直、とても正視できたものじゃなかったけど。」

・・・そこだけが知りたい」

俺は平然と述べる。けれど、彼女に同情する気になれなかった。

哀れだとは思っけれど、同情してはいけない。

「・・・人の家に土足で入り込むような言い方ね。ぶしつけという

か

ぼつりと口に漏らして、ふいに天を仰いだ。高くのぼりつめた空と向き合う形で、俺に答えた。

「ま、いいわ。特に隠すことでもないし。簡単なことよ。

私はあの子を疑ってしまったの。疑わなければ、気が済まなかった、というのかしら？」

彼女は続けて、

「人間として、最低な行為よね。笑えると思わない？ あの子は、本当に私を友達としてみてくれていた。なのに、私にはそれを信じようとしなかった。だって、そうでしょう。今まで誰一人として私に話しかけた人はいない。他人に対して、疑心暗鬼だった私に。

いつか、『私達三人が会った』時、あなたにだけ言ったわよね。

『私はあの子が怖いって』。あれは、そういう意味なの。純粹で、誰一人隔たりなく、私にすら話しかけることが、私には理解しなかった。理解できない分、『何かウラがあるんだろう』って、恐くなくて。

・・・そうやって誤解した結果、私はとりかえしのつかないことをしてしまったの」

泉に、悪意はない。

要するに、とまどい続けた藍園が自分勝手に傷ついて、思い込んで、そのくせ、ありもしない疑念にかられて、勝手にキレただけだ。そこに、同情する余地はない。

・・・ただ、哀れでしかない。

悪い意味にとらえるのなら、孤独とは、そういうものだ。

「偽善だ、って思った。けれどあの子は、ただ普通であっただけ。

あの場で否定されなくちゃいけないのは、むしろ私のほうだったの」

俺は平然と、「自己嫌悪に陥るまでの」彼女の話の聞き続ける。

家の扉を開けるまで、大層時間がかかったものだ。

と氷室美月は、何処か投げやりな口ぶりだった。家の鍵をポケットから掴み取って、静かに差し込む。これほど頑丈そうに見えたドアは、小さな鍵だけでたやすく開く。

「鍵、か」

氷室美月は、一人呟く。

「なければ先へは進めず、あればいとも容易くこうして開く。たった小さなものが、大事を変えてしまう・・・成程、それで『重要』という意味がこの言葉に付加したのか」

言葉というものは面白い、と納得しながら玄関に入る。

「ならば、今日のキーポイントは、福原の馬鹿者と道端で再会してしまったことだな。しかもあの店の前で。」

店に入ったはいいが、つい話が盛り上がって、帰るのも遅くなってしまった。全く以って、情けない。補習が明日に控えているというのに」

饒舌に言いながら、表情は和らいでいた。その脳裏にある光景は、何か。一年後に店主が殺害されてしまうあの喫茶店で、高校時代の同級生や友人の店主たちと、思い切り無駄話に打ち込む。そういった風景だろうか。

この時期になって旧友と再会できたのは、本当に幸運だったと、彼女は思う。

次は、おそらくないだろうから。

「・・・さって、日記つけないとな」

このほのぼのとした日常に、一つネタができたから。

机に向かって、白い手帳を開く。

八月九日、とまず記入した。

* * *

頭痛薬を買いに行こう。

そう決意し、俺は薬局へと旅立った。

のはいいけど、

「あ、あ、尻！ 今さ、公園でちよつと空き缶拾い（報酬ナシのボランティア）をやってるんだ。手伝って」

と、珍しくもなく朝からテンションの高い泉に腕を引っ張られて、公園へと引きずり込まれてしまった。

公園には何人もボランティアが、ビニール袋を片手にゴミを拾い続けている。

「なんだよ一体・・・」

溜息をつく俺をよそに、泉はどこからか持ってきたスコップと袋を手渡してきた。

「犬の糞とか、生ゴミの類は袋にお願い。空き缶とは分別してね」

「・・・眠い」

だるい。

かつたるい。

従って、俺はしばらく公園のベンチに座り込んでいた。

「・・・でも気まずいよなあ」

よつこらしよ、とすぐに体を起こして、泉のところに行く。

彼女はせつせと無償労働にいそしんでいた。

この資本主義の世の中で、タダ働きというものほど人の気力を根こそぎ奪うものはないと思う。

「なあ、俺さ。頭痛薬買いに来ただけなんだけど」

「それが？」

「・・・あれ、もうアンタの中じゃ尻クンのお手伝いって決定なんだ」

「それが？」

「……わかったよ、手伝う」

朝なので血圧とテンションの低い俺は仕方なく、頭痛薬をポケットに、ゴミ拾いを黙々と行うことにした。

しばらくして、ふと気付いた。

「なんで朝っぱらからアンタ、こんな仕事を手伝ってるんだ？」

見渡す限り、中年のおばさん達ばかり。見知った奴もいないので、余計に泉の存在が浮いている。

「うん、お母さんにつれてこられて」

「ああそう。で、なんで俺も参加なの？」

「まだそんなこと言ってるんだ。いいじゃん、せつかく見かけたんだし」

「ああそう。でもさ、よくこんな暑い中働けるよな。ひよっとして朝型とか？」

なぜか今日の補習が休みだったため、もう一眠りしたい完全夜型人間の俺は聞いてみる。

「ううん、今日は気分が悪いだけ」

「はい？」

ふと、疑問に思う。

「気分が悪いから、はりきるの？　すげえなアンタ」

「ん、ほらよくあるじゃん。調子の悪い時にリフレッシュのつもりで運動するとか。汗を流すと意外と気持ちがスッキリするもんだよ」

「はあそうですか」

ものすごくオバサンくさい言い様だなあ、と感心しつつも呆れる俺だった。

「ってか、気分が悪いって逆効果じゃねーの。……あ、体調面じゃなくって、心のほうね」

「うん」

こともなげに頷いて、

「猫が死んじゃってね」

平然と言った。

「猫が？」

「この辺りにいた猫たち。近くの埋立地に倉庫があるでしょ。よく餌をやり、そこに行くんだ。」

でも、昨日そこに着いたらね・・・」

俺はにわかには耳を疑った。

「虐殺だぞ、それって・・・！」

「うん、だから私、ちとばっかし汗を流しているのです」

につこりと、まるで子供のような笑顔を見せる泉。ますますわけがわからない。

「笑ってる場合かよ」

「『だから』笑うんでしょ。こういうときこそ、明るく笑わないと。余計に悲しくなるだけだからさ」

ふふん、と笑みを絶やさず、芝に紛れた空き缶を探す。後ろ暗さなど微塵にも感じられない普段通りの彼女が、そこにあった。

「わかんねーな」

空き缶をまとめてカゴに放り込みながら俺は呟く。

「世の中がアンタみたいな前衛的おはなはたけ思考の持ち主ばかりだったら平和なことこの上ないと思うぜ」

やはりコイツは甘いな、と思う。おそらく猫好きの泉のことだ。

倉庫で「それ」を目の当たりにして、彼女の精神は耐え切れるはずがない。それでも笑っていられる。

それ故にまだ、彼女は幼い。

少なくとも、いままで俺の見てきた数々の「記憶」に、そんな安直に笑える人物はいなかった。

そいつらはもう、笑う気力すらもないほど、心が年老いていたのだけね。

「やっぱアンタ、幼稚園児並みの精神および思考回路だわ」

なにおう、と怒号が返ってくる泉は、やはりいつもの彼女だ。

昨晚、といつても八月八日のことだが、実は台風が神谷町を直撃していた。

「つて、ついさつき家族旅行から帰つて来た君はみていなかったか。素晴らしい風が僕を電柱に縛り付けようとしたり、中々貴重な体験をさせてもらったよ」

「・・・つか、そんな時に外に出るなよ」

「昨日は仕事が忙しくてね。それでも社会人としての勤めは果たしているつもりだが」

何の仕事をしているのか、最初から旅行土産一つ配る気もない少年には知る由もない。

「は、そりゃあそうとき。昨日か一昨日の新聞、ないか？」

「急に言われても、手元にはないね。どうしたんだ」

「その一昨日からよお、この辺り一帯に飼っていた猫が消えちまつたとかなんとか。俺の友達から聞いたんだが、そいつが妙に気になつて仕方がないんだ。何か知ってるか」

ふふ、と線の細い青年は笑みを浮かべて、

「さあ、知らないね。まあ、その新聞社がよほど記事の材料に困っていたというのは容易に想像できるがね」

そんな下らないことを記事にするな、と少年は解釈する。

「・・・で、準備のほうは」

「ああ、もちろん進んでいる。

姉さんに電話して、一時的に泊まりに行くことを了承してもらつた。

正直、向こうもあんまり乗り気じゃなかったけど」

そりゃそうだろ、と少年は答える。家族とはいえ、勝手に人の家へ上がりこまれるのは、向こうも好まないだろう。

「まあ、死ねば関係ないってか」

少年はけたけたと声を上げる。

「・・・その言葉を、周りの人に聞かれ、気を引かれたらどうする。「事件」は内密にしておかなくちゃね。

だからこうして、見知った人のいない所で計画を立てているというのに」

宗は辺りをぐるりと確認して、ここが公園だということ改めて認識する。周囲にボランティアで空き缶拾いをする中年の女性たちの姿が見えるが、特に知り合いの人物はいない。

「全く、こんな日に限って人が来るとはね」
それでも、宗はどこか気に食わなかった。

「事件」発生まで、あと五日。

* * *

台風の影響もあって、補講期間が一日延びてしまった。とはいえ補習の最終日は八月十一日。今日が、その日に当たる。

夏期講習の方も期間が変わって、登校する生徒の顔ぶれが変わっていた。クラスの奴に至っては、俺を除いて誰一人としていない。

「ま、こっちは授業まで教室で寝てるか」

喧騒から離れた教室で頭痛薬を片手に、そのまま机に突っ伏して眠気に従う。しばらくしたところで、ふと気が付いた。

「？」

人の気配を察知して、顔を上げる。すると、ちょうどドアの窓越しに見知らぬ少女がこちらを眺めていたところだった。

「・・・・・・・・」

その瞳は、どこか黒く、濁っている。魚が死んだような、という表現はおそらくこのことを差すのだろうか、俺は首をかしげた。

その少女は、しかし一言も発さず、幽霊のごとく足音を響かせず、どこかへと立ち去っていった。

あまりに不気味だった。

少しばかり、背筋の凍る思いをする。

「なんだありゃあ・・・？」

頭痛薬の入った瓶を握る手から、汗が滲み出る。

* * *

明かりがついているのに誰もいない教室だと思っていたが、薬の瓶らしきものを持った一人の少年が寝ていたらしい。顔を起こしてこちらを見ていたが、誰だかは知らない。

顔を見ないということは、第一校舎の生徒だろう。

「・・・・・・」

私は歩く。

私はもう、壊れていた。

ほんの三日前の光景が、今も鮮烈に蘇る。

「・・・・・・」

この数日、確実に世界は変わった気がした。命を奪うという行為を意識する、というのはこんな感じなんだなと、妙な浮遊感を得ていた。

例えば、蚊を殺すことに罪の意識は働かない。

それと同じこと。悪意あって猫を殺しても、たとえそれが泉を傷つけることとナっても、私は罪悪感を覚えない。

自分はとうに狂ってしまったんだから。

「・・・っ、はは」

口元が歪んだ、ひしゃげたような笑いが思わず出る。喘息の発作のように、止まらないのだ。いくら抑えようとしてもだ。

本来なら、私はここに来るべき状態じゃない。それは、理解しているのだけれど。

でも、今日になって、「あの人」に呼びつけられたのだからしょ

うがない。

「楽しいことでもあったか、優」
・・・振り返ると、そこには見慣れた先生の姿があった。

誰もいない廊下の先で、氷室美月は空ろな笑みを浮かべていた。「講習が終わったというのに、呼びつけてしまつて済まなかつたな。聞きたいことがあるんだ。ちと、その空き教室に行くか」

近くの教室には補習の生徒が居眠りをしている。その男子生徒にも聞かれたくないのだろうか、私は勘繰る。

「用事っていうのは、一体なんですか？」

「うん、教室に入ってから話す」

知っているくせに、と心の中で自分に軽蔑する。どうせ、猫の件の話だろうから。

この人は、他人には厳しくせに、自分にだけは真剣に怒ることはないのだ。教師としては失格というものだろう。もっとも、私がこんなことを言えてしまうのも、先生に対して距離を置いてしまつたからだろうか。

そう、私はもう変わってしまった。

今の私は、私じゃないのだから。

もう先生を尊敬することはおそらくない。

「ここにするか。鍵は、かかつてはいないようだ」

そう呟きつつもやたらと鍵口を気にする。

「無用心だな」

「・・・ええ、そうですね」

言いながら、全く感情のこもっていない、抑揚のない口調だと内心で驚く。こつとも変わるものなんだ。

私は教卓の前の席についた。

「さて」

先生は、教卓に備わつた椅子に腰掛けて、ちょうど面談をするような格好となつた。

「宗から、妙な話を聞いたんだが。お前に関わることだ」

そう切り出され、ああ、と私は納得する。一昨日、私が倉庫で「行ったこと」を彼は目撃しているはずだから。

姉であるこの人に告げ口（彼の年齢的にそう表現するのも正しくないようだけど）していた可能性もある。

これで用事の内容を、私は把握しきつたということだ。彼女が「私の行為」を知った経路も、想像がつく。

呼びつけられた時点で、いやあの日の時点で、私に覚悟はあった。半ば家族のような関係だから、どうしても「彼女」は避けて通れない。「殺し逃げ」することはできないのだから。

「お前が猫を、傷つけたと聞いた。・・・本当なのか？」

・・・私は、

病人の笑みを作つて、力なく答えた。

知りません、と。

私は嘘をついた。

無駄だとはつきりしていても、たとい私の人格が疑われるようでも、それでも動じたりしない。もはや退くべき道を知らないのだから。

堕ちたな、と考える。

こうして懺悔をする場から、逃げたのだから。

そして改めて私は承服する。

もともと、自分はこのように矮小な存在でしかないのだと。

だから、嘘をついた後も、平気でのどからこみあげてくる嬉々とした感情を、臆面もなく打ち出しているのだ。自然に笑みをこぼすほどに、自分の卑劣さを自覚するのだけれど。

卑劣？

まだ、そんなことを思うような、あきらめの悪い良心があったのだろうか。

己の卑劣さはとうに受け入れたつもりなのだけれど。
だが、そんな自分の在り方すら悩んでしまう。

なぜだろうか。

嘘を通すのは、「真実を伝えて、この人を苦しめてしまうのを恐れた」から。

この人の心を「傷つけないから」、嘘をついたのだと。

私は他の人のように、正直な人間ではない。

だが、本当はもう一度伝えなくちゃいけないのだ。

・・・嘘偽りなく。ありのままの事実を。

私に、それができるとでも？

こんな否定されなくちゃいけないような、自分に？

否定するの？ さっきまで、否定しなかった悪い自分を。

「・・・くす」

思わず吹き出してしまう。さっきまでの自然な笑みと、質の違ったものだけれど。

ばかっているから、笑いを禁じえなかったのだ。

自分は一体どっちなんだと。

否定するのか、しないのか。

自分は「ひねくれもの」でしかないのか、それとも真性の悪意を持った罪人なのか。

私を鑑みるとしたら、一体・・・

・・・ふと、我に返る。

「・・・？」

目の前の、ほんの数センチほど先の教師は、一言も出してはいなかった。

そのくせ、彼女は

「どうして、笑っているんですか」

さあな、と漏らす。ごく自然な感情から湧いたような、泣きじゃくった幼稚園児を穏やかにだめるような、そんな笑みだった。

泉と同じだ。全く、理解できない類の笑みだ。

だが、それよりも遙かに理解し難いのは、

「『嘘でよかった』。お前は、そんな子じゃないって、『信じていた』がな。全く、人騒がせな弟を持って、気苦労が絶えんよ」

この一言に尽きるだろう。

「もしかしたら、私は数日後に死んでいるかもしれないんだぞ。そんな時分、あつちの世界にまで問題を抱えたくないものだな」

何を言っているのだと、私は耳を疑ってしまう。いや、彼女の言動はどこか変だ。いつものように、私に見せる氷室美月ではありえない。

もっと、素をさらけ出したような、高みから見下ろすような、達観した彼女がそこにあった。

私は、苛立ちを含みながら言った。

「先生のおっしゃることがよくわかりません。」

先生が死ぬって、どういうことです。私に冗談を言うために呼びつけたのですか？」

「冗談？」と、不思議そうな面持ちでそう聞き返す。しばらく目を見開いた様子のまま、先生は唐突に吹き出した。

「なら、お前は冗談だと理解してくれればいいさ」

そういつて、不可解な言葉と共に、彼女は補習の授業に向かった。一人取り残された私は、慥然とした心持だった。

「・・・よかつたのかな？」

誰もいない教室に、声は小さく轟く。答えは、かえってくるはずもない。

私は、罰せられて当然なのに。

なぜ、笑っていたのか。

沈痛な面持ちではなく、ごく自然に、笑みを振りまいていた。自然な感情から湧きだした、本物の笑み。

そう、彼女は真剣に笑ってくれたのだ。

こんな私を、心から信じて。

「やりきれないわね」

言いがたい齟齬を覚えながら、私は一言だけ言い放つ。冷房のかかりすぎた教室に、また声が響いては消えた。

「遅くなつてすまない」

張りのある声を聞いて、俺は机にうつぶせたまま顔を上げた。

「・・・なんか良い事でもあつたんすか」

教壇に立つ女性の表情がどこか晴れやかなのが、逆に違和感を覚えてしまう。

「そう見えるか？」

「見えます」

「ははは。なに、教師としての血が騒ぎ出したただけだ。お前には関係がないさ」

昨日のプリントを鞆から取り出す。俺は頭痛薬をポケットにしま
いこんだ。

「なんか気になりますねえ。あ、俺気になりだしたらほかの事に手
がつかない性質なんで教えて下さいよ」

半ば冗談のつもりで言ったのだけれど、いつものように強烈な皮
肉と共に頭をこつんと叩かれたりしない。

「知りたいか」

「・・・あ、は、はいまあ」

「ふふふ、まあいいさ。今日は最終日だからな。」

私もたまにはこういう身の上話でもしたいものだ」

それで授業が潰れてくれれば、と期待してしまう俺がそこにあつ
た。

閉じられた空間で、冷え切った感のある教壇に手をかける。

「教師という職業柄、多くの生徒と触れ合うのだよ。」

もちろん、私はその子達には道を踏み外してもらいたくないもの
だし、ちゃんと卒業を果たすまで面倒を見なければならぬ。

まあ、それが好きでこの職に就いたのだがな。

『どんな生徒であろうと』、私は見捨てるつもりはない。お前のような補習組でもだ」

なんだかさりげなく自分が馬鹿にされたようで、誹謗中傷に当たらないかと疑ってしまふ。

「手のかかる生徒ほど、更正しがいがあるというものだ。いや、そういう奴のほうかむしろ私は好きだな。

つまり、それほど守りがいがあるのだよ」

「はあ」

「今日、といつてもついさっきか。

私はある生徒と会っていたんだ。その子は、少しばかり心の弱い人間ではあるが非常に真面目な子だと思っている。

だがその子はささいなことで暴走する気があってな。このあいだも、かんしゃくを起こして他人を傷つけてしまった」

問題児にも程があるだろと無用の突っ込みをいれる俺。

「はは、そうに違いない。今日もこの私に謝るところか、嘘をついていたぞ。

自分は知らないって。ある意味で開き直っていたな」

だからこそだ、と氷室は黒板に目を向けて

「・・・嬉しいんだよ。

あの子は今まで、私にはいい子だった。

だがそのせいで私は、あの子の本当の苦しみをも気付けずにいた。あの子のそばにいながら、私は教師として失格だろうな。

けれども、それでもいい。

あの子の苦悩を『何も理解しないままである』よりもな」

漫画とかドラマにもよくあるように。

熱血教師が不良たちを更正させようと意気込む、ようなものかなと俺は思う。

「・・・」

検査にもかからない病気ほど、たちの悪い病はない。

人に気付かれないまま、症状が進行するのだから、それとおなじこと。

「おそらく「その生徒」は、誰にも知られない苦悩を抱えていて、この教師もそのサインを見逃してしまっていた。

今、彼女を包む嬉しさ、それは、正体不明の病気の原因をつかんだ医師が思わず見せる喜びのようなもの、だろうか。

手遅れになる前に、気付けてよかった、と。

「・・・そんな奴、殴り倒せばいいじゃないスカ？ 話を聞く限り、ソイツかなり性根が腐ってますよ」

「だからといって、見捨てるわけにもいかんだろうが。教師を何だと思っっているんだ。

立派な人間に育てる。それが、私の仕事だ」

大変ですねえ、と歯牙にもかけない。いずれにしろ、俺には関係のない事柄だった。

そんな柔らかな笑みを見せる教師の表情は、ふいに硬くこわばってゆく。

「私に、『そんな時間が残されて』いるんだろうか」

「・・・？」

なんでもないと適当に言っつて、教師はプリントを掴む。それが授業開始の合図だ。

「さあて、始めようか」

シャーペンの芯を変えている間、氷室ははつきりと一言、加えた。「『最後の』授業だ。心しておけよ」

* * *

幼い頃から

姉は弟の意思を感じ取っていた。

自分を殺そうという、ふざけた考え。どうして弟がそれに興味を抱き始めたのか、姉の知るところではない。

だがなまじに近い家族であったがために、姉だけが知ってしまったのだ。むろん、弟が何か暴力を振るったわけでもなければ、他の家族も気付くことはできなかった。いや、気付いたとしても、弟は『殺意を見せるだけで何もしていない』のだ。空き巣犯を未然に逮捕できないように、『何も起こらなければそれで済まされる』。

姉にはどうすることもできなかった。助けを求めるにも、その根源がないのだから。

その間にも、弟の意思は限りなく膨らむ。妄想から、実行へ、やがて現実へと。

協力者の存在は、姉も気付いていた。

逃げることも、できたのでは？

・・・それなら弟はどこまでも姉を追い求めて、殺害してしまう。他に生き延びる選択肢ははったはず。

・・・その選択肢自体が、一つずつ、長い年月をかけて、弟につぶされたとしたら？

結局のところ、死からの回避は不可能。

しかし、姉はあきらめていたのだろうか。

弟を説得する立場にあったはずなのに。

彼らを、どう思っていたのだろうか。

死を前にして、その姉は何を感じ、何を考えていたか。

「事件」の真相とは関係ない彼女の想いは、幾多もの鍵を残したまま、深い海の中へと潜り込んでしまう。

八月十五日、「事件」発生

同日、火災が発生。焼け跡から、一人の女性が遺体となつて発見される。

遺体の損傷が激しく、警察は焼死と断定。遺体の解剖は執り行なわず。

深夜の住宅街ということもあつて、目撃者はなし。木造の家は全焼。

出火元は、室内(台所か)に充満したガスが、女性の使用したライターに引火したものとされる。ただし、証拠をもとにした推測によるものである。

* * *

最後に宗の姿を見たのは、八月十五日の午後。「事件」の際、車で逃走して、そのまま隣町の海浜公園へと向かった。少年と二人、木陰のベンチでアイスをほおぼっていた。

「あつっー・・・ナンだこの暑さ。つつあ！アイスが垂れちまつた」

「ははは、君の不注意というものだ。謝礼のアイスはもう買ってやったから、替わりはなし」

マジかよ、としかめっ面の少年をよそに、宗は芯にこびりついたバニラ味のそれを、歯でそぎ落とす。近くのごみ箱に捨てたと思つたら、それは空き缶の箱だった。

「あーあ、分別してないっすよ？大人のクセに」

「君とは十歳も離れていない」

青いズボンに薄汚れたTシャツと、やたら生気を感じられない格好の男が言っても説得力はない。少年はアイス棒にしゃぶりつきながら、空を仰いだ。

「疲れたっつーか・・・」

木陰から焼けるような日差しを目の当たりにして、意識が飛んでしまいそうになる。それは熱中症の類ではなかった。

「最高か？」

横で宗は呟いた。

「人を殺すのは、楽しいか？」

「まだわからん」

少年はあっさりと告げる。

「自分に羽が生えたわけでもなきや、突然足が速くなったわけでもない。人を殺したからっつって、感覚的に、あんまり変わっちゃいない。」

自分が何をしたのか、俺自身の理解が追いついてないのかも」

「じゃあ、まだ人を殺したいと思う？」

「勿論」

少年は口元を緩ませて、あるいは目を輝かせながらそう口にした。さながら、大きなカブトムシを目にしたときの子供のように。

「アイツを殺した時のこの手の感触、ってゆーのかな？ 俺、まだはつきり覚えてるんだ。人を切り刻んでいく感触が、妙に生々しくつて。」

あれは、『ああいうことでしか』手に入らないと思うんだ。うまく言えねーけどよ」

「ならば近いうち、再び人を殺したくなる」

「・・・近いうち、ねえ」

「君は『そういう種類タイプの』人間だからね」

氷室宗は、屈託のない笑みでそう答えた。

この二人はどこまでも異質だった。加えて、周囲ではしゃぎまわる子供たちとの、計り知れない温度差を体感していた。

そもそも、殺人という行為を是認するか、しないか。

この分岐点から、彼らと周囲の子供達とは道を違えていた。

「そろそろ、行くか」

舌に残るバナラ味をかみしめながら、宗は言う。

「計画は、君とはもう会わないことにしている。元々、君と僕は『計画以外では』赤の他人だ。だから、ここでお別れということ」

「だけどアンタ、俺の携帯の電話番号持ってるんだろ？ アドレス、変えておこっか？」

「いや、と首を振る。」

「連絡がつかなくなつて、君が消息を絶つこともありうる。準備の時に言つただろう、一人だけしらを切ることはしない、と。」

つまり、もしこのさき一方が捕まつたのなら、もう一方の人物についても証言する、と。どのみち、住所も知らないような仲間を飛ばす意味もないからね。

それに、何か疑われることがあつたら、赤の他人である君ではなく、それは家族である僕のほうだ。

いずれにしろ、番号はその時の連絡手段ということ」

少年が逮捕されたなら、宗の名前を挙げればいい。彼は被害者の弟だから、すぐに住所は割れる。

宗が捕まつたのなら、少年の名前を挙げる。少年との直接的なつながりはないが、携帯の番号を残しておくという点で、問題は解消される。

これは、お互いが納得した、ルールだった。

要するに、双方が一蓮托生とならざるを得ないようにするための規定だった。

「ハン、それを考えたのもアンタだろ？ それも、無関係の俺がシ

ラを切らないための。

どこまでも俺を信じてねーんだな」

「君も同じだろう?」

赤の他人だから、ごく自然なことだ。言外にそう告げていた。

「・・・姉さんの日記、どうして君がその一部を持ち逃げしたんだい?」

「別に、意味はないぜ」

意味はある。

心の中で、口先とは正反対のことを少年は言った。

「ふうん、なら、いいや」

そう少年に告げて、宗はベンチを立つ。

そのまま振り向きもせず、公園を去った。

ひょっとしたら、また明日にでも会いそうな、あっさりとした解散の仕方だった。

* * *

少年の予測したとおり。

その後、宗は「事件」の抹消を図り、日記の行方を追うこととなる。

一年後、少年の手によって、二つの事件が起こった。

事故と処理された「事件」とは違い、警察の捜査はやがて少年に行き着くだろう。少年も、それは自覚していた。

だがそれでは、少年は納得がいかない。事件を起こしたのは自分だが、「関係ないからといって宗が罰せられない」のは不満なことこの上ない。

少年はそこで、日記の存在を明かそうとした。残された「事件」

の証拠として、警察の手に委ねて、宗をも巻き込もうと。

それは、宗からしてみれば、迷惑の一言だろう。他人の勝手な犯罪に巻き込まれ、自分の過去を暴きだされてしまうのだから。

少年は、あの時定めた「ルール」を悪用した。

一蓮托生という言葉を利用して。

そもそも、少年がなぜ再び、愚行としかいえないような事件に手を染めたのか。

・・・第三者が真実を知る頃には、少年も忘れてのことだろう。

「……がらんどうの電車に、見知った男がいた。

「おや、久しぶりだね、凧君」

このクソ暑い中、男は輝くような笑みを作り出していた。

「……輝いてまぶしいツス」

眩しくて暑い。俺は不快のたまる一方だった。

がたんごとん、と一定の間隔を踏んで、人の少ない電車は軽やかに走る。

「……しばらく、彼とささいなことを話していた。

いつの日か、「藍園や泉と会った日」の夜に見た、変なユメ。真夏の昼、冷房の効きすぎた車内。入道雲、目の前に座る宗。誰もいない車内、空転する扇風機。

曖昧なままのユメは、続きがあった。

「……平行を保っていた車内が、急に傾きだす。どうやら、停車駅に着くようだ。」

「ああ、着いたか。僕はここで降りるよ。君は？」

「……いや、俺は降りない」

告げると、微笑をたたえた宗は、ドアに立って答える。

「最後に一つ、君に話したいことができた」

「……」

「僕の異常とは、殺人衝動だ」

長らく閉まっていたドアが開扉する。

「ふふ、こんなことは人には言えないだろう？」
そう残し、蒸し暑い外に一人出て行った。

窓越しに見える駅の名前、おそらく隣町の名前を冠したものだろ
うか。

彼はここに、『住んでいる』のだろうか？
そんなふとした思いを、俺は打ち消した。

「殺人衝動とは、またタイムリーすぎ……」

人が死ぬ、という事件なら、昨日辺りこの町で発生したらしい。
おそらく、事故だろうが。

いや事故で、あつてほしい。

何より俺にとって、強烈な印象の残る「事故」だったから。

「殺された女性、俺の補習の先生だっつーの」

空しく響く声が、扇風機の羽音にかき消される。

「やりきれねーな」

それでも俺は呟いた。

つい何日か前まで顔をあわせていた人物が、唐突に消えてしまっ
たのだ。不思議なこと、この上ない。

「……ま、関係ないからいいか」

せめて、俺はそう言うしかなかった。

刺すような痛みが、頭を切り裂いた。

* * *

この痛みの原因は何か。

記憶を見続けたことへの脳の負担か、あるいはたんなる頭痛か。

頭の中にある記憶というのは、ただ乱雑に放置されてはいない。情報を秩序立てて、分類されている。

つまり、物事を思い出すときに、まずそれに関連した鍵キーを基にして、記憶は引き出される。連想ゲームのようでもあり、あらかじめ分類されたファイルを、パソコンの検索機能を使って探し出すのと原理は似ているだろう。

人の脳は、常に記憶したものの情報を整理し、秩序立てる。それが、普通なのだ。

だがしかし、もしこの整理機能が、俺の頭の中でうまくいかなかったとしたら？

全く関連もない「人の記憶」が、突如として割り込んできたら？

つまり、「人の記憶を見て」、それを自分が「記憶する」ことで不具合は起こる。他人の記憶が入るほど、記憶体系が混乱をきたしてしまうらしいのだ。

形の整ったトランプタワーに、さらにトランプを重ねるのは、難しい。

むしろ、そうしようものならタワーそのものが崩れてしまうだろう。

それが、記憶をなくした原因だ。

・・・八月十六日のあの時も、俺は倉庫に残された爪あとの記憶を辿ろうとした。

理由は特にない。ひよつとしたら、猫の大量失踪事件の手がかりを得ようと、俺は記憶を探したのかもしれない。

だけど、そんな俺に、再び頭痛が起きた。

その「記憶」は、とても正視できるものではなかった。

限りのない、終わりのない惨状を、俺は目の当たりにしてしまっただのだ。

その記憶を「記憶する」ことは、到底無理があった……

俺は結局、「人の記憶」を見すぎたのだ。

その結果、自分の持っていた様々な思い出が、一緒にたに混ざり合ってしまった、つながりを失った。

こうして泉との思い出も、ほぼ一瞬にして失ってしまったのだ。

* * *

それから、ほぼ一年の歳月が流れる。

俺は、散らばった記憶の整理を終えたのだけれど、「事件」は風化し、宗は行方不明。巷で起きた二件の事件の犯人は、未だに正体をつかめていない。

そんな俺だったが、やるべきことはある。

宗を探し出すこと。

「事件」の共犯者であった彼の記憶を引き出せば、犯人の正体は掴めるのだ。

では、彼はどこにいるのか。

……少なくとも、その鍵は俺にもピンと来る。だが今、告げるべきことではない。

その前に、もう一つ。知るべきことがあったから。

過去を振り返るのを終えて、俺は今一度日付を戻す。

十一月十四日、つまり、俺が宗と話した日の翌日に当たる。

「偽善だ、って思った。けれどあの子は、ただ普通であっただけ。あの場で否定されなくちゃいけないのは、むしろ私のほうだったの」「俺は平然と、「自己嫌悪に陥るまでの」彼女の話の聞き続ける。

冬空に包まれた屋上に、俺は突っ立っていた。金網によりかかって話し続ける少女のほうに向きながら、できるだけ日なたのほうへと移動する。

倉庫の猫を、誰よりも大切に想っていたのは、泉だ。その思いを、藍園という少女が踏みにじる。・・・虐殺という、最も、残酷な形で。

目の前にいる少女は、あくまできっぱりと、告げる。

「あなたにはわからないけど、私ね、友達っていう関係が、嘘に思えるんだ。

いつか、裏切られるんじゃないかってね。

ほら、もう信じれない。おかしいでしょ、私」

「別に」

平静を装いながらも、俺は後ろ指を指されるような心情だった。

彼女の、人への不信さが、俺にも解せてしまう。

俺も人の記憶を見て、そう思ったことがあるさ。

「そんな私にとって、人を信じれる人間は、絶対に理解できない。黒木さんのように、誰にも分け隔てなく付き合えるって、不可能だつて。

最後まで信じれなかったから、『あんなこと』をしてしまったのね」

だが同時に、

彼女は嫉妬していたんだと思う。

「本当はうらやましかつたんだ」

普通だったら、ためらいを覚えるような言葉を、藍園は呟く。

「友達のいない人にとってね、黒木さんみたいな人が、とってもうらやましく感じられるの。」

人を信じて友達だって言える人間。

・・・その時の私が、どうしても否定しなかったんだけど、やっぱり心の中ではそう思っていたわ」

くす、と彼女は笑みを浮かべる。

「こんな風に」そして藍園は告げる。

「笑っていられる人って、素晴らしいと思わない？」

どんな悲しいことがあっても、最後は笑って忘れることができる。そんなくだらないもの、笑ってはねとばせる人って、私はすごいと思う。

どんなに陰口を叩かれたって、

どんなに人を傷つけてしまったって、笑って受け入れる。そんな人が、たぶん私は尊敬できる」

今の彼女だったら、泉のことをどう見れたか。

まるで子供のような少女を、どう捉えていたか。

おそらく、あの時の彼女のような、不信心はなかった。

そうして倉庫での虐殺という事実も、書き換えられたはずだ。もし、過去を変えられたのなら。

いや、記憶を見るだけの俺には、過去を改める力はない。

別に、気にはしていないけどさ。

「猫を殺した理由、あなたの思う様に、一つとは限らないわ」

注意を促すように、そっと口にする。

「あの時の私は、彼女が恐かった。そして、同情された』と感じた」

事への逆恨み。もう一つ、あるわ。

心のなかでは羨ましさがあったと思うけど、それって嫉妬なんだと思う。

「・・・嫉妬は人を狂わせる。そう言うでしょう?」

歌うように、楽しげに、彼女は口ずさむ。

羨望は、嫉妬と紙一重だ。

その違いは、泉を肯定的に受け止めたかそうでないか。

「一つだけだったら、とても小さな理由で、私もあそこまでしようとは思えなかったわ。だけど、理由がいくつもできてしまったの」「人ごとのように、口にする。まるで、彼女自身も、自分を省みているように。」

「・・・反省、しているだろうか。」

少なくとも、その素振りがあった。俺が納得できるような態度ではないけれど。

「私が答えることは、もうここまで。参考になったかしら?」
別に、と答える。

人の心情なんて、完璧に理解できるはずもないからね。

「さて、・・・そろそろ、探しに行くか」

不意に、俺は呟いた。

金網から背を離して、藍園は俺のほうを向く。

「何、落し物?」

「天美と同じにすんな」

藍園と向き合う格好で俺は、言った。

「・・・氷室宗を、探しに行くんだ。記憶を見て、アイツがどこにいるか、大体見当がついたからね」

鍵は、「俺と藍園の」記憶の中。

今も尚、彼が同じところに住んでいるか、俺の知るところでもな

い。

だが、探すだけでいい。

「事件」は、それで解決する。

少年には、もう一度、氷室宗と会う必要があった。

そのためには、どうするべきか。少年から、宗に連絡する手段はなかった。逆に、彼は少年の携帯番号を知っているだけで、一度も連絡をよこしたこともなかった。

少しばかり考えて、やがて答えを導き出した。向こうのほうから、近寄ってくればいいと。

目の前に横たわる福原の死体を眺めながら、ふとそんな考えを反芻してみる。

* * *

十月十一日の夜、少年は密かに福原の家に忍び込んで、彼を殺害した。

「二枚目となる紙」、つまり日記から切り離されたページは、どうしたことが彼の家に忍び込んだ凧が持ち去ってしまった。今更、新しい紙を置く必要もない。

どうしようか、と少年は考える。

この紙を事件現場に置くことで、宗の注意を誘い、こちらに連絡をよこすという算段は少し狂ってしまった。

偶然にも、凧が持ち出してしまった。

確か宗の話では、彼は記憶を見る力を持っているという。ひょっとしたら、「事件」の記憶を読み取ったのかもしれない。

少年は少し、身体を強張らせる。だが、少年の身には何も起こっていないことを鑑みるに、どうやら凧は犯人の正体を知らないでいるらしい。

ただ、藍園と凧と、同じクラスにいる。彼女の記憶を読むことと

なれば、不利であることに変わりはない。

凧を殺すか。

「日記を持つ」藍園を殺すか。

少年は考える。だが、ここで「更なる」殺人を行い、余計なリスクを払いたくないのも事実だ。

少年の計画は、二人の人間を殺し、どちらにもこの紙を置くことで、世間の注目をひくことにある。一つの事件だけでは、日記が注目されないという可能性もあるからだ。

全ては、氷室宗と再び会うために。

とるべき行動を変えなくてはならない。

「……」

残り二枚の紙のうち、一枚はもう必要がない。これは、「凧」にでも譲渡しよう。

残り一枚だけは、「氷室宗」のためにある。

「餌は残しておくべきかあ」

少年は密かに嗤う。

「一枚さえ残っていれば、あの男は食いついてくる」

全ては、あの男を殺すために。

少年は動く。

* * *

自動販売機に並ぶのは、コーヒーの欄ばかり。呉竹は内心、飽きを感じつつもアメリカンを選択する。

ガラス越しに紙パックになみなみと注がれるのを見つつも、サイフにおつりを入れる。コインの数が随分と増えてしまったなと感じ

る今日この頃だ。

手が滑らないよう、紙パックを慎重に取り出す。近くの椅子にもたれかかって、ゆっくりと口に含んだ。

「警部補」

ふと、自分の肩書きを呼ぶ声がした。振り向くと、大柄な体格の警官が書類を手に持っていた。

「先日の喫茶店殺人事件の証拠の割り出しにおいて、新たな事実が判明しました」

「そうか、やはりあの靴跡は・・・」

体格のいい警官は書類を差し出す。呉竹は用紙にぎつと目を通し、それから呟いた。

「この書類によると、比較的珍しい靴だというのが」

「はい、靴跡の形状、床を擦ったと思われる箇所の成分から察するに、『革靴』と断定しました」

「その革靴が、特定の洋品店でしか売られていない、と」
警官は勢いよくうなずいた。

「成程、店を当たって、購入者リストを一人ずつ調べ上げていけば、犯人は特定されるということか」

呉竹の脳裏に、ある光景が浮かび上がる。何らかの乱闘が起きたと思われる痕跡、床を擦ったさいにできた靴跡。床に散らばった服の繊維。それらを示すものは、ただ一人の容疑者だ。

しかし、呉竹にはどうしても、革靴と聞いて思い当たる人物がいた。

・・・ 風和也という少年もまた、『革靴をはいて』登校する。

「・・・ 革靴を履いて外出する人間は、限られているか？」

職業柄、履く人間もいる。だが、あの店での目撃者によると、『店から去っていったのは、神谷高校の女子生徒（藍園）』だと考えられる。

この齟齬は、どこから来るのか。

ともあれ、洋品店を調べることが先だろう。

「今度こそ、上層部の鼻を明かしてやろうか」
は？ と首を傾げる警官をよそに、呉竹はコーヒーを飲み干す。

一年前の夏、彼はとある『火災事故』の現場主任だった。
しかし、捜査結果を巡って、彼は周囲と対立を引き起こしてしま
った。

元々の彼の性格の悪さも手伝って、ということもあっただろう。
当時の同僚が昇進を重ねる一方で、呉竹が『警部補どまり』である
のも、こうした対立が遠因ともなっていた。

職場での疎外感を一身に受けているにもかかわらず、彼はそれを
気にも留めない。

「・・・さて、行くか。その洋品店の住所は調べてあるだろうな」
目の前に、解くべき「事件」があれば、構わない。
解決に近づいた状況とあっては、尚更だった。

一年前のとある夏の夜、この町に「事件」が起きた。被害者は氷室美月、この「日記」を書いた人物。しかしそれは、不運にも事故として扱われてしまう。

この「事件」には目撃者がいた。その少女の名は氷室の姪・藍園優。彼女は現場に残された「日記」を持って逃走。しかしその心に深い傷を負ってしまう。

その後の犯人の行方は不明。ただし、被害者の弟・氷室宗は共犯者であり、彼らは「日記から切り離れた数枚の紙」を所持していた。一方で俺は、「記憶を見過ぎてしまった」^{つながら}「反動（度重なる頭痛）から、自らの中にある記憶をまとめていた秩序の崩壊を招いてしまう。これによって、あらゆる記憶が散乱。文字通り、「脳の中で喪失」してしまう。

一年後のとある秋の日、俺は藍園が落とした「日記」を拾う。そこから氷室の記憶を読み取り、「事件」の存在を知る。同時期・この町に二件の殺人事件が発生。偶然にも、俺は犯人の残した数枚の紙を手にする。

その後ほどなくして「日記」を落とした少女が現れ、共犯者の存在を認知。十一月、その共犯者・氷室宗と対峙。彼は「日記」の抹殺を図り、その行方を追っていた。

だが彼は再び行方不明となる。

後日、「記憶の秩序」を取り戻した俺は、少女の持つ「苦悩」の原因に触れる。その「苦悩」は、今も少女の心を蝕み続けていた。

ほどなくして、氷室宗の消息を求めに、俺と藍園は隣町に向かった。

十一月十四日・金曜日

隣町に向かう上り線の電車に、二人は乗り合わせていた。

「がらんどうね」

普段は口数の少ない藍園が思わず呟く。普通なら帰宅する学生や社員でにぎわうはずなのに、今は傾いた日に照らされたつり革の影が空しくゆれるだけだ。俺は呆気にとられつつも、適当な場所に座る。

彼女は向かい側の左のドアに、立っていた。

席には座らない信条なのだろうか。鞆も床に下ろさず、手に携えていた。

俺にとっては、移動手段としてこれを利用するのは比較的、珍しい。通学もバス。あとは自転車か徒歩で、ことは足りたからだ。

一年前の夏、俺は同じ車内で、氷室宗と偶然にも出くわした。

「ねえ、あの人が降りた駅、覚えてるの？」

ああ、と俺はうなずいた。

「色々話をして、隣町の駅で降りた」

俺の記憶から、彼の居場所に関する手がかりを見つけ出した、ということ。実は、これには裏づけがあった。

「・・・あの人は、『事件』前後に引越しをしていた。現に、私もその手伝いを誘われたんだけど、断ったわ。あの後、あの人とは会いたくなかったから」

「事件」の際、彼女は共犯者（宗）を目撃している。そのせいで、顔を合わせなくなかったのだろうか。

もっとも当時の彼女には、確証が持てなかったのだから、仕方な

い。
「『隣町へ』越す。嘘かもしれないけど、可能性としてはありえるかな？」

俺の記憶と彼女の記憶。

つまり、「隣町の駅で降りた」と、「隣町への引越しの手伝い」。

この二つを「結んだ事実」が、彼が隣町に住んでいるという可能性だ。

「『再開発地区』って言葉以外、詳しい場所は教えられなかったけどね」

残念そうな顔つきで、藍園は呟く。

足元のヒーターから、温かい風を受ける。座席は熱を持ったように、触れるとかじかんだ手が緩やかに溶けていくようだった。

「だけど、彼が『今も』、同じ場所に住んでいるとは限らないかもね」

俺はゆっくりと口を動かした。

「・・・それが、普通ね」

俺や藍園に顔を合わせることは、向こうもしたくないはずだ。つまり、この町や、その近くの隣町に留まることはしない。「事件」後すぐさま、どこかの遠い町へと姿を消すことも可能だったはずだ。しかし、現に彼は、俺の目の前に現れた。

「偶然とはいえ、倉庫であなたと会った。どうして、そんなところにいたのかしら」

「日記だろうね」

俺はにべもなく答える。彼にとって、「日記」とは特別な意味を持ったものだった。

つまり、姉の存在を感じ取れてしまうもの。

彼は、姉を殺すことを考えていた。ならば、彼女の書いた日記も

抹殺しようというのだろう。理解不能もはなはだしいが。

「要するに、アイツは日記が、世間に出てしまうことが怖いんだと思う。それで今更、「事件」の存在が明るみに出るとは思えないけど、快く思わないだろうね」

「ただ、ここでもまた一つ。

複雑な問題が横たわっていた。

「犯人が、宗の邪魔をしているらしいんだ。おそらく、俺が手にした『切り離しの紙』を元々持っていたのも、犯人であって宗じゃない。」

それに、こともあるうに犯人は、二つの事件で証拠として残そうとした。少なからず、宗を刺激することだろうね」

俺はせせら笑う。一方で、藍園は口を真一文字に結んだままだった。

「考えられないかな。日記の回収を目論む宗の邪魔をするように、犯人は『紙』を事件と関連して使っている。

・・・ひよつとすると、日記の本体はもう、回収するつもりはないのかな？」

本体は、俺が密かに持っていて、警察に届けようという意図はない。ついでに意味もない。

俺が求めているのは、「事件」の犯人の正体を明かすこと。それ以外は、どうだっていいのだ。

宗もこのことはわかりきっているだろう。だから、もう世間に流れることのない本体を回収する意味は薄い、と考えてもいい。

「実際に、この手にある日記は無事だからね」

鞆から白い手帳を取り出す。「切り離された紙」も、いくつか入っていた。

「すると、あの人を追っているのは、犯人の持つ『日記の一部分』」

ってことね。あの犯人、何をするかわからないからね」
溜息混じりに、藍園は平然と言ったのけた。

プラットホームに降り立つと、閑散とした風景だけが待ち受けていた。

この寂れ具合が、なんとも肌寒さと合致してしょうがないのだけだ。

ともかく、海に面した隣町は、静かな住宅街がひっそりと並ぶ。気が向けば潮風が吹き、少し歩けば川の土手が見える。

そういった、どこにでもありそうな町のと真ん中に、小さなロータリーは構えていた。

「再開発地区、地図にあるかしら？」

藍園はそう言って、駅構内に設置された大きなウィンドウに目を向ける。陳列された骨董品のような扱いの地図は、この町の形をさらけ出す。

「あった」

ぶつきらぼうに言って、指差した方向を俺は見た。

一通りの道筋を暗記し、ウィンドウから離れる。道行く人々の波に従うように、高層ビルの立ち並ぶ区域に足を運んだ。

「ほんとうに、犯人を捕まえられるのかしら」

試すように、藍園は尋ねた。

「前にも言っただろ」

今更、という感じで呆れる。

「氷室宗の記憶を覗けば、たぶん犯人に行き着く。そいつは俺にしか出来ない方法で、俺達が『唯一犯人の正体を知る方法』だ。警察じゃなし、どっかの探偵漫画じゃなし、ただの一般人が殺人事件を解決できるはずないだろ」

もう一度、俺はなすべきことを確認する。

目的は、犯人の正体をつかむこと。そのためには、犯人の記憶を読み取るのが一番だ。

けれども、犯人が誰だかわかるはずもないし、ソイツの持ち物に触れたこともない。「紙」は氷室美月の日記の一部であって、読み取れる記憶は彼女のものでしかない。

とすると、共犯者の記憶を引き出すのが妥当だろう。いずれにしても、自分にしかない「記憶を見る力」を、使うほかない。

頻度としては、一回だ。

多用すると、また自分の記憶を見失いかねないから。

「・・・つくづく、都合のいい能力なのね」

嘲るように、監園は告げる。

「全く、それさえなければ、私は今も『関わらずにすんだ』ものを」
独り言のように、愚痴をこぼす。俺は特に気の利いた返答はしない。

再開発地区、と分類されたこの区域は、高層ビルが林立する。そのせいで、湾から流れ込む風が分断され、一種のビル風を生み出らしい。その代わり、行き交う人の数はまばらだった。

「で、氷室宗はどこに住んでいるんだろうね」

引越しの話を聞いた監園なら、少なくともその居場所を知りえている、と思ったのだが。

彼女は逡巡して、口を塞いだままだった。

「・・・そんな目で見られても、俺は聞いてないぜ」

すると、彼女は更に肩を落とす。終始無言の沈黙、とはこのことだったりして。

どうやら、お互いにアテが外れたらしい。

「でも、探す手は考えればあるかもね」

どこからどう見ても、この区域は地域密着とは程遠い。

だが、彼ら住人がいつも利用する施設はある。

「コンビニエンスストア・・・」

藍園はひらめいたように言う。

彼女もマンションで一人暮らしをしている。それゆえ、気付いたのだろうか。

「そうだ。よく利用する客ほど、店員も顔を覚えていられる？ 例えば、立ち読み客とか。店員にとっては迷惑この上ない客とか。名前も知らない赤の他人でも、しょっちゅう顔合わせすれば、記憶すると思うんだけどさ。」

つまり、店員に聞いてみればいいと思うんだ」

宗にとってもここで暮らすともなると、それなりの生活用具が必須だろう。少なくとも、食料とか。俺ならその調達は、「自分の家から一番身近な場所」で行う。わざわざ自分で料理するのなら別だけど。あと、わざわざ遠くまで行って買う、例えば現担任の三村のような変な嗜好の持ち主でなければ。

つまり、俺達は「宗が近くで利用するコンビニがどこか」、を絞ればいい。少なくとも、居場所の近くにまで迫ることは出来る。

「コンビニ二つつつても、あまり数が多いと調べようがない。でも、区域内で一つ一つの家の表札を見て回るよりは、効率がいいかもね」「なら手分けして探しましょう。もう日も傾き始めているから、余計な時間の無駄は避けるべきね」

別に夜中まで搜索しても構わないのだけれど。

結局、二時間後にこの見知らぬバス停に集まることで、俺達はひとまず分かれた。

時刻は午後四時。夕方とは、少し縁遠い時間帯だ。

しかし冬が顔をのぞかせ始めるこの日は、太陽すらビルの陰に隠れてしまう。この付近一帯は同じような建物が林立しあい、そこにできた影が、より一層の肌寒さを補強しているのだ。

「たまんねーなコラ」

愚痴をこぼしつつも、ひとまず近くのコンビニに足を運ぶ。見知

らぬ土地を搜索するという強硬手段は、確かにこの一歩から始まった。

「・・・アンタ、何でここに？」

その一歩目、俺はよく見る人物に出会ってしまった。

そこにいたのは黒木泉だった。

彼女は俺達とは違う高校の生徒だった。なので、色の違う二種類の制服が相対する格好だ。

「つか、アンタはなんでここにいるんだよ」

「ういんがちゃ、と働くコピー用紙を横目に、何を言うのやらとあきれ返る。」

「学校終わったからだよ」

「アンタ、ここに住んでたっけ？」

俺はふい、と首を傾げる。

「違うよ。ここね、ウチの高校の近くだからよく利用するだけ」

聞くと彼女は、生徒会のポスターをコピーしているのだという。部数にして、約百枚ほど。

「金もつたいねえよ」

「大丈夫、会費使ってるから」

いいのかよ、と俺は勝手に生徒会の運営に危機感を抱いてしまう。「やっと終わった。で、キミはどうしてここにいるの」

仕事を終えたニコニコ顔で尋ねられる。俺はどう言い訳しようかと考えていると、

「今のキミ、嘘つく気満々でしょ」

ものすごく釘を刺されてしまう。以前にも同じような状況に陥った拳句、大事なことを白状してしまった気がする。

正直、彼女を「事件」に巻き込みたくないのは事実だ。現に、氷室宗の捜索を犯人側に悟られると、向こうはどんな手段に出るかわからない。その場に、泉が関わっては、彼女の身に危険が降りかかる。

これは、藍園も暗に理解していた。「事件」に深くかわりすぎた俺はともかく、彼女をこれ以上誘いたくはないのだ。

「ただ、

こういう形なら、安全だろうか。

「ある男の住所を探しているんだ」

その男は、とても地味な服装をしている。

普段着といえ、白のTシャツに薄汚れた青のズボン。靴はねずみ色・・・に汚れたスニーカー。髪はボサボサで、いつも笑みを振りまいている。

「とまあ、こんな感じの男だ。三十前後に見えなくもないかな」

「なんかそれ、どこかで見たとような」

気のせいだろ、と断りを入れる。でも実は、宗とは倉庫で見かけたりする。二人とも赤の他人だから、名前は知らないだろうけど。

「そんな特徴的な人だったら、コンビニの店員も覚えやすいだろね」

「店員が知ってるようなコンビニを見つけたら俺にメールよこせよ」とだけ告げて、集合場所は教えないでいた。

藍園にあわせるべきではないだろう、と考えたから。

それは彼女自身の問題であって、俺の関わることではない。

「そうしたら礼にリンゴジュースでもくれてやるよ」

言って、近くの店員に話しかけた。背後で大量のコピー用紙を手に、どこかへと立ち去ろうとする少女の姿があった。

彼女も、自動参加、ということだ。

* * *

再開発地区南側、つまり川の河口付近にあたる場所を、私は歩いてきた。

その対岸には、自分たちの住む町が見渡せる。この広い川に分断されるように、隣町と区切られている。そのどちらからも、河口はうかがえた。

私は息を切らしながらまた次へと足を運ぶ。かれこれ一時間以上

も経っていた。

「・・・・・・・・」

携帯電話を取り出す。しかし、向こうもまだ居場所をつかめていないようで、連絡はない。ひと呼吸ついて、またポケットにしまう。建物の隙間に日が顔をのぞかせる。だが、落ちるのも時間の問題だった。

急がなくては、と考える。

氷室宗を捕らえることで、全てが終わるというのなら。

私は足を止めない。

近くの道路では、けたたましい車の排気音が、煙を巻き上げる。私は思わず眉をひそめてしまった。

すると通り過ぎた車のエンジン音にまぎれて、私を呼ぶ声があった。

「こんなとこでなあにやってるの！」

振り返ると、その人はちょうど肩に手を置くところだったらしい。宙ぶらりんの右手が、よく見知った人物の顔を呆けさせていた。

「タイミング逃しちゃったね」

彼女はそう言って快活に笑っていた。

* * *

「で、アンタが泉に話したんだ。俺らが氷室宗を追ってるとか、『事件』のこととか」

無言で何度も、こくこくこくこくと高速でうなずく藍園。少しばかり気まずそうな表情だった。

そして、

「・・・・・・・・」

大層ご立腹の泉がそこに。

「全く、最初からそう言えばいいのに！ 二人して、『アイツを巻

き込むのはよくない』ってどうよ？ 危険なのはわかるけど、ウチにも手伝えることだってあるじゃない！」

「理由知らなくても、手伝ったんだからいいだろ」

ふくれっ面の彼女に動揺しっぱなしの藍園をさしおいて、俺は適当に受け流す。

「む、そりゃそうだけど・・・なんか、ウチだけ仲間はずれって感じだし、納得できない」

堂々と言つか、と俺は呆れてしまう。

「アンタが関わっていると『犯人』に知られたらまずいだろが。俺や藍園でさえ今どうなるかわからないってのに、アンタまで加わる面倒なことこの上ねえんだよ」

「自分だけずるい！」

「それ、自分は死にたいです、つってるのと同じだぜ？ 意味わかって言ってるのかよ」

「・・・（この二人、どうしよう）」

あわあわとうろたえる藍園は、さあ議論を重ねようかと事を構える俺達に、いきなし割って入る。

「ちよつと、いい、かな」

「あ、何だよ」

「あの、コンビニで、見つけたんだよね」

ぶつ切りの単語を搾り出して告げる。クエスチョンマークを表示しながら俺はしばらく頭を働かせて、

「氷室宗がどこに住んでるかっつて、わかったんだ」

「見つけたのは・・・私じゃないんだけど」

ほら見たことかウチだって手伝えたんだ、と勝ち誇ったような表情を見せ付ける泉。全く小憎たらしい餓鬼だとジョークを飛ばしつつも、しかしはやる気持ちは抑えきれなかった。

泉の話によると、宗とよく似た男が来るコンビニは二軒。藍園は、購入した簡易地図を広げて、鞆から取り出した赤ペンを握り締める。

「そのコンビニは・・・ここと、ここ」

地図に目を通すと、赤いマルのついた記号が二つ、やや近い距離に並び立っている。業種の違う店舗ではよくあることで、俺の高校近くには三・四店舗が同じ通りに並んでいるというのだから、それから比べても特に疑問を感じるでもない。

問題なのは、この二店舗から近い場所に、氷室宗あのおとこが住んでいるという可能性だ。

「普通、自分の家から一番近いコンビニを選ぶよな。すると、アイツの家から最短距離にあるコンビニが、この二つ。すると、この二つを結んだ線の中心が・・・」

あれ、と首を傾げる。その中心点は、『公園』の文字だけがあった。

「違うよ。ね、定規持つてる？」

唐突に泉が尋ねた。俺が答える前に、藍園がケースから取り出して渡す。

「二点から直線を引いた中心が答え、とは限らないよ。こんなふう
に・・・」

ざつと勢いよく、二つの点からそれぞれ線を引く。ななめに引いたかと思いきや、二つの赤い線は一点で交わっていた。

同じような線を、こんどは反対の方向に引く。これも、等しい距離で一点で結ばれる。

地図に引いた線は、ひし形を成している。その内の二点は言うまでもなく、コンビニで、あとの二つは結んだ交点。そうイメージすれば、泉がどういうふう線に線を引いたのか、理解できるだろうか。

「・・・こんな風に結んだ点も、『二つの点からは等距離だ』って

言えるよね。それと、数学の軌跡みたく、結んだ二点をつなげたら一つの直線ができるでしょ。要するに、『この線』の範囲で調べたらいんじゃないかな」

ひし形の内部に、『線』を中心として思い切り楕円を描く。

この中に、氷室宗の居場所がある、ということらしい。俺は数学が殆どできない人間だから、理解も追いつかないが。

・・・さっぱり、わからない。

「ちょっと理論に走りすぎね。他のコンビニとぶつからないような範囲にしたら、もう少し狭められるわ」

「じゃあ、こつ？」

言つて、泉は横幅を削る。

すると、地図上で探すべきポイントが、いくつかに絞られた。

「マンションが一つに・・・これは学校だから違う。この辺りは他のコンビニが近くにあつて二店舗からは遠い、よつて違う。」

・・・結局、このマンションだけつてことだね」

泉が指を差したところに、割と大きな土地を持った建物が描かれていた。

「道なりから言つても、二つのコンビニとの距離は同じくらい。たぶん、ここに住んでるんだらうね」

そつ口にして、不適の笑みを浮かべる。

「絶対とはいきれないわ。でも、調べてみる価値はあるわね」
確信して、俺達はそのマンションへと向かつた。

煙突のように突き出た建物が林立する区域において、そのマンションを見つげ出すことは容易ではない。俺達はひとまず、最寄のコンビニへと足を運んだ。そこから道に従つて、先へと進む。

「暗くなつちやつたね」

泉は笑いながら溜息をつく。腕時計のライトをともせば、午後六時をちょうどまわつたところだつた。

「寒いから早く行こつぜ」

藍園はしばし無言だった。先頭を歩く泉を敬遠するように、歩をあわせている。

当然のこと、泉は不思議に思う。

「どうしたの、さっきから黙って」

「あ、いえ。なんでもない」

二人のやり取りを俺は無視する。おそらく、彼女は今も泉に遠慮してるのだろう。

あるいは、泉を正視できないでいる。

「・・・緊張して、しょうがない。」

これから、『事件』と向き合っただって思っただらね」

「うーん、そういうことが」

はぐらかしたな、と感じる。ただ、半分は本音なのかもしれないが。

「そうだな。これからあの男の首を絞めて、犯人の正体ってのを明かして、そいつに一発かます。やること沢山あるじゃん」

「何故に暴力を使う」

「宗の考えが気に入らないから、あと犯人にはやられっ放しだからね。」

顔面に殴らんと気が済まねえんだよ」

拳を高々とあげて、こきこきと指を鳴らす。泉は溜息混じりに、

「アンタ、何やってるんだか」

全力で呆れていた。

俺は続けて、

「それで、犯人は警察に引っ張り出す。だが、宗はどうする？」

藍園に聞いたのだした。

「アイツは最近の事件には全く絡んでないけど、一応『実の姉を殺害した張本人』だ。つまり、アイツを説得させて警察に連れて行くということは、『事件』を再び世間の目の前に据えることにもなる。」

・・・それは、わかってるよな」

つたない足取りの彼女は、不意にその動きを止めた。

顔を上げて、前を歩く俺と泉に、視線を投げかける。

「・・・覚悟は、ある」

藍園は、はっきりと告げた。

「あの人には、自分のしたことを償って欲しい。それ以外は何も望まないわ」

強く吹き付ける風から身を守るように、藍園は身体をちぢこませる。制服の襟を正しながら、面と向かうような格好を取る。

俺達は、みんなマンションに向かう足を止めて、彼女の話を聞き取っていた。静かな道路に吹く風は無機質に冷たい。けれども、今は緩やかに流れていた。

「事件」の存在が、明らかになる。

犯人の正体を知ろうとしている今、藍園は望んでいるのだろうか。確かに大切な人間をその手にかけた犯人は許しがたい存在ではある。それでも、彼女は喜ばない。

むしろ、遅い。

今更「事件」が世間の注目の中心に据え置かれるからといって、彼女は果たして、「救われる」のだろうか？ いや、何も変わらない。彼女には、事態は何も変わってはくれない。

ただ、大切な人の死が、事故死から他殺にすりかわるだけだ。ほかに、何もない。

「アイツを説得できるかどうかによるけど、つつか強制的に連行決定だけだ。たぶんアンタの周囲は忙しくなる。アンタも、必要なら証言することもあるだろうね。『事件』の目撃者として。『事件』を隠匿していたとはいっても、アンタは被害者だからさ」

「うん、でもそれでいい。私が、被害者というのも語弊があるけど、整然と述べる藍園に、俺はとある質問をぶつける。

「……だから、もう一度聞くけど。仮にそういう状況にあったら、『全て』を、話すことはできるのか？」

「全てを？」

「特に、泉には話しておくべきことが、あるだろ。それでなくとも、いつかは話さなくちゃいけない事実がさ」

「え、何なに、なんなの？」と子供心に興味津々の泉とは対照的に、藍園はにわかには表情を曇らせて、うつむいてしまった。

彼女が、あるうことが泉の大切な猫を殺しつくしたという事実。それを真正面から伝えなければいけない。

告白から逃げれば、この先もそれは彼女自身を縛り続ける。記憶の底にこびりついたまま。

おそらく藍園は迷っているのだろう。泉を信用できた今も尚、彼女と会うたび、伝えられないでいる。彼女を踏みとどまらせてしまうもの。それは、真実を伝えた結果、泉が自分から離れてしまうことだろう。

もしかしたら、今のような友人関係には戻れないかもしれない。そんな恐れが、彼女を制しているのだろう。

「ん、どうした」

何も知らない、純粋な少女。そして、苦悩に苛まれ続け、自己を責める少女。あまりにも対照的な二人に、しかし俺は干渉はしない。なぜなら、俺の口出しするような問題ではないから。

この二人だけで、解決するべきものだから。酷いようだけど、ね。

そんな俺に、藍園は尋ねる。道に迷って途方に暮れる子供のような、同情を誘ってしまうような眼差しで。

「本当に、いいのかな？」

「俺はそう思っぜ」

「・・・」

「泉はお前の考えるような寂しい奴じゃないよ。笑って許してくれ

るだろね」

「え、ナニもしかしてウチ褒められてる？」とほざいて若干テンションの上がる奴は放置して、逡巡しきりの藍園に、こう言った。

「逃げるなよ」

強く、言い放つ。無表情を装って。

「俺は、『そのこと』とは無関係だ。だから自分だけで言えよ。」

逃げ出したなら、俺はアンタを軽蔑するだろうね」

軽い口調で、そんなことをのたまってみた。相手は、それでも顔を伏せたままだった。

このままの状況が、一番とは言えない。

やはり、思うに彼女の口から伝えるべきだ。

・・・今度こそ、この前のような嘘を一切、含まずに。

「・・・この場では、言えない」

これが、少女の出した答えだった。そして、

「でも、犯人がわかって、全てが解決したら、絶対に話す！ それ

は・・・約束するわ」

力強く、俺達に宣言した。

「ほえ、おあずけかあ。ま、いつでもいいよ。」

『その気になってくれたら』さ」

口を綻ばせながら、泉は無垢そのものの笑みを重ねる。俺は肩をすくめて、「まあいいか」とだけ告げる。

「んじゃ、言うべきことは、あの男の首を絞めてからにしますか」

「だから何故そこで暴力に走る」

気に入らないから、とだけ答えた。

そうして俺達は再び、歩き出した。

* * *

マンションの入口前は、豪華な装飾が施されている。暗闇に包まれているはずの外に、ライトアップされる玄関口。金色の床にかけられた赤いカーペットは、どっかの一流ホテルを連想させる。上を向けば、シャンデリア。これもまあ、どっかの城から拝借したような、とても大きなものだ。

そんなわけで俺は若干の引け目を感じて、他の二人もただ感嘆するしかなかった。

「なんてゆうか、ほら、お金持ちって人種あるじゃん。その人たちが住むような所だよ、ここって」

「・・・ここだけなんつか、雰囲気が違うぜ？ あの男に、そんな金あつたっけな」

「でも地図にはここだって・・・あの、もう一度探してみたほうがいいかしら」

三者三様に思惑を違えるけれど、第一印象の感想だけはみんな同じだった。

はつきりいって悪趣味だ、と。

「で、どうする。こんな変なトコに住むはずもねえけど。つか道間違えただろ・・・いや、常識的に考えて」

「一応、玄関口のポストを調べる。そこに名前がなかったら・・・もう一度地図に目を通すわ」

と不気味な建物の外観を前に、俺達はとりあえず揉めていた。入口先で大声で話し合うというのも奇妙に思えるので、ひとまずは藍園の意見を探り入れる。神々しいようなそうでないような、なんとも退廃的な入口に進む。

中は広いエントランスロビーで、ここも内装が整っている。もちろん先程の光景ほど派手ではないけれど、引いてしまつには十分だ。「・・・ね、あのヴィーナス像。目がイっちゃってるよ」

「黒木さん、そういうのは目を背けたほうが無難よ」
目の前に敷かれた強化ガラスに、備え付けられたドアはオートロックがかかっている。どうやら、横のパネルに暗証番号キーワードを入力するタイプのものらしい。

「なあ、こういうマンションって確か、郵便受けはドアの外側についてるもんだよな。ほら、この中は力ギがかかって入れんし」

こんこん、と手近なガラスを叩く。いい音が返ってきた。

「ということはずまり、あそこかあ」

パネルとは反対の壁に、奥行きの高いスペースが控えている。郵便受けらしきポストが、整然と並ぶ。

「こういうのって、マンションの住人の名前が貼ってあったりするよね。ね、藍園さん」

「え・・・ええ、まあ」

突然に話を振られてなのか、泉に引け目を感じているのか、戸惑いつ放しの藍園だった。

「見たところ、このマンションの住人全員のポストがここにありそ

うだな。『氷室宗』という名前、探そうぜ」

「見つけたよ」

「早えなおい」

一番奥の狭いスペースに、泉が立っている。指し示したポストには、確かに苗字だけがあった。

「同姓つてこともあるかもしれないな。一応、他のも確認しておこうぜ」

案の定、「氷室」という珍しい苗字が三つも四つもあるはずもなく、俺達は『1001号室』のそいつを、宗と断定した。

「ねえ、パネルで呼び出してみる？」

一旦外に出て、藍園がそう提案する。だが考えてみよう。入口パネルから呼び出すとする。すると俺達の顔は、パネルに設置されたカメラに映り、それを通じて向こうに姿を見られてしまう。これは、防犯対策のためらしいが、少々厄介だ。

俺達が、奴の家に押しかけてきたと知られたら、向こうはどんな方法で逃げ出すかわからない。カメラに映った俺達の顔を見て、奴は逃走という選択肢を浮かべることだろう。

「・・・じゃあ、どうやってあの人の玄関まで行くの？」

「セキュリティのせいで諦めました、なんてのは冗談にもならんしな・・・よし。」

探すか、抜け道を」

へ、と硬直する二人をよそに、俺はあるものを探した。

「探すつて、なにを？」

「非常口だ」

こういう嚴重な設備の、牢獄のようなマンションは、逆に言えば外に出にくい。例えば火災やシヨートとかの影響で電子ロックが解除されなくなると、非常時に外に出る方法がなくなってしまう。そのため非常に非常口を、どこかに設けているはずだ。

マンションをぐるり、と一周すれば、その一つくらいは見つかる

だろう。

「あつた」

泉が走り出した方向に、さほど嚴重ではないドアが、鍵一つなく開きかかっていた。

「こりゃ、どつかのガキが抜け道に使ってるな。まあ、あれだ、なんていうか形容し難い入口から出たくないってのもありそうだけどさ」

「何となくわかる気がする」

『非常用』と掲げられた手軽なドアを押して、中に入る。

近くに非常階段が見える。上を仰ぐと、十階までのびているらしい。

氷室の家も、十階。

俺達はそのフロアまで上る。息が切れ掛かったところで、「10F」と表示された階が顔をのぞかせた。

表札と部屋番号を確認しつつ、廊下をゆっくりと突き進む。角に当たったところで、目的の部屋番号が見えた。

「氷室 宗」

唯一人、その名前が在った。

* * *

俺達三人は終始無言だった。こみ上げてくる想いは、度合いは、それぞれに違う。だが、タイプか何かで打ち込まれたような表札の前に、圧倒される。この奥が、真実と結びついているのだと確信したとき、俺は震えをこらえることができない。手の平がじんわりと滲み、冷気をまとってかじかんでしまいそうだ。

「・・・みんな、ありがとうね」

ひっそりと、先頭に立つ藍園が呟いた。

まるで、無機質なドアの向こうにいるあの男に聞かれたくないように。

「すごく、迷惑かけちゃった。それは、申し訳ないって思ってる。私の問題に、あなたたちを巻き込ませて、謝らないといけないわ。本当に、ありがとう・・・だから」

だからどんなことがあっても私はあの人を説得させる。

消え入りそうな声を、俺達は確かに受け取った。

俺達は、何も言わずに一度だけ、頷いた。

玄関先にもカメラはついていて、現時点ではまだ、俺や藍園の姿を見られるのもまずい。俺達の姿を見たその瞬間にでも、奴は居留守を使う事だつてありうる。最悪の場合、ベランダから飛び降り自殺、というシーンも想定される。ありえないとはいえ、藍園にとつては考えたくない事態だった。

なので、ここは泉が応対する。泉は「事件」と関わりはないだろう、と奴も思っているだろうから。

詰めは誤らない。あくまで、慎重に行動してのことだった。

「・・・・・・・・」

少し離れた場所から、俺達は泉の姿を見つめる。心なしか、弱弱しい電灯の下に立つ彼女はどこか、緊張しているようだった。

ただ普通にボタンを押して、住人を呼び出す。

それだけのことだったのだが。

びんぽん、という静かな音が流れた。

その瞬間、胃が切迫してせり上がるような心持だった。緊張の糸が、極限にまで引つ張られる。永遠とも、永久ともとれる時間に、その時かすかに身を置いていた。

「・・・・・・・・っ！」

少女は、目を大きく開いて、震えるばかり。俺達は、ただひたすらあの男の声を待っていた。

あの男が現れる瞬間を

ひたすら待ち続けた。

異変に気付いたのは、泉。

もついちど同じ動作を繰り返す。けれども、向こうから反応はない。

「……？」

俺達も近づき、再びドアの前に立つ。いくら呼び出しても無反応の結果に、泉は困惑するばかりだった。

「いないのかな」

藍園はふと、呟いた。見ると、緊張の断たれた、あっけらかんとした呆けた表情だ。

「ドアの向こうから音もしないし、電気を点けているとも思えない。こりゃ、本当に不在だな」

とそこに、

「あら？ どちら様ですか……」

振り向くと、そこには若い女性の姿があった。空のベビーカーに、トイレトペーパーが山積みされている。赤ん坊を抱いて、やけにのほほんとした母親の姿に、俺達は一瞬、顔を見合わせた。

「あら？ もしかして氷室さんに何か御用が」

そう告げながらも首を傾げる。一応、俺は頷いた。

「ええ、それは残念ね」

「……残念……？」

「知らなかったの。お隣の氷室さん、先月あたり引越していったわよ。それもわずか、一年足らずでねえ……」

赤ん坊にそつと毛布をかけながら、やんわりと微笑む母親に、俺は何も言えずにいた。

「そうだったんですか」

「だけどね、うちのマンション。入居してくれる人がさっぱりなくって。あんなエントランスだけど、かえって住みづらいみたいね」

そこは全会一致で賛成の旗を掲げる。

「その表札とかも掲げたままだし。管理がおざなりになってるみ

たくつて。

ともかく、氷室さんはもうここには

「あの」と藍園は声を遮って告げる。

「その人は、今どこに？」

彼女の問いかけに、母親は手を頬に当ててぼおつとするばかり。

「聞いてないわねえ」

「・・・そうですか」

うなだれる彼女を尻目に俺は、もう一度部屋の表札に向いた。

そつと、手を当てる。

記憶を取り出すために、力を使う。

「・・・だめか」

・・・一言だけ、悔し紛れに呟いた。

表札は本人のものではない、ということ。つまり、『そういう判定』を受けたのだ。

公共物、つまりこの場合『氷室宗の私物』でなければ、記憶を読むことはできない。俺の力にも、定義は暗然と存在する。

いや、本人の持ち物であっても、引きだせる記憶は限られている。犯人の手がかりをつかめるような記憶ともなれば、無数に在る宗の記憶にほんのひとかけらあるかないかだ。持ち物ごときにそんな小さな記憶が、はたして偶然見つかるだろうかと考えれば、やはり否定しなくてはならない。

そう、記憶を見るためには、氷室宗自身を探し出すしかないのだ。・・・おそらくこの部屋の中に入ろうとも、彼の思い出すすらも残ってはいないだろうね。

「・・・？」

そんな俺の態度を見て、ほんわかとした母親が疑問を述べる。

「あなたたち、そういえばどこから入ってきたのかしら？」

回答する気力は、既になくなっていた。

氷室宗は、その存在に俺達が気付いた十月ごろには、既にこのマ

ンションを退出していた。

彼も当然、俺の記憶を読む力のことは知りえている。だから、用心を重ねているのだろうか。

そんな男に、つい先週会ったことは、ほぼ奇跡のようなものだろう。

だからこそ、あの場で彼を見失ってはいけないかった。

ともあれ、もうここには何も無い。

この町にも、という意味で。

俺達は足早にマンションを後にした。

共犯者探しは、探す前から既に結末を迎えていたらしい。

怪訝な表情で不法侵入を疑う母親から、逃げるようにマンションを後にする。手がかりを失った俺達は、駅への道のりを歩んでいた。突き刺すような風が絶えない。冬の夜というのは、あまりに無機質だ。夏の暑さのような、べっとり張り付くような密接さは、どこにもない。

俺はどちらかというと、暖かい冬を好む。

少し矛盾しているだろうね。

「うっん、残念」

沈黙を断ち切るように、唐突に泉が言った。藍園は何も返す言葉がないといったふうには、背後をゆっくりと歩く。

「・・・まだ、わかかんねーよ。つい四日前は倉庫で見たんだ。それなりに、この近辺に滞在する理由があるんだらうね」

「その理由が尽きてないことを祈る？」

泉の問いかけに、俺はもちろんと答える。

「アイツに逃げられたら、もう一度別の方法から『事件』の犯人を知らなければいけない。俺が知らないのは、犯人の正体だけだ。逆に言えば、それさえ知れば『事件』は終わる」

「・・・」

ね、と小さく尋ねた。

「なんだよ」

「この先、誰が死ぬと思う？」

不思議なことに、ひどくぬるい風が一瞬、俺達を駆け抜けた。

矛盾をはらんだ、温かな冬の風。

俺は顔をしかめた。

「・・・それって、つまり、俺達が？」

「少なくとも、私と風」さえずる様に、藍園は続ける。「考えて。犯人を見つけられないでいる私達が『殺されない理由はない』の。私達が『事件』を追っているということは、向こうも承知しているでしょうね。その上で、私達は犯人の正体を掴もうとしている。

さつさと始末しておこうって、考えない？」

壊れたように、平然と口走る。

誰も口に出来なかった、最悪の結末を。

「・・・フン」

俺はどこか気に食わない。

そんな当たり前のことを今更心配するなんてさ。

「考えたことなかったな」

泉がそう口にする。

「同感。俺も、忘れてた」

「え？」

俺と泉は、「当然だろ」という感じだった。あべこべに、藍園が
無然とした表情になる。

「・・・能天気ね」

「精一杯の皮肉だろうけど、俺にはあてはめるな。コイツと違って
ちゃんと気にはしてるさ」

「こらあ！」と声を上げる約一名を放置して俺は続ける。

「要するに、そんなことは絶対にありえないって考えればいいんだ
よ。」

何時殺されるかわからんって悩むよりは、多少神経を使わないで
すむだろ？」

「そんな理由で、あなたは平然としていられるの」

「俺はそういう奴だ。自分で言うのもおかしいことだけどね」

俺は何も考えない。

危険だとわかって、それでも好奇心むきだしで首を突っ込みたく
なるような性格らしい。

そもそも、俺が「記憶を見て『事件』に好奇心を抱かなければ、

今の状況は生まれなかった」のだ。氷室美月が殺害される、酷く醜い記憶を見て、それでも尚、真相を知りたく思う。こういっとうしようもない俺は、多分そういった危機感に鈍感なのだろう。

「……そういえば」

思い出したように、藍園は告げる。

「最初から、あなたは私のことを知ろうとした。『事件』のことを知ろうとした。……そうね、あなたにとって、『どちらが大事』か、天秤にかけるまでもないわね」

自分の命と、真実。

さてどちらが大切でしょう。

「ウチは？」

「あなたの場合は、特になにも関わってないから心配ないわ」

「……むっ」

藍園の一言に、泉はどこかうなずけないようだった。

* * *

「それで、別の方法から探すにしても、あなたはどつするの」
唐突に藍園が言う。

「直接、犯人を調べる」

どうやって、と二人が訝るのを制して、俺は言う。

「学校の奴らの記憶、片っ端から探りを入れる。そもそも犯人は、学校の人間だからね」

随分前のことになる。

この犯人、一ヶ月ほど前に俺の担任であつた福原を殺害している。わざわざ家にまで押しかけて。

「その前の事件から考えて、奴のターゲットは『紙』に書かれた人物。九月の喫茶店の事件がそうだった」

しかし、ここで問題なのは、「福原の家を奴が知りていた」と

いうことだ。

「変だと思わないか？」

俺は二人に問いかけた。

「今の世の中、たまたま『紙』に書いてあっただけで全く知らない奴の個人情報がある、そんな簡単に分かる？」

喫茶店の店主の場合だと、ちゃんと店名まで『紙』に記されている。おそらく、住所を辿ることはできただろう。

だが、ただの担任教師ならば、話は違う。

鞆から日記を取り出して、挟まれていた『紙』のうちから一枚、二人に手渡す。

「その『紙』は八月九日と十日の記事なんだけど、見てみるよ。福原の家がどこかって、一言も書いてないぜ」

「・・・成程ねえ」

これだけの情報では、福原の家を特定できない。

かといって、知らない人物の個人情報を知る術もない。

「だけどき、学校には名簿とかあるじゃん。あの担任、名簿を調べて俺の家から日記を盗み出したことがあるくらいだから。」

学校の人間だったら、それが犯人にできないはずないだろ？ 例

えば、名簿を盗み見るくらいならできる」

そうして、奴は福原の居場所を掴んだ。

「俺はそう考えるけどね」

そもそも犯人は、俺や藍園をどこか知っている素振りがある。特に藍園だ。『事件』の目撃者である彼女が一年以上生き延びていることには、必ず犯人の思惑が隠されているはずなのだから。

「推測に走るのは、あまり良い案とはいえないわ」

藍園は呟きながらも、

「・・・でも、私達の知る人物だっていうのは、何となくそうかもしない。身近な人が、犯人。」

その可能性に、賭けてみるしかないわね」

「あまり自分にはお薦めしたくないものだけれどね。なるべくこう

「いう方法は採りたくもなかったけど」

俺はことわりをいれる。

「ウチの聞いた話だと、記憶を引き出しすぎると何かまずいんじゃない？ 大丈夫」

別に、とだけ答えた。

人の記憶を引き出すには、それなりに負担がある。あまり多くの記憶を読むことができないのだから、学校中の人間で試すと果たしてどうなることやら。

俺は心の中でそう嘯いた。

「・・・ほんとに、みんなゴメンね」

「別に気にしなくて良いよ。最終手段として単純な解決方法を探るだけだから」

最初からそうすればいいものを、と泉は皮肉めいたことを言う。

「・・・そもそも、あんましこういうの、使いたくないからなあ」
過去に一度、力の副作用として自分の記憶を散逸してしまった。
そのせいで、知らず知らず慎重になっているのだろう。

記憶を読むことに対して。

日記を拾ったときは、何も感じなかった恐れが、今はこうして俺の身にのしかかる。

おそらく、この恐れは一生ついてまわる。記憶を読もうとする「と」。

・・・使えなく、なるな。

俺はそう感じた。

つまりは、この力を捨て去る道を、選択するということだ。

「んじゃあまあ、そういうことでもいいか？ お前ら」

一応二人の意見を聞いておこうと思ったただけなのだが、とてもあっさりと言を縦に振ってくれた。

* * *

俺達は再び駅前ロータリーに行き着いた。

「あの、もう少しここに残るわね」

背後からそう告げた藍園は、どこか落ち着かない様子だった。

「・・・そろそろ、洗剤が足りなくなつて。せつかくだから、この近くのスーパーで買っていくことにしたの。いいかしら？」

「ああ、そう。一人暮らして大変だな」

とりとめもなくそう口にしたのだけれど、隣で不可解な反応を示す奴が一人。

「一人暮らしかあー、なんかすごいよねそういつのつてさ」

「え・・・」と一気にうるたえる藍園に、羨望の眼差しでさらに詰め寄る泉。

「いいなー。ウチ、ずっとそういうのに憧れてたつてゆーかそんなんだマジすごくない？」

「・・・(ど、どう答えればいいのかしら)」

雨に打たれる捨て犬のような少女を、俺は適当に放置する。

と思つたところで、叩きつけるような風がこの場を駆けていった。

「・・・寒いから帰ろうぜ、泉」

心の底から溜息をつく。ポケットに突っ込んだ手は、既にサイフを掴んでいた。

「う、もつと聞きたいことあつたのになあ。ま、いつか。

じゃね」

俺も適当に手を振るだけで、背後を振り返ることはしなかった。

また明日も顔を合わせるだろうから、と面倒に思つたから。

同じ方面に帰る泉ととりとめもない話をしながら、今日はあつてなく過ぎていった。

* * *

一人居残つた私は安堵の溜息をつく。どうも、泉とはそりが合いません。そうじゃないらしい。向こうがちつともそのことに気付いてくれないのが、なんとも空しいのだけれど。

凧の場合だと、人に合わせて話している感がある。

「でも、二人とも・・・友達だ」

こっそりと、自分に言い聞かせる。どこかおかしな所作だなと自分に呆れつつも、暖かな場所を求めて足早に雑踏の中を進む。

ロータリーを半周したところで、大きなデパートに辿りつく。ちようどドアの入り口からあふれ出た人のかたまりを避けながら、中に割って入った。

目をうつむけさせるほどの光に包まれたデパート内は、まるで私を際立たせているかのようだった。

冷えた鼻先に、手に、温かさが戻る。血が通う。私はほんの少しだけ、居心地の良さを感じていた。

ただそれは、刹那のこと。

「・・・・・・・・」

私は目的の階に向かう。初めて来た場所だけれど、案内図を見れば見当はつく。エスカレーターに乗り留まって、人の列に従いながら上へと目指す。

「・・・・・・・・」

何回も、階を重ねる中で、私は思う。

居心地の良さは、刹那のこと。

そこからさきは、違う。

私の周りには、知らない人たちばかり。

それは私にとって、誰もいないも同然だ。私の存在は、彼らの頭にはないから。

私には今も、在るべき人がいない。

私には、有るはずのものがない。

その分岐点にさしかかったとき、私と人は道を異にする。自覚はしていた。

そして、事実を受け入れていたはずだった。

なのに、今になってそれが、ひどく恐く感じてしまうのだ。

全てを失ってからの、私。あらゆることから関わらないでいた、

私のあり方に。

だから、今は彼らに感謝している。

私の醜さを知りえて、それでも「事件」を追ってくれる人に。

私を最後まで信じて、ただ笑ってくれた人に。

彼らがいなければ、今ごろ私は、「事件」から目を背けたままだった。

今も、エスカレーターで目の前にいる人たちの無視に、私は知らず耐え続けていたのだろう。

そう、私はその無視が怖くなった。

だから、彼らに感謝している。

目的の階に着いたところで案内図に再び目を通す。どうやら、洗剤は窓際のコーナーにあるらしい。

場所はすなりと見つかった。ちょうど私が来た道の上に、ちいさなコーナーが設置されている。窓の外に、人の流れがあった。黒く不気味に見える波に一定の規則なんてものはない。みなそれぞれ、帰路を急いでいるのだろう。心なしか、皆足早に歩き去ってゆく。

私はそんなロータリーの風景についておかしく思ってしまった。吹き出しそうになるのをこらえて、窓から目を離れたところで

・・・私は、見てしまった。

洗剤を買う金の入ったサイフを無造作にしまいこみ、私は迷路のようなデパートの入り口を必死に求めた。

* * *

この時、もし彼女がその姿を見ていなければ。

おそらく「その結末」も、もう少し形を変えていたのだろう。

* * *

駅前ロータリーを人知れず歩くのは、氷室宗という名の男だった。駐車場に留めつばなしの車のキーを手に、彼もまた足早にある場所へと向かう。

「くそっ！」

思わず舌打ちする。自分でも珍しいと自覚するほどの怒りを抱いていた。

周囲に目を配り、凧の姿がないか、確認する。

問題は、彼がコンビニに立ち寄ろうとした時に起こっていた。

一月ぶりにこの町に訪れた際、駐車場近くのコンビニに立ち寄ったのだが、大きなウィンドウ越しに彼の姿があったのだ。店員に何か話しかけていたようだが、宗には心当たりがあった。

なぜ、あの少年がこの町にいるのか。

知つてのとおり彼は、神谷町に住む高校生だ。「学生服のまま」ここに来ることは考えてみれば不可解だろう。

しかも、この辺りにはかつて自分の住んでいた所がある。すると答えは一つしかない。

「……僕の居場所を突き止めようとしている、か」

混沌とした雑踏を抜け、小道に入った宗は一人呟く。

この町に長居はしたくない、というのが彼の思惑だった。

……間の悪いことだな、と吐き捨てる。もし「ある少年と待ち合わせる用事」でもなければ、今頃は遠く離れた県の雑貨屋で日記帳を購入していることだろう。

この日、宗は少年とある約束をしていた。

「日記から切り離された紙」を受け渡す、という約束を。

日記本体に関しては、後回し。あの持ち主なら、そうそう世間に流す意思はないと踏んでのことだった。それよりもまず、あの少年が「紙」を持つこと自体が危険だと判断したのだ。巷の事件に、「紙」を証拠として残しかねないという、理由で。

当然のことながら少年の持つ「紙」は残り一枚だ。それを回収するためだけに、宗は自ら連絡をした。一年もの間、放置していた番号は、今もつながりを保っていたようだが。

人目を避けるように、宗はある公園に足を踏み入れる。

公園にしては、見慣れない樹木が鬱蒼と茂り、街灯一つ伴わない錆びたブランコに湿ったベンチ、露骨にさらけ出すひび割れた地肌が、この公園の寂びれ具合を示している。

寒さに辟易しつつも、近くの古ぼけたタイヤに座り込む。

羽織ったコートの襟を寄せて顔を埋める。ちょうど丸まった格好になって、なんだが自分がダンゴ虫にでもなったかのようだ。

約束の時間までしばらく、待つ。もしやあの少年、自分の言うことを信じていないのだろうかとささやかな不安に包まれる。

いや、約束を破ることは「あるはずもない」のだが、心配なことに変わりはない。

そもそも、「事件」を起こしたあの時少年から「紙」を回収しなかった自分に責がある。彼の持ち物の中に、「事件」の際に見た日記の一部が含まれているということは、容易に推測できた。もつとも、当時はそんな回収事を考える余裕もなかったのだ。そう、あの殺人が事故だと片付けられるとは、予想だにしていなかったのだ。その時は、やがて来るであろう警察の捜査に焦りを抱いていた自分が虚しくも滑稽に見えたが、少年から「紙」を回収する機会も逸してしまった。

姉の存在を強烈に示す「最後の手がかり」を消すためにまず優先すべきものは、風の「本体」よりも少年の持つ「紙」だ。

「随分遅かったじゃないか、君」

氷室宗は、苛立ちを含みながら、目の前の少年にそう告げた。

「そして、その格好を見るのも、久しぶりだね。中央を十字に切り取られた白い仮面に、黒いぶかぶかのジャージ・・・

まるで、これから人を殺そうと意気込むために着ているみたいじゃないか」

ちょうど一年前の「事件」の時のように。

デジャビュなどではない、彼の姿がそこにあった。

自分を殺そうとしていると、宗はこの時に初めて確信した。

「久しぶりっつーか、ここに来させて悪いなあ」

「別に構わないが。僕を探そうとする風を、ついさっきこの町で見ただがね」

傑作だ、と少年は無邪気に笑う。人気のない公園は、それでも無反応だった。

「こんなところに、お前以外に手がかりなんてねーのになあ。電話で聞いたがよ、お前、ここに住んでたんだったって？」

「一年近く、ね。つい先月引越したが」

「・・・それにしても、風を見たとなあ」

仮面の中から、声が洩れる。

「全く、不幸というかなんつーか。あんときアイツさえいなけりゃ、店先の事件で血ベツタリの足跡アシもつかなかったんだがなあ。けど、あそこで殺す必要もなかったし、そもそも何で『あの野郎が藍園の持っていた日記を鞆に入れていた』のかが気になったからなあ」

「すると、つい殺すのをためらってしまっただけか」

「計画外の殺人は行いません」

きやはは、と質の軽い笑い声が少年から発せられる。

卑しい笑いだ、と顔をしかめた。

「君は、少しばかり気の狂った殺し屋みたいなものだ。無差別殺人は行わない。そのかわり、動機も全くない。そもそも、いきなり人を殺すものだから、こっちが失笑してしまうくらいだ」

「いいやあ、違う違う」

「じゃあ、何か？」

「全部お前を誘うための仕掛けだったわけ」

ああそうか、と宗は取り合わない。

「僕が、日記を回収しようとしているのは、あの時から知っていたらしいね。そこを利用して、君はいくつかの『紙』を日記から引きちぎった」

宗は続ける。

「・・・風がどうして、『紙』を持っていたのか。その経路がようやくわかったよ。君は巷の事件で、『紙』を証拠として残そうとしていた。確かに、あれが警察の手に渡るのは、はっきり言って不気味だ。そんなの、僕の最も嫌う行為だ。もっとも君の為す事に、風がついてまわった結果、それは向こうに盗られてしまったわけだが」

事件現場に残されている「不審物」は、それ自体が疑われる。中身はただの日記。しかし警察は、それが何かのメッセージを示すものと重要視する。世間の目にも触れられることだろう。例えば、少年にはどこにいるかわからない宗の目にも。

「案の定、アンタはくっついてくれたねえ。そこまで執着してるのはわかってたけどよ。」

・・・つか、あの野郎が邪魔しなけりゃあ、福原を殺す必要もなかったかもな」

少年は肩をすくめる。互いの距離は、五メートルくらいだった。

予想外だったのは、九月二十一日の凧の行動だった。

「アイツ、警察に連絡をいれなかったんだよな。普通さ、あの状況で殺人事件を見てみぬ振りして、しかもわざわざ俺が置いた『紙』を持ち逃げする奴があるか？」

「・・・まさか、自分だけで事件を解決しようなんざ、考えているとは思わなかったぜ」

少年は、凧が警察に自ら連絡を入れ、そこで彼らに『紙』を手渡すだろうと踏んでいた。見慣れないものが転がっていたら、誰だっ
て怪しむ。

「はつきりいつて、それじゃ意味がねえんだよな。お前には伝わらん。俺に接触するいわれもねえ。もう一度同じことを、つまり福原まで殺す必要が、できてしまったってわけ」

「・・・すると、その福原とやらを殺して事件を引き起こすきっかけを作ってしまったのは」

「そう、あのアホだ」

けたけた、と弾けるような笑み。

「・・・身近な人間じゃあアシがつく。だから『紙』に書かれてた赤の他人をターゲットに絞ったんだけどよ、福原とか調べんの苦労したぜ？ まあそれはいいとして、俺が学校の名簿を盗み見て、アイツの家に行った時だ。」

あの野郎、なんか家の中物色してたらしくつて。で、二枚目の『紙』の行方は知ってのとおり」

「二度も奪われた、ということか」

「そ、だから、もう一人『中原』って奴で事を起こそうと思ったんだが。」

「・・・お前、俺が邪魔をしてるってのは、気付いてたんだな」

「ああ、そつだ。そもそも、神谷町で二つの殺人事件だ。どう見て

も、君のせいだろう。

・・・そして、君はあの『紙』を持つている。

一年前はそれを不思議に思ったものだが、かすかに気付いたさ」「かすかに、かよ。ま、結果オーライだから良かったわけか。

で、どうしてリスクを犯してまでお前を呼ぼうとしたか、わかるか？ いいや、いい加減わかつてるよなあ」

宗は何も言わず、ただ笑みを返すばかり。少年は、愉快そうに語った。

「どこにいるかわかんねえテメエを探し出して不細工なマネキン人形にしてやりてえんだよコラ」

一瞬、この公園が音をなくしたように凍りつく。

しかし宗は、動じない。顔を合わせたときからにわかを感じ取っていたことを、あくまで少年が宣告したにすぎないのだから。

「それは、いつごろからだい？」

「一年前のあの時、つってもわかるよな」

それ以上、宗は問わない。何時の頃か、おおよそ見当がついたから。^{ら。}

「そうか、それよりさきは、僕の知るところでもない。

全ては僕を殺すためだけに・・・君は動いていたのか」

だが、と宗は続ける。

「それは最初から感づいてはいたさ。

そもそも何だ、こんな場所を指定した君に、何か意図があったのかとだと考えないはずはないだろう？

・・・それなりに準備はしておいたさ」

言つて、コートの中に手を入れる。右脇腹の辺りに妙なふくらみがあることに、少年は気だるそうに呟いた。

「・・・どんな準備をしようと、関係ねーよ」

続けて、こうも言った。

「お前、よくもまあこのうとしゃしゃり出たモンだわ。こんな・
・小さな紙切れごときにこだわらなきゃ、ここに来なけりゃよかつ
たんじゃないの？」

「・・・ん？ 俺がこんなこと言うのもおかしいなあオイ」

少年の右手に有るもの、それは日記から切り取られた『紙』。

中身は八月十三日、十四日の記事が、裏表にびっしりと埋まる。

「まあそういつても、お前は絶対に来ると思つてたぜ。どんだけシ
スコンなんだよお前。つか、物事を理解しない馬鹿より、理解する
馬鹿のほうがタチ悪いぜ。」

さしずめ、殺されると分からなくて来る馬鹿と、分かつてこの
のこ来る馬鹿つてとこだがなあ。どっちの馬鹿かわかつてんのか、
お前」

けたけた、と再び笑い出す少年に、宗は何も言わない。その代わ
り彼はあるものを取り出す。

手には、デザインの凝ったスタンガン。

「・・・殺さない程度にして、その『紙』を奪い取るつもりだ」

「何を戯言を」臆することなく、少年は告げた。

寒気の覆う夜に、遠く太鼓の音がとどろく。おそらく、近くの神
社で祭りを催しているのだろう。すると、この近辺から人が集まる。

この寂れた公園に、誰一人として来たがる者はいない。

「つーか、テメエ。いつまで偽善ぶってるつもりだコラ」

「何を言っている」

「とぼけんな。自分は人を殺せないって、まだ勘違いしてるのかよ。
・・・ああそうか。その妙なスタンガン持つてるようじゃ、気
付いてねーよな」

「僕は人を殺せはしない。いや、そうしたことはない。」

でも、傷つけることはできるぞ」

「いいやああ」

わざとらしく、少年はおどけてみせる。口を半開きに留めたまま、
「つぎけるんじゃないぞ teme。あの教師を殺したくせによお」

「意味がわからない」

「ハッ、まだわっかんねーのかよ。いいか、temeには姉への殺人願望があつた。だがそれ自体が、人殺しなんだよ。『そう思えること自体』が。いいかげん気づけよ」

「違う」

その事だけは、決して認めたくないから、憤慨する。

「僕は手を染めていない。ああ確かに『事件』には関わったさ。だが僕は直接殺してはいない。殺したのは君だ」

「しかし teme には人を殺す意思があつた。動機があつた。手段があつた。そして実際に計画して、実行に移した。」

「・・・どっから考えても、立派な殺人行為だ。多分、『お前を探してたあの馬鹿』もきつと同じ事を言うに決まってるぜ」

お前が元凶だ、と。

その言葉に、宗はいつもの笑みを見せない。いや、この少年を前に、見せようとも思わない。

宗の脳裏に、倉庫で対峙したあの少年の言葉が、鮮明に浮かぶ。

あなたは人を殺したんだ。たとえ間接的にでも、あなたにはその意思があつた。動機があつた。手段があつた。それが殺人じやなくて、何だというのですか

「・・・風といい、君といい。どうして人を殺したのが僕だと勘違いする！」

罪の意識を感じないというのなら、それは嘘です。あなたは気付いていないだけで。矛盾しているんですよ。あなたの言う事は

「temeは自分を認めたくないだけで、理論武装しているんだよ。姉を殺してないと自分に偽って、納得させているだけだ」

ムカつく、と一言。

「temeがどう思おうと関係ねえ。だが言い逃れして、俺に責任転

嫁するな。

「……たくよお、酷い言い様だぜ」

「ふざけるな！」

「それはコッチノセリフダ」

仮面の奥から平然と述べる少年。取り出したサバイバルナイフを持って余している。

「……お前の振りかざす理論、確か『人には殺せる人間とそうでない人間がいる』だっけ。その理論も、結局はお前の言い訳のためにある。だから矛盾をはらむ」

殺人願望は、誰しもが持っている。当然、実行に踏み切ってしまう人間もいる。

ならば、少年と普通の人間とを隔てるものは、なんだろうか。

「正しくは、こうだ。『人を殺して笑い飛ばせるか否か』。

平気なら、そいつは確かに異常だ。俺はその種に入る。だからお前も同じだよ。お前も実の姉を殺したじゃねーかよ。そのふてぶてしさは、俺と同じだ。

「……で、気付いたか？ 罪悪感はあるか？ いや、いつもどおりに笑みをふりまく自分がいるはずだ。

「テメエと俺は、同じ人間だ」

「……」

宗は無言だった。

一歩、近寄った。

「これより先、君に何も言う事はない。

君のそれは、要するに戯言。

君の言う事實は、要するに誤りだ。

・・・僕は認めない」

スタンガンのスイッチを押して、奇妙な音を振りまく。当たった
ら、死なずとも動きを止められる。少年は身をかがめて、相手が近
づくのを待つ。

「・・・認めない、僕が人を殺した？ その言い訳をしている？
認めないね」

あくまで宗は冷静だった。感情を爆発させることもなく、自身の
思いに揺るぎはなかったから。

この少年から『紙』を奪い取って、立ち去る。それだけだった。
だから、もう一步、踏み出す。

「哀れだな」

少年はぼつり、呟く。

「お前の姉も、おそらくそう考えていたと思うぜ？ いやあの教師、
多分殺されることも、わかっていたんだろうな。

・・・その上で、お前には気付いて欲しかったんだろうなあ。自
分がどんだけ醜いか、わざと殺されることで、悟って欲しいと考え
たか・・・。

・・・いや、俺には関係のないことか」

少年は目を細めて、ふと感じたことを言葉にする。その度に宗の
表情が怒りを含んでゆくのを、眉をびくびくと動かしながら全身を
震わせるのを、はっきりと捉える。

「でもやっぱ、お前は結局、いつまでも哀れな奴だなと思ったわけ

だよ。だから、この俺が殺してやろうというのに、ナンだよその態度は」

その様子に、けたけたと笑いながら、最後にそう告げた。

* * *

決着は、明らかだった。

もし宗が少年の言葉に動揺していなければ、まだ展開は違ったものになっていただろう。

宗は、自分から少年に突き進んでいき、

途中、公園のひび割れた地面に足をとられてしまう。

その隙をついて、少年のナイフが彼の心臓めがけて飛び出す。

肋骨の間に差し込むように、異物がコートに喰らいついた・・・

混沌とした空を、仰向けになって眺める宗。手にあったはずのス Tangan は、どこへ消えたのだろうか。

とにかく、少年の姿は既になかった。

ナイフは少年に抜き取られ、近くにあるのは一枚の『紙』。おそらく、手に余ったものを処分するように、ここに置いたのだろう。

必死に手を伸ばすと、やがて風が運んでくれた。

自分の血に浸されて、染まった日記。

横たわったまま、その右手に収めた。

ほんの少し急所を外したため、即死にはならない。

だが胸の傷口からあふれ出る感触が、結末は同じなのだと告げているようだった。

彼は何も考えない。

・・・考えれば、自らの過ちを認める方向に思考が傾くだろうか。
ら。

彼は後悔しなくなかった。

ただ、最後に失敗をしただけなのだ。

あの少年に動揺してしまったから、しくじったのだ。

姉への反省は、どこにもない。

彼の望んだ結果なのだから。

凧にも、少年にも、誰一人として反省はしない。

そう、彼が謝るべき人間はいないのだから。

薄れゆく視界^{そび}が、不意に影を落とした。

自分の真上に覆いかぶさるようにして、顔を覗き込む少女。

その目から滴り落ちるものは、なんだろうか。

彼女がどうして、「紙」を持つ自分の右手を握り締めているのか。

宗は、しかし何も考えない。

考えれば、多分この少女に罪悪感を抱いていただろうから

混沌とした空は、いつまでも昏^{くら}い。

隣町で男が刺殺されるという事件が発生したらしい。

昨日まさに俺のいた町なのだが、どうにも気がかりなのは、藍園が学校を休んだ理由だった。

「えっとお、藍園さん今日はお休みね。風邪を引いたから、らしいわね」

担任の三村の気の抜けるような報告に辟易しつつ、ふと疑問に思う。

昨日見た時点では、ごく普通だった。特に顔色が悪いとか、そういう素振りもなかった。

すると、彼女は精神的なショックで休みを取った（これはこれで問題）のだろう。

・・・隣町の事件に関わっていたとか？

気のせいだろう、と考える。

「先生、うしろうしろ！」

「何なんですか先生の後ろには黒い板しかぶっ！！」

顔を上げると、ちょうど黒板の上の置き時計が三村の頭上にぶち当たったところだった。

「んで、アイツ涙目で出て行っただんですよ」

「貴方のクラス、ネタに困りそうになっていいわね」

いつものように、昼休みは図書室でまったりとする。図書委員の仕事があるわけでもなく、暇つぶしに委員長と馬鹿話でもしていた。

「マジウケタゼ、アレ。ツカ、委員長でもおんなじことシソウ」

「失礼ね不動。私は『そこまで』間抜けじゃないわよ」

言外に「三村は間抜けです」と言う委員長。

「ところで、貸出席でナニ読んでるんスか？」

「デスノート」

あれ？ と不思議に思つて、カバーを外すと

「・・・カウンターで同人本読まないで下さい。図書委員のイメージに関わります」

「別にいいじゃない。スタンドプレーよ」

相変わらずどこかズレた言い草だった。

退屈な授業を終えて、教室から誰もいなくなるまで待つ。不動や高嶋たちとは別れて、しばらく暇を持て余す。

まずは教室の人間の記憶をのぞくことから始める。

「・・・あまりおおっぴらにできることでもないけどね。

「さて」

夕暮れもさしかかったころ、俺は教室に入る。

「・・・そいつにとつて、身近なものであればあるほどいい。髪の毛なら、あるいは・・・？」

口に出して考察する。例えば、髪の毛にはその人間の遺伝子が含まれている。つまり、その人の記憶も少なからず読み取れることだろう。

試したことはないけど。

その価値はある。

「・・・怪しいな、俺」

見返りにあわないな、と感じつつ、丹念に探す。しかし、中々うまくいかない。

「・・・だめだ。全員分足りねえ」

自分の席に戻つて、ため息をついた。

「・・・こんなじゃ、犯人が誰か、調べられない。もっと範囲を狭めて考えるか・・・？」

どうやって、と問われれば、答えは出ない。

犯人は、おそらく俺と藍園を知る人物。

藍園の場合、特に中学時代から近い位置にいるはずだ。

それと、福原の住所を簡単に調べられるポジションにいる奴。ク

ラス外の奴らに、名簿を見ることは難しい。

だから俺や藍園のいる「このクラスの誰か」だと考えるのだけれど、どうだろうか。

と、不意に思いついた。

「・・・上履きはどうか？」

校舎で履くもの。そこには、様々な思い出が詰まっているはずだ。苦心して作った彫刻に、芸術家の想いがこめられているように一人ひとりの上履きには、それぞれの思い出がある。その人の一部、ともとれる。

「・・・昇降口か」

席を立って、鞆を肩にかけなおそうとしたその時、携帯が振動した。

非通知設定。

久しく忘れていた番号だ。

当然ながら、これは藍園イスマミのもの。

俺は携帯を耳にあてて、呼びかけた。

* * *

藍園の家はマンションの一室にある。以前、彼女の記憶を読むためにここに来たことがあったので、道に迷うことはなかった。

狭い廊下を抜けて、表札の前に立つ。

近くのボタンを鳴らして、しばらく待つ。

やがて、目の前の扉が重く開いた。

心なしか、いつもより暗い表情の彼女がそこにいた。

「・・・お前、昨日からずっと『その制服』着てたんだ？」

紺のセーターに身を包んだその姿は、今しがた帰宅したような錯覚を受ける。だが、彼女は学校に来ていない。

ズル休みかよ、と冗談を入れようと思ったところで、やっぱり止める。

「・・・アンタ、今なんだった？」

藍園の言葉に、俺は凍りつくような思いをする。

最後の手がかりが、この世界から消えてしまったのだ。

「死んだ」

突き放すような口調。にわかには、少女は目をそらした。

伸びっ放しの髪が表情を隠す。だけど、声は嘘をつかない。

「私の目の前で死んでいったの。いいやきつとあの犯人に殺されたの！」

少しずつ、言葉は怒りを帯びていく。握り締めた拳が、震えて止まない。

「ねえ、信じられる？」

正面から睨みつける。

自製のきかない幼稚園児のように。

「私にはさっぱりわからない！」

少女は叫ぶ。

「どうしてなの？ こんな理不尽なことが。理不尽すぎるんことが。

あっちゃいけなかったことが起きた！

どうあっても生きて欲しかったのに！ 謝ってほしかったのに！

うつん、私にじゃなくって、『あの人』に。なのに、なのにどうして！

「・・・こんなの全然うれしくない！」

俺は、何も言えなかった。

沈黙は続く。

うつむいたまま、だらりと下がった彼女の左手だけが小刻みに震え続ける。俺はその場に立ち止まり、傍観していた。

同情はしない。

できなかった、というべきなのだろう。

氷室宗は、犯人に殺害された。言ってみればそれは、当然の成り行きだったのかもしれない。むしろ自業自得だと切り捨てるべきだろう。

だが、この少女は決して、そんな思いは抱かない。

『本当に』怒っているのだ。

・・・反省することなく、その機会すらも捨て去ってしまった宗に対して。

この少女もまた、『ある人間』に謝ることができなかった。真実を語る機会は、『その人物』がいなくなったことで、二度と訪れることはなかった。

今回、宗はどうだったのか。

逃げ続けて、ちっとも謝らない。拳句の果てに、宗はもういない。彼女にとっては、癩に障ったことだろう。『かつての彼女の姿』と、重ね合わせながら。だから、やるせない。

そして、俺は同情しない。

俺は、関係者ではない。

はつきりと断言すれば、他人事だ。だから、共感を覚えてはいけない。

これは自分が決めたことだ。あくまでその姿勢は貫くつもりだ。

「・・・ごめん、なさい」

不意に彼女が口を開く。

「いきなし呼びつけて、聞きたくもない愚痴を聞かせて……ごめん……」

別に、と気にもかけない。

ゆっくりと、再度顔を上げる。今にも泣き出しそうなその表情。

だが、その瞳は、限りなく濁っていた。

……まるで、そう。二度と開かれない扉の前に、偶然出くわしたような感覚を受ける。

決して心を開こうとしなかった、かつての彼女に、戻ったのだらうか？

「ちよつと、待って」

そう告げて、奥へと下がる。しばらくして、何かを手にして玄関へと戻る。

思わずぎよつとした。

べつとりと張り付いた血。赤く染まったぱりぱりの『紙』に、ところどころ消え飛んでしまったものの、文字が浮かぶ。

「これは、言わなくても、わかるよね」

日記から切り離された、一枚の紙。

日付は十三日と、十四日。

「……あの人の、手にあった。犯人が、置いていった、ものかしらっ」

途切れながらも、かすかに言葉を託す。一つ一つの単語が、しかし俺に全てを理解させる。

昨日、彼女が何を見たのか。

どうして、これを手にしていたのか。

あの後、やはり逃げてしまったのだ。

警察に通報することもなく。

そうして、この家に閉じこもる。

一年前と何も変わらない行動様式だ、と俺は異様な『紙』を見ながらに思う。

「あなたを、呼んだのは、これを見て欲しかった」
紡ぎだすように、核心の事柄を述べる。その口ぶりに、もう一切の感情の起伏はなかった。

つまるところ、彼女は人形のようなだった。

「・・・受け取って、そして、感じて。今のあなたになら、きっとできるはず。今この場で、その手で、『この日記』を見て。そして、私に教えて」

「・・・」

「私には、それだけでいいから。私はもう、何もしたくないから。

その先は、あなたが考えて。そこから、どうするかは」

「・・・いいのか？」

問いかけに、ただ頷く。

そつと、汚い『紙』を差し出す。

掴んだ瞬間、奇妙な粘り気を感じた。まだ、乾ききっていないの
だろうか。

しかし俺はためらうことなく受け取る。

そうして、静かに日記を読んだ。

* * *

十三日

終日、雨がやまない。

夕方になってようやく・・・がのぞく。それを見るたび、・・・
は心が・・・らぐ。

その先に、希望とか夢とい・・・、非現実的なものがある・・・
から。

矛盾に満ちた・・・を過ごしながら、ふと感じる。

いつか、この晴れ間が見えるこ・・・を信じて。

その・・・まで決して、・・・を見捨て・・・しない。

そう決意する。

十四日

まだ半分以上あるけど、おそらく埋まらな・・・記。一応、これを読む人のために・・・おこうか。

・・・はどうでもいい事柄に趣を感じる・・・だ。だからこの・・・は、そんなくだらない私の・・・を託しただけの物に過ぎない。読んで・・・面白くないだろう。

だが、そ・・・もいい。

そんなの、わかりきった・・・だ。

そう、全て、知りえている。

これは、・・・への皮肉だ。

また明日もがんばるか。

(所々、文字が欠落している。内容に、「事件」に関することはない)

* * *

「これを持ち出してくれてありがとう」

自分にしては珍しいなと思いつつ、俺は感謝する。

「・・・別に、私はなにもしてない」

「そりゃ違う。お前があの場合にいなけりゃ、今頃昇降口で汚ねえ靴でも手にとっていただろうからな。」

その手間が省けただけでも、感謝」

「・・・そう」

言って、玄関先のドアノブに手をかける。俺は『紙』を手に、さつさと廊下に出る。

「・・・それで、あなたはどつするの？」

平坦な口調に、俺は手をぐるぐると振るだけ。

「発殴る」

冗談交じりに、そう告げた。

午後六時。

きびすを返して家に戻る。

「おかえりー」

「姉ちゃん、ちっとこれから出かけてくるわ」

「え、その格好で？」

「まーね、うん」

姉の言葉を受け流して部屋に戻る。制服姿のまま何も着替えず、押入れの中から一枚のコートを取り出して、羽織らずに手に抱える。鞆から中身だけを取り出して、かわりに机の中から「日記」を入れる。もちろん、四枚の『紙』も残らず。

急ぎ玄関に戻る。下には姉が、顔に疑問符をかかえながら立ち尽くしていた。

「あんだ、そのコートの中に何を入れてるの？」

「入れてない。厚手だからそう見えるだけだよ」

革靴から履き替えることにする。動きやすいものがないから、足が一番なじむものを選ぶ。いつも使う、灰色のスニーカーを取り出す。

「その靴、汚れてるから捨てるつもりなんだけど・・・」

「使うのは今日一日だけだよ」

玄関のドアノブに手をかける。つい一ヶ月前に最新式のカギを取り付けただけあって、頑丈そうだ。

この先、福原のような空き巣に入られることもないだろう。

そう思いつつも。

「じゃ、行って来るね」

「どこへ？」

「近くの公園。すぐ戻ってくるから」

俺はどこか訝る姉を振り切るように、駆け出していった。

「晩御飯までに帰るのよ！ 遅くならないようにねー」

・・・その時間までに戻ることが、できればいいのだが。
不安を抱きつつ、ひたすら駆ける。

目の前にある、『非日常』へと。

* * *

午後六時十分。

「おーい、ちゃーこいる？」

黒木泉という名の少女が、唐突に出現した。

この倉庫は、埋立地の一角にぽつんと設置されている。周囲数百メートルは、雑草と乾いた土だけが広く延びている。そういう位置づけからは、陸の孤島と形容したほうが正しいのかもしれない。泉は考える。

さて、この倉庫には、一匹の猫が住み着いている。

少女はこの、首輪のついた猫の様子を見に毎日来ているのだ。端から見ると、面倒に感じられる日課なのだが、本人にとって苦労だとは感じない。そこには、猫好きな彼女の性格が見受けられる。

もっとも、家で飼うことはしない。この猫が、時々飼い猫のような仕草を見せることがあって、どうしてもか不思議に思ってしまうのだ。

「ん？」

もぞもぞ、と背後から一匹の猫が這い出てきた。

みずぼらしい姿に、愛くるしさは微塵にもない。

というわけで、

「洗濯物一つみつけ」

不思議がる猫をひとまず抱え、入口の水道に座り込む。もちろん、温水なんてものは出るはずもない。

要するに、冬の季節に水風呂に入るのと同じ。
当然のことながら、全てを悟った猫は暴れだした。

* * *

六時二十五分。

私は居間で時計を眺めていた。外を振り返れば、部屋の様子が映し出される。この季節では、日が落ちる時間はわりと早い。じつと視線を向けながら、私は複雑な思いだった。

この瞬間、私がこうして彼らに関わらないでいる間にも、事態は動き始めている。

鍵を握るのは、私の元を訪れた後の、凧の行動。彼が今後、何を行うかで、未来は変わる。

とはいえ私も、凧も、全てを知ったのではない。だから私も『その場』に向かい、真実を知りたいとも考える。

だが、自分の性質とでも呼ぶべきものが、その決意を鈍らせる。何も関わりたくないという、私自身のその一言が。

昨日の事で、私はあらゆる目的^{しみ}を失った。

だからもう一度、「事件」を追う前の状態に引き返したくなったのだ。それは、図書館で日記を落とす前の、以前の自分だ。あらゆることに無関心で、関係を持たなくて、平然とできた、今までの私に、戻ろうとした。

・・・そう、私の中で、「事件」は既に完結しているのだ。

「私には、もう何も無い」

誰に向かつてでもなく、私は心無く呟く。

以前から一人しかいないこの家に、声はすぐに溶けてなくなる。

変動する状況にあつて、私は再び孤立する。

「事件」の結末など、知る由もない。

午後六時半。

凍えそうな気温に入ったらしく、制服のポケットに手を突っ込んだままでも風が容赦なく当たる。コートを羽織りたい感情に囚われるけれど、それはできない。

手に持つ事に、意味が有るのだ。

藍園から聞いた話だと、彼は川のそばの公園によく顔を見せるらしい。夜になると町を徘徊する習慣が彼女にはあって、つい一週間ほど前にも、この近辺でその姿を見たのだという。

もしこの場にいなければ、また明日にでも学校で会って話をすればいい。

そう気楽に考えて済みます。

公園が道の向こうに見える。迷わず突き進んで、鬱蒼と茂る寂れた公園に、足を運ぶ。街灯だけが頼りだが、それも公園までには届かない。

それでも、俺は引き返さない。

今すぐにも奴を引きとめなければ、ひょっとしたら誰かを殺しかかるだろう。明日じゃ遅いのだから。

巷で起きた三つの事件。

人々から忘れ去られた、「事件」。

日記、そして記憶。

全ては、密接に結ばれているのだ。

公園の中は薄暗く、やはり街灯の届かない場所が大半を占めている。俺はその中で、大きな広場を目指して進んだ。

歩を進めることに、沈着な自分に驚きを感じながら、やがて切り開けた場所にたどり着いた。

川に面した、わりと敷地の広い所。川べりには転落防止のためのデザインの凝った手すりが見受けられる。

この広場は、半円に切り取られた形をしていた。手すりを中心として周囲に延びる階段は、劇場の観客席の配置にもよく似ている。あるいは、それを少し湾曲したような形。つけ加えれば、ドーム球場の席の並びとも言える。

もっとも、広場に席などなく、あるのは石のタイルを敷き詰めた階段だけだ。

その階段の下に、奴はいた。

手すりに身を寄せて、川を眺めているのは、俺と同じクラスの少年だ。

「・・・よお」

俺は気軽に声をかける。少年は振り返り、俺のほうを見上げた。

「ん？ 凧か」

「どうした、そんな格好で」

わざとらしく指差した先には、黒のジャージを着た、身軽な服装の人間がいた。あの十字に切り取られた仮面は、つけていない。

「これか？ 別に何も」

「前にどっかで見せた、あの白い仮面はどうした？」

「これも、わざとらしく問いかける。」

「風強えな、こっから聞こえてるか？」

少年は答えない。俺のひねくれた質問の意図を、吟味しているようだ。

ついでに、互いの距離は約十メートル。間に階段があり、上にいるこちらが風上だ。

「・・・仮面、か」

少年は口元を綻ばせる。

「そうかテメエ、知ったんだな？ 『事件』どころか、俺のこと全部ひっくるめて」

けたけたと笑い始める。いつものコイツのクセだ。つまるところ、少年はいつもと変わらない態度でいた。

「ばれちまったかあ。ま、いつかはこうなるとは思ってたんだけどさ。

で、俺のことはどうやって知った？」

「記憶を読んだんだ」

「・・・お前のそれ、反則的すぎだろ。推理小説全部根底から無視してねえかオイ？」

「さあね、知ったこっちゃない」

あくまで気楽に受け流す。ゆっくりと、階段の縁をなぞるように歩く。体は少しでもほぐしておいたほうがいかもしれないから。

ある程度の距離はとっている。少年には一気につめられるはずもない。

だから少年は今、その場に立ち尽くすしかない。

「それでお前、どこからどうやってたどり着いた？」

普段と変わらず、少年はぶしつけに尋ねる。

「少しばかりその経緯が気になるか？」

「あたりめえだろバカ」

そこには反省の色も、欠片すらない。異常だな、と感じ取りつつも、

「・・・なんだそれは？」

俺はまず、鞆からあるものを取り出した。

「紙」

「・・・そうか日記か」

「そうだ。といっても、この日記は『氷室美月』という人物の書いたもの。だから、見える記憶も、彼女のものでしかない。

ところが、この四枚目の『紙』だけは、違うんだ」

切り離された『紙』は、全部で四枚。

その記憶を覗いても、日記本体と同じ人物の記憶しか出ない。彼女は直接、犯人（少年）を見ていない。ふつうなら、少年の手がかりを知ることが不可能なのだが、ある一枚の『紙』だけは、勝手が違った。

「一枚目は、あの店で俺がアンタに襲われたとき、残したもの。

二枚目は確か、福原の家に行ったときだ。

三枚目は、なぜか俺の家の郵便受けにあった。

そして、最後の『紙』は、氷室宗の手元にあった」
俺は続ける。

「この三枚と比べて、四枚目『だけ』にあったんだよ。
犯人の姿を捉えた記憶がさ」

午後六時四十五分。

「昨日、宗はアンタに殺された。その時、四枚目の『紙』を、アンタは残した。」

アンタとしては、その行為には、特に意味はなかったんだと思う。だが、その時『紙』に血痕が付着したんだ。つまり、刺された胸の傷から流れ出した、宗の血液だ」

現に、四枚目の『紙』に書かれていたはずの記事は、半分しか読み取れない。あとは血液がしみになって、文字が消されていた。

「わかるか？ 俺は『それを』読み取ったんだ。俺の力は、いくつか定義リトルがあつて、本人に近いものほど読み取れる記憶の量が多くなる傾向にあるらしい。この場合だと、血液は本人の体内に流れている。調べるには十分すぎだ」

宗は、一年前の「事件」の共犯者だ。

真犯人を突き止めるためには、どうしても彼の記憶が必要だった。それさえなければ、今は途方に暮れていただろう。

「血の記憶かあ。凄えなそれ。」

「……しかし、『紙』自体がお前の手にあるのは解せねえ。どうやって手に入れたんだ？」

「これかい？」

『紙』を振つて示す。

「……藍園だよ、アンタのよく知っている、クラスメート同級生」
昨日、確かに宗は人知れず殺された。

だがその遺体を最初に発見したのは、偶然にも彼女だった。

「アイツはわかってた。この血が誰の手によるものかを、ね。多分、犯人アンタを知る方法にも気付いて、持ち去ったんだと思うぜ。そうして、俺に渡してくれた。」

あいにく、彼女はご気分が優れないようなので、代わりに俺が伝えておくけどね」

「冗談交じりに、語りかける。犯人である少年を前にして、不思議と緊張はなかった。

「その偶然がなけりやあ、よかつたんだがなあ」

さも忌々しそくに、愉快そくに少年は言う。本心がどこにあるのかは、さっぱりつかめない。

「偶然？ でも、その場合は違うルートでアンタを追っていたと思うぜ。

アイツもアイツなりに、『事件』と向き合っていた。だから、俺も俺なりの方法で、多分同じように見つけ出せたと思う」

手に巻いたコートを持ち替える。

「要はさ、最初っから同じことなんだよ。俺は日記を拾った。氷室美月の記憶を見た。それで、アンタの起こした『事件』を、解決する気になったんだ。

こんな異常なことを平気でやってのける狂人に会ってみたい、つてさ。まあ、こう思う俺も確かに異常だ。人の歪な記憶を読みすぎたせいかな、どうも性根が曲がりきっているらしい。自覚はしているけどさ」

「ふん、蚊みたいにチヨロチヨロ動き回ってたっつーわけか」

「・・・でも、それだけじゃないんだよな」

俺はふと、足を止めて向かい合う。

「この二ヶ月さ、色々な奴に会ったり、結構思うこともあってさ。怖いもの見たさって感じで犯人を追ってみたいのは今も変わらないんだが、『犯人を見つけたらどうするか』って考えたんだよ。ただ犯人の正体を知りえて終わり、じゃなくって。そいつに会ったらどうするかって部分だ」

無論のこと、答えは用意していた。

「まあ、その前にアンタに聞きたいこともある。悪いけど、俺の質問に答えてくれ。」

「どうせ、今更隠すようなこともないだろうし」

「・・・くつははは！ 終始テメエのペースで話ア進めるって魂胆か？ まあいいぜ、付き合っただけよ。オラ何が聞きてえんだ？」

「恫喝にも似た口ぶりに、俺は思わず口元を緩めてしまっ。ここま
で冷静でいられる自分も、やはりどこか少年と共通する部分がある
のかもしれない。嫌なことだけだ。」

「じゃあ、その言葉に甘えんとするか」

「少し、思考を巡らして質問を作る。」

「俺が聞きたいのは、一年前の『事件』じゃない。はっきりいって、
あれは俺とは関係ないから。」

「だが、なぜ今になって、アンタは人を何人も殺すような真似をし
た？」

「宗は、死ぬ間際にこの少年と話をしている。細部まで記憶を引き
出したから、少年の犯行理由はある程度つかんでいた。だがそれで
もある一点にのみ、疑問が湧く。」

「端的に言えば、あのシスコン野郎を殺すためだ。そのために計画
を立てた。テメエのせいで大部分が狂っちまったが、終わりよけれ
ば全てよしってこと。どうせテメエも記憶を見て聞いているだろう
から、これ以上は言わねえぞ。同じ事を繰り返すのは面倒だからよ」
「よく俺の力のことを知っているな。そのシスコンとかいう宗から
聞いたのか？」

「ん、まあそうだ。アイツから」

「なら話は早い。俺も説明する手間が省けた。言つとくが、俺が『
一番聞きたい』のはそんなささいなことじゃあない。アンタや宗に
は気付かないかもしれないが、少し離れた立場から見ると、十分に
疑問なんだよなこれが」

「なんだよ、勿体ぶらずに言えよ」

「俺は言う。」

「そもそも、この犯人を追うことにした理由を、改めて尋ねる。」

「アンタ、なんでそんな簡単に人を殺せるんだ？」

少年は、けたけたと笑う。

午後七時三分。

水道から逃げ出した猫を探すこと小一時間。コンクリートの瓦礫に座り込んでメールチェックを行う一人の少女がいた。

「ちゃーこはどこ行っただらな？」

流石に冬場に水洗いは刺激が強かったかと、いささか場違いな行為に気付きながらもしばらく待つ。そのうちおなかをすかせて（瓦礫の）山を降りるだろうと踏んでいた。

結局のところ、気楽に考えるだけで何もしなかった。

友達への返信メールを片手に打ちながら、にわかに咳き込む。埃の積もったこの場所に長くいる必要もないと悟って、しばらく入り口のドアにもたれかかる。

携帯を閉じてもう一度辺りを見回す。猫はやはりどこにもいない。「……どこかにいれば、鈴の音がするはずなだけだな」

猫には首輪が巻きついてあった。そこに小さく備えられた鈴は、猫が歩きたび心地よい音を放ってくれる。ちなみにちゃーこという名前は、その首輪に小さく、油性マジックのようなもので書かれている。

耳を澄まして、埃の漂う薄汚れた倉庫から出る音を吟味する。体育館ほどの大きさの倉庫にあるのは、金属のきしむような音ばかりと、近くの瓦礫からカタコト、うごめく音があった。

「……?」

あまりに不審。

ためらうことなく、体の半分の高さの瓦礫に向かう。すると、大きな排水溝の穴が、瓦礫に隠れるように設置されていることに気付く。いつも餌を与えるにも猫のいる場所が決まっているため、倉庫全体を把握してはいない。この穴も、泉の知るところでもなかった。

ただ、どうしてここから音がしたのだろうか。
そう鑑みて、ふと思う。

「この排水溝の通路を通って、やって来てるんだ」
近くの窓をのぞくと、確かに排水溝は埋立地を分断するように、
レールのごとく敷かれている。遠くは暗くてよく見えないが、きつ
と埋立地の入り口にまで延びていることだろう。

毎日あの猫は餌をもらいに、まるでネズミのように倉庫への通路
を通り抜ける。

つまりは、そういうことだ。

「雑草ばかりの外を歩く必要もないってか」

納得して、泉は半ばあきれ返る。

ひとまず、猫は帰ってしまった。エサは与えずとも、どうせ飼
猫なのだから、飼い主が代わりにやってくれることだろう。

帰るか。

不意に思っ、泉は排水溝から目を背けようとする。その時、視
界の隅に何かを捉えた。

「.....」

どこかで見たとような、黒一色に包まれただけの古ぼけたハンカチ
だった。これといった絵柄もなく、見た目よりもただ実用性を重視
しただけの感を受ける。

加えて、何より泉の目を引いたのは。

「.....あ！」

『それ』を見た瞬間、全身の身体が硬直した。ハンカチの殆どの
部分に、凝固した血液がこびりついている。赤黒くもあり、近寄る
と強烈な異臭に思わず鼻を押さえてしまう。更によく見ると、無理
矢理引き裂かれたような小さな肉片がハンカチに付着している。

せりあがる吐き気を手で抑えて、そっと離れる。とにかく、目を
背けたかった。

見続けることが、いたたまれなかったのだ。
そう、泉は『あれ』が何なのか、知りえていた。

しばらくするうち、ほんのわずかに考える余裕が出来る。
考え出した瞬間、彼女は悔しくなった。

この血が、腐食した肉片が、誰の仕業なのか、彼女は知らないから。

忘れようとしていた記憶を蒸し返すようなこの酷い始末に、許せなくもあり同時に悔しくも感じてしまうのだ。

だから、あのハンカチから目を背けたかった。

「・・・」

・・・いや、たった今彼女は、思い出してしまった。
ハンカチの持ち主が誰だったかを。

かつて（一年前の夏）、あの黒いハンカチは『彼女』から借りたことがある。

そのハンカチは、あまりの特徴のなさに、かえって珍しいものだった。黒一色だけの、他にはなにもない、地味なもの。しかし、先程泉が目にした『それ』には、大量の血が付着していた。

それは、誰の血か。

当然のごとく、泉は知りえていた。この朗らかな少女でも、記憶から消してしまいたいと思うほどの、悲惨な光景を。

かつてこの倉庫では、ほとんどの猫が無残にも殺された。これは、『その』血に違いないだろう。

猫を殺害した犯人は、黒いハンカチの持ち主なのか。

もしそうだとしても、泉には到底信じる事が出来ない。

・・・違う、と否定したい自分がいるのだ。

『その人物』が、氷室宗を共犯者だと信じきれなかったのと同じ。
泉もまた、たったいま脳裏に浮かび上がった『彼女』という可能

性を、認めたくはなかった。

気が付けば、泉は駆け出していた。

倉庫を離れ、広い土地を走り抜ける。事実を確かめるために、古びたハンカチを手に、ひたすら走る。

メールで尋ねるような範疇ではない。そう思ったからこそ、『彼女』の家へと向かうしかなかった。そう思ったからこそ、『彼

午後七時二十八分。

私は制服のまま、いつしか家を飛び出していた。繁華街を疾走して、ひたすらに公園へと向かう。

・・・行って、どうするのか。

はつきり言って、そんなのはわからない。このまま引き返して、関わらないでもよかったのに。無関係のまま、事件が勝手に解決して、それで納得してもいいはずなのに。

私は今、足を動かして公園へと駆けている。一体、どちらの行動が正しいのか、私にとっていいのか。それすらも判別できないでいた。

角を曲がって、近道をとる。路地裏を渡り、また大通りへと出る。先はまだ遠い。

確かに、凧は死なせてはならないと考える。

彼には犯人がよくいるであろう場所を教えている。だがあの広場は人気がなく、凧にもしものがあつてはと、私としては無視することが出来ない。やはり犯人と会うのは危険なことだ。これではむざむざ彼を死なせかねない。元々、彼は「事件」とは無関係。そんな人間を、結局は放っておけるはずもないだろう。

だけど、『本当に』私を動かしてるのは何だろう？

その一点だけがどうしても、考えられないでいる。できないでいるから私は、思いを振り払うように走るしかないのか。

けれどその先で、私は何をすればいいのか？

苦悩は止まない。

・・・なすべきことが、全くわからないのだから。

硬くそびえ立つ建物の下、赤色の信号をひたすら眺めていた。急ぎたいのだけれど、最低限の交通ルールだけは守らなくてはいけない。もどかしくもあり、やりきれなくもある。私は、信号が変わるその瞬間にでも走り出す覚悟でいた。

だが、その先にある人の姿が、その思いを踏みとどまらせる。

「・・・あれは？」

向かい側の信号のそばを走り抜けるのは、黒木泉。

こちらに気付いていないようだが、心なしかその表情は曇っていた。私はつとに訝る。悲しげな表情を作る彼女に、一体何があったのかと。

声を上げて、こちらから呼び止めてみようかとも考える。だが、その思いはすぐに取りやめた。

彼女の手に、黒いハンカチが握られているのを、偶然にも目にしたのだ。

きっとあの倉庫で私が捨てたものに違いない。

確信して、私は悟った。

おそらくもう、『私が猫を殺したことに泉は気付いた』のだろう。その証拠として、ハンカチがある。そう、悲愴な表情の泉は、私を探してるのだ。

向かう先、おそらく私の家だろうか？

「・・・」

どうしようか、と考える。

信号はあと少しで変わる。駆けて、彼女の元に行く。どのみち、

『真実』は語らなくてはならないのだ。

その機会が、たまたま今訪れている。

「・・・私は、どうすればいいの？」

自問する。あまりに多い選択肢に、困惑してならないのだ。

このまま風のところに向かうのか。

立ち止まって、泉と話をつけるのか。
退いて、何もしないほうがいいのか。

「・・・いくら考えても、わからない」
自答する。今にも泣き出しそうな心持に囚われて仕方がないのだ。

信号が変わる。

だがその先に、泉の姿はなかった。

私は、元の位置に立ち尽くしたまま、呆然としていた。

「わからない」

私は呟く。

「何をしているの？」

自らに問いかける。

「何なの、これは？ どうするの？ どうしたいの！」

自分を問い詰める。叱責する。糾弾する。

「もう『どうしていいのかわからない』！ ねえ誰か教えて！ お

願いだから、誰か私に・・・！」

唐突に吹き荒れる風に、私は言葉を失う。

相手のいない質問ほど、虚しく終わるものはない。鏡に向かっていても、向こうは何も答えてくれない。失望だけが、私をみじめなものにさせてくれた。

・・・そう、本当にみじめだと、この時私は思った。

だからこそ、私は歩かなければならない。

進もう、とだけ割り切るしかない。

「ごめんね、黒木さん」

点滅する信号を前に、私は断りを立てた。

「・・・またあなたから逃げるようなことをしちゃうけど、私は元々そういう人間。だから、ごめん」

自分に納得させるように、告げる。

重大な迷いを抱え込んだまま、私は駆け出す。

* * *

藍園の住むマンションは、入口から容易に出入りできる。その十階にある彼女の家を目指すのは、泉。はやる気持ちをこらえて、エレベーターに乗り込む。ゆっくりと作動し、硬い箱は彼女を上へと押し上げる。

わずかな時間を経て、ドアが開いた。早足で角の部屋の前に立つ。
「・・・・・・・・」

泉には信じがたかった。どうして彼女が猫を殺したといいきれなのか。確かめるために、どうしても直接会って話す必要があった。近くの機械に触れ、呼び出してみる。

しかし、出るものはいない。

家族でどこか外食にでも出ているのだろうとも考えるけれど、すぐに打ち消す。そもそも、彼女には家族がいないのだ。

途中、繁華街が横たわっていた。

その人ごみの中で、もしかしたら『すれ違った』のだろうか？

「・・・・・・・・（そんなの、あるわけないか）」

首を横に振りながら、違うだろう、と考える。

泉は息をついて、おもむろに手すりに身を寄せた。

「どっこいつちゃったのかなー・・・？」

眼下に広がる、光り輝く町並みを俯瞰しながら、黒木泉は小さく呟くしかなかった。

(七時四十一分。終了)

午後七時二十三分。

「なんでアンタ、そんな簡単に人を殺せるんだ？」

少年はけたけた、と笑うばかり。

「……答えたくない、か」

「俺にもわからねえんだよな」

歪んだ笑みを見せつけながら告げる。

「別にそいつらが憎くてやったわけじゃあねーし、あの野郎を呼び出すためにわざわざそういう手段をとった理由も浮かばん。そもそもあの野郎を殺そうと思った動機もねーし。

俺の頭あいつからそんなベクトルにしか働かなくなっちまったんだろうなあ」

「それで、殺した時アンタはどうだった？」

感想を求めするように、尋ねる。ふざけた嘲笑と共に返ってきたものが、

「楽しいね」

ふざけた言葉だけだった。

「いつのまにか、そう思っちまったみたいだ。ま、これもお前にはわからねえよなあ」

「全然、さっぱりだ」

両手を上げて降参のポーズをとる。正直に言わせてもらつと、くだらない。いくら興味があるといっても、俺はこの『理解不能な動機』を解読してみようという気にもなれない。要するに、質問するだけ無駄だったといえよう。

「……確かにアンタは異常だよ。いや、冗談じゃなくつて。正直俺、引いたぜ。何も理由がなく殺せる？ほんとに、アンタみたいな奇人がいたとは、少し驚いたよ」

「八、別に気にしちゃあいねえ」俺の態度はさも当然だろうとばかり、受け流す少年。「どうせそんなモンだろ？」「人は、他人が決して理解できない部分を持つ。だから人は何かしら異常だ。そもそも人の心はそいつより他知るはずもねえ」。全部、宗が言ったことだ。俺あアイツの言う事を鵜呑みにはしちゃあいない。だが、その部分だけは共感できる。

どっからどうみても普通の人間なぞ、どこにもいない。

・・・俺という人間が一人ぐらいいても、不思議じゃねえだろ？」「いたとしても、そいつは人前に曝すものじゃなし、ましてや実行に移しちゃあいけない。心のインナースペースだけに留めて置くのが吉だ。

・・・ま、死人すら出たこの状況で、俺が言っても遅えか」

あくまで、冷静に言葉を流す。そこには少年に対する怒りも共感も、憐れむ気持ちすらも起きない。俺は多分、元からそういう冷酷な一面を持っているのだと思う。俺の心に巢食う異常は、他人への非共感性。しかし、記憶を読むのにはそういった冷淡さが、時として必要なのだ。だから、俺は自分の人と違う面を、否定もしなければ人に見せることもしない。

そもそも、言葉にするようなものでもないと思うけれど。

「死人かあ」

それはそうと、俺はもつと別のことを考えねばならないようだ。

「オマエ、そろそろ死人になってみる？」

刹那とも呼べる時間だけ、俺は凍りつくような思いをした。

「唐突だね」

けれども淡々と受け流す。どうあっても余計な緊張の糸を紡ぐことはない。

「っーか、うん。俺さっきから思ってただけだよ。オマエ、結局はそれを言うために来たのか？」

「別に。聞く耳持たなければそれでいいさ」

「なら何しに？」

「一発殴りに」

途端、相手は盛大に吹き出した。

「ばっかじゃねーか？ つーか、わざわざこんな人けのねえ所で俺と会うこと自体、危険だつて思わない？ まさかあの野郎とおんなじことをしに来るとは、傑作だなこりゃ」

宗のことだろうか、と勘繰ってみる。ともあれ、

「なに、今から警察に出頭します俺には何も危害を加えたりしませんごめんなさい、とか思ってくれてるとか？」

そうしてくれたら、ありがたいけどね。

「んなわけねえだろ、オイ」

「だけど、俺を殺したところで、いずれアンタは警察に世話になる。それでなくとも、もうアンタは何人も手にかけているんだ。本音を言わせてもらつと、アンタが何をしようとするかは変わらないってこと」

「それでテメエは安心だとも思ってる？ だとしたらその脳みそは軽くお花畑作つちまってねーか？」

「いいや、と俺はわざとらしく首を振ってみる。

「要は、アンタが捕まる前に、殴らないといけねーんだよ」

「わっけわかんねー」

「・・・あの店でアンタには散々やられたからな。確か九月二十一日。もう二ヶ月も前のことだけど、まだ少し腹が立っているんだ」
手をほきほき、と鳴らしながら、腕にかけたコートを『調整』する。その中にあるものに、気付かれたくもなかったから。

「覚えているか？ 俺は今でも根に持つてるぜ、顔面を蹴り飛ばされたことを。アンタが警察に連れ込まれたら、俺が仕返し、できないだろ？」

「借りは返す、つーーことか」

少年はせせら笑う。

「最近この手の馬鹿がよく俺の周りにいるんだよなあ。お前とかお前とかお前とか」

結局俺しかいねえじゃん、とか冗談めいたことをのたまう俺。

「・・・まあ、とりあえずご苦労さん。とだけ言っておくぜ」
言いながら、相手は身構える。

俺は、相変わらず平静を保っていた。

午後七時四十八分。

その選択に、理由はない。

ただ、この少年を殴り飛ばしたいという意味だけが、俺の頭に残っていた。馬鹿だろうと揶揄しても構わない。そこに、特別な考えなど存在しないのだから。

表裏はなし。勝たなければ、俺は死ぬ。

だが、むやみに殺されるわけにもいかない。

そう、俺はあらかじめ準備をしておいた。

「そのコート」

半円状の階段。その下にいる少年はおもむろに懐に手を入れる。

「気になってたんだが、ナンだそりゃあ」

「アンタを倒すためのものだ。気にするな」

ヒヤハハ、と高笑い。俺は全く動じない。

「初めから俺を殴る気ているのは、本当なんだなあオイ」

右手のコートを、視界の端に確認する。

「一応言っておくが、不利なのはアンタだ」

「そっさいきれるのかよ？」

「まあね」

それだけ伝えれば十分だろうと考える。俺はここを動かない。こちらからは決して近づかない。

俺は顔色一つ変えない。手には汗一つかいていない。

不思議な感触と、自信だった。

そう、絶対にやられるはずがないのだと。

おそらく今までと違って、相手の正体を掴んで、視認できて、癖までも把握しているからだと思う。二ヶ月前に襲われた時は、そんな分析をする余裕すらなく、結果的にあんな形になってしまった。

だが、今は違う。

・・・こういう空元気が、俺を安心させているのだから、そんな自分に呆れてしまうけどね。

相手はどうだろうか？

正体をつかまれ、俺をこの場で殺すことしか選択はない。いくらあの少年でも、警察に捕らわれることは好まないだろう。自然、人がいないうちに『事を終わらせよう』と考える。

もしものとき、俺は人の居る場に逃げればよい。

そう気楽に考える。

納得させて、心理的に余裕が生まれる。

・・・動き出した。

少年は階段に足をかける。

思い切り踏み込み、

こちらに何かを投げつけた。

「つつ！」

冷えた大気を掠める音。

投げたナイフが勢いよく俺に喰らいつく。

かろうじてかわすものの、ナイフはコートの袖を切り裂く。

刹那、怯んだ隙について少年は襲い掛かる。

「チツ！」

階段を駆け上がる時間、俺は右手に巻いたコートを手際よくほどいて示す。少年の視線もそこにあった。

その顔面めがけて、

右手でコートを放る。

予測していたのか、少年はこれをかわす。その両手に、それぞれタイプ型の異なったナイフが収まっていた。

二つ同時に相手することは難しい。

片方のそれをもう一度投げつける可能性もある。

距離にして四メートル、飛び道具をよけることは困難だ。
俺は左肩のカバンを、制服の袖を滑らせながら少年めがけ、投げつける。

至近距離からのそれは、少年の突き出したナイフに串刺しされ、右手にはもう一つのそれが残る。

更に俺に走りかかる。

その差は手を伸ばせば届くほど。

少年はナイフを両手に抱え、喉元を襲う。
表情一つない。

絶望が俺の背後にちらつく。

少年の手から繰り出されたナイフは

途中その方向を変えてどこかへと放り投げだされてしまう。

「くぁ・・・！」

コートに包まれていた俺の右手には、『痴漢撃退用の催涙スプレー』。丁度、ゼロ距離で相手の顔面に噴きかけたところだった。

痴漢撃退用とあって、中の薬剤は目に当たれば『ひどくしみる』。相手は前のめりに体勢を崩す。

秒数で数えられるほどの余裕が生まれたところで、鼻っ柱を本気に殴りつけた。

あまりの勢いに、ふわりと浮いた少年の身体は、一直線に階段を転げ落ちる。

少年の元居た場所、一番下のフェンスに激突したところで、ぐったりと動きを止めた。

* * *

九月三十日のことを、覚えているだろうか？

以前、姉に頼まれて防犯用の某かを買いにホームセンターに立ち

寄ったことがある。その時にせつかくだからと、姉の金を使って携帯用の催涙スプレーも買っていたのだ。身を守るために一応、懐の大きい制服のポケットに忍ばせておいたのだが、そのまま何ヶ月も経ってしまった。

・・・ということ。大きさも手ごろだったが、よくひきつけて噴射しなければ当たらないのが難点だ。

そこを補うために使ったあのコートは、いわゆるフェイク。なるべく大きなものを選んで、相手の注意を引きつけるように仕向けたつもりなのだが、むしろ相手のほうが気に取られすぎたきらいもある。

少年の頭では、せいぜいその程度だ、と考える。

周到に計画を立てる人間ほど、急な事態に思考を張り巡らせることには馴れていない。

瞬時に、コート裏のスプレーを見抜くゆとりもなかった、ということだろう。

からくりにしては、やや単純だったかもしれない。

だが不思議と、成功する自信はあった。

・・・本当にこんな自分が怖いと思えるくらいに。

そう自画自賛しながら、もう一度階段の下を見る。

効果は抜群だった。

「・・・足と目が、痛え。ひねった。しみる。オマエ、最低」

フェンスに寄りかかるように座り込んで舌打ちする少年の目は、まだ開けられないでいた。

午後七時五十三分。

鼻を刺すような風の冷たさに紛れて、この広場を埋め尽くすタイルが、かたかたと声を上げる。一度床に目を向けて、それから近くのコートを拾い上げる。暗闇に包まれている広場、灯となるものが皆無なこの状況でも、前方を流れる川が、対岸の町の光をわずかに反射して明かりを運んでくれている。かろうじて見える、程度だった。

次に鞆を拾い上げる。開くと、中の日記から数枚の紙が飛び散っていた。それらをまとめて、チャックを閉める。

「・・・その様子だと、本当に立てないみたいだな」

俺は嘲るように語りかける。階段下のフェンスに腰を下ろす少年に、身を起こす気力もないらしい。

「馬鹿らしくて萎えた」

「何が」

「テメエごときに殴られちまったことが」

右足をさすりながら何度も舌打ちする。視線は何処か別の方向にあった。

「・・・つつても、この様子だとこのみち逃げられねえしなあ」

「俺が見逃すと思うか」

「ない」

即座にそう答える。

「そうだよ、アンタには警察にしょっぴいても連れ込まなきゃいけない。それが俺や他の奴らにとって一番良い解決の仕方だ。アンタが捕まれば、それでこの事件は終わる」

そう。

現在に至るまでに連綿と続いていた「事件」も、消滅する。もつともあれは、世間では存在すらしなかった。「事件」の被害者としての氷室美月も、結局は日の目を見ることはない。

報われないな、と思う。

けれども、彼女が存在したという事実はこの日記に託され、今も俺の手に在る。

日記が残される限り、氷室美月という女性は、決して消えない。たとえその人が死んだとしても、生きたという証拠は容易くは消えない。人々の記憶に残り、あるいは物として残されるから。

絶対に、消されたりはしない。

あるいは他人によつて、消されてはいけないのだ。

「・・・この日記、捨てる意味もうないよな」

「あん？ 何がだよ」

別に、とだけ答えた。

「それより、動けるようになったら行くぞ。つつか、逃げようとは思うなよ？」

「フン、こんな状況で逃げるかつつの。まあ、テメエの言うことが決定事項になつちまつたつてのも癪だが」

「・・・？ もし俺がいなかったとしたら、捕まらないとでも思ったか」

「さあな、けどいつかは捕まってる」

「自覚はしてたんだ」

「当たり前だろが」

少年はさもつまらなさそうに言う。

底冷えすらしそうな広場に、また吹き抜ける一陣の風。たまらずコートを羽織ながらどこか風の当たらない場所がないか確認する。

「寒っ」

辺りを眺め回しても、暖かな場所はない。あるのは鬱蒼とした公園の木々と、何も無い広場。風を遮るものすらなく、仕方なく階段

にまた腰掛けるしかなかった。

「・・・おい、風」

不意に少年は問いかける。

「何だよ、つかそこにいて寒くねーの？」

「お前の背後に誰がいるぞ」

「ん？」

ゆっくりと首だけ振り返る。

そこには

その少女はまるで、置物のように立ち尽くすばかり。

手にあるのは、先程少年が投げつけたナイフ。不思議に思っ
て、つい拾ったのだろうか。

相変わらず制服姿のままだった彼女は、静かに視線を送る。しか
し悲愴な表情のままに

・・・藍園は佇んでいた。

「・・・どうした？」

突然の来訪に、戸惑いを隠せない。あれほど来たがらなかった彼
女に、どうという心境の変化が訪れたのだろう。ともかく、彼女はこ
こにいた。

「ああ、アイツなら大丈夫だ。俺が殴ってああいう風に転がって
けど」

しかし答えない。よく見ると、微かに唇をぶるぶる、震わせてい
る。

注視すれば、震えが全身に転移していることに気付く。

「本当にアンタ、どうしたんだ？」

答えない。俺は半ば無視されているようで、苛立ちを覚える。

「『事件』のことは、もうこれで終わった。一応、こいつが警察に
自首することで話がついた。それでいいだろ？」

彼女は、『この結末』に立ち会うことを嫌っていた。

もちろんそれは、彼女の決めることであって、心変わりすることだつてあるだろう。今になってこの場に来ることには別段、危険も無いのだから。

だが、来るとしても。

彼女は何をしに訪れたのか。

結末を見届けるため？

あるいは、別の目的で・・・

「なんで」

・・・思考する俺を遮るように、彼女は『少年に』問いかける。

「何で、こんなことになるの・・・？」

階段を一段ずつ下りつつ言う彼女は、どこか苛立った様子だった。

午後八時三分。

そのとき俺の前に黒い影が現れた。

脳裏にじわりと浮かぶ一抹の不安。振り払おうとしても、結局はなすすべなく立ち尽くすしかない。

少女は、「事件」の時と何も変わらない。

自己嫌悪に陥りながら、誰よりも濁りきった眼差しを突きつけるばかり

「人殺し」

辛らつに放ち、藍園は一步階段を下る。背後にいる俺からはその表情は窺えない。

「なんで、こんなことになったの？　なんで、あなたはそうしたの？　なんで・・・なんでよ！」

要領を得ない少年への詰問だったが、執拗に同じ事を繰り返す彼女に、俺は引きとめる言葉を持たない。気迫とか鬼気迫るものとか、とにかく話しかけてはならないようで、俺に語る権利すら彼女に剥奪されたかのようにだった。

「『あの人』はあなたたちのせいだ殺された！　ほかに！　『あの人』には悔いて欲しかったのに、あなたはその機会すらも奪った！　どうして！」

誰も答えることが出来ない。いや、したとしても彼女は錯乱し、我を失っている。何を言っても弁論の余地すら否定されるだろう。

「それどころか、なんにも関係のない人たちまで、信じられない」
悲鳴にもとれる声で、罵倒する。

「どうして、どうしてそんなに涼しい顔して座っていられるの？」

俺は一步も動けない。

「ねえどうしてあなたのような人間だけが生きているの！」
「硬く握りつぶした拳だけが、虚しく震える。」

口を開く。

ただし、それは少年のほうからだった。

「俺はそういう存在だ」

おそらく、半分は冗談で。

「そのために俺は在る。だからオマエや尻を殺そうと思えば、して
た」

半分は、真意を含んで。

「気分だ」

少年は憎たらしく笑う。

「あと、存在する意味のために」

到底、他人には理解できない言葉ばかり、並び立てる。

「それ以外に、何があるっつーんだよバカ」

一抹の不安、というものだろうか。

まるで俺を、黒い影が包み込んだように、煮えきれない不安に駆
られてしまう。振りほどこうとしても、目を背けようとしても、消
えてはくれない。そんな不安。

不安はやがて

現実味を帯びて、俺の前に姿を見せる。

「……俺はその時、背後から目にするようになった。」

「……あ」

思わず、声が出る。

硬く握り締めた拳に、気付けば先程のナイフが、その穂先をゆら
りと動かす。いや、動かしているのは少女のほうだから、彼女は其
のナイフを。

階段を更に下りる。

少年の目の前に立ち、ゆっくりとひざを曲げる。少年と視線が同じ高さ。

少年は、そこで全てを悟った。

「そうか」

瞬く間に狂笑する。

「ハハハ！ そうかそうかいそういうことかあ！ やっぱりテメエは……！」

それ以上は何も喋らない。

けれども、フェンスに深々ともたれかかったまま。

少年は異常なまでに甲高い、不快な音を放つ。

そばにしゃがみこんだ少女はそっと、少年の胸に片方の手をあて、軽く呟く。

「この人殺し」

すっ、と突き刺さる。

片方の手をそっと、少年の背後に回す。

抱きつくようにして、その刃を差し込んだ。

静かに、深く。

そう、もっと深く。

少年は無抵抗に、ひたすらに笑っていた。

どこまでも醜く、口元を歪めたまま。

しばらくして、あらゆる動きが止まった。

* * *

音のない世界に、足を踏み入れたようだった。

あらゆる雑音が碎け散って、この場から消え去ったかのように。残るは、沈黙する二人の人間。

・・・その少女は俺に背を向けて立ち尽くしていた。

雫の落ちる刃は、紅い液体を飲み込み、さながら渴きを潤したかのようにだった。暗闇に覆われているけれど、絶対に認めてはいけな
い類の鮮やかさが、そこにある。

俺は言葉を失ってしまった。力を入れ続けなければ、足が崩れて
しまいそうなほどに。

口を開こうにも、喉を震わせることすら叶わない。

言いたいことがあるすぎて、口を塞いでしまっている。

思考も追いつかない。

今しがた起きた『こと』が。

「・・・ねえ」

そう、その時少女は俺のほうに振り返った。

伸び放題の髪の毛に、何日も着っぱなしの制服に付着する、血液
が目につく。

まるで腕に巻きついたように、ナイフは手放されずにいる。

何よりも俺は見てしまったのだ。

彼女という人間が、一体どういう性質を帯びたものなのかを。

「可笑しいと、思わない？」

泥水のように濁りきった瞳を浮かべながら、見上げた彼女は恍惚と笑っていた。

全身からとめどなく噴き出す、不快なまでの汗。血に染まりながら、それでも笑う藍園に、俺は思考を寸断されたまま啞然とするばかりだった。

「可笑しい、何がだよ？」

それでも、言わなくてはならない。

「アンタ、何やってんだよ？ こういう解決の仕方って、ねえだろ？」

・・・酷い、裏切りだと。

「答えるよ」

ぎちぎち、と歯を食いしばるしかなかった。無性に腹が立っていた。酷い裏切りに。俺や他の奴らに対する、あまりにも幼稚な裏切りに。

「何でテメエは黙ってるんだよ！」

「わかってるくせに」

藍園は無機質に言い放つ。

「最初からわかっていたくせに。私はね、元々そういう人間なの。人殺しをして、それでも笑わずにはいられない、存在悪。わかるでしょ？ こんな私は他の人と関わってはいけないの」

「ふざけんなよ！」

俺は止めない。

「だからつつつて、殺していいはずがねえだろ？ どうしてそこまです自分を否定すんだよ！ 関わっちゃいけない？ そんなのただ言い訳作ってるだけだろが！」

「違う！」

手に在ったナイフを、ゆっくりとこちらに向ける。

「あなたには『決して』わからない。私が『今まで』どれだけ苦しんだか、あなたはわかるっていうの？ いいえたとえ記憶を見たっ

て、わかるはずもないわ。だってあなた、『無関係の他人』だもの。なのにあなたは、平気で人の事を知ろうとする。

「……はつきりいつて、ムカつくのよ、それ」

俺に近づきながら、平然と述べる。

「ええ、私はあなたに腹が立っている」

言葉を繰り返す。

「今ここで、殺したいくらいに」

「……」

俺は、深く息をついた。強く吹き付ける風に頭を冷やして、言葉を紡ぐ。

「……同情できない。したくもないけど」

続けて、言う。

「本当に哀れとしか言えない。アンタこそ、人の気持ち、全然わかってねーじゃん。」

自分から人を遠ざけて、そんなに嬉しいのか？ 自己嫌悪ばかりして、そんなに自分を見下して楽しい？」

言葉が、見つからない。

このままじゃいけない、と感じつつも、俺は引きとめる言葉を知らない。人の記憶を探るだけでは、決してその言葉は見つからない。いや、見つかったところで、口で言葉に託すだけでいいのだろうか？

ずっと悩み続けながら、『それでも答えを見出せなかった』彼女に、傍観していただけた俺が、わかるというのだろうか？

「だとしたらアンタは馬鹿だ。はつきり言ってそれ、もう救えねえよ」

「……」

追い詰められているのは、彼女自身なのに。

俺はかける言葉がない。あったとしても、もう虚しく空回りする

ただだろう。

最後まで俺は、傍観するだけでしかないのだろうか。当事者としていれずに、苦々しく見つめているしか。

「あなたに、救ってもらおう必要はない」

ざく、という音に、我に返る。

見ると、血液のついた刃物がコートに突き刺さったところだった。しかし、厚手だったため、俺は傷を負っていない。あるいは、彼女がそうしたのでだろう。

「逃げて」

唐突に告げた。そこに苦悶の表情を浮かべながら。

「人に見つからないうちに、あなたは逃げるの。あなたはもうこれ以上、私に関わってはいけない。あなたはこんな場所においてほしくない」

刃先を微かに震わせる。刃先に引っかけたコートがその度に動く。

「どういうこと、だよ」

「お願い。あなたたちは決して、こんな事に頭を痛めてほしくない。こんな自分に、同情してもらいたくない・・・こんなことで、あなたはきつと納得するはずがないわよね。でも、分かってほしい。

あなたや黒木さんには、『私のような思いをして欲しくないの』。だから、日記を持って、この場をすぐに離れて」

ぼつりと垂れた、大粒の涙。それが、彼女をうつむかせる。

「駄目だ。アンタは、まだ泉にも『真実』を話していない。悪いけど、俺達はもう無関係にはならない」

ずぶ、と嫌な音を立てる。コートに食い込み、制服にまで届く。

「・・・駄目。あなたはここにはいけない！」

「だけど・・・！」

「忘れないで」

言葉を断ち切るように、藍園は語りかける。

「・・・今まで起きたことを、全て覚えていて。決して、忘れないで！ 何があつたか、どんな人が在つたのか。」

記憶して。日記に記してもらつてもいいから・・・」

「・・・何だよ、ソレ？ 遺言？」

何も答えない。うつむいたまま、すつと刃物を突き立てる手を引いた。

そのまま、向かい合つたまま、動かなくなつた。

「ちつきしよう・・・」

逃げることに、賛成なんてできるものではない。

俺に、この不快極まりない結末を変える力があつたなら。

けれど、何も考えられないのだ。

今この場所を立ち去つてしまつたなら。

それは迷子を見捨てることと同義だ。

・・・けれど、何もかける言葉がない。

「ちくしょう！ なんで何もできねんだよ！」

俺は認めたくなかつた。

この最低な結末に。

畜生が。

気付けば俺は、息を切らして走り続けていた。

負け犬さながらだな、と俺は自己嫌悪に耽りそうになる。

けれど、何もできなかつた自分を否定はしない。それは彼女の望む事ではないだろう。だから、この結末を認める。

その代わり、彼女を見捨てるようなことはしない。決してしない。いつの日か、殺人を犯した彼女を救うために。

その時まで俺は諦めない、と誓う。

こうして、最初から傍観者の立場にあった俺は、ひとまず日常へと戻ることを余儀なくされる。

(午後八時十七分。終了)

* * *

吹き荒れる風に身をやつしながら、階段に座って私はぼうつと考える。

『人殺し』を目の前に、私は可笑しく思う。

「人殺し」

もう一度、今度はあっさりと言ってみる。それがおかしくって、自分に対しても言った』ようで、吹き出してしまう。

こんな笑いを浮かべる自分もつくづく、否定したい、醜いものだなと投げやりに思う。

でも心なしか、これはこれで、胸のうちが晴れたようで、心地よいのだ。

「人殺し」

私は、その一言でこの少年を死に追いやった。

それは、少年を『自分に見立てて、自分を殺すために』行ったのだろうか？

考えもしなかったけれど。

これが『答え』なのだろうか。

つまりは、私は『過去の私を葬り去るために』、ここへ来たということ。

私は考察すらしない。初めから、了解しているのだから。

遠くサイレンの音が響く。

風が通報したのだろうか、と勘繰ってみる。けれどまだ、そんなに時間は経っていないはずだ。別件、だろう。

だがいつまでもここにはいられない。

「・・・そろそろ、私も行かなきゃな」

ゆっくりと、腰を上げる。血液の固まりかけたナイフを手に、少年の残骸を見下ろす。

よく考えてみると、この少年に対してそれほど、憎しみは湧いてこない。

それでも、これは当然の結末、とだけ付け加えておく。

「もう、わかんないな・・・」

私の心には、もう何もない。さっきまで複雑に絡み合っていた思いが、少年の死と引き換えに、全て吹き飛んでしまったのだから。

今の私は、『ここに来る前の私』ではありえない。すると、ここにいる私とは何者なのか。

孤立したく思う自分？

人に笑いあえる自分？

私には、わかってる。

とにかく、真っ白。

「・・・・・・うん」

だから、歩き出す。

どこへともつかないところをめざして。

(八時三十一分。終了)

十二月十五日。午前八時。

そそくさとバスに乗り込んで、かじかんだ手を暖房に当てる。血流の悪くなった手に、じんわりとした感覚が瞬く間に戻っていく。居心地の良さに癒されていると、

「天気予報によると、今日は夕方から雪が降るそうだが。君の学校はコートの着用が禁じられているのかい？」

「使ってたやつ、一ヶ月も前にダメにしちゃいました。ああ、大丈夫ですよ呉竹さん。制服にセーターを着込んでますから」

意外なことに、この長髪切れ目の警察官とはたまに、同じバスに乗り合わせることもある。なんでも電車を使うより、署に向かう時間が短縮できるとか。

「一ヶ月前、という不思議だな。あの事件があった日じゃあないか」

「・・・そうでしたっけ？」

「知らないのか？」

知ってますよそれくらい、と受け流す。『忘れていいはずがない』。これは、その時に交わした約束なのだから。

呉竹に言い伝える必要もないことだけれど。

「被害者が、神谷町および隣町の連続殺人犯だった・・・とんでもない事件ですよね？ 犯人が何者かに殺害されたただなんて。しかもそいつ、俺のクラスのやつだし」

「何かと君の周りだけ騒がしくはないかね」

「俺を疑ってるんですか？」

「さあな、と煮え切らない返答。」

「でもま、流石に今は落ち着いてますよ。今の担任が、相変わらず空回りするばかりなんで、そっちのほうがむしろ大変ですよ。まあ、

前の担任のこともありましたし、なんか変な意味で慣れちまいました」

教室の雰囲気としては、あの少年が犯人だとは信じていない。その辺りは共通認識としてある。

クラスの奴らはむしろ、『彼女』が気がかりだった。

「……ふむ。そうであるといいのだがな」

「？」

「なに、あの被害者が一連の犯人ではないかもしれないという可能性だ。事例が極めて稀なケースだけに我々も、事後検証を行っている。君たちには朗報を伝えることがあるかもしれない」

「別に、気を回す必要はないっすよ」俺はとりとめもなく言う。「そんなぐらいで騒ぎだすほど、クラスの奴らは弱くはないですよ」と強気に発言してみる。

「ふむ、そうか」

呉竹は一足先に、手すりの下にあるブザーに手をかける。次の停車駅で下りるらしい。

「そういえば、このあいだ話聞いて驚いたんですけど」

「何だ」

「呉竹さん、事件解決まであと一歩つてところだったんですね。靴跡から用品店を割り出したりとか」

「……ふん」

どうでもいい、とばかりに鼻を鳴らす。

「断定はできんが、結果的には被疑者死亡となった。私にとっては、あと一歩というものは全く以って、意味をなさない」

ある種のこだわりなのだろうか、と少しばかり気になるうちに、呉竹はさっさとバスを降りてしまった。

* * *

午後五時十八分。

帰りがけに本を買うには、実は隣町まで足を運ばなければならぬ。神谷町に、めばしい本屋が皆無な状況にあって、こうして駅前ロータリーに在るのだけれど。

「くっそー、あの委員長と顧問なんなんだよ・・・」

本日の委員会活動も確か全員参加のはずだったが、委員長が率先してサボタージュを決行したため、いつもながら司書というにはあまりにかけ離れた筋肉質な体格が自慢の顧問の登山話に切り替わってしまった。

ぼりぼりと頭を掻きながら、そろそろ図書委員をやめようかと思案している中、

「おーい、凧」

溜まりっぱなしの愚痴を切り上げて振り返ると、泉の姿があった。

迷路のようなデパートを歩き回って本屋を捜し求める。なぜか隣には、違う高校に通う女子高校生がいてくる。

この構図、端から見ればまた別の意味でほほえましくも見えそうだけれど、話す内容をよく聞くと多分みんな首を傾げるだろうと思う。

「ああ、知ったんだ。『アイツ』が猫を殺したってこと」

「やっぱり、そうなんだね」

泉にしては珍しくも、どこか寂寞とした表情だ。

「まだ許せないとか、そういう部分はある？」

「確かに、謝ってほしい。やっぱり、許せないから」

でも、と断りを入れて、

「ウチはそれだけで十分だよ。あの猫たちも、納得してくれるだろうし」

「それはどうしてだい？」

「ちゃんと謝ろうって思ってたさえくれれば、それだけで伝わるものだよ」

気軽にそんなことをのたまう泉。俺はやれやれ、と首を振るばかり。

「やっぱりそこが甘いんだよな、アンタは」

「ほえ、そうかな？」とはてな顔の少女は、やはり考え自体が幼い。友人関係というのは、些細なことできくしゃくしてしまふことがある。ましてや、この問題は、泉の考える以上に根が深いのだから。

・・・謝るだけで済ませられるのなら、『彼女』はまず喜んで打ち明けたらうね。

「でも、『アイツ』はそれすらもしなかった。とうとうアンタには謝ることはなかったんだしな」

「そうだね、もう一ヶ月も行方不明だし。何があったんだらうねえ？」

ふい、と首を傾げるばかりの泉。『彼女』が逃げた、とは絶対に思っていないだろう。

もつとも、向こうもそうは考えてない。

「うん、でもいつかは謝りに来てくれるかもね」

「生きていればの話だけど」

こらあ、と本気で頭を殴られてしまった。

買ったばかりで真新しいカバーをつけた本を、丁寧に鞆にしまいこむ。その時鞆から、日記に挟んでいた『紙』が落ちた。

「うわあ！」

思わず泉が飛びのく。無理もない。その『紙』はある男の血でコピーイングされているのだから。

「いやそういう話じゃないでしょ。あーびっくりした。

・・・ね、いいかげんその日記を持ち歩くのやめない？」

泉にも一応、「事件」の顛末を事後説明している。『彼女』がいなくなつた経緯、と言つた方が正しいか。

「いや、俺はそうしない」

「なんでよ、不気味だよそんなの」

「忘れちゃいけないんだ。それは『アイツ』との約束だから、こうして手に持っている。もちろん、この日記はいずれ『アイツ』に返すさ」

エスカレーターを下った先、傘を持つ客が増えていることに気付く。三階の吹き抜けに出てみると、窓の外に雪がちらついていた。

床にうつすらと積もる、白磁の風景。道路の上に敷かれた通路は、百貨店の別館へとつながっている。

別館側に駅が控えているので、どうしても下の信号を待ちたくない俺達はひとまず通路に向かう。

「約束、かあ」

おわんの形に手を作りながら泉は雪を待ち構える。

「ね、もし戻ってきたら、どうする？」

「『アイツ』が？」

うん、と首を振って答える泉。

「そりゃあ決まってるだろ。もう一度話をつけるんだ。アンタも交えて」

俺はとりとめもなく話す。

「あの時、確かに『アイツ』は人を殺した。その事実は今も消えない。今は行方不明扱いにしている警察もやがては、彼女にたどり着くだろうね」

俺は淡々と続ける。

「それでも俺たちは、『アイツ』を救わないといけないって思うんだ。『アイツ』がどんな悩みを抱え込んでいたのか、どうして苦しんでいたのか。俺はその全てを知らない。

正直、他人だから、俺にとっては知ることすら難しいかもね」

事件を解決するのは、警察に任せればいい。だけど、『彼女』を孤独から救い出すことは、おそらく俺と泉にしかできない。ある程度過ぎた自負だとは割り切っていた。

「もちろんそれは、記憶を読むだけじゃ全然わからない。相手もそ

んなことは嫌がるだろうね。けれど、絶対に諦めちゃいけないんだと思う。アンタもそう考えているだろ？」

黒っぽい空に視線を上げながら、泉は頷く。

「でも、人を救うって、なんか傲慢にも聞こえるよね」

つとに、泉が呟く。

「じゃ、そう言われない様にするしかねーか。すんごく抽象的だけども」

「うん、きつと伝わる」

雪夜の街に、俺達は声高に宣言した。

かつて、氷室美月も俺に言ったこと。

誰かさんを見捨てるつもりはない、とね。

今度は俺達が、『藍園優』という、一人の人間と立ち向かう。

その日はいつだろうか。

五分後か。明日か。一年後か。

・・・ともあれ、『その時』が決着をつける時だ。

通路のど真ん中で泉ははっと息を呑んだ。

歩みを止めて、

「見てあれ」

やや興奮気味に指差す先、デパートの壁に街灯テレビのような大きなスクリーンが埋め込まれている。画像の粗い中放映される夕方のニュースに、ある映像が映し出されていた。

「藍園さんの顔写真・・・行方不明の搜索の呼びかけね」

「搜索届けを出したの、確か同じマンションの人たちだったな」

呉竹から聞き出した情報に、嘘八百は仕込まれていない、はず。とかなんとか思い起こしつつ、考える。

「・・・なんだ、そういうことか」

「え？ 風、どしたの？」

鼻先に白いものを載せながら尋ねられる。

「アイツ、確か親がいなくって一人暮らしだったよな。けどさ、女子高校生が一人だぞ？　いくらなんでも、近所の奴らがその生活を心配しないはずがないだろ。」

つまりアイツは孤独じゃない。こうして、心配してくれる人だっているんだからさ」

「・・・あ、そうか」

スクリーンの搜索情報と交互に見合わせる泉。俺は空に呼びかけるように、言っただけだ。

「アイツは、いや、誰だっただけさ。他人と関わりのない奴なんて、この世界にはいない。問題は、そこに本人が気づくか、そうでないかどうかだけだ。」

まあ、単純にはいえないけど、そういうことだ。ましてや、誰にも必要とされない人間はいないさ」

彼女の帰還を、俺のほかにも待ちわびている人たちがいる。

マンションの人たち。クラスの奴ら。そして、泉。

もし彼女が再び目の前に現れるとすれば。

それは、彼らの意志に、気付いたときだろうか？

そう考えた矢先だった。

「・・・？」

通路を渡りきったところで、気配のようなものを感じた俺は背後を振り向いた。

視界が定まろうとするその瞬間。

通路の中央に、人影が目についた。

彼女は、満面の笑みをたたえながら、こちらに

「どっしたの？」

泉の声に、ふと正気を取り戻す。

俺の視界には、大勢の通行人と、床を明るく染め上げる雪が割って入るばかり。墨がぼやけたような風景に、見知った影はどこにもない。

「別に、なんでもない」

頭を掻きながら、俺は再び歩き始める。

* * *

人が違えば、その思いも異なる。

こうしてそれぞれの意志が交錯し、すれ違いながら、日々は過ぎて行く。それがたとえ、退屈な日常であったとしても、帰結するところもなく、ただ連綿と続くだけの日々。ちよつどこの曖昧な雪空に、少しばかり似ていた。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございました。

事件ものに超能力に日記という、なんともよく分からない矛盾に満ちた設定のこの長編小説。今から思えば、もう少し明るい話だったらなあと若干後悔しております。（初めはもう少し軽い展開で話を終えるつもりでしたが……）

書いているうちに話の設定やら方向性が変わることってよくあるのでしょうか？

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9994d/>

Diary

2011年4月29日01時25分発行